創隊七十周年記念誌
七十年のあゆみ

西部方面隊

題字：西部方面総監部付隊　Ⅰ等陸曹　鳴川るり

令和７年秋、静かに時を重ねる総監部庁舎

西部方面隊歌

山口白陽 作詞
滝本泰三 作曲

一、祖国の朝の　青空を
神代のままに　伝え来し
聖なる国土　九州の
衛りに結ぶ　若人が
誓いは固し　自衛隊

二、気こんを示す　大阿蘇や
思いに燃ゆる　桜島
久遠の平和　めざしつつ
腕を鍛う　若人が
血潮は踊る　自衛隊

三、幾たび父祖の　血に染めし
不滅の歴史　輝かに
黒潮めぐる　豊沃の
郷土を継げる　若人が
使命は重し　自衛隊

四、平和の盟主　日本に
培う西の　防人と
気負いて立てば　鎮西の
誇りに生くる　若人が
瞳は清し　自衛隊

五、吹雪はしまく　北の空
嵐はすさぶ　四方の海
祖国の砦　同胞の
力と励む　若人が
理想は光る　自衛隊

地域とともに 未来をひらく　我ら防人

～地域とともに７０年。守り続ける未来のために～

目　次

発刊にあたり　・・・・・・・・・　1

祝　辞　・・・・・・・・・　2

歴代西部方面総監　・・・・・・・・・　4

西部方面隊の活動　・・・・・・・・・　１２

地域とともに
　九州各県における部隊の活動・・・・・・３９８
　各駐屯地における部隊の活動・・・・・・４０８

歴代西部方面総監の回想・訓示等・・・・・４４２

西部方面隊部隊等配置図　・・・・・・・・・４８６

西部方面総監部歴代補職　・・・・・・・・・４９０

西部方面隊歴代部隊長　・・・・・・・・・５０８

西部方面隊年表　・・・・・・・・・５２６

特別編
　ＯＢの活動記録　・・・・・・・・・５３８
　創隊７０周年記念行事の記録・・・・・・５６０

発刊にあたり

西部方面総監

鳥　海　誠　司

西部方面隊は、本年、創隊７０周年を迎えました。

この間、我が国の平和と安全を守るという基本任務はもとより、災害派遣、国際平和協力活動等幾多の役割を全うできましたのも、九州・沖縄地域の皆様のご理解とご協力、そして諸先輩方の一方ならぬご努力の賜と、厚く御礼を申し上げます。

このたび、創隊７０周年の節目にあたり、西部方面隊の７０年間を振り返り、歴代総監を核心として諸先輩方が永々と築き上げられた歴史と伝統を振り返り継承するとともに、これからの我が国の防衛を担う隊員一人ひとりが使命の重みを自覚し、さらなる前進を期する契機とするために記念誌を発刊することとしました。

西部方面隊は、昭和３０年（１９５５年）１２月に福岡駐屯地に総監部を編成し方面隊の基盤を確立、昭和３１年１月２６日に創隊し、幾多の変遷を経つつ、多様な役割に即応し、任務を完遂してまいりました。この間、昭和３０年代は、東西冷戦の緊張の中、我が国は防衛の基盤を築き上げました。当時、西部方面隊の担任区域は九州・山口の８県でしたが、陸上自衛隊の５個方面管区・１３個師団体制への移行に伴い、昭和３７年（１９６２年）、山口県は中部方面隊の担任区域となり、昭和４７年（１９７２年）の沖縄返還を経て、西部方面隊の担任区域は九州本土から沖縄へと拡大しました。以来、西部方面隊は、我が国防衛の最前線を担う「南西防衛の要」へと、我が国の安全保障環境の変化に応じつつ進化してまいりました。

そして、現在、我が国が戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面している中、九州・沖縄の皆様の生命と財産と国土を守るという使命の完遂に向けて、西部方面隊全隊員が精励努力しております。また、九州・沖縄地域の抑止力・対処力を更に強化することが必要であり、沖縄に所在する第１５旅団の師団化へ向けた改編をはじめ、各種新装備の導入など、体制移行へ向けた準備を進めております。皆様のご理解ご協力を頂けますよう、あらゆる機会をとらえて、誠実かつ丁寧に対応してまいる所存です。

西部方面隊は、引き続きその任務遂行に邁進していきます。そして幾多の先輩方が築かれた輝かしい伝統をしっかりと継承し、未来へと繋げることを創隊７０周年にあたり、お誓いします。

平素から西部方面隊にご理解とご協力を頂いている自治体、関係諸団体、そして、地域の皆様に改めて深甚なる感謝の意を申し上げますとともに、今後とも西部方面隊に対しまして、更なるご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げ、発刊の挨拶といたします。

～　地域とともに７０年　守り続ける　未来のために　～

西部方面隊
創隊７０周年によせて

九州・沖縄地区防衛協会連絡協議会会長
熊本県知事

木　村　　敬

陸上自衛隊西部方面隊が創隊七十周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

昭和三十一年の創隊以来、西部方面隊は我が国の西方防衛の要として、また災害派遣や国際貢献・離島からの患者空輸・不発弾処理等の多岐にわたる任務を遂行し、地域住民の安全と安心を支えてこられました。特に、近年の災害においては、迅速かつ的確な対応により多くの人命を救い、熊本県をはじめ地域社会からの信頼と絆を一層深めておられます。

また、国際情勢が複雑化し、南西地域の安全保障環境が一層厳しさを増す中、西部方面隊の皆様が日々訓練を重ね、いかなる事態にも即応できる態勢を維持されていることは、我々国民・県民にとって大きな安心であり、誇りでもあります

私ども防衛協会は、地域と自衛隊との架け橋として、これまで以上に西部方面隊との連携を深め、防衛基盤の強化と国民理解の促進に努めて参りますとともに、西部方面隊の皆様が、鳥海総監統率のもと、今後も高い士気と誇りを持って任務に邁進されることを、心より願っております。

結びに、創隊七十周年という大きな節目を迎えられた西部方面隊の更なる御発展と、隊員の皆様並びに御家族の御健勝と御多幸を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

歴代西部方面総監

歴代西部方面総監
（昭和30年12月～昭和48年3月）

初　代
松谷　誠　陸将
（30.12～32.8）

第　2　代
池野　清躬　陸将
（32.8～34.7）

第　3　代
辻村　義和　陸将
（34.8～35.7）

第　4　代
吉橋　戒三　陸将
（35.8～37.7）

第　5　代
和田　盛哉　陸将
（37.8～40.3）

第　6　代
関口　八太郎　陸将
（40.3～43.6）

第　7　代
荒武　太刀夫　陸将
（43.7～45.3）

第　8　代
上妻　正康　陸将
（45.3～47.3）

第　9　代
堀江　正夫　陸将
（47.3～48.3）

歴代西部方面総監
（昭和48年3月～昭和62年3月）

第　１０　代
中島　直臣　陸将
（48.3～49.6）

第　１１　代
近藤　清　陸将
（49.7～51.3）

第　１２　代
塚本　勝一　陸将
（51.3～53.3）

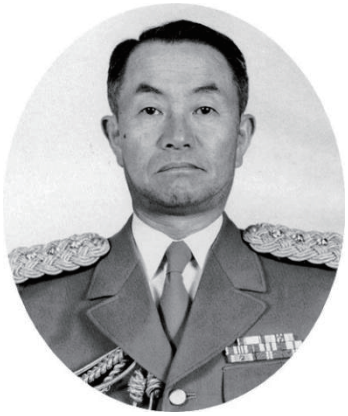
第　１３　代
加藤　誠一　陸将
（53.3～55.3）

第　１４　代
河津　幸三郎　陸将
（55.3～57.3）

第　１５　代
村松　榮一　陸将
（57.3～58.6）

第　１６　代
齋藤　信夫　陸将
（58.7～60.3）

第　１７　代
新井　道彦　陸将
（60.3～61.3）



第　１８　代
水澤　博　陸将
（61.3～62.3）

歴代西部方面総監
（昭和62年3月～平成14年3月）

第　１９　代
荒木　雄二　陸将
（62.3～元.6）

第　２０　代
久我　幹生　陸将
（元.6～3.3）

第　２１　代
重松　惠三　陸将
（3.3～4.6）

第　２２　代
横地　貞　陸将
（4.6～6.3）

第　２３　代
新井　均　陸将
（6.3～7.6）

第　２４　代
田村　鞆利　陸将
（7.6～9.6）

第　２５　代
樋山　周造　陸将
（9.7～10.6）

第　２６　代
天野　良晴　陸将
（10.7～12.4）

第　２７　代
作道　光夫　陸将
（12.4～14.3）

歴代西部方面総監
（平成14年3月～平成29年8月）

第　２８　代
松川　正昭　陸将
（14.3～15.6）

第　２９　代
森　勉　陸将
（15.7～16.8）

第　３０　代
林　直人　陸将
（16.8～19.3）

第　３１　代
輪倉　昇　陸将
（19.3～20.7）

第　３２　代
用田　和仁　陸将
（20.8～22.3）

第　３３　代
木﨑　俊造　陸将
（22.3～23.8）

第　３４　代
宮下　寿宏　陸将
（23.8～25.8）

第　３５　代
番匠　幸一郎　陸将
（25.8～27.8）

第　３６　代
小川　清史　陸将
（27.8～29.8）

歴代西部方面総監
（平成29年8月～令和7年8月）

第　３７　代
湯浅　悟郎　陸将
（29.8～31.4）

第　３８　代
本松　敬史　陸将
（31.4～2.8）

第　３９　代
竹本　竜司　陸将
（2.8～5.3）

第　４０　代
山根　寿一　陸将
（5.3～6.3）

第　４１　代
荒井　正芳　陸将
（6.3～7.8）

西部方面隊の活動

西部方面隊の活動

西部方面隊は、1955年（昭和30年）12月に福岡駐屯地に総監部を編成し方面隊の基盤を確立、翌年1月に創隊し、じ来、我が国を取り巻く安全保障環境の変化に伴い改編をしながら、70年にわたって九州・沖縄地域の防衛と地域の皆様の安心・安全の確保に努めてまいりました。

この間、昭和時代は諫早・長崎大水害、三池炭鉱爆発事故、熊本県山鹿市大火災、熊本市デパート火災、阿蘇中岳噴火災害、平成以降には雲仙普賢岳噴火、山林火災、口蹄疫、熊本地震、豪雨、台風、感染症、鳥インフルエンザ、豚熱など多くの災害に対応しながら、緊急患者空輸や不発弾処理といった任務を着実に遂行するほか、地域開催の国家的行事への協力、国際平和協力活動への部隊派遣等さまざまな活動に取り組んでまいりました。

近年においては、海・空自衛隊及び米第3海兵機動展開部隊等と連携し九州・沖縄の防衛を更に強化するとともに、自然災害への備えや国民保護について、自治体、関係機関等との連携強化にも取り組んでいます。

「西の守りは日本の守り」　西部方面隊は、これからも地域の皆様とともに歩んでまいります。

	防衛力整備の変遷	陸上自衛隊の変遷	西部方面隊の変遷
1950年代	・国防の基本方針策定（漸進的に防衛力を整備） ・第1次防衛力整備計画（1957年） 国力に応じた必要最小限度の自衛力を整備	・警察予備隊から陸上自衛隊へ 1954年に陸上自衛隊が発足。全国的な部隊整備が進められ、防衛体制の基礎を構築	・1956年（昭和31年）に西部方面隊が発足、九州・山口地域を担任区域とし、第4管区隊や第8混成団を中心に基盤整備が進展
1960年代	・第2次防衛力整備計画（1961年） ・第3次防衛力整備計画（1966年） 通常兵器による局地戦以下の侵略に有効に対処することが防衛力整備の目標	・方面隊、師団の体制が整備 5個方面隊、13個師団、18万人体制などの基礎固めに専心	・第4師団（福岡）、第8師団（熊本）、方面直轄部隊が創設
1970年代	・第4次防衛力整備計画（1972年） 通常兵器による局地戦以下の侵略に有効に対処することが防衛力整備の目標 ・防衛計画の大綱（51大綱）策定 「基盤的防衛力」構想	・沖縄が返還され、沖縄の部隊配置を推進	・1972年（昭和47年）5月に沖縄が返還され、同日、沖縄地方連絡本部が発足 ・次いで熊本で編成された臨時第1混成群が沖縄に移駐 ・特別不発弾処理隊創設（1974年） ・対馬警備隊創設（1980年） ・第8師団改編（1981年）
1980年代		・米軍と初の通信訓練、指揮所演習を実施 ・初の日米共同の統合指揮所演習と実動演習を実施	
1990年代	・防衛計画の大綱（07大綱）策定 「基盤的防衛力」構想を踏襲 防衛力の役割に「大規模災害など各種の事態への対応」、「より安定した安全保障環境の構築への貢献」を追加	・わが国初の国連PKO活動としてカンボジアへ部隊派遣 ・阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件、雲仙普賢岳などの災害派遣	・第5地隊艦ミサイル連隊創設（1998年）
2000年代	・防衛計画の大綱（16大綱）策定 「基盤的防衛力」構想の有効な部分は継承 新たな脅威や多様な事態に実効的に対応するとともに多機能で弾力的な実効性ある防衛力を整備	・イラク人道復興支援活動（2003年～2009年） ・統合幕僚監部創設（2006年） ・国際平和協力活動の本来任務化（2007年） ・防衛庁から防衛省へ移行（2007年）	・西部方面後方支援隊創設（2003年） ・西部方面衛生隊創設（2003年） ・西部方面情報処理隊創設（2005年）
2010年代	・防衛計画の大綱（22大綱）策定 「動的防衛力」の構築 ・防衛計画の大綱（25大綱）策定 「統合機動防衛力」の構築 ・防衛計画の大綱（30大綱）策定 「多次元統合防衛力」の構築	・東日本大震災災害派遣（2011年） ・能力構築支援への取組開始（2012年） ・南西地域の防衛体制強化 ・熊本地震災害派遣（2016年） ・16式機動戦闘車配備 ・即応機動連隊を新編	・第15旅団新編（2010年） ・与那国駐屯地開設（2016年） ・奄美駐屯地、瀬戸内分屯地開設（2019年） ・宮古島駐屯地開設（2019年）
2020年代	・防衛力の抜本的強化と国力を総合した国全体の防衛体制の強化（2022年12月） （安保関連3文書）	・電子作戦隊 新編（2022年） ・輸送航空隊（V−22）が木更津駐屯地から佐賀駐屯地へ移駐（2025年）	・石垣駐屯地開設（2023年） ・第2特科団改編（2024年） ・佐賀駐屯地開設（2025年）

昭和３０年度

30.10.2　山口県夜市川河口の水害に対し、小月部隊派遣

30.10.2　山口県夜市川河口の水害に対し、小月部隊派遣

昭和３０年度

30.12.1　松谷初代方面総監着任（場所：福岡）

31.2.6　総監部移駐　現在の正門（福岡から健軍へ）

昭和３１年度

31.7.17　陸・海統合訓練（場所：竹松・佐世保海岸）

31.8.6　船田防衛庁長官福岡視察

昭和３１年度

31.8.8　船田防衛庁長官北熊本視察

31.8.8　船田防衛庁長官北熊本視察

昭和３１年度

31.8.17　災害派遣（場所：熊本県長洲海岸）

31.9.8　災害派遣（台風１２号）（場所：佐賀県有明干拓地区）

昭和３１年度

31.3.4　陸幕長の行う第８混成団検閲

31.3.4　陸幕長の行う第８混成団検閲

昭和３２年度

32.4.5　北熊本駐屯地移駐（熊本から北熊本へ）

32.4.5　北熊本駐屯地移駐（熊本から北熊本へ）

昭和３２年度

32.4.5　北熊本駐屯地移駐（熊本から北熊本へ）

32.4.26　松谷総監北熊本視察

昭和３２年度

32.4.29　北熊本駐屯地開庁式

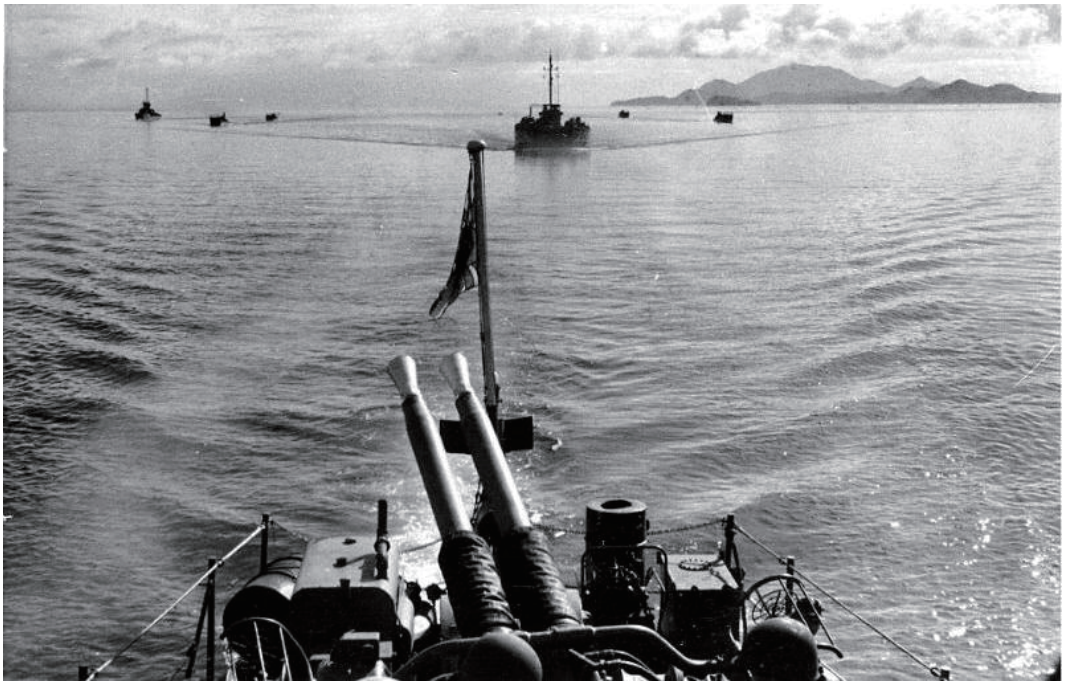
32.4.29　北熊本駐屯地開庁式

昭和３２年度

32.7.14　方面総監部新庁舎落成（場所：健軍駐屯地）

32.7.15　陸・海統合訓練（場所：天草）

昭和３２年度



32.7.15　陸・海統合訓練（場所：天草）

32.7.25　災害派遣（西日本大水害）

昭和３３年度

33.4.8　天皇・皇后両陛下、別府市志高高原植樹祭

33.5.20　方面直轄剣道大会（場所：健軍駐屯地）

昭和３４年度

34.5.6　伊能防衛庁長官視察（第８混成団 北熊本駐屯地）

34.5.22　西方ＭＭ演習

昭和３４年度

34.7.13　災害派遣（福岡県集中豪雨）
（場所：福岡県）

34.8.10　辻村総監着任式（場所：健軍駐屯地）

昭和３４年度

34.9.3　辻村総監北熊本視察（第８混成団北熊本駐屯地）

34.8.10　辻村総監着任

昭和３４年度

34.9.5　赤城防衛庁長官北熊本巡視（第８混成団北熊本駐屯地）

34.10.8　災害派遣（場所：佐賀県有明千拓堤防復旧作業）

昭和３５年度

35.5.9　杉田陸幕長視察（第８混成団北熊本駐屯地）

35.5.9　杉田陸幕長視察（場所：北熊本駐屯地）

昭和３５年度

35.8.8　吉橋総監着任式（場所：健軍駐屯地）

35.8.16　吉橋総監視察（第８混成団北熊本駐屯地）

昭和３５年度

35.10.27　高松宮殿下健軍駐屯地訪問（国体ラクビーご観戦）

35.11.18　管区隊等対抗演習（場所：日出生台）

昭和３５年度

35.11.18　管区隊等対抗演習（場所：日出生台）

35.11.18　管区隊等対抗演習（場所：日出生台）

昭和３６年度

36.7.9　西村防衛庁長官視察

36.10.23　陸上自衛隊管区対抗駅伝大会

昭和３６年度

36.10.29　災害派遣（国東地区復旧作業）
（場所：大分県国東地区）

36.12.6　藤枝防衛庁長官視察（場所：福岡駐屯地）

昭和３７年度

37.4.5　大森陸幕長福岡視察

37.5.22　対戦車ロケット弾試験射撃（場所：大矢野原）

昭和３７年度

37.7.6　災害派遣（場所：熊本県下）

37.7.28　若戸博覧会支援（場所：福岡県戸畑大橋）

昭和３７年度

37.8.15　第４１普通科連隊新編（場所：小倉駐屯地）

37.9.26　災害派遣（福江市火災人命救援）
（場所：長崎県福江市）

昭和３８年度

38.6.30　災害派遣（木場川堤防復旧作業）
（場所：新潟県木場川）

38.8.14　災害派遣（五木村道路復旧作業）
（場所：熊本県五木村）

昭和３８年度

38.11.10　災害派遣（三池炭鉱爆発事故人命救助）
（場所：福岡県大牟田市）

38.11.16　大森陸幕長福岡視察

昭和３８年度

38.12.1　西部方面指揮所演習（場所：健軍駐屯地）

38.12.1　西部方面指揮所演習（場所：健軍駐屯地）

昭和３９年度

39.6.25　災害派遣（白浜干拓復旧作業）
（場所：長崎県諫早市）

39.6.25　災害派遣（白浜干拓復旧作業）
（場所：長崎県諫早市）

昭和３９年度

39.6.25　災害派遣（白浜干拓復旧作業）
（場所：長崎県諫早市）

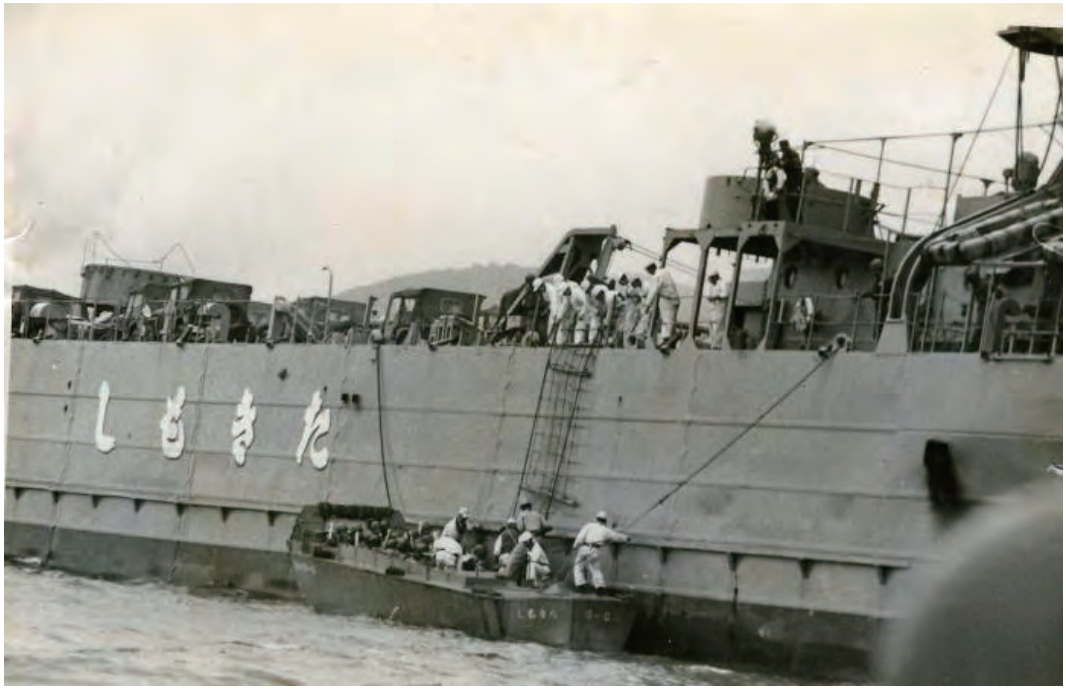
39.9　小泉防衛庁長官健軍視察

昭和３９年度

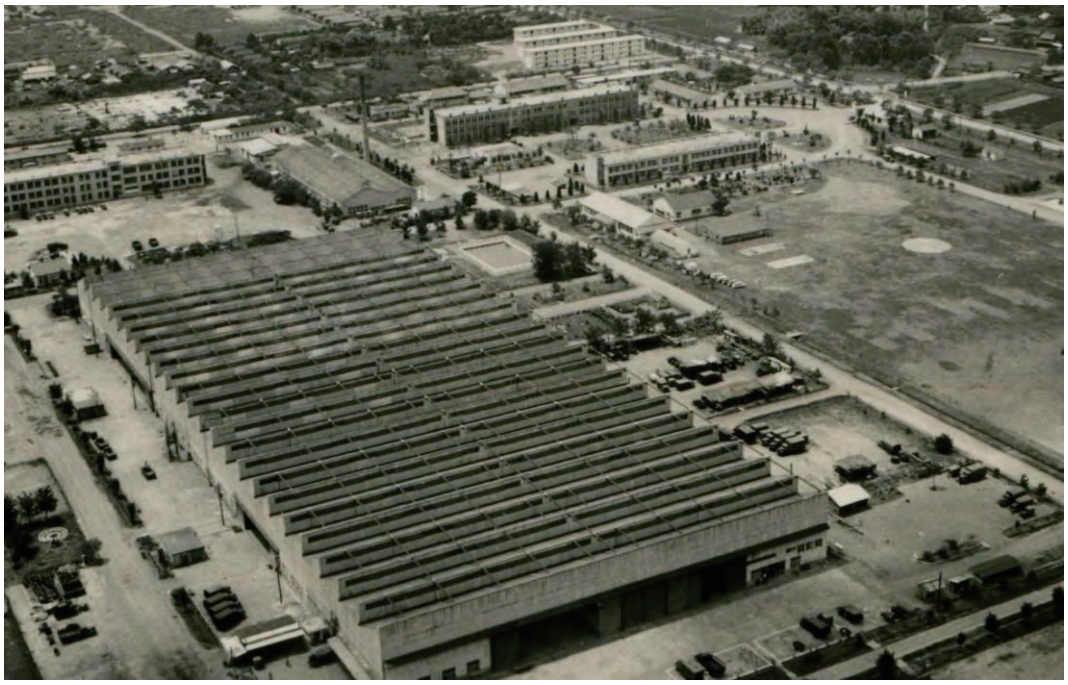
39.11.19　師団対抗指揮所演習（場所：詫麻）

39.11.19　師団対抗指揮所演習（場所：詫麻）

昭和３９年度



39. 海上輸送訓練（場所：福岡県小倉）



39.　上空から見る健軍駐屯地

昭和３９年度

40.1 .21　大森陸幕長福岡視察

40.3.24　関口総監着任式（場所：健軍駐屯地）

昭和４０年度

40.5.24　さつき演習（場所：長崎県佐世保～対馬）

40.5.24　さつき演習（場所：長崎県佐世保～対馬）

昭和４０年度

40.6.9　方面射撃大会（場所：花園射場）

40.6.19　松野防衛庁長官健軍視察

昭和４０年度

40.7.3　災害派遣（坂本町水害復旧）
（場所：熊本県八代郡坂本町）

40.7.3　災害派遣（坂本町水害復旧）
（場所：熊本県八代郡坂本町）

昭和４０年度

40.7.15　林統幕議長視察（場所：健軍駐屯地）

40.10.12　杉江統幕議長視察（場所：健軍駐屯地）

昭和４０年度

40.11.2　自衛隊創立１５周年記念行事（場所：熊本城下）

41.2.21　飯塚駐屯地開設

昭和４１年度

41.4.15　災害派遣（合志町給水支援）
（場所：熊本県菊池郡合志町）

41.5.24　吉江陸幕長視察（場所：健軍駐屯地）

昭和４１年度

41.8.6　災害派遣（奈久地区給水支援）
（場所：熊本県八代市）

41.9.3　上林防衛庁長官視察（場所：国分駐屯地）

昭和４１年度

41.9.27　陸幕訓練検閲（場所：日出生台）

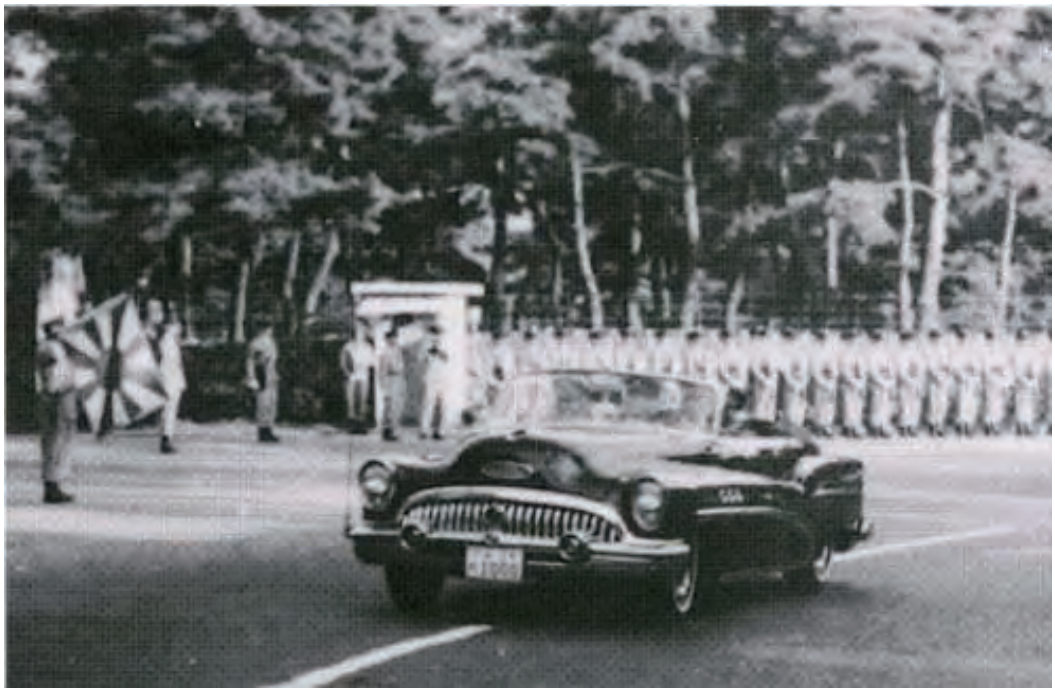
41.9.27　陸幕訓練検閲（場所：日出生台）

昭和４１年度

41.9.27　陸幕訓練検閲（場所：日出生台）

41.9.27　陸幕訓練検閲（場所：日出生台）

昭和４１年度



41.10.21　第２１回大分国体にご出席の天皇・皇后両陛下
（場所：湯布院駐屯地）

41.10.21　第２１回大分国体にご出席の天皇・皇后両陛下
（場所：湯布院駐屯地）

昭和４２年度

42.7.9　災害派遣（集中豪雨による復旧作業）
（場所：佐賀県伊万里市）

42.7.9　災害派遣（集中豪雨による復旧作業）
（場所：佐賀県伊万里市）

昭和４２年度

42.8.21　陸幕訓練視察（場所：大矢野原、霧島、日出生台）

42.8.21　陸幕訓練視察（場所：大矢野原、霧島、日出生台）

昭和４２年度

42.8.21　陸幕訓練視察（場所：大矢野原、霧島、日出生台）

42.8.21　陸幕訓練視察（場所：大矢野原、霧島、日出生台）

昭和４２年度

42.10.16　戦闘団演習

42.10.16　戦闘団演習

昭和４２年度

43.2.21　災害派遣（地震による道路復旧作業）
（場所：宮崎県えびの町）

43.2.21　災害派遣（炊き出し）
（場所：宮崎県えびの町）

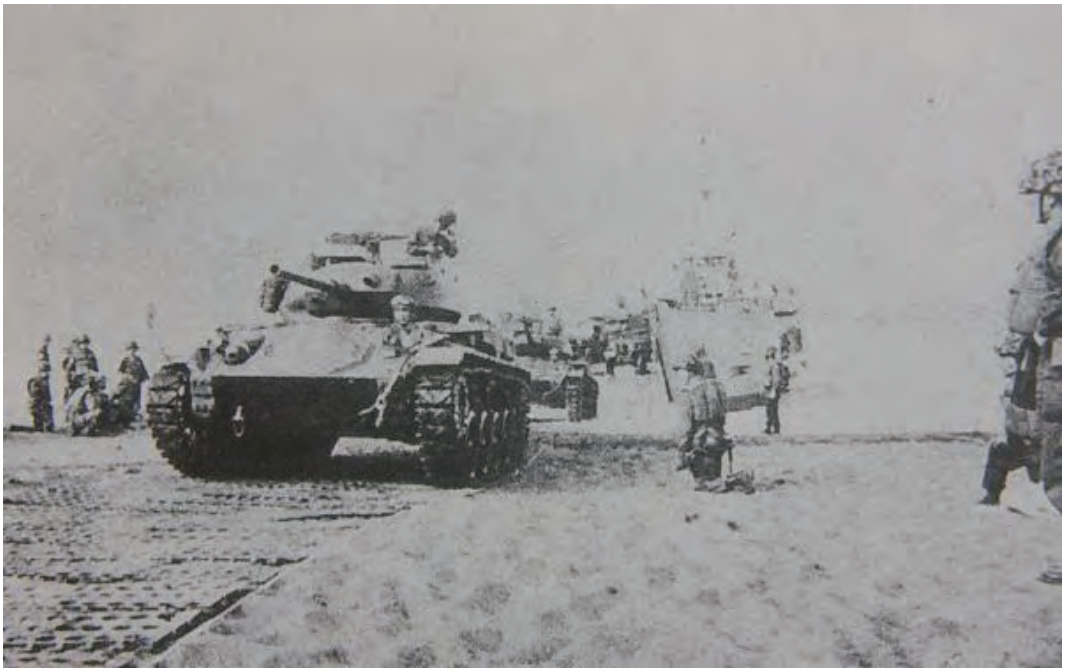
昭和４２年度

43.2.16　吉江陸幕長視察（場所：健軍駐屯地）

43.3.1　通信群編成（場所：健軍駐屯地）

昭和４３年度

43.4.4　耳納山産業開発道路工事（場所：福岡県久留米市）



43.5.9　沿岸監視演習（場所：南九州地区）

昭和４３年度

43.7.1　荒武総監着任式（場所：健軍駐屯地）

43.7.16　増田防衛庁長官視察（場所：健軍駐屯地）

昭和４３年度

43.10.11　戦闘団演習

43.10.11　戦闘団演習

昭和４４年度

44.5.12　ＷＡＣ第１期生着隊（場所：健軍駐屯地）

44.7.1　治安出動訓練（場所：目達原駐屯地）

昭和４４年度

44.10.15　有田防衛庁長官視察（場所：健軍駐屯地）

44.10.17　第２４回長崎国体秋季大会支援（場所：大村駐屯地）

昭和４４年度

45.3.18　荒武総監離任式（場所：健軍駐屯地）

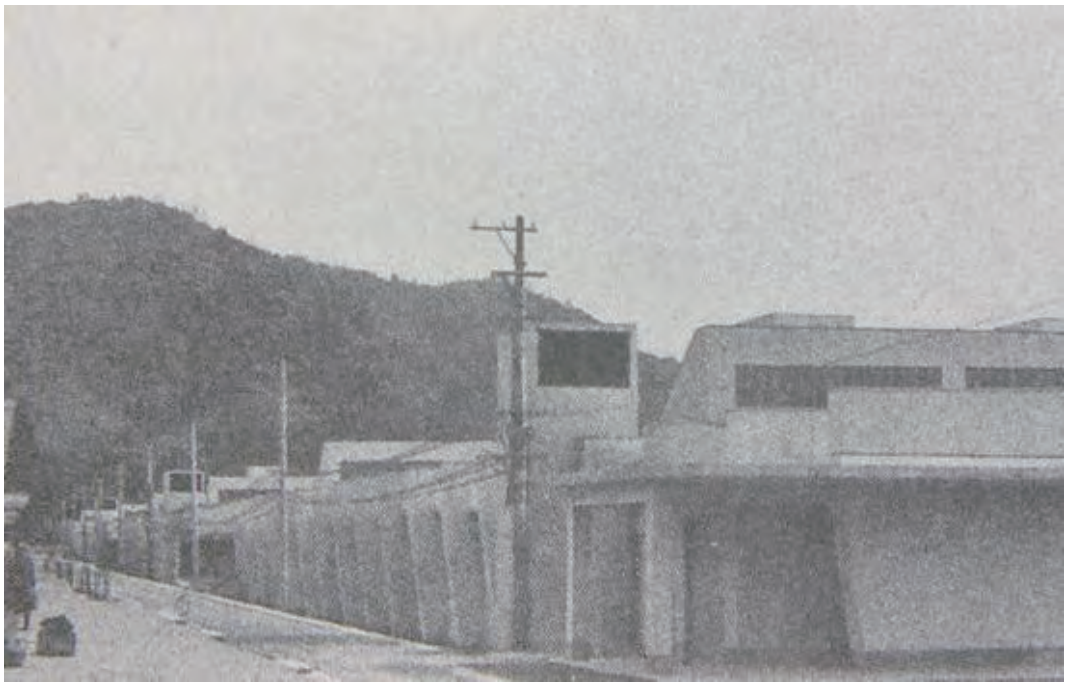
45.3.24　上妻総監着任式（場所：健軍駐屯地）

昭和４５年度

45.7.22　渡河演習（場所：福岡県久留米市筑後川）

45.10.1　中曽根防衛庁長官健軍視察

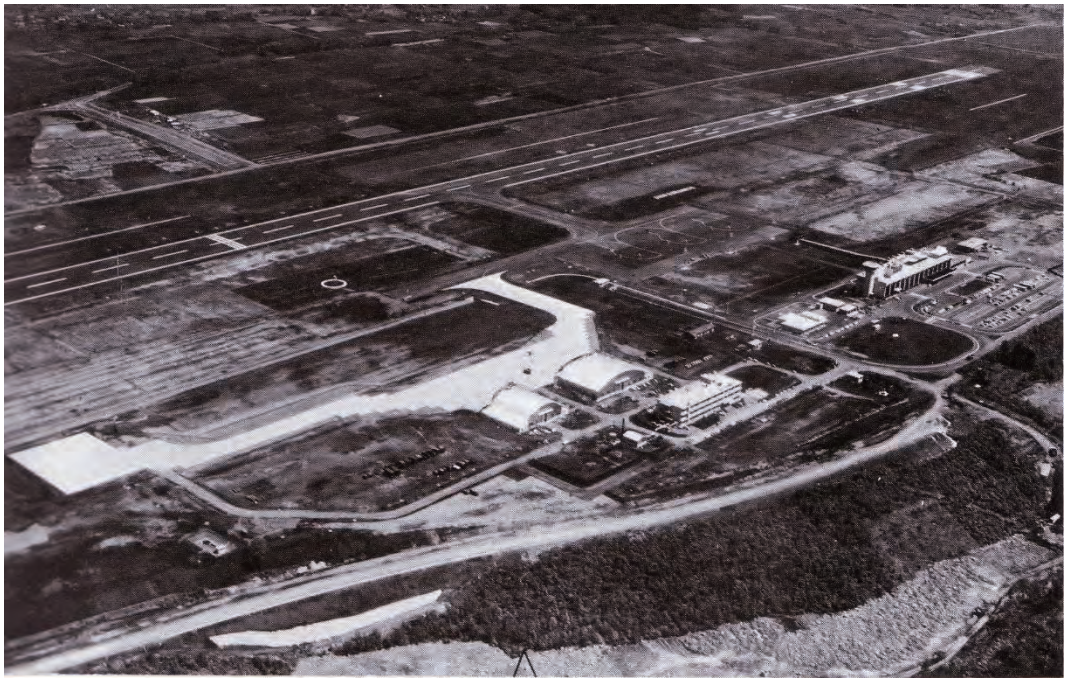
昭和４５年度



46.2.8　曽根覆道式射撃場完成

46.3.25　第３高射特科群新編

昭和４６年度



46.4.20　高遊原分屯地開設

46.7.2　災害派遣（集中豪雨による人命救助）
（場所：熊本県下益城郡小川町）

昭和４６年度

46.7.5　第４師団　上陸演習（場所：長崎県五島）

46.8.6　災害派遣（台風１９号による復旧作業）
（場所：熊本県球磨郡）

昭和４６年度

46.9.1　災害派遣（火災復旧作業）
（場所：熊本県山鹿市）

46.11.11　鎮西演習（場所：日出生台・十文字原）

昭和４６年度

46.11.11　鎮西演習（場所：日出生台・十文字原）

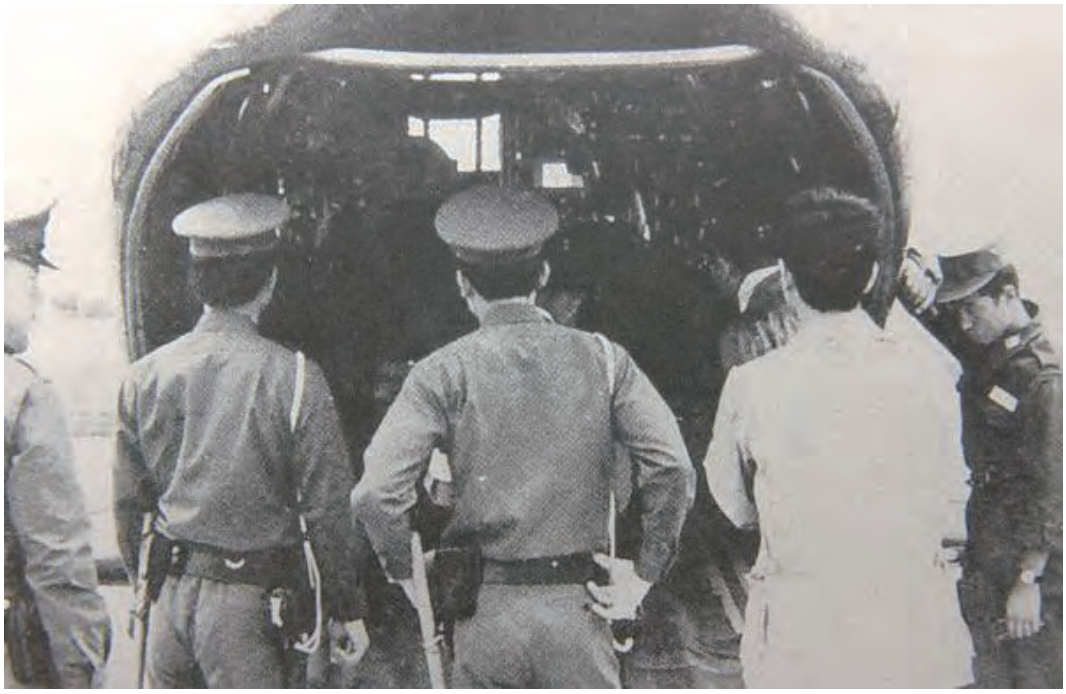
46.11.11　鎮西演習（場所：日出生台・十文字原）

昭和４６年度

47.3.1　臨時第１混成群新編（場所：北熊本駐屯地）

47.3.1　臨時第１混成群新編（場所：北熊本駐屯地）

昭和４７年度



47.5.1　沖縄現金輸送支援

48.2.10　堀江総監小倉視察

昭和４７年度

48.2.24　那覇駐屯地開庁記念式典

48.3.27　第１混成団準備隊本部編成（場所：那覇駐屯地）

昭和４８年度

48.5.14　沖縄における不発弾処理開始

48.10.16　第１混成団編成（場所：那覇駐屯地）

昭和４８年度

48.11.29　災害派遣（熊本市大洋デパート火災）
（場所：熊本県熊本市）

49.3.2　災害派遣（不発弾爆発事故）
（場所：沖縄県那覇市）

昭和４９年度

49.5.4　山中防衛庁長官都城視察

49.6.5　特別不発弾処理隊新編

昭和４９年度

49.5.4　山中防衛庁長官福岡視察

49.6.28　海上機動演習（場所：長崎県佐世保～対馬）

昭和４９年度

49.8.30　近藤総監都城視察

50.1.24　災害派遣（阿蘇地震復旧作業）
（場所：熊本県阿蘇）

昭和５０年度

50.4.21　災害派遣（大分県中部地震復旧作業）
（場所：大分県中部）

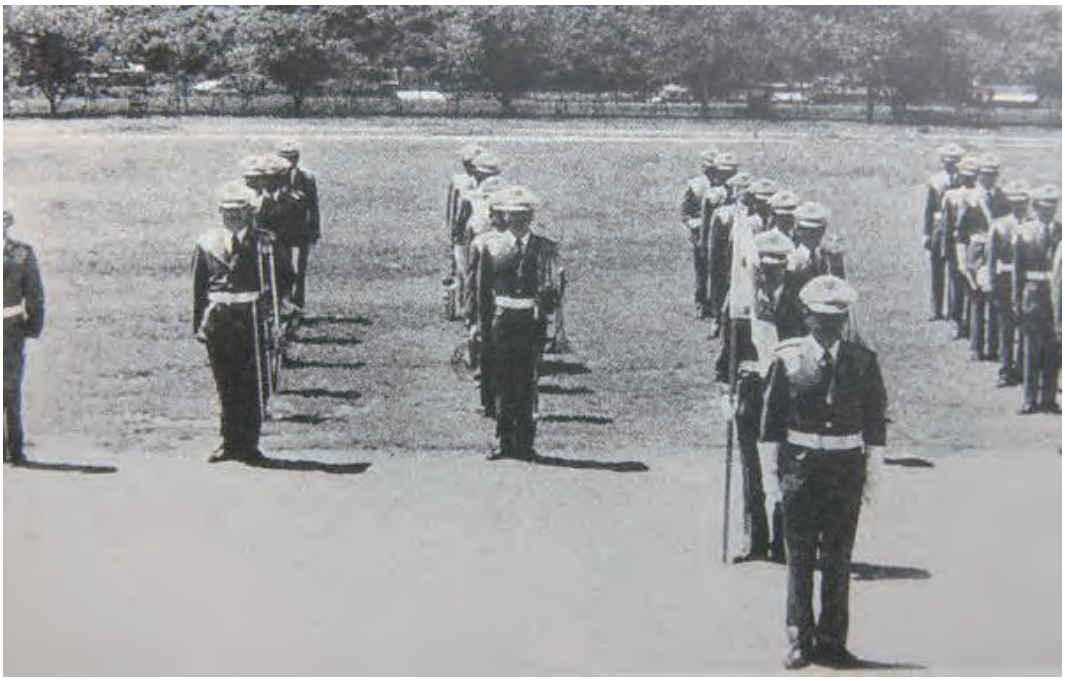
50.7.1　災害派遣（熊本市水害応急復旧）
（場所：熊本県熊本市）

昭和５０年度

50.7.17　沖縄御訪問の皇太子ご夫妻に対しと列

50.7.18　坂田防衛庁長官健軍視察

昭和５０年度



50.8.1　師団音楽隊新編

51.1.11　緊急患者空輸（累計４００件）

昭和５１年度

51.6.25　災害派遣（鹿児島県下集中豪雨復旧作業）
（場所：鹿児島県下）

51.8.5　災害派遣（集中豪雨による復旧作業）
（場所：佐賀県鹿島市）

昭和５１年度

52.1.26　師団対抗指揮所演習（場所：大矢野原）

52.1.26　師団対抗指揮所演習（場所：大矢野原）

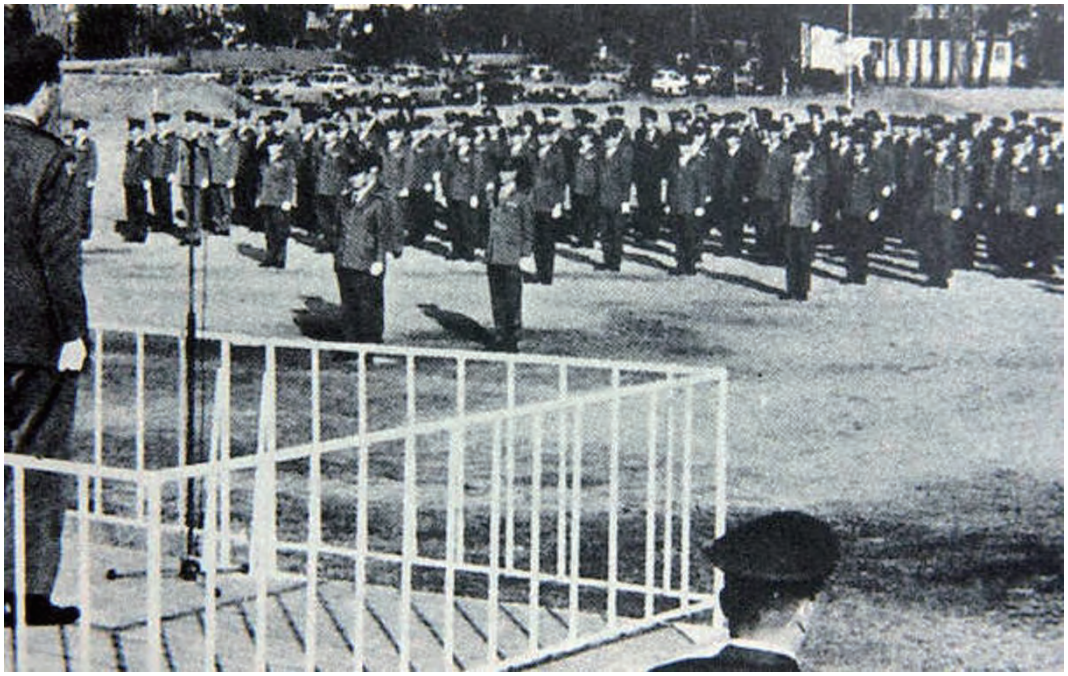
昭和５２年度

52.6.24　災害派遣（吉野町滝ケ水地滑りによる人命救助）
（場所：鹿児島県鹿児島市）

52.9.10　災害派遣（道路復旧作業）
（場所：鹿児島県沖永良部島）

昭和５２年度

52.11.12　緊急患者空輸（累計７００件）



53.1.30　方面総監部改編（場所：健軍駐屯地）

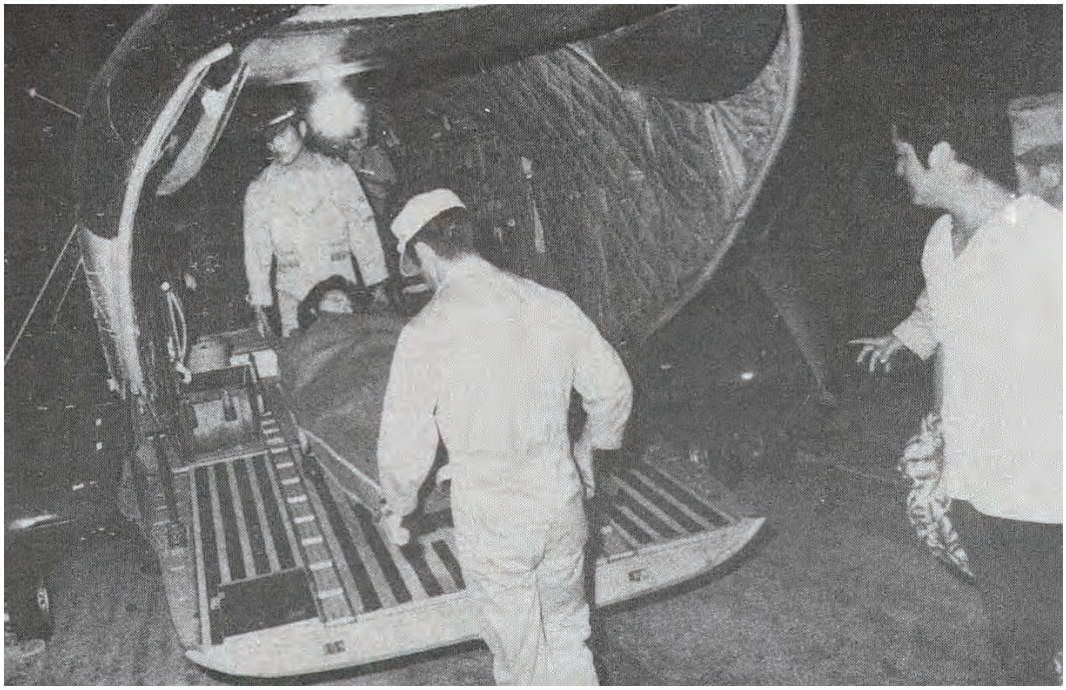
昭和５３年度

53.5.15　海上（空中）機動演習
（場所：鹿児島県国分・加治木～阿久根）

53.5.27　災害派遣（異常渇水下の福岡市に対し給水支援）
（場所：福岡県福岡市）

昭和５４年度

54.6.26　災害派遣（北九州地区集中豪雨）
（場所：福岡県北九州市）



54.7.27　緊急患者空輸（累計１,０００件）

昭和５４年度

54.9.6　災害派遣（阿蘇中岳爆発）
（場所：熊本県阿蘇）

54.11.24　方面隊検閲受閲（場所：日出生台、十文字原、大矢野原）

昭和５４年度

54.11.24　方面隊検閲受閲（場所：日出生台、十文字原、大矢野原）

55.3.13　災害派遣（生き埋め捜索による人命救助）
（場所：宮崎県日之影町）

昭和５４年度

55.3.25　対馬警備隊

55.3.25　西方輸送隊移駐

昭和５５年度

55.5.6　鈴木陸幕長沖縄地区視察

55.5.20　他方面区演習（場所：北海道矢臼別）

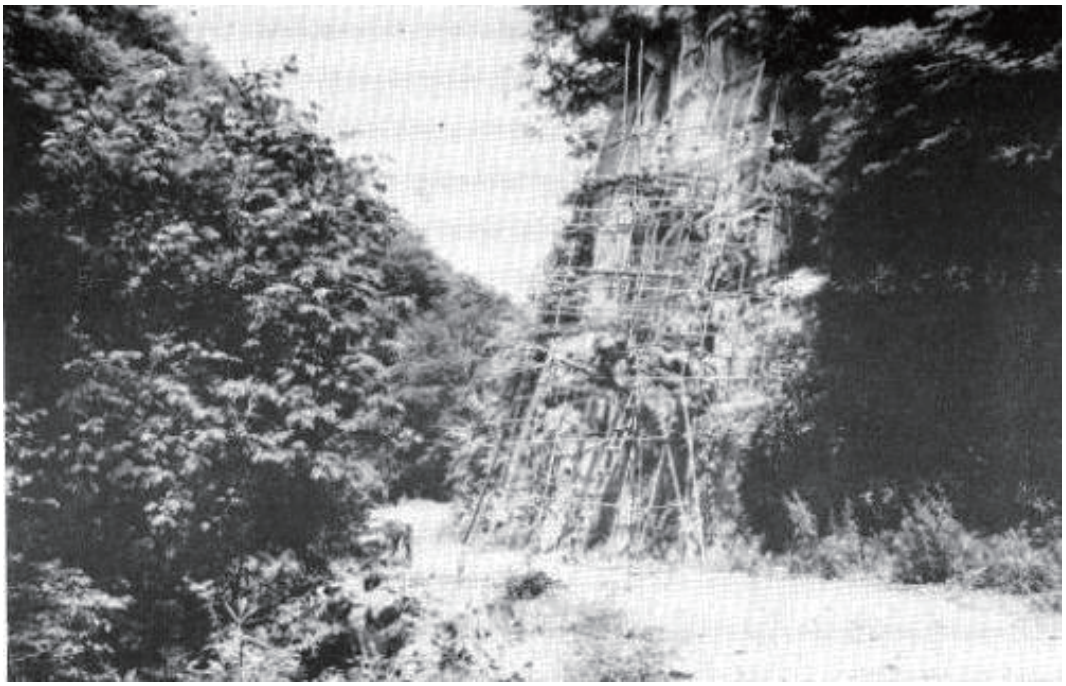
昭和５５年度

55.5.20　他方面区演習（場所：北海道矢臼別）

55.5.20　他方面区演習（場所：北海道矢臼別）

昭和５５年度

55.5.20　他方面区演習（場所：北海道矢臼別）



55.7.3　築城演習（場所：日出生台）

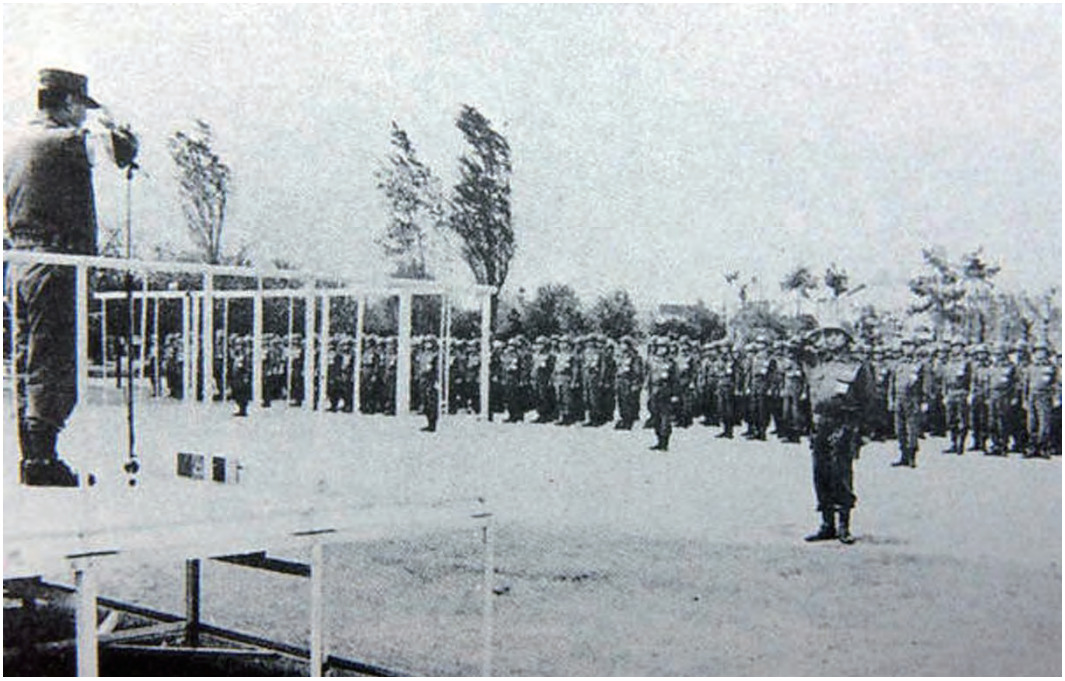
昭和５５年度

55.7.3　築城演習（場所：日出生台）

55.8.30　災害派遣（集中豪雨による復旧作業）
（場所：佐賀県小城市）

昭和５５年度

55.8.30　災害派遣（集中豪雨による給水支援）
（場所：熊本県阿蘇郡阿蘇町）



55.9.10　西部方面総監部指揮所演習

昭和５５年度

56.3.25　第８師団改編（場所：北熊本駐屯地）

56.3.25　第２４普通科連隊編成完結（場所：えびの駐屯地）

昭和５６年度

56.7.24　陸海空統合実動訓練（場所：福岡・佐世保・対馬地区）

56.7.24　陸海空統合実動訓練（場所：福岡・佐世保・対馬地区）

昭和５６年度

56.12.30　えびの駐屯地開設

56.12.30　えびの駐屯地開設

昭和５７年度

57.4.2　村松総監第８師団視察（場所：北熊本駐屯地）

57.4.5　村松総監第１混成団視察（場所：那覇駐屯地）

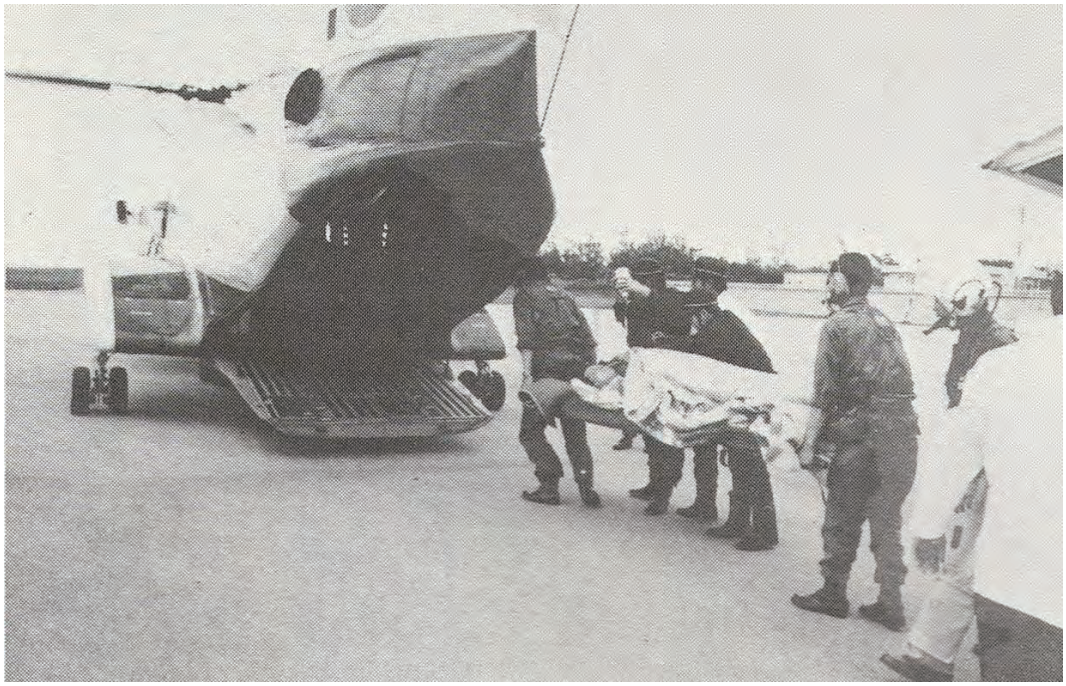
昭和５７年度

57.4.8　村松総監第４師団視察（場所：福岡駐屯地）

57.6.11　村井陸幕長えびの視察

昭和５７年度

57.6.12　村井陸幕長別府視察



57.7.7　緊急患者空輸（累計１,５００件）

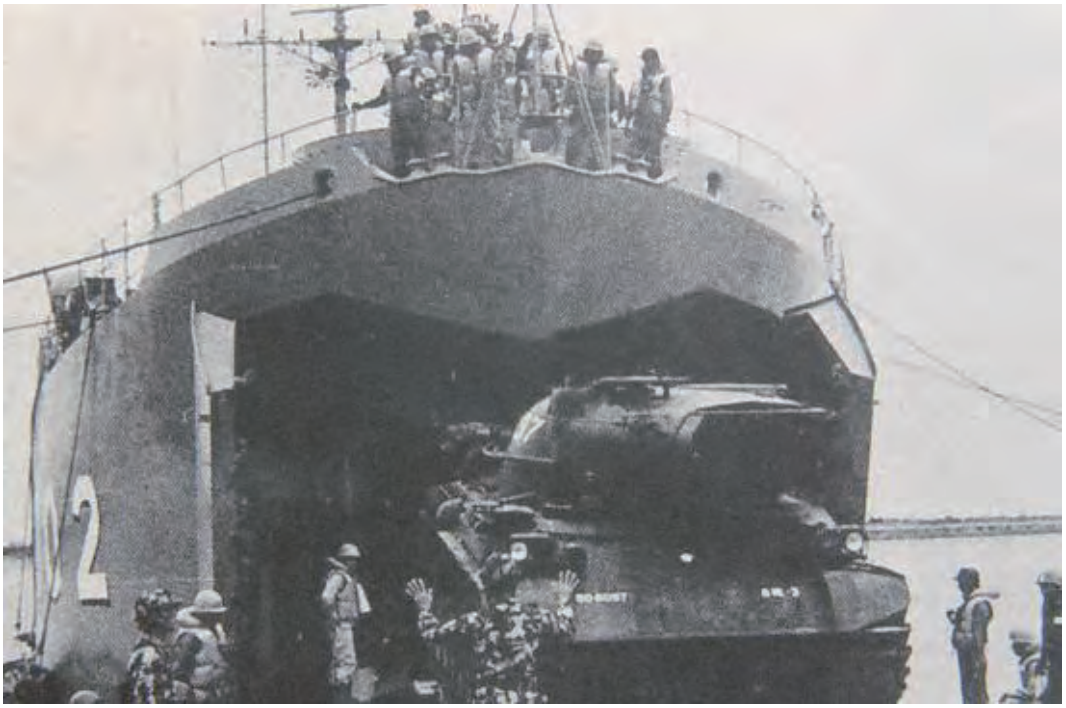
昭和５７年度

57.7.23　災害派遣（大水害による人命救助・復旧作業）
（場所：長崎県長崎市）

57.7.23　災害派遣（大水害による人命救助・復旧作業）
（場所：長崎県長崎市）

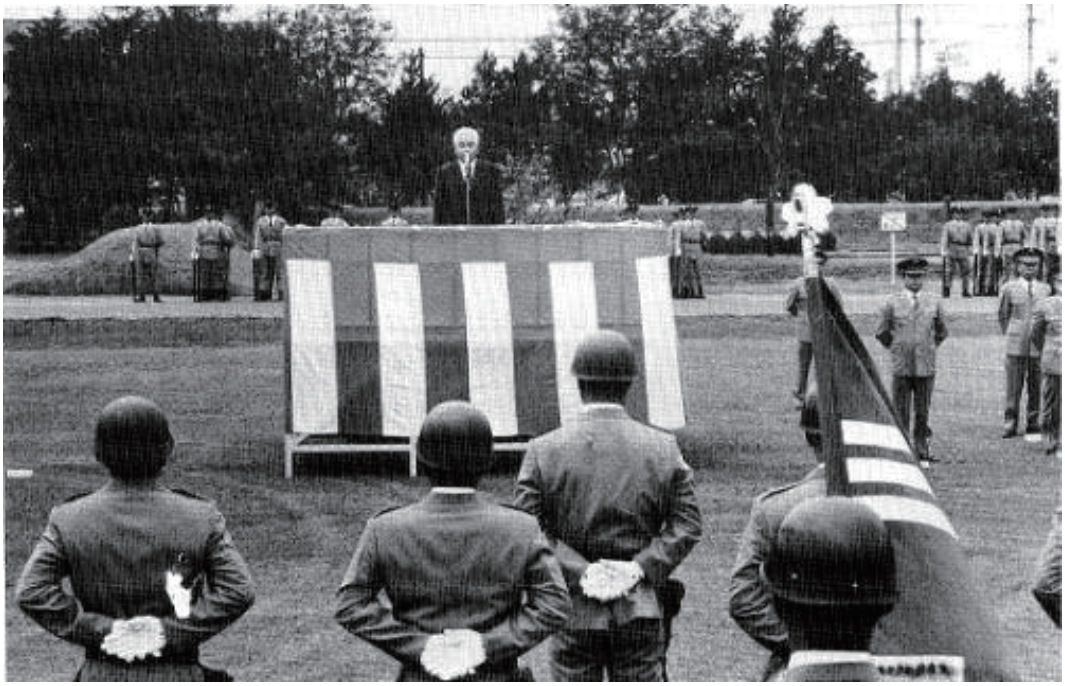
昭和５７年度

57.9.1　長崎大水害災害派遣の功績により防衛庁長官
第１級賞状を授与する第４師団



57.9.14　統合機動訓練（場所：加治木港～福山、霧島）

昭和５７年度



57.9.29　堀之内防衛政務次官健軍視察

57.10.21　矢田統幕議長、在日米軍司令官ドネリー海軍中将訪問

昭和５７年度

57.12.2　災害派遣（海上保安庁ヘリ墜落による行方不明者検索）
（場所：長崎県男島周辺）

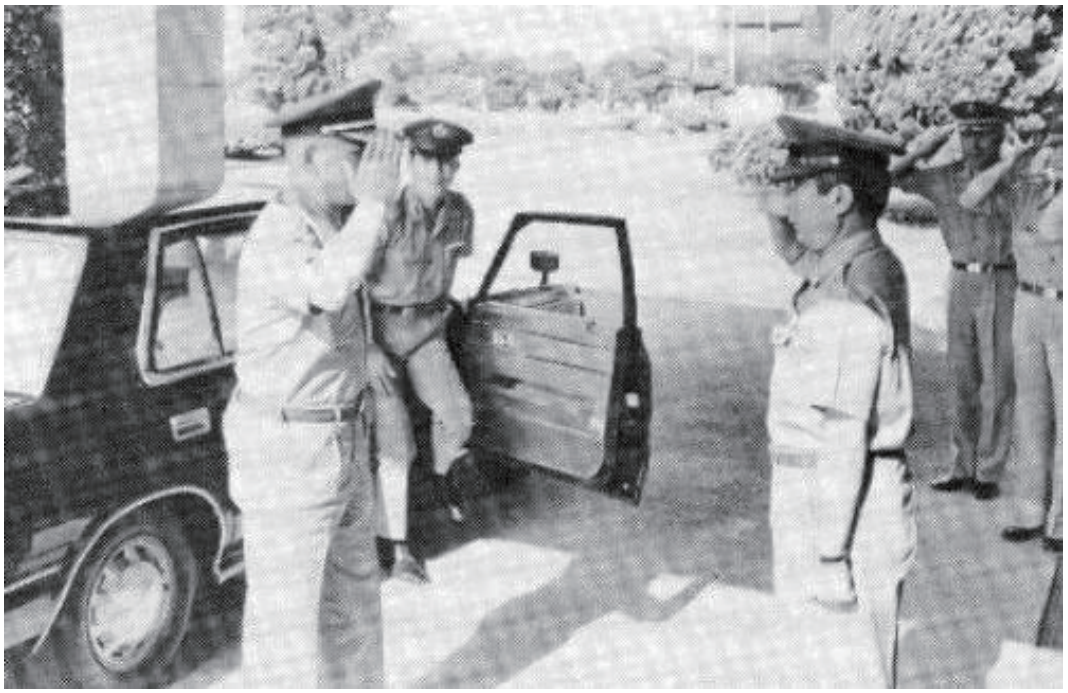
58.2.23　渡部陸幕長沖縄視察

昭和５８年度

58.4.6　在日米陸軍副司令官ワイアンド中将来監

58.4.6　在日米陸軍副司令官ワイアンド中将来監

昭和５８年度

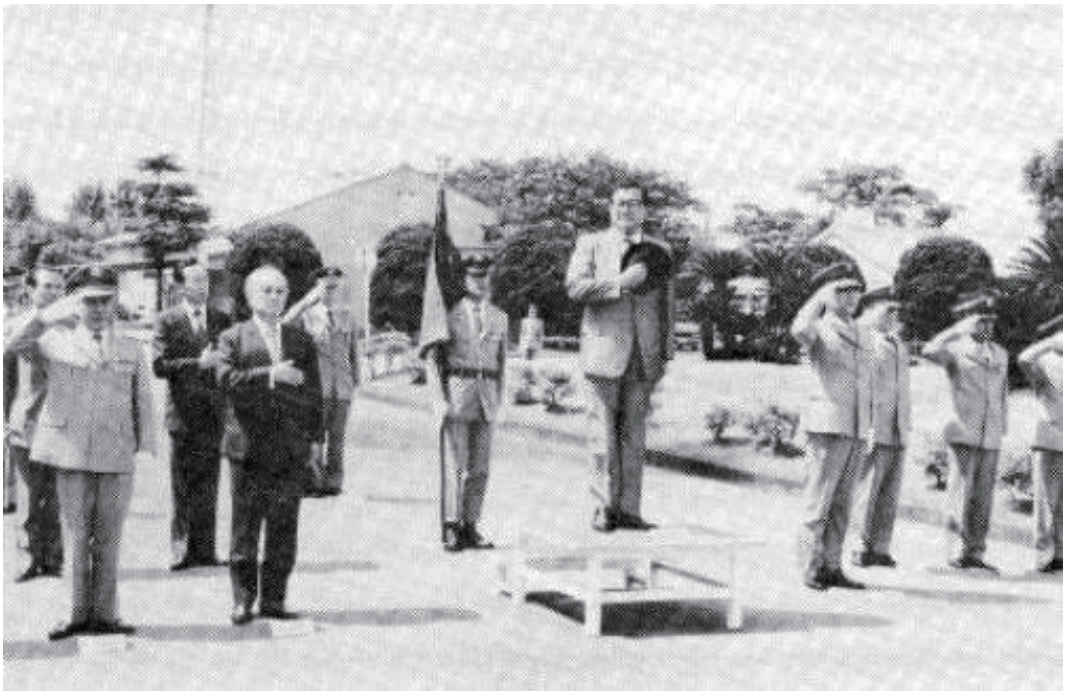


58.6.9　村井統幕議長視察（場所：健軍駐屯地）

58.7.5　齋藤総監着任式（場所：健軍駐屯地）

昭和５８年度

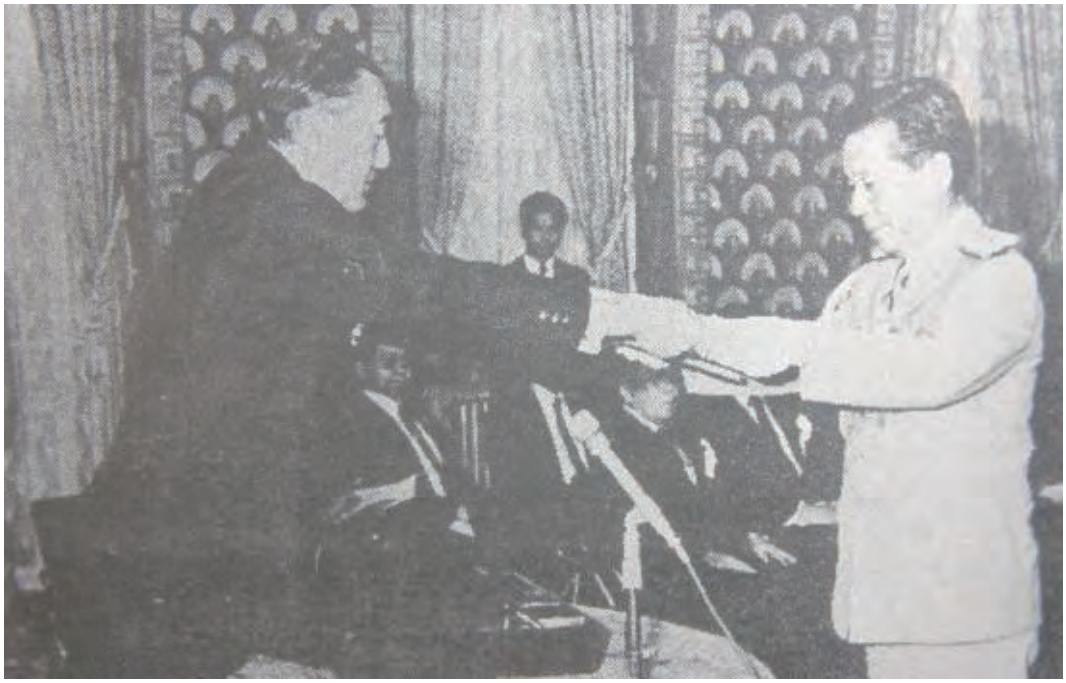
58.7.7　齋藤総監福岡視察



58.7.14　谷川防衛庁長官健軍視察

昭和５８年度

58.7.7　齋藤総監那覇視察



58.9.1　長崎集中豪雨災害派遣　内閣総理大臣表彰受賞

昭和５８年度

59.2.7　災害派遣（山林火災）
（場所：宮崎県延岡市小野町）

59.5.25　栗原防衛庁長官福岡視察

昭和５９年度

59.6.29　災害派遣（崖崩れによる行方不明者捜索）
（場所：熊本県五木村）

59.6.29　災害派遣（崖崩れによる行方不明者捜索）
（場所：熊本県五木村）

昭和５９年度

59.8.13　災害派遣（祖母山中行方不明者捜索救出）
（場所：大分県）

59.12.13　中村陸幕長健軍視察

昭和５９年度

60.3.20　村上防衛政務次官健軍視察

60.3.25　川内駐屯地開設

昭和６０年度

60.4.4　新井総監那覇視察

60.5.24　加藤防衛庁長官久留米視察

昭和６０年度

60.5.27　加藤防衛庁長官訓練視察（場所：日出生台）

60.5.27　加藤防衛庁長官訓練視察（場所：日出生台）

昭和６０年度

60.7.20　中村陸幕長対馬視察

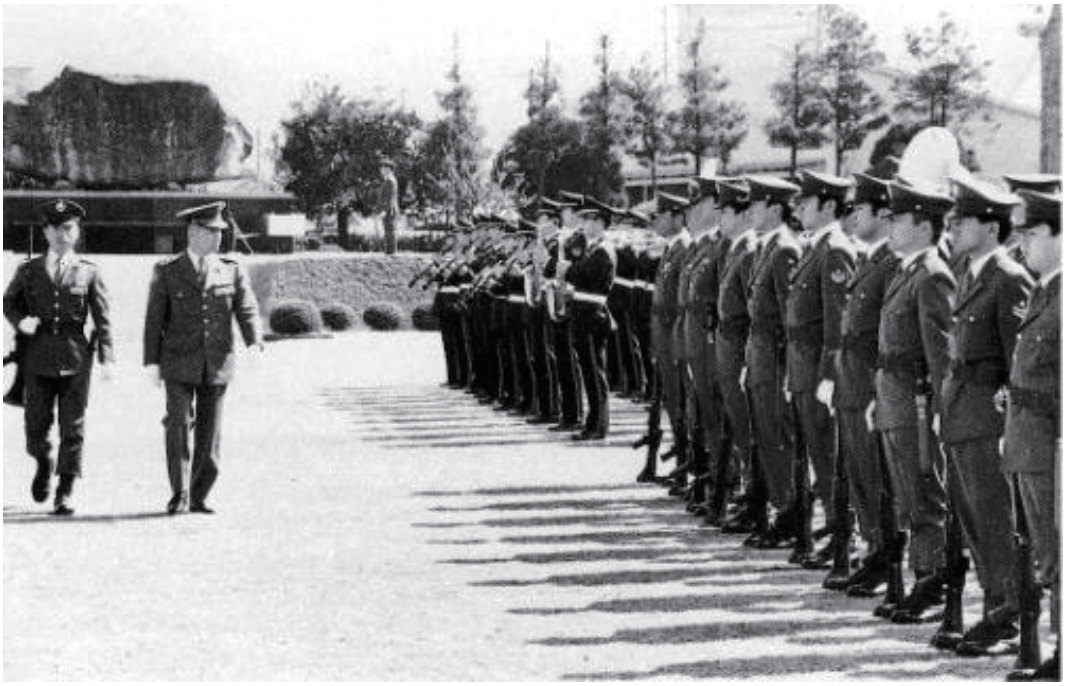
60.8.25　自衛隊演習

昭和６０年度

60.9.2　災害派遣（漁船転覆捜索）
（場所：熊本県八代海竜ヶ岳沿岸）

60.9.26　参議院内閣委員会部隊研修（場所：対馬駐屯地）

昭和６１年度



61.4.1　水澤総監福岡視察

61.4.10　北口防衛政務次官北熊本視察

昭和６１年度

61.4.10　北口防衛政務次官別府病院視察

61.5.27　森統幕議長対馬視察

昭和６１年度

61.6.23　石井陸幕長福岡視察

61.7.10　災害派遣（集中豪雨による崖崩れ行方不明者捜索）
（場所：鹿児島県鹿児島地区）

昭和６１年度

61.7.24　石井陸幕長訓練視察（場所：北海道矢臼別）

62.3.25　荒木総監北熊本視察

昭和６２年度

62.4.6　森防衛政務次官小郡視察

62.6.7　荒木総監玖珠視察

昭和６２年度

62.9.1　在日米陸軍司令官ダイク中将来監

62.10.14　ティシェ在日米軍司令官及び森統幕議長視察

昭和６２年度

62.10.14　ティシェ在日米軍司令官及び森統幕議長視察

62.11.1　６２演習（日米共同訓練）
（場所：日出生台・十文字原）

昭和６２年度

62.11.1　６２演習（日米共同訓練）
（場所：日出生台・十文字原）

62.11.1　６２演習（日米共同訓練）
（場所：日出生台・十文字原）

昭和６２年度

62.11.1　６２演習（日米共同訓練）
（場所：日出生台・十文字原）

62.11.1　６２演習（日米共同訓練）
（場所：日出生台・十文字原）

昭和６２年度

63.1.6　荒木総監西方航空隊総合編隊訓練視察

63.2.16　寺島陸幕長健軍視察

昭和６３年度

63.5.9　災害派遣（土石流阻止応急作業）
（場所：熊本県矢部地区）

63.5.9　災害派遣（土石流阻止応急作業）
（場所：熊本県矢部地区）

昭和６３年度

63.9.7　在日米陸軍司令官コーンズ中将来監

63.11.18　寺島陸幕長演習視察

昭和６３年度

63..11.18　寺島陸幕長演習視察

64.1.10　平成元年成人者（場所：健軍駐屯地）

平成元年度

元.4.6　寺島陸幕長沖縄視察

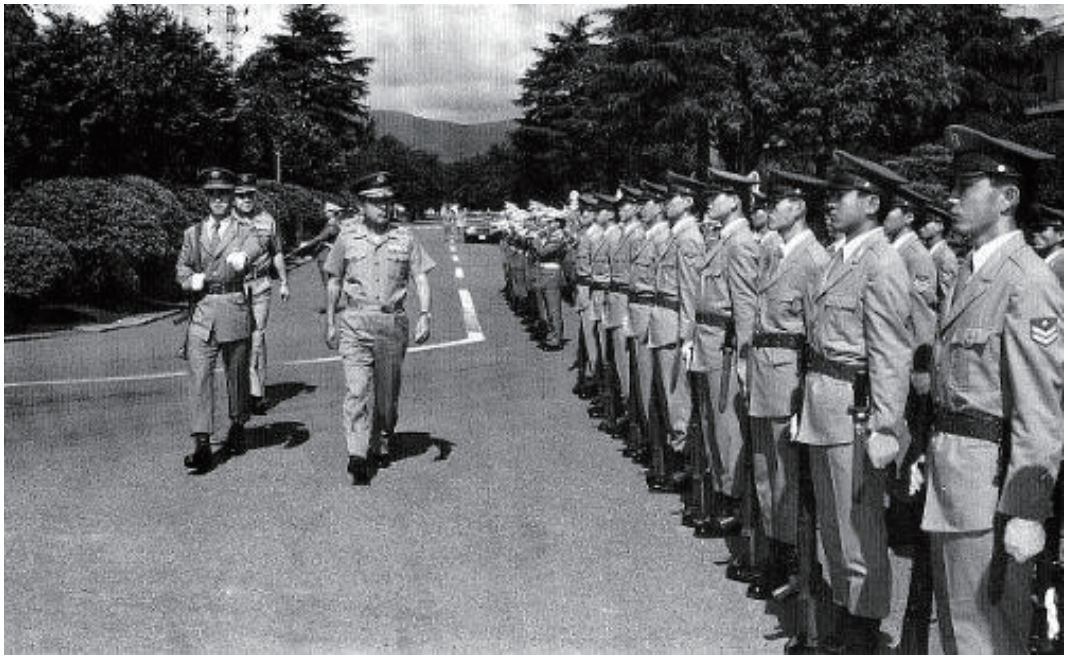
元.7.3　久我総監小郡視察

平成元年度

元.7.7　久我総監福岡視察

元.7.11　久我総監沖縄視察

平成元年度



元.7.13　久我総監北熊本視察

元.7.14　山崎防衛庁長官福岡視察

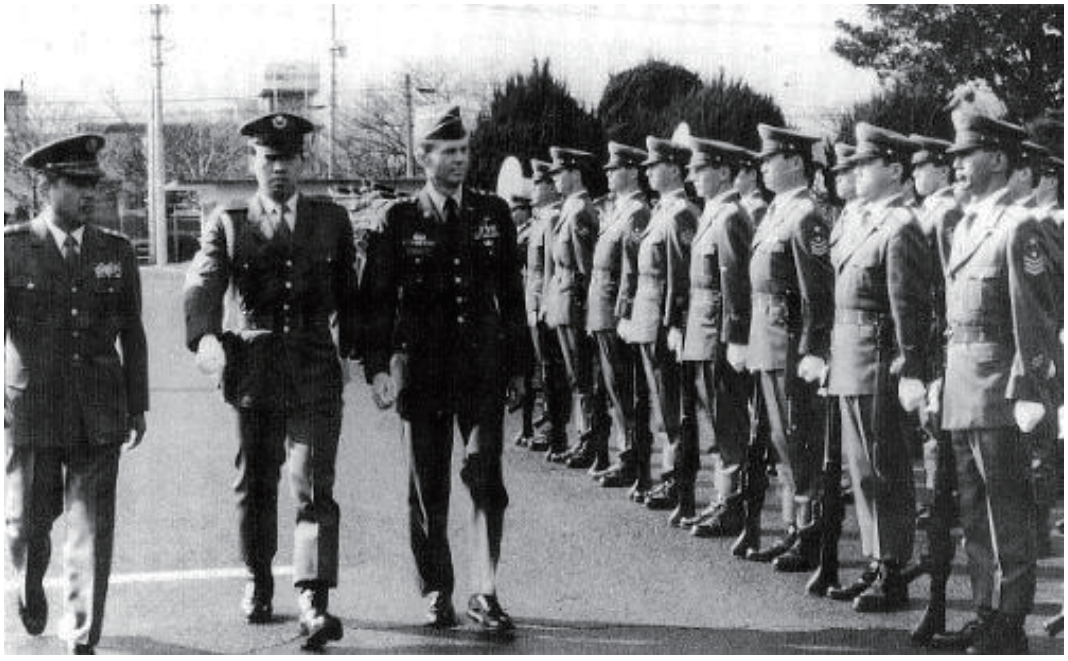
平成元年度

元.7.28　災害派遣（給水支援）
（場所：鹿児島県垂水市）

元.7.28　災害派遣（給水支援）
（場所：鹿児島県垂水市）

平成元年度

元.10.6　鈴木政務次官北熊本視察



元.12.14　在日米陸軍司令官ウッド・オール中将来監

平成２年度

2.4.9　志摩陸幕長健軍視察

2.4.10　志摩陸幕長北熊本視察

平成２年度

2.7.3　災害派遣（大野川氾濫）
（場所：大分県大野郡）

2.7.3　災害派遣（大野川氾濫による給水支援）
（場所：大分県大野郡）

平成２年度

2.7.3　災害派遣（行方不明者捜索）
（場所：熊本県阿蘇一宮町）

2.7.3　災害派遣（行方不明者捜索）
（場所：熊本県阿蘇一宮町）

平成２年度

2.7.10　石川防衛庁長官健軍視察

3.3.18　重松総監着任式（場所：健軍駐屯地）

平成３年度

3.4.23　重松総監小郡視察

3.5.3　災害派遣（風倒木災害）

平成３年度

3.6.3　災害派遣（雲仙普賢岳）
（場所：長崎県雲仙市）

3.6.3　災害派遣（雲仙普賢岳）
（場所：長崎県雲仙市）

平成３年度

3.6.3　災害派遣（雲仙普賢岳）
（場所：長崎県雲仙市）

3.6.3　災害派遣（雲仙普賢岳）
（場所：長崎県雲仙市）

平成３年度

3.6.3　災害派遣（雲仙普賢岳）
（場所：長崎県雲仙市）

3.6.9　海部総理島原視察
（場所：長崎県雲仙市）

平成３年度

3.9.28　災害派遣（台風１９号による給水支援）
（場所：大分県中津市）

3.9.28　災害派遣（台風１９号による給水支援）
（場所：熊本県玉名市天水町）

平成３年度

3.10.16　池田防衛庁長官島原視察

3.11.11　鎮西０３演習（場所：日出生台・十文字原）

平成３年度

3.11.11　鎮西０３演習（場所：日出生台・十文字原）

3.11.11　鎮西０３演習（場所：日出生台・十文字原）

平成３年度

3.11.11　鎮西０３演習（場所：日出生台・十文字原）

4.3.14　宮澤総理島原視察

平成３年度

4.3.31　健軍駐屯地体育館落成式

4.3.31　健軍駐屯地体育館落成式

平成４年度

4.4.7　横地総監北熊本視察

4.5.12　災害派遣（風倒木予防災害派遣）
（場所：玖珠・山浦地区）

平成４年度

4.5.12　災害派遣（風倒木予防災害派遣）
（場所：日田・友田地区）

4.5.1　西元陸上幕僚長視察（風倒木予防災害派遣）
（場所：玖珠・山浦地区）

平成４年度

4.5.18　西元陸上幕僚長視察（風倒木予防災害派遣）
（場所：玖珠・山浦地区）

4.5.29　佐久間統幕長視察（風倒木予防災害派遣）
（場所：玖珠・山浦地区）

平成４年度

4.8.26　横地総監小郡視察

4.12.10　西元陸幕長健軍視察

平成５年度

5.6.14　佐久間統幕議長福岡視察

5.6.19　災害派遣（集中豪雨による土砂崩れ復旧作業）
（場所：熊本県阿蘇郡小国町杖立）

平成５年度

5.8.13　細川総理被災地視察（場所：鹿児島県国分）

5.8.18　冨澤陸幕長島原視察

平成５年度

5.8.23　冨澤陸幕長健軍視察

5.9.4　災害派遣（台風１３号による給水支援）
（場所：大分県大分市）

平成５年度

5.9.4　災害派遣（台風１９号による行方不明者捜索）
（場所：鹿児島県川辺町）

6.3.23　新井総監着任式（場所：健軍駐屯地）

平成５年度

6.3.23　新井総監着任式（場所：健軍駐屯地）

6.3.29　愛知防衛庁長官島原視察

平成６年度

6.4.12　新井総監福岡視察

6.6　新井総監小郡視察

平成６年度

6.10.14　在日米陸軍司令官フリーマン少将来監

6.11.12　村上防衛政務次官対馬視察

平成６年度

7.1.17　日米共同訓練ＹＳ－２５（場所：北熊本駐屯地）

7.1.17　日米共同訓練ＹＳ－２５（場所：北熊本駐屯地）

平成６年度

7.1.17　災害派遣（阪神・淡路大震災）

7.1.17　災害派遣（阪神・淡路大震災）

平成７年度

7.7.3　田村方面総監着任式（場所：健軍駐屯地）

7.7.3　田村方面総監着任記者会見（場所：健軍駐屯地）

平成７年度

7.9.2　田村総監小郡視察

7.11.12　西方火力演習（場所：日出生台）

平成７年度

7.12.16　島原災害派遣終了セレモニー

7.12.16　島原災害派遣終了セレモニー

平成７年度

7.12.17　方面駅伝大会

7.12.26　災害派遣（山林火災）
（場所：宮崎県延岡市祝子川）

平成８年度

8.6.13　災害派遣（福岡空港航空機墜落事故）
（場所：福岡県福岡市）

8.7.29　第２次ゴラン高原派遣輸送隊編成完結式（隊長：角南３佐）

平成８年度

8.11.7　０８ＦＴＸ参加（場所：日出生台）

8.11.7　０８ＦＴＸ参加（場所：日出生台）

平成８年度

9.1.9　久間防衛庁長官竹松視察

9.3.27　災害派遣（薩摩地方地震給水支援）

平成９年度

9.4.10　災害派遣（対馬地区タンカー重油流出）

9.4.10　災害派遣（対馬地区タンカー重油流出）

平成９年度

9.7.2　樋山方面総監着任式（場所：健軍駐屯地）

9.7.2　樋山方面総監着任式（場所：健軍駐屯地）

平成９年度

9.7.9　災害派遣（土石流発生による復旧作業）
（場所：鹿児島県出水市）

9.7.24　樋山総監国分視察

平成９年度

9.9.3　樋山総監日出生台視察

9.10.21　藤縄陸幕長健軍視察

平成９年度

9.12.5　夏川統合議長福岡視察

10.3.26　第５地対艦ミサイル連隊編成完結

平成１０年度

10.7.2　天野方面総監着任式（場所：健軍駐屯地）

10.7.2　天野方面総監着任式（場所：健軍駐屯地）

平成１０年度

10.8.13　災害派遣（森林火災）
（場所：鹿児島県硫黄島）

10.9.30　天野総監小郡視察

平成１０年度

10.11.5　米海兵隊との実動訓練（場所：霧島・大矢野原）

10.11.5　米海兵隊との実動訓練（場所：霧島・大矢野原）

平成１０年度

10.11.5　米海兵隊との実動訓練（場所：霧島・大矢野原）

10.11.5　米海兵隊との実動訓練（場所：霧島・大矢野原）

平成１０年度

11.1.25　第７次ゴラン高原派遣輸送隊編成完結式（隊長：堀切３佐）

10.12.2　在日米陸軍司令官インジ少将来監

平成１１年度

11.5.18　磯島陸幕長健軍視察

11.7.26　第８次ゴラン高原派遣輸送隊編成完結式（隊長：秋葉３佐）

平成１１年度

11.7.26　第８次ゴラン高原派遣輸送隊見送り

11.8.2　災害派遣（セスナ機不時着による人命救助）
（場所：大分県庄内町）

平成１１年度

11.9.22　野呂田防衛庁長官健軍視察

11.11.21　西部方面隊創隊４４周年記念行事

平成１２年度

12.6.15　作道総監沖縄視察

12.7.12　作道総監国分視察

平成１２年度

12.7.26　在日米陸軍司令官来監

12.9.6　虎島防衛庁長官大村視察

平成１２年度

13.1.22　日米共同方面隊指揮所演習（ＹＳ－３９）

13.1.22　日米共同方面隊指揮所演習（ＹＳ－３９）

平成１２年度

13.2.24　西部方面音楽まつり

13.2.24　西部方面音楽まつり

平成１２年度

13.3.15　中谷陸幕長健軍視察

13.3.26　韓国陸軍第２軍司令官金仁鍾大将来監

平成１３年度

13.5.16　災害派遣（山林火災）
（場所：福岡県八女郡星野村）

13.5.21　中谷陸幕長沖縄視察

平成１３年度

13.7.12　災害派遣（高良川水害復旧作業）
（場所：福岡県久留米市国分町）

13.7.12　災害派遣（高良川水害復旧作業）
（場所：福岡県久留米市国分町）

平成１３年度

13.8.6　健軍駐屯地納涼盆踊り

13.8.6　健軍駐屯地納涼盆踊り

平成１３年度

13.10.14　西部方面隊創隊４６周年記念行事

13.10.14　西部方面隊創隊４６周年記念行事

平成１３年度

13.10.14　西部方面隊創隊４６周年記念行事

13.10.14　西部方面隊殉職隊員追悼式

平成１３年度

13.11.8　在日米陸軍司令官ジョンソン少将来監

13.11.8　在日米陸軍司令官ジョンソン少将来監

平成１３年度

14.1.8　１４年度初飛行

14.1.8　１４年度初飛行

平成１３年度

14.2.3　災害派遣（与那覇岳人命救助）
（場所：沖縄県国頭村）

14.2.8　対空情報戦闘（場所：日出生台）

平成１３年度

14.2.8　松川総監対空情報戦闘視察（場所：日出生台）

14.3.27　西部方面普通科連隊新編

平成１４年度

14.7.26　松川総監小郡視察

14.8.5　災害派遣（山林火災）
（場所：宮崎県高千穂町）

平成１４年度

14.11.7　緊急患者空輸（累計６,０００件）

14.11.12　災害派遣（山林火災）
（場所：大分県塚原地区）

平成１４年度

14.11.13　米陸軍との実動訓練（１４ＦＴＸ）

15.1.9　石破防衛庁長官相浦視察

平成１４年度

15.1.20　先崎陸幕長那覇視察

15.3.27　西部方面後方支援隊新編

平成１４年度

15.3.27　西部方面後方支援隊新編

15.3.27　西部方面衛生隊新編

平成１５年度

15.5.13　先崎陸幕長健軍視察

15.5.14　先崎陸幕長国分視察

平成１５年度

15.6.18　災害派遣（山林火災）
（場所：熊本県菊池市旭志）

15.7.19　災害派遣（集中豪雨による復旧作業）
（場所：福岡県三笠川）

平成１５年度

15.7.19　災害派遣（集中豪雨による人命救助）
（場所：福岡県飯塚市）

15.7.19　災害派遣（集中豪雨による人命救助）
（場所：福岡県飯塚市）

平成１５年度

15.7.20　災害派遣（集中豪雨による復旧作業）
（場所：熊本県水俣地区）

15.7.20　災害派遣潮谷熊本県知事視察
（場所：熊本県水俣地区）

平成１５年度

15.9.12　災害派遣（沖縄県宮古島）

15.10.11　第４次国連東ティモール派遣隊第１派出国（隊長：川又１佐）

平成１５年度

15.10.11　第４次国連東ティモール派遣隊第１派出国

15.10.27　米陸軍との実動訓練（１５ＦＴＸ）

平成１５年度

15.10.27　米陸軍との実動訓練（１５ＦＴＸ）

16.1.23　天皇陛下行幸と列（場所：那覇）

平成１５年度

16.2.17　第１７次ゴラン高原派遣輸送隊壮行行事（隊長：遠藤３佐）

16.3.29　西部方面指揮所訓練支援隊新編

平成１６年度

16.6.16　先崎陸幕長小倉視察

17.7.3　第４次東ティモール派遣部隊帰国行事

平成１６年度

16.8.22　第１８次ゴラン高原派遣輸送隊隊旗授与式（隊長：徳永３佐）

16.9.24　在日米陸軍司令官来監

平成１６年度

16.9.27　日米ジョイントコンサート（場所：那覇）

16.10.27　災害派遣（中越地震による浴場支援）
（場所：新潟県）

平成１６年度

17.1.10　第１８次ゴラン高原派遣輸送隊活動

17.3.7　韓国白将軍来監

平成１６年度

17.3.20　災害派遣（西方沖地震による人命救助）

17.3.20　災害派遣（西方沖地震による人命救助）

平成１６年度

17.3.20　災害派遣（西方沖地震）

17.3.20　災害派遣（西方沖地震）

平成１６年度

17.3.20　災害派遣（西方沖地震による浴場支援）

17.3.28　西部方面情報処理隊・西部方面通信情報隊新編

平成１６年度

17.3.28　西部方面情報処理隊新編

17.3.28　西部方面通信情報隊新編

平成１６年度

17.3.28　第１５旅団新編

17.3.28　第１５旅団新編

平成１７年度

17.4.19　ブラックマン中将来監

17.6.11　第７次イラク復興業務支援隊編成

平成１７年度

17.7.30　第７次イラク復興業務支援群壮行行事

17.7.30　第７次イラク復興業務支援群壮行行事

平成１７年度

17.7.30　第７次イラク復興業務支援群見送り

17.8　第７次イラク復興業務支援群サマーワ宿営地

平成１７年度

17.8　第７次イラク復興支援活動

17.9　第７次イラク復興業務支援群

平成１７年度

17.10.22　第８次イラク復興業務支援群隊旗授与式

17.10.22　第８次イラク復興業務支援群出国

平成１７年度

17.11　第８次イラク復興業務支援群サマーワ宿営地

17.11　第８次イラク復興業務支援群

平成１７年度

17.11.26　第７次イラク復興業務支援群帰国行事

18.3.4　第８次イラク復興業務支援群

平成１８年度

18.7.30　国際緊急援助隊準備訓練

18.7.30　国際緊急援助隊準備訓練

平成１８年度

18.7.30　国際緊急援助隊準備訓練

18.8　不発弾処理（那覇市）１万回出動

平成１８年度

19.1.29　米海兵隊との実動訓練（１８ＦＴＸ）（場所：健軍駐屯地）

19.1.29　米海兵隊との実動訓練（１８ＦＴＸ）（場所：健軍駐屯地）

平成１８年度

19.1.29　米海兵隊との実動訓練（１８ＦＴＸ）（場所：健軍駐屯地）

19.2.4　緊急患者空輸（累計７,０００件）

平成１８年度

19.3.29　輪倉総監着任式（場所：健軍駐屯地）

19.3.29　輪倉総監着任式（場所：健軍駐屯地）

平成１９年度

19.4.3　輪倉総監記者会見（場所：健軍駐屯地）

19.5.11　在日米陸軍司令官パーキンス少将来監

平成１９年度

19.5.17　鹿児島県防災訓練

19.5.17　鹿児島県防災訓練

平成１９年度

19.5.21　折木陸上幕僚長健軍視察

19.5.21　折木陸上幕僚長健軍視察

平成１９年度

19.5.22　折木陸上幕僚長那覇視察

19.5.22　折木陸上幕僚長献花

平成１９年度

19.7.2　北方転地訓練演習移動

19.7.2　北方転地訓練演習（場所：北海道矢臼別）

平成１９年度

19.7.6　災害派遣（集中豪雨による人命救助）
（場所：熊本県美里町）

19.7.6　災害派遣（集中豪雨による人命救助）
（場所：熊本県美里町）

平成１９年度

19.7.9　ＦＴＣ訓練

19.7.9　ＦＴＣ訓練

平成１９年度

19.7.9　ＦＴＣ訓練

19.7.9　ＦＴＣ訓練

平成１９年度

19.7.9　ＦＴＣ訓練

19.7.9　ＦＴＣ訓練

平成１９年度

19.7.19　災害派遣（新潟県中越沖地震）

19.7.19　災害派遣（新潟県中越沖地震）

平成１９年度

19.7.19　災害派遣（新潟県中越沖地震）

19.7.19　災害派遣（新潟県中越沖地震）

平成２０年度

20.4.7　日出生台演習場第１次定期整備　輪倉総監視察

20.4.7　折木陸幕長対馬視察

平成２０年度

20.8.4　用田総監着任式（場所：健軍駐屯地）

20.8.4　用田総監慰霊碑献花（場所：健軍駐屯地）

平成２０年度

20.8.25　災害派遣（愛知県今治市山林火災）

20.8.25　災害派遣（愛知県今治市山林火災）

平成２０年度

20.8.25　災害派遣（愛知県今治市山林火災）

20.8.25　災害派遣（愛知県今治市山林火災）

平成２０年度

20.8.29　ＦＴＣ訓練

20.8.29　ＦＴＣ訓練

平成２０年度

20.9.27　大分国体協力

20.11.1　西部方面隊殉職隊員追悼式（場所：健軍駐屯地）

平成２０年度

20.11.2　西部方面隊創隊５３周年記念行事

20.11.2　西部方面隊創隊５３周年記念行事

平成２０年度

20.11.2　西部方面隊創隊５３周年記念行事

20.11.2　西部方面隊創隊５３周年記念行事

平成２０年度

20.11.10　用田総監自衛隊統合演習視察

20.11.10　用田総監自衛隊統合演習視察

平成２０年度

21.1.14　米国における米海兵隊との実動訓練

21.1.14　米国における米海兵隊との実動訓練

平成２０年度

21.1.26　オリエント・シールド（２０ＦＴＸ）

21.1.26　オリエント・シールド（２０ＦＴＸ）（場所：大矢野原）

平成２０年度

21.1.26　オリエント・シールド（２０ＦＴＸ）（場所：大矢野原）

21.1.26　オリエント・シールド（２０ＦＴＸ）　（場所：大矢野原）

平成２０年度

21.1.26　オリエント・シールド（２０ＦＴＸ）　（場所：大矢野原）

21.1.26　オリエント・シールド（２０ＦＴＸ）　（場所：大矢野原）

平成２０年度

21.1.26　オリエント・シールド（２０ＦＴＸ）

21.1.26　オリエント・シールド（２０ＦＴＸ）

平成２０年度

21.2.17　用田総監方面対空情報戦闘訓練視察

21.2.17　用田総監方面対空情報戦闘訓練視察

平成２０年度

21.2.17　方面対空情報戦闘訓練

21.2.17　方面対空情報戦闘訓練

平成２０年度

21.3.26　第４特殊武器防護隊改編

21.3.26　第４特殊武器防護隊改編

平成２１年度

21.9.25　用田総監方面統裁指揮所演習視察

21.9.25　用田総監方面統裁指揮所演習視察

平成２１年度

21.10.1　２ＡＡホーク実射検閲

21.10.1　２ＡＡホーク実射検閲

平成２１年度

21.10.17　西部方面隊殉職隊員追悼式（場所：健軍駐屯地）

21.10.17　西部方面隊殉職隊員追悼式（場所：健軍駐屯地）

平成２１年度

21.11.3　自衛隊統合演習（２１ＪＸ）

21.11.3　自衛隊統合演習（２１ＪＸ）

平成２１年度

21.11.3　自衛隊統合演習（２１ＪＸ）

21.11.3　自衛隊統合演習（２１ＪＸ）

平成２２年度

22.5.1　災害派遣（口蹄疫拡大）
（場所：宮崎県湯郡川南町）

22.5　緊急患者空輸（ＬＲ－1　ラストフライト）

平成２２年度

22.6.16　西部方面音楽隊５０周年記念演奏会

22.6.17　北澤防衛大臣災害派遣視察

平成２２年度

22.7.24　第３０次ゴラン高原派遣輸送隊激励行事（隊長：武者３佐）

22.7.24　第３０次ゴラン高原派遣輸送隊激励行事

平成２２年度

22.8.5　在日米陸軍司令官ワシンスキー少将来監

22.8.21　パキスタン国際緊急航空援助隊派遣

平成２２年度

22.9.11　第２９次ゴラン高原派遣輸送隊（ジウアニ宿営地）

22.9.11　第２９次ゴラン高原派遣輸送隊交代

平成２２年度

22.10.10　西部方面隊創隊５５周年記念行事

22.10.10　西部方面隊創隊５５周年記念行事

平成２２年度

22.10.21　災害派遣（大雨被害による物資輸送）
（場所：鹿児島県奄美大島）

22.10.21　災害派遣（大雨被害による復旧作業）
（場所：鹿児島県奄美大島）

平成２２年度

22.10.26　パキスタン国際緊急航空援助隊帰国行事

22.12.1　日米共同統合演習

平成２２年度

22.12.2　方面隊実動訓練（場所：日出生台）

22.12.2　方面隊実動訓練（場所：日出生台）

平成２２年度

22.12.2　方面隊実動訓練（場所：日出生台）

22.12.2　方面隊実動訓練（場所：日出生台）

平成２２年度

23.1.3　災害派遣（小型民間機行方不明者の捜索）
（場所：熊本県阿蘇外輪山）

23.1.3　災害派遣（小型民間機行方不明者の捜索）
（場所：熊本県阿蘇外輪山）

平成２２年度

23.1.19　北澤防衛大臣健軍視察

23.1.24　災害派遣（高病原性鳥インフルエンザ）

平成２２年度

23.1.27　日米共同方面隊指揮所演習（ＹＳ－５９）

23.1.27　日米共同方面隊指揮所演習（ＹＳ－５９）

平成２２年度

23.2.19　西部方面音楽まつり

23.2.19　西部方面音楽まつり

平成２２年度

23.3.11　災害派遣（東日本大震災）

23.3.11　災害派遣（東日本大震災）

平成２２年度

23.3.11　災害派遣（東日本大震災）

23.3.11　災害派遣（東日本大震災）

平成２３年度

23.8.8　宮下総監着任式（場所：健軍駐屯地）

23.8.27　第５次ハイチ国際緊急援助隊派遣第２派見送り行事

平成２３年度

23.8.27　第５次ハイチ国際緊急援助隊派遣第２派見送り行事

23.8.27　第５次ハイチ国際緊急援助隊派遣第２派見送り行事

平成２３年度

23.8　緊急患者空輸（累計８,０００件）

23.9.9　第１５飛行隊長　統合幕僚長表彰

平成２３年度

23.9.28　折木統合幕僚長健軍視察

23.10.30　西部方面隊創隊５６周年記念行事

平成２４年度

24.9.26　国民保護実働訓練

24.9.26　国民保護実働訓練

平成２４年度

24.4.23　君塚陸幕長対馬視察

24.8.28　米海兵隊との実動訓練（場所：日出生台）

平成２４年度

24.8.28　米海兵隊との実動訓練（場所：日出生台）

24.8.28　米海兵隊との実動訓練（場所：日出生台）

平成２４年度

24.8.28　米海兵隊との実動訓練（場所：日出生台）

24.8.28　米海兵隊との実動訓練視察（場所：日出生台）

平成２４年度

25.2.22　日米統合演習（ＪＸ）及び陸上総隊演習編成完結式

25.2.22　日米統合演習（ＪＸ）及び陸上総隊演習編成完結式

平成２５年度

25.6.5　第４次南スーダン現地支援隊見送り

25.6.5　第４次南スーダン現地支援隊見送り

平成２５年度

25.6.5　第４次南スーダン現地支援隊見送り

25.6.5　第４次南スーダン現地支援隊見送り

平成２５年度

25.6.5　第４次南スーダン現地支援隊見送り

25.6.5　第４次南スーダン現地支援隊見送り

平成２５年度

25.10.24　番匠総監福岡視察

25.10.24　番匠総監福岡視察

平成２５年度

2.2.21　西部方面音楽まつり（福岡公演）

2.2.21　西部方面音楽まつり（福岡公演）

平成２５年度

25.11.12　岩﨑統合幕僚長西部方面隊実動演習視察（鎮西２５）

26.3.30　西部方面混成団編成完結式

平成２６年度

26.4.11　災害派遣（鳥インフルエンザ）

26.4.11　木原防衛大臣政務官隊員激励

平成２６年度

26.4.17　第４師団ＮＥＸＣＯ西日本との締結式

26.5.13　第８師団ＮＥＸＣＯ西日本との締結式

平成２６年度

26.5.11　災害派遣（山林火災）
（場所：熊本県八代市泉町）

26.5.11　災害派遣（山林火災）
（場所：熊本県八代市泉町）

平成２６年度

26.5.10　統合訓練（実動訓練）

26.5.10　統合訓練（実動訓練）

平成２６年度

26.5.17　武田防衛副大臣　統合訓練視察

26.6.22　小野寺防衛大臣健軍視察

平成２６年度

26.8.6　健軍駐屯地納涼盆踊り

26.8.6　健軍駐屯地納涼盆踊り

平成２６年度

26.12.6　米海兵隊との実動訓練（場所：日出生台）

26.12.6　米海兵隊との実動訓練（場所：日出生台）

平成２６年度

26.12.6　米海兵隊との実動訓練（場所：日出生台）

26.12.6　米海兵隊との実動訓練（場所：日出生台）

平成２６年度

26.10.1　西部方面隊創隊５９周年記念行事

26.10.1　西部方面隊創隊５９周年記念行事

平成２６年度

27.1.6　総監部訓練始め

27.3.1　西部方面音楽まつり

平成２６年度

27.3.9　西部方面隊創隊６０周年記念行事記念講話

27.3.9　西部方面隊創隊６０周年記念行事山崎統合幕僚副長来訪

平成２６年度

27.3.25　西部方面対舟艇対戦車隊編成改組式

27.3.26　水陸機動準備隊編成完結式

平成２７年度

28.3.28　与那国駐屯地開設

28.3.28　与那国駐屯地開設

平成２７年度

27.4.28　ネパール地震発生に於ける国際緊急援助隊派遣

27.8.2　沖縄県浦添市経塚不発弾処理

平成２７年度

27.8.11　駐在ニュージーランド大使来監

27.8.26　１５ヘリ隊による沖縄電力に対する石垣島の空輸支援

平成２７年度

27.9.5　離島統合防災訓練

27.9.5　離島統合防災訓練小川総監視察

平成２７年度

27.9.5　離島統合防災訓練

27.10.7　在日米陸軍司令官来監

平成２７年度

27.11.5　第４師団 佐賀県警との共同訓練（場所：福岡駐屯地）

27.11.15　防災訓練（場所：与那国）

平成２７年度

27.11.15　防災訓練における給水支援（場所：与那国）

27.11.15　防災訓練における音楽演奏（場所：与那国）

平成２７年度

27.11.22　第４音楽隊による大相撲千秋楽演奏支援

27.12.20　第８師団原子力防災訓練

平成２７年度

28.1.12　桜島火山爆発総合防災訓練

28.2.4　ⅢＭＥＦ司令官来監

平成２７年度

28.2.4　ⅢＭＥＦ司令官来監

28.2.5　米国海兵隊移転射撃支援（場所：日出生台）

平成２７年度

28.3.22　米海軍第７艦隊司令官来監

28.3.22　米海軍第７艦隊司令官来監

平成２８年度

28.4　災害派遣（熊本地震）

28.4　災害派遣（熊本地震）

平成２８年度

28.4　災害派遣（熊本地震）

28.4　災害派遣（熊本地震）

平成２８年度

28.4　災害派遣（熊本地震）

28.4　災害派遣（熊本地震）

平成２８年度

28.5.24　国連平和維持活動（ＰＫＯ）早期展開支援隊出国報告

28.7.14　環太平洋合同訓練ハワイ沖及び周辺海域

平成２８年度

28.8.25　岡部陸幕僚長視察（場所：健軍駐屯地）

28.9.7　稲田防衛大臣相浦駐屯地視察

平成２８年度

28.9.7　対馬災害派遣に於ける警察、消防との救助者搬送

28.9.11　西部方面隊創隊６１周年記念行事

平成２８年度

28.10.4　１５ヘリ隊緊急患者空輸（累計９,０００件）

28.12.28　災害派遣（鳥インフルエンザ）
（場所：熊本県南関町）

平成２８年度

29.1.23　派遣海賊対処行動支援隊先遣隊出発

28.2.28　通信事業者との共同訓練

平成２９年度

29.4.14　安倍内閣総理大臣健軍駐屯地来訪及び隊員激励

29.5.11　日仏英米合同訓練（ボート発着訓練）

平成２９年度

29.5.13　日仏英米合同訓練（上陸訓練）

29.5.16　日仏英米合同訓練（ヘリボン訓練）

平成２９年度

29.6.26　１５５ミリ榴弾砲（ＦＨ－７０）起動展開射撃

29.6.29　第１５ヘリ隊緊急患者空輸９,０００件
防衛大臣１級賞状受賞

平成２９年度

29.7　災害派遣（九州北部豪雨）

29.9.2　離島統合防災訓練

平成２９年度

29.12.12　日米共同射撃訓練（第８師団）

30.1.21　小野寺防衛大臣北熊本視察

平成３０年度

30.4.7　水陸機動団隊旗授与式（場所：相浦駐屯地）

30.4.11　災害派遣（土砂崩れによる人命救助）
（場所：大分県耶馬渓）

平成３０年度

30.4.11　災害派遣（土砂崩れによる河川捜索）
（場所：大分県耶馬渓）

30.4.23　大分県耶馬渓災害派遣の撤収

平成３０年度

30.6.15～7.21　環太平洋合同訓練での１２ＳＳＭ射撃

30.6.15～7.21　環太平洋合同訓練

平成３０年度

30.8.30　離島統合防災訓練・消防との共同救出訓練

30.9.1　離島統合防災訓練・輸送艦おおすみへ着艦

平成３０年度

30.9.21　ホークミサイルの組み立て（場所：米国マクレガー射場）

30.9.29　ホークミサイル実射（場所：米国マクレガー射場）

平成３０年度

30.10.23　３０鎮西 緊急患者後送中（場所：大矢野原）

30.10.30　３０鎮西 陸空共同基地警備（場所：那覇基地）

平成３０年度

30.11.8　３０鎮西 ＣＨ－４７への車両搭載

30.11.14　３０鎮西 警戒中の近ＳＡＭ

平成３０年度

30.11.16　３０鎮西 空中機動準備中のＵＨ－６０Ｊ

30.11.16　３０鎮西 水際障害準備中の車両

平成３０年度

31.1.9　年初飛行中の西部方面航空隊（場所：熊本県上空）

31.3.26　宮古警備隊編成完結式

平成３０年度

31.3.26　宮古警備隊編成完結式

31.3.30　奄美駐屯地開設行事・瀬戸内パレード

平成３０年度

31.3.31　奄美駐屯地開設行事・除幕式

31.3.31　奄美駐屯地開設行事・隊旗授与式

平成３１年・令和元年度

31.4.7　宮古島駐屯地開設行事　隊旗授与式

31.4.7　宮古島駐屯地開設行事　隊旗授与式

平成３１年・令和元年度

31.4.19　災害派遣（宮古島廃油ボール漂着物除去）

元.5.16　国連ＰＫＯ支援部隊アフリカ出国報告

平成３１年・令和元年度

元.5.19　災害派遣（屋久島大雨による孤立者救助）

元.7.22　派遣海賊対処行動支援隊・任務完了報告式

平成３１年・令和元年度

元.8.27　災害派遣（九州北部豪雨）

元.8.27　災害派遣（九州北部豪雨）

平成３１年・令和元年度

元.8.27　災害派遣（九州北部豪雨）

元.8.29　国連ＰＫＯ支援部隊アフリカ帰国報告

平成３１年・令和元年度

元.9.1　離島統合防災訓練

元.9.1　離島統合防災訓練

平成３１年・令和元年度

元.10.04　宮城県南三陸町長　東日本震災災害派遣に伴う感謝状授与

元.12.9　日米共同方面隊指揮所演習（ＹＳ－７７）

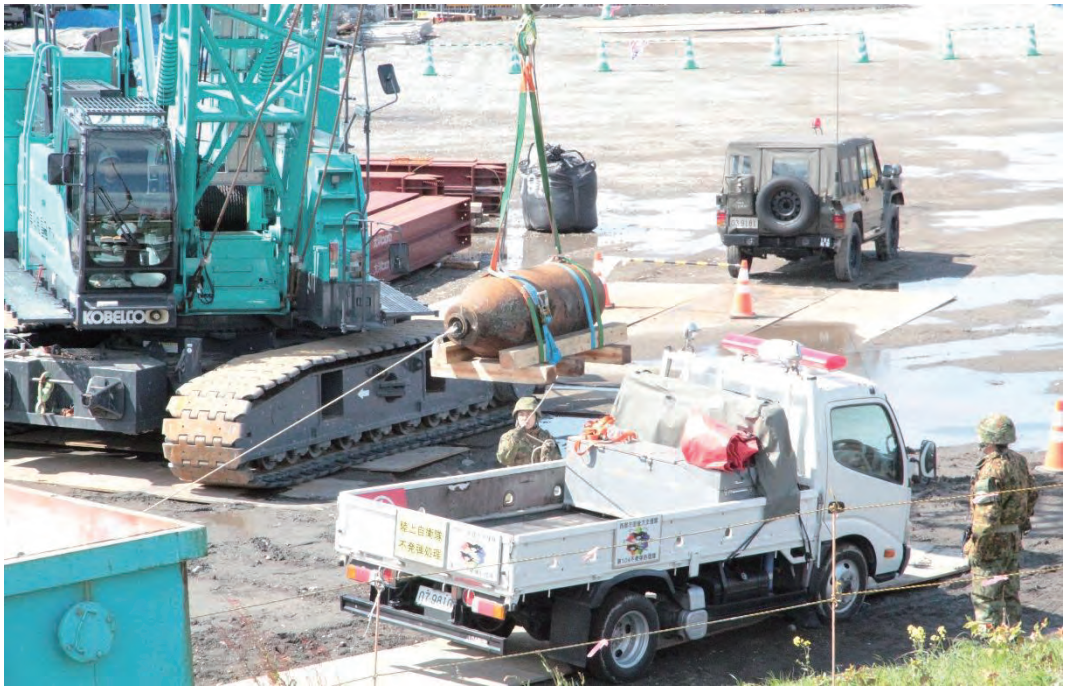
平成３１年・令和元年度

2.1.8　災害派遣（沖縄県うるま市で豚コレラ発生）

2.2.9　河野防衛大臣健軍駐屯地視察

平成３１年・令和元年度

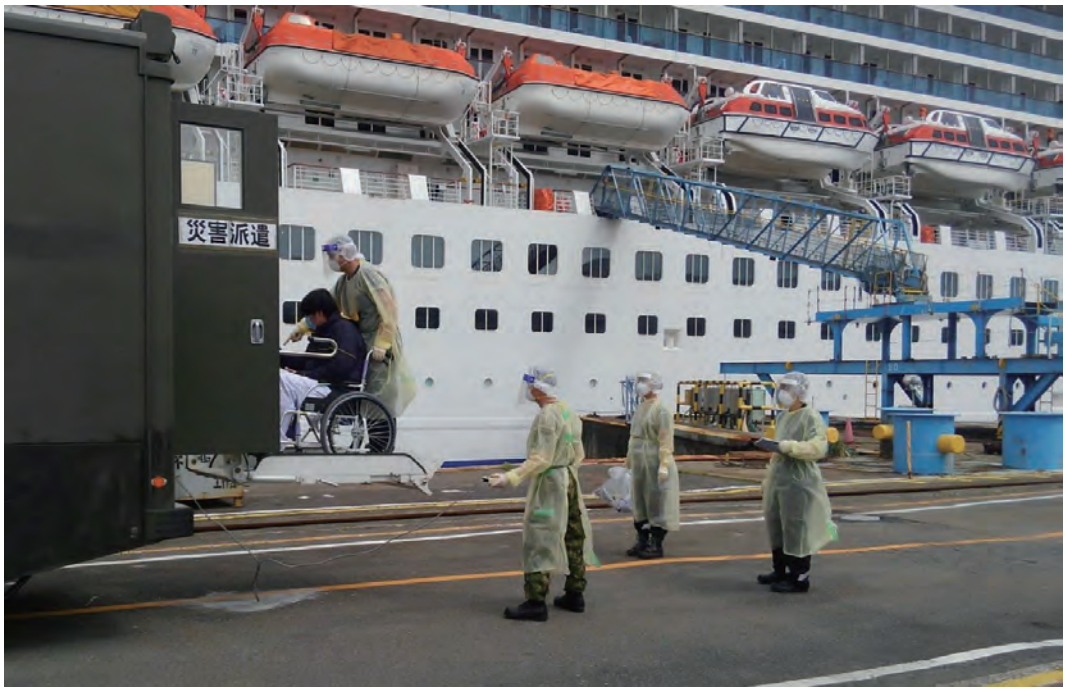
2.3.8　１０４不発弾処理隊１ｔ爆弾処理



2.3.8　１０４不発弾処理隊１ｔ爆弾処理

令和２年度

2.4.5　宮古島駐屯地編成完結式



2.5.4　災害派遣（長崎市クルーズ船コロナ患者発生）

令和２年度

2.7.13　熊本県豪雨に伴う安部総理災害現場視察

2.9.4　災害派遣（台風１０号被害に伴う避難者空輸）鹿児島県中之島

令和２年度

2.10.16　鎮西演習掩体から射撃姿勢をとる火砲

2.11.1　鎮西演習海自のLCACから降りる陸自の車両

令和２年度

2.11.25　災害派遣（福岡県宗像市鳥インフルエンザ発生）

2.12.1　災害派遣（宮崎県都農町鳥インフルエンザ発生）

令和２年度

2.12.7　災害派遣（宮崎県小林市・都城市鳥インフルエンザ発生）

2.12.13　災害派遣（宮崎県宮崎市鳥インフルエンザ発生）

令和２年度

3.1.29　新型コロナ患者を離島から搬送

3.1.29　新型コロナ患者を離島から搬送

令和３年度

3.4.9　オピニオンリーダー委嘱式

3.6.5　西部方面音楽隊第４８回定期演奏会

令和３年度

3.8.14　新型コロナ対応（バイタルチェックを看護職員と行う隊員）

3.8.12　新型コロナウイルス感染患者空輸

令和３年度

3.8.12　新型コロナウイルス感染患者空輸

3.8.12　新型コロナウイルス感染患者空輸

令和３年度

3.8.14　災害派遣（佐賀・長崎大雨による災害）

3.9.30　森下陸幕副長０３陸演視察（場所：えびの）

令和３年度

3.9.30　森下陸幕副長０３陸演視察（場所：えびの）

3.10.4　０３陸演報道公開（場所：大矢野原）

令和３年度

3.10.25　ⅢＭＥＦ司令官総監官来監

4.3.17　自衛隊那覇病院改編行事

令和４年度

4.4.6　緊急患者空輸　（累計１０,０００件）

4.4.8　オピニオンリーダー委嘱式

令和４年度

4.5.22　西部方面音楽隊第４９回定期演奏会

4.6.3　ＵＳＡＲＪ司令官来監

令和４年度

4.6.28　オピニオンリーダー研修（場所：小郡・玖珠・湯布院・別府）

4.7.26　第５施設団出国式

令和４年度

4.8.28　国内における米陸軍との共同訓練（ＯＳ２２）
（場所：大矢野原）

4.9.19　暴風雨による災害派遣（宮崎県三股町）

令和４年度

4.9.21　浜田防衛大臣視察（場所：与那国）

4.10.20　オマーン軍楽祭

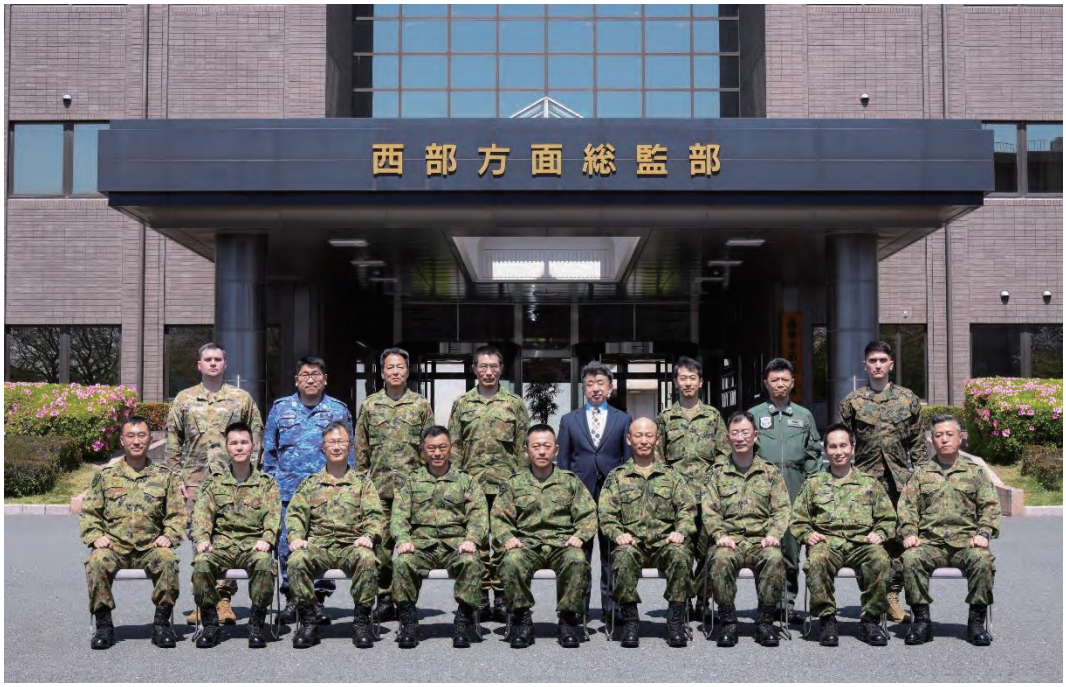
令和４年度

4.10.29　原子力防災訓練（福岡・佐賀・長崎）

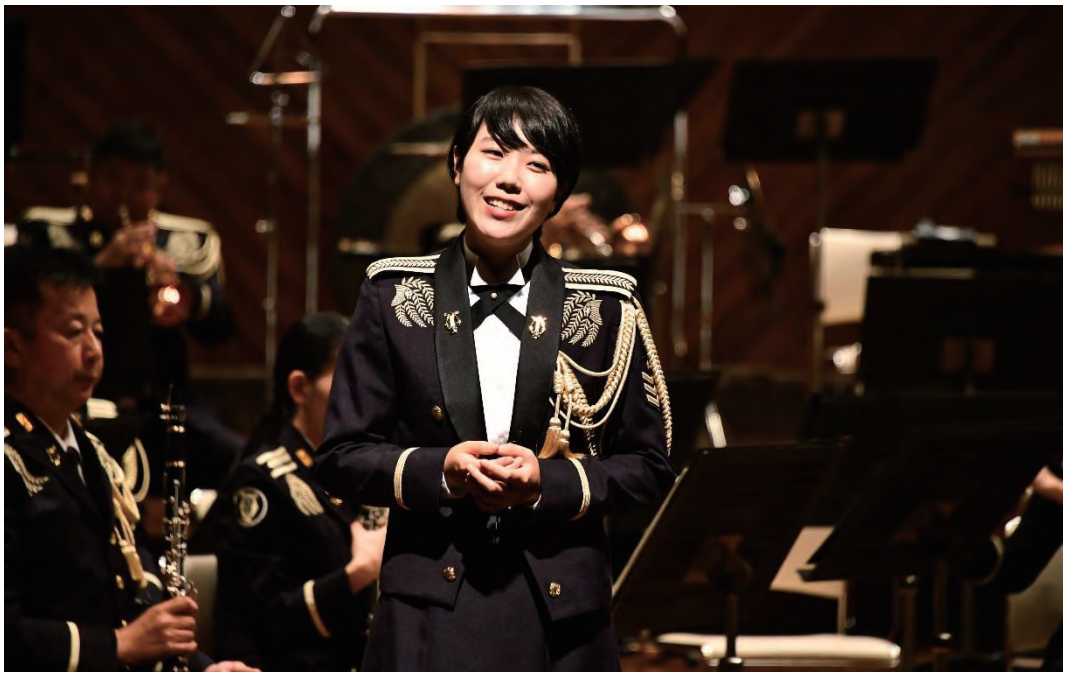
5.2.21　輸送業者等との協定締結式

令和５年度

5.4.2　石垣駐屯地開設記念行事



5.4.3　山根総監着任式

令和５年度

5.6.4　西部方面音楽隊第５０回定期演奏会

5.6.18　葬送式

令和５年度

5.6.20　災害派遣（奄美大島瀬戸内町勝浦）

5.7.11　災害派遣（福岡県今坂地区）

令和５年度

5.7.11　災害派遣（防災担当大臣視察）

5.7.11　災害派遣（佐賀県）

令和５年度

5.8.8　西部地区日米将官級会同

5.8.31　災害派遣（佐賀県豚熱）

令和５年度

6.2.11　西部方面音楽まつり

6.3.29　荒井総監着任式

令和６年度

6.4.9　ⅢＭＥＦ司令官来監

6.4.11　オピニオンリーダー委嘱式

令和６年度

6.4.13　第２特科団新編

6.4.13　第２特科団新編

令和６年度

6.6.15　西部方面音楽隊第５１回定期演奏会

6.7.17　陸幕長視察（場所：奄美駐屯地）

令和６年度

6.7.18　木原防衛大臣部隊視察（場所：奄美駐屯地）

6.7.20　自衛隊フェスタ２４（場所：熊本駅前）

令和６年度

6.8.3　国外における米海兵隊との実動訓練（ＲＤ２４）
（場所：与那国駐屯地）

6.11.5　１９式装輪自走１５５ｍｍりゅう弾砲実射訓練
（場所：北海道矢臼別）

令和６年度

6.11.5　不発弾処理　４０,０００件　沖縄県知事感謝状拝受

7.3.30　第８地対艦ミサイル連隊新編行事

令和７年度

7.4.1　佐賀駐屯地業務隊準備隊隊旗授与式

7.4.3　第３飛行隊無事故表彰

令和７年度

7.4.3　イオンとの「大規模災害時等の連携強化に係る協定」締結式

7.6.14　西部方面音楽隊第５２回定期演奏会

令和７年度

7.7.9　佐賀駐屯地開設行事

7.7.9　佐賀駐屯地開設行事

令和７年度

7.7.14　荒井総監自衛隊統合防災演習視察（０７ＪＸＲ）

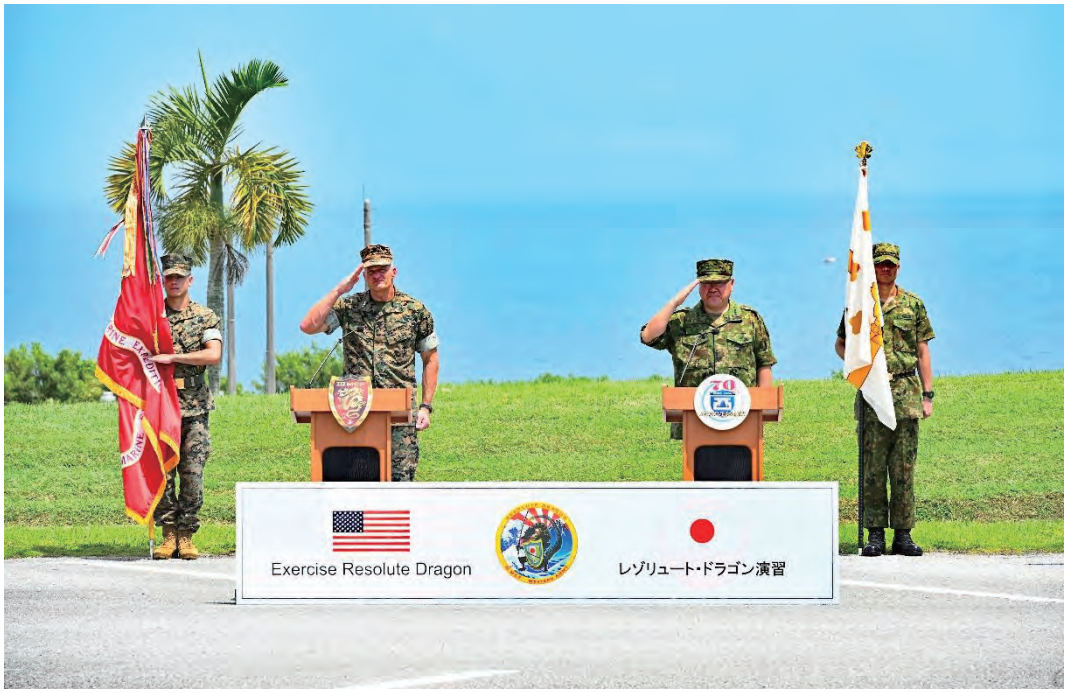
7.7.30　荒井総監離任行事

令和７年度

7.8.4　鳥海総監着任式

7.8.27　西部方面隊創隊７０周年記念看板の設置（正門）

令和７年度



7.9.11　国外における米海兵隊との実動訓練（ＲＤ２５）
（場所：キャンプコートニー）

7.9.17　国外における米海兵隊との実動訓練（ＲＤ２５）
（場所：石垣駐屯地）

令和７年度

7.9.17　国外における米海兵隊との実動訓練（ＲＤ２５）

7.9.17　国外における米海兵隊との実動訓練（ＲＤ２５）

令和７年度

7.9.8　ＵＳＡＲＪ司令官来監

7.10.18　日米共同コンサート（場所：くすまちメルサンホール）

令和７年度

7.10.20　自衛隊統合演習（０７ＪＸ）

7.10.20　自衛隊統合演習（０７ＪＸ）

令和７年度

7.11.23　小泉防衛大臣視察（場所：与那国駐屯地）

7.12.19　西部方面隊創隊７０周年記念人文字

令和７年度

8.1.13　総監部年始行事（だるま目入れ）

8.2.11　西部方面音楽まつり

地域とともに

九州各県における
部隊の活動

福岡県における部隊の活動

7.2.19　令和６年度音楽の夕べ（田川市）

7.5.25　福岡県防災訓練

佐賀県における部隊の活動

7.2.4　佐賀県実働機関との連携訓練

7.7.29　陸自ＥＸＰＯ（目達原駐屯地）

長崎県における部隊の活動

7.8.2　対馬市厳原まつり

7.9.28　防災訓練

熊本県における部隊の活動

7.10.15　熊本県防災訓練

7.10.15　熊本県防災訓練

大分県における部隊の活動

7.5.29　安心院小・中・高に対する防災教育

7.11.9　由布市防災訓練

宮崎県における部隊の活動

6.11.4　宮崎県防災訓練

7.10.26　宮崎県防災訓練

鹿児島県における部隊の活動

6.10.28　さつま町防災訓練

7.5.11　川内川総合防災演習

沖縄県における部隊の活動

7.8.31　日米ジョイントコンサート

7.9.12　沖縄全島エイサーまつり

各駐屯地における
部隊の活動

健軍駐屯地

7.3.2　西部方面隊創隊６９周年記念行事

7.3.30　健軍駐屯地春まつり

福岡駐屯地

7.4.20　第４師団創立６３周年・福岡駐屯地創設７５周年記念行事

7.8.6　福岡駐屯地納涼祭

北熊本駐屯地

7. 4.13　北熊本駐屯地創設周年記念行事

7.8.25　夏休みちびっこ大会２５

那覇駐屯地

6.11.24　那覇駐屯地創設５２周年記念行事

7.10.19　沖縄県防災訓練

奄美駐屯地・瀬戸内分屯地

7.2.2　奄美駐屯地開設 6 周年記念行事

7.2.19　県立大島病院ドクターヘリとの共同検証

飯塚駐屯地

6.11.20　福津市総合防災訓練&防災フェス２０２４

7.3.29　飯塚駐屯地５８周年記念行事

石垣駐屯地

7.3.30　石垣駐屯地創立２周年記念行事

7.11.2　石垣島まつりへの参加

えびの駐屯地

7.5.25　えびの駐屯地創立記念行事市中パレード

7.10.10　インターンシップ

大村駐屯地

6.11.15　自衛隊合同記念行事

7.3.16　大村駐屯地ふれあいコンサート

小郡駐屯地

7.3.23　小郡駐屯地創設７１周年・第５施設団創隊６３周年記念行事

7.3.2　福岡県筑後市防災フェスタ

春日駐屯地

7.10.5　福岡病院開院７０周年記念行事

7.10.5　福岡病院開院７０周年記念行事 院内の案内

勝連分屯地

6.10.18　勝連分屯地観月会

7.10.12　うるま市与那城防災訓練

玖珠駐屯地

6.10.6　玖珠駐屯地創設６７周年記念行事

7.1.10　二十歳のつどい

熊本駐屯地

7.9.10　中学生職場体験

7.9.6　熊本病院創設６８周年祝賀会食

久留米駐屯地

7.2.2　佐賀県災害対策実動訓練

7.8.28　久留米駐屯地夏祭り

国分駐屯地

6.10.28　さつま町防災訓練

7.9.30　クリーンアップ作戦

小倉駐屯地

7.3.1　小倉駐屯地音楽部定期演奏会

7.9.28　小倉駐屯地創設６８周年記念行事

佐賀駐屯地

7.7.1　佐賀駐屯地開設行事

7.9.7　佐賀駐屯地開設行事中谷防衛大臣視察

白川分屯地

7.9.12　沖縄全島エイサーまつり

7.9.12　沖縄全島エイサーまつり

川内駐屯地

6.2.1　創立３９周年記念行事

7.8.28　ちびっこ大会

高遊原分屯地

6.11.7　熊本県防災検証

7.6.1　高遊原分屯地記念行事装備品展示

竹松駐屯地

7.3.30　竹松駐屯地創設７２周年記念行事

7.9.28　防災訓練装備品展示

知念分屯地

7.9.28　知念分屯地５２周年記念行事

7.6.10　奥武・海野ハーリー支援

対馬駐屯地

7.8.6　対馬駐屯地夏祭り

7.9.15　対馬駐屯地記念行事市中パレード

別府駐屯地

7.8.3　山の納涼音頭大会

7.10.12　別府駐屯地創設６８周年記念行事　ふれあいコンサート

前川原駐屯地

6.11.12　幹部候補生ＢＵ課程１０Km行軍

7.8.4　第５４回水の祭典久留米まつりへの参加

南与座分屯地

6.11.17　糸満市総合防災訓練（炊き出し）

7.9.13　南与座分屯地開設５２周年記念行事祝賀会

都城駐屯地

6.11.7　都城駐屯地創立周年記念行事戦闘訓練展示

7.7.9　都城市おかげ祭りへの参加

宮古島駐屯地

7.2.24　宮古島駐屯地創設 6 周年記念行事

7.8.30　宮古島駐屯地サマーフフェスタ

目達原駐屯地

7.2.24　佐賀県実働機関との連携訓練

7.5.18　目達原駐屯地創設周年記念行事　編隊飛行

湯布院駐屯地

7.8.30　自治体の防災訓練

7.9.6　湯布院駐屯地創設周年記念行事

与那国駐屯地

7.2.22　与那国町防災訓練

7.2.26　職場体験

歴代西部方面総監の回想・訓示等

昭和３０年度方面隊史の巻頭言

初代　西部方面総監　松谷　誠　陸将（昭和３０年１２月～昭和３２年８月）

※創隊六十周年記念誌より

大陸諸邦の情勢を見るに、中共を初め朝鮮、仏印等共産圏諸邦の国力拡充、これに伴う戦力の強化充実は、逐年向上の一途をたどりつつ、驚くべき発展を示しており、これら諸邦とわが国との交流・交易は潜行又は公然として逐年その度が加えられつつあり、これら共産圏諸国と一衣帯水の間にある九州及び山口県は、あらゆる分野にわたり対大陸の第一線地域としての脱れ得ぬ命題を蔵しております。これを防衛の対直接侵略上から見るに、多数の島しょに囲じょうされた海面の防衛という点から、海・空を主体とした陸・海・空統合戦力の発揮を必要とし、また内には、わが国重工業地帯の一半である北九州地域を有しており、超新兵器等による有数の目標を呈していることは論をまたずその防空対策は必須の要件となり、これまた陸・海・空統合戦力の発揮が特に要望されるのであります。また、対間接侵略上から見るに、地理的条件により大陸の玄関口として特に第三国にかかる錯綜した態勢を包含し、直接その任に当る諸機関を初め政治経済社会等各般にわたり、公及び民間の協力がきわめて重要な事項となります。

これらの事情から当地方陸上自衛隊を統一し海・空その他あらゆる分野と協調し防衛上の要求を満たすために、ここに新しく西部方面総監部が設置され、西部方面隊が誕生し重要正面における防衛の第一線として、その防衛力が強化され、北部方面隊とともに双璧となり東京を枢軸にするわが国防衛態勢の一翼を担当することとなった次第であります。

方面隊管掌の九州及び山口県は昔から尚武の地として知られており、明治以降においても郷土部隊は幾多の戦役にかくかくたる偉勲を樹て、その誇りとする気風及び伝統は自衛隊創設以来継承され、今や西部方面隊に厳然として存し、事あるごとに遺憾なくその成果を発揮し、平素の教育訓練においては祖国防衛のための全国少壮年の精神道場として国家再建・民族再興の意欲を広く全国に波及させる気はくをもって、日夜隊員を教育指導し特に新隊員の育成には力をいたし、その過半を北海道その他各管区に送り出し、自衛隊中最強部隊たるの自信と抱負を堅持し今日に至っております。

また、当地方は地理的関係上、毎年台風襲来による被害を受け住民はその都度災害に遭遇するのであるが、方面隊はその都度最善を尽くして災害復興に努め、郷土民に対し、多大の感銘を与えていることは過去数度にわたる風水害に際し日常の成果を発揮した行動により立証され、国民のための、国民とともにある自衛隊たるの輝かしい歴史を燦として樹立したのであります。

郷土民の苦難に際しては、ともにその苦難と闘うべく常に先頭にあって活躍する西部方面隊各位の熱と意気に燃え、汗と泥にまみれた姿は深く住民の脳裡に刻まれており、これこそ一朝有事の日、方面隊の任務を完遂する唯一の尊い基盤であると存じます。

以上しばしの間、在職当時をしのび方面隊創設の意義と若干の業績ついて回顧しましたが、西部方面隊の洋々たる前途を祝福するとともに、今後も伝統に輝くかくかくたる部隊史が陸続として創造されることを信じ、擱筆いたします。

着任当初の池野総監について

第２代　西部方面総監　池野　清躬　陸将（昭和３２年８月～昭和３４年７月）

※創隊六十周年記念誌より

第２代方面総監池野清躬陸将が、３２年８月１６日着任された。

着任後、災害地の慰問、視察及び隷下部隊を巡視されてその実情を祥ぶさに承知され、１０月４日、初の部隊長会同を開催、「人・物・施設等の全般にわたって方面隊の基礎態勢を完成する。」という前総監の方針を堅持されるとともに、更に、「使命感と愛情とを基礎とする強固な団結の完成」を強調された。

また、上半期の事故の多さにかんがみ、事故防止の徹底を要望するとともに、業務運営上の諸問題について要望、初見について指示された。

部隊長会同時（昭和３４年１０月２０日）における総監訓示（抜粋）

第３代　西部方面総監　辻村　義和　陸将（昭和３４年８月～昭和３５年７月）

※創隊六十周年記念誌より

隊務繁忙の時期にもかかわらず、本日ここに隊長会同を招集した目的は、第１に部隊統率についての私の所信を申し述べ、第２に新たに発足する方面管区制についての若干の重要事項及び３５年度の教育訓練について説明し、第３に最近とみに増加してまいった事故について深刻な検討反省をお願いし、諸官とともに相携えて、新しい西部方面隊の育成強化に邁進したいと考えるからであります。

１　部隊統率方針について

我が方面隊が今後目指すべき目標は、一言をもって言うならば、祖先に恥じない、かつ土地柄に相応しい方面隊を育成するということに帰着すると思います。要は我々の血につながる伝統の美風を、ますます助成し、土地の利をもって人の和を制し、内に骨肉の愛情と透徹した使命感に基づく鐵の団結を固め、至厳なる隊規を確立し、外、激動する国際情勢、不安な国内政情の中にあって、良く管内民心安定の基盤となり、また待つあるを期さねばなりません。

新制度が近く発足せんとするこの機会に、改めて我が方面隊の恵まれた条件、今後の複雑、困難な任務、新設の方面隊に比し発足において一日の長のある点等に深く思いをいたし、緊禅一番「自衛隊の本領は西部方面隊に在り」と自他共に許す精鋭なる部隊を育成するために、相共に一層精進いたしたいと念願する次第であります。

２　方面管区制と３５年度教育訓練について

明年１月１４日を期して実施される方面管区制の施行は、陸上自衛隊における防衛、警備及び行政上の地域的基盤を確立し、隊務運営の基礎体制を強化整備しようとする画期的な改正でありまして、その影響及び重大性についてはその例をみないものであります。

これを担当するわれわれとしては、ますますその重要性を認識し、隊員一人一人に至るまで、新体制に対する正しい認識と確固たる郷土防衛の信念を保持してもらいたいと思うのであります。

３５訓練年度は、次期防衛力整備計画との関連において、極めて重大な意義をもつものであります。３５年度は現行の編成装備をもってする訓練の総仕上げ、最終年度と目されているのでありまして、これがため陸上自衛隊全般としては訓練目標を管区隊等の演練におき、ことに西部方面隊は管区隊等対抗演習を特命されているのであります。したがって、３５訓練年度における当方面隊の目標は年度末における管区隊等対抗演習を最も円滑、かつ効果的に実施することであります。

各管区隊等は勿論、直轄諸部隊もあげてこの目標に寄与しうるごとく強力に諸施策を推進されるよう要望いたします。

３　事故防止について

事故の防止については、従来上司からしばしば強く要望され、諸官におかれても日夜最も心膳を砕いて努力されているところであります。それにもかかわらず、最近とくに著しい事故の増加の現象を見ており、様態的に見ますと、悪質又は重大な事故が増大しつつあります。

特に従来ややもすると事故防止はＧ－１ないしＳ－１系統の業務として、他の係幹部、陸曹等はあまり関心と反省を払わない傾向がありますが、それではいけないので、指揮官以下部隊総ぐるみで努力しなければ解決できない問題であります。

何卒この事故防止について、今一段の御工夫を煩わしたいと存じます。

陸上自衛隊１０周年記念日にあたり与える訓示（昭和３５年１１月１日）

第４代　西部方面総監　吉橋　戒三　陸将（昭和３５年８月～昭和３７年７月）

※創隊六十周年記念誌より

陸上自衛隊創立１０周年記念日に当り、祝賀の式典を挙行することは、御同慶に堪えない。陸上自衛隊は発足以来苦難の途をたどりつつしかも着実な歩みを続けて立派に成長してきた。

わが西部方面隊は、創設以来５年歴代総監以下の丹精により伝統は立派に堅まり団結はますます堅く、訓練はいよいよ精到を加えつつある。近く自衛隊として初めての大規模な管区対抗特別演習を控え意義盛んなるものがある。

一方災害派遣、部外工事、国体協力その他部外に対する各種の支援協力についても着々と実績を挙げ、国民とのつながりが、ますます緊密となりつつあることは喜ばしいことである。ただ、ここで一言いたいことは、由来日本は災害が多くそのため自衛隊の災害派遣、復旧工事等の特に目立って国民から感謝されるわけであるが、災害派遣や部外工事ばかりが自衛隊本来の使命ではないということである。われわれの使命は自衛隊法に明示するとおりわが国の平和と独立を守り国の安全を保つため、直接侵略間接侵略に対しわが国を防衛することを主たる任務とし、必要に応じて公共の秩序の維持に当ることである。世界中どこの国でも政治力に期待して平和の維持をこいねがうことは当然であるが、政治力や国民の希望だけでこの悲願が達成されるものであるならば昔からどこの国でも軍隊はなかったはずである。自衛隊の厳だる存在は政治力と相俟って平和維持のため、また民生のため立派に貢献していることを自覚し、諸君が魂を打込むことを念願してやまない。今や、日本は正に冷戦の焦点にある。自衛隊に対する風当りはますます強くなることを覚悟しなければならない。しかし、風当りの強いことはそれだけ自衛隊が大きな価値をもつことを意味することであり、われわれは尊い使命を再確認しなければならないと思う。自衛隊記念日は自衛隊員がこの覚悟を新たにする日であると同時に国民の自衛隊が年とともに成長しつつある姿を国民に紹介して安心してもらい、また、国民と自衛隊との親しみを増すよい機会でもあると私は考える。

諸君は今述べた主旨を体し、各人が自己の言動に責任をもちますます本務に精励することを誓い合い陸上自衛隊創立１０周年記念日を本当に意義あらしめるよう希望する次第である。

自衛隊記念日に当って（昭和３７年１１月１日）

第５代　西部方面総監　和田　盛哉　陸将（昭和３７年８月～昭和４０年３月）

※方面隊広報紙「鎮西」より

本日ここに自衛隊創立記念日を迎うる当り、創設期における苦難を偲ぶと共に、現状を省みて将来への発展を期することはまことに意義深く思う次第であります。

陸上自衛隊は創立以来、満十二年を経過したのであるが、この間、国民の支援と隊員諸君の日夜撓ゆまぬ努力とによって堅実な発展を遂げ、本年度をもつて、五コ方面・十三コ師団体制を作りあげ、更にナイキ誘導弾の導入を始め、国産装備品による近代化に数歩を進め、着々内容の充実に向いつつあることは、諸君と共に誠に同慶に堪えない所であります。

昭和二十五年、朝鮮事変勃発の危局に臨んで国内は混乱し、それに第二次大戦の創痍いまだ癒えぬうちに、警察予備隊として誕生した時には誰しも予想し得なかったものが、今日このようなたくましい姿に育ちつつ新しい時代に一歩を印していることは、日本の歴史的な伝統の強さを物語るものであろうと思うのであります。

しかし乍ら、何事も十年以上を経過すると安易な惰性に陥り進取の気象が停滞する弊を生ずることに深い反省を加える必要があります。自衛隊は、今迄通常の風雪に堪えて来たのであるが、未だその実力を評価するような重大な試練に際会していないことに鑑み、常に自らを省みて足らざるを恐れ厳しい修練を積んで行くことを忘れてはならないと思うのであります。

われわれが日常の隊務を進めているときに、何事もないような隊風の中に、何時の間にか隅隅に雑草が芽を出し、或は上下の間における血脈が硬化し、士気も又沈滞しつつある傾向はないか等々、最近における部隊内の服務規律の面においてこの種の現象の萌芽を何がしか看取し得ることは各級指揮官は勿論のこと、個々の隊員としても十分反省を要する点であると思う次第であります。

自衛隊は過去の約十年間において、防衛力の基礎を概成したのであるが、之が形而上下に亘る真の充実は今後の努力に俟たなければならないのであつて、現在は恰も第二次防衛力整備計画の初年度に当り、言わば自衛隊の育成は、これからであると言っても過言ではないのであります。われわれは防衛上の法制的な面や物的な面において不備不足を克服しつつ、而も負荷される諸々の隊務を遂行して、日本の防衛を確固たるものとする礎石としての歴史的使命を負っていることを自覚しなければならないのであります。それに現下の国際情勢は、自衛隊を建設し育成しつつ、明日の変に対応するの態勢を整えておかなければならない厳しい現実に直面していることを知らねばなりません。

現下における世界情勢については、既に諸君が承知しているとおりであり、キューバを繞る米・ソの間の軍事情勢の発展は頗る危険な関頭に立つていたのでありますが、フルシチョフの「キューバから攻撃用兵器の搬去」の措置がとられて、一応当面の破局はくい止められた形になつていることは、せめてもの幸いであります。

昨年夏におけるベルリン問題の時もそうでありましたが、人類が最もいみ嫌っている核兵器が戦争への発展を抑制している奇妙な現象を呈しているのが世界軍事情勢の現実の姿であります。

しかしながら、核戦争は起りにくいからと言つて安易な平和観に陥り事態を甘く見てはならないと思うのであります。由来、日本においては米・ソの間の基本的な対立について深列な観察を欠き、又紛争の軍事的発展についても軽く見る傾向がなしとしないが、事態の深い淵源について十分な理解を必要とするものと思うのであります。

キューバ問題は米国民にとつては非常に直接的なものであり他国民の想像を絶するものがあることを知らねばならないと思います。世界には、その外にヨーロッパの火山であるベルリンがあり、又国家民族が二分されて不安定な地帯となつている幾つかの地域があつて、一つの紛争は連鎖的に反応する危険を包蔵しています。このような国際情勢は世界史的に見ても未曾有のものというべく、防衛の責を負うものとしてはしゅゆの油断を許さない所であります。

以上のように混乱波動する世界情勢の下において、われわれは、まず自らを信じ、朋友相切磋し、決して相手の恫喝に屈することなく、国家民族の永劫の生命を守り通す信念を固めて真に国民の信倚に応え得る精到な自衛隊を練成することを諸君と共に誓つて、私の訓示と致します。

着任の辞（昭和４０年３月２４日）

第６代　西部方面総監　関口　八太郎　陸将（昭和４０年３月～昭和４３年６月）

※方面隊広報紙「鎮西」より

私はこの度西部方面総監を拝命し、諸士と苦楽を共にしつつ鎮西の任にあたることになった関口陸将である。

西部方面隊は、和田前総監を始めとし、歴代名総監が精魂を傾けて練成された立派な伝統のある方面隊であって、その指揮を継承することは私の無上の光栄とするところであり、まことに感激にたえないところである。

そもそも九州は史実に照しても古来日本の興隆と防衛について幾多尊い輝かしい足跡を残してきているが、現在においても、いわゆる西部防衛の真の第一線であり近くは常に不安動揺の様相を呈している中共、韓国に接するともに遠くは南北ベトナムのある印度支那半島に連なり、わが国防衛上重要な地位にある。また陸上自衛隊における約３０％の隊員が九州出身隊員であることを考えるとき、西部方面隊員は自らその郷土を守るほか、わが国防衛を担う人的資材地としてきわめて大きい役割を負担している実情である。西部方面隊は、北部方面隊についで早く編成され、完成後すでに９年、その基盤は漸く固く、今やこれを充実発展させるべき時に来ていると思う。

私は、ここに先達の残された業績を保持し、更にこれが画期的向上を図るための精進を決意するものであるが、諸士の積極的な任務遂行の情熱と意欲的な理解ある支援と協力なくしては到底成果し得ないところであり、私が諸士に期待するところ、まことに切なるものがある。

ひるがえって国内外の情勢については、今更説くまでもなく、外においては、東西両陣営の対立は激化するばかりでなく、極東において身近かに新たな核脅威が生起しつつあり、内においては第２次防衛力整備計画の終末を迎えんとし幾多解決推進すべき問題が存在し陸上自衛隊をめぐる諸情勢はきわめて重大段階にある。

かかる段階に処する西部方面隊としては、輝かしい伝統を基礎として、清新溌剌、真に上下一体団結を固くし、規律厳正、厳しい訓練と修練を積みあげ、いやが上にも部隊の精強さを期することが必要であって、各隊員は、ますます任務意識を明確にし、日常起居の間、自ら不断の精進に心掛け崇高な責務を担う自衛隊員たるにふさわしい努力をいたさねばならないと思う。

ここに西部方面隊全隊員諸士が私の意とするところを汲み、自己に課せられた使命を自覚し相携え各々最善をつくしてその職責を全うするとともに、今後より一層地域住民との密着態勢を深めつつ、前途多難なるべき防衛任務を一歩一歩着実な力強い歩みをもってやりとげるよう念願する次第である。

幸いにして西部方面隊は、それぞれ将器の誉高い岩越陸将及び碇井陸将の統率する第４、第８師団を中核として直轄各部隊各機関等も亦何れも有能卓越した指揮官の率いるところであり、私はまことに心強く頼もしく存ずるのであって、今後益々士気を高揚していやがうえにも精強なる西部方面隊を練成するよう祈念するものである。

新年の挨拶　使命の達成に一層の努力を

第７代　西部方面総監　荒武　太刀夫　陸将（昭和４３年７月～昭和４５年３月）

※方面隊広報紙「鎮西」より

諸君、新年おめでとう。鶏鳴とともに年あらたまり、こゝに希望に輝く昭和四十五年の新春を迎えて、いわゆる１９７０年代の第一歩を踏み出すことになりました。まずもって諸君とともにがわが国の平和と繁栄をことおぎ、御家族の皆さんをも含めてお互いの健康と発展を祝うことのできることを心からうれしく思うものであります。

１９７０年代は、わが祖国日本にとって未曾有の飛躍興隆の時代となるものでありますが、その一年目である今年は、わが陸上自衛隊が２０才の成人式を迎えるきわめて意義の深い年であります。

陸上自衛隊は昭和２５年に警察予備隊として発足以来黙々として武を練ること２０年、国民の絶大な支援のもとに創設以来の悲願であった１８万体制もようやく達成され、まさに創設期を脱して、青年期を迎えるにいたり、国運の進展とともにその前途は希望と抱負にあふれ、実に洋々たるものを感ずるのであります。

いまやわれわれは一人前の成人としての門出に立ったのであります。戦後２５年間の長い平和の間に、日本は西独と並んで世界の驚異とさえ言われる目ざましい経済の成長をとげ、自由圏において米国につぐ総生産力をもち、名実ともにアジア唯一最大の工業国として国際的地位も確固たるものとなってきていることは、諸官承知のとおりであります。

わが国がこれまでに発展し得たことは、もとより国民の一人一人の絶ゆまざる努力勤勉によるものでありますが、その根本は何と申しましても日米安全保障体制のもと陸・海・空の自衛隊が厳として国の護りにつき国の安全が保持された結果であり、今後ともますます防衛の必要性が増すことは火を見るより明らかなことであります。一方目を国内外の情勢に転ずればまことに楽観を許さないものがあります。すなわち、国際間の協調により、世界の平和と繁栄をはかろうとする気運は逐次高まりつつあるようにも見受けられますが依然として国際紛争はその跡を絶たず、特にベトナム紛争、朝鮮半島における分裂国家の係争等、アジアの情勢はなお複雑かつ不安定なものがあります。また国内的には「核抜き本土なみの沖縄返還」及び本年６月を山場とする「日米安全保障条約」等の諸問題をめぐって、法秩序を無視した過激分子の破壊活動により善良な一般国民の平和と安全をそこなう恐れ大なるものがあります。

７０年はまさにわが国雄飛の幕明けでありますが、同時に以上述べたような防衛上の諸問題を内蔵しつつ楽観を許さない状態にありわれわれは、自衛隊に課せられた使命のますます重かつ大なることを痛感せずにはいられません。

われわれは、防衛の第一線にあるものとしての名誉と責任の重大さを、この年頭にあたり、ひしひしと肌身に感ずるとともに、ここに更に覚悟を新たにすることを誓うしだいであります。

西部方面隊は、創設以来尚武の地九州にあって、各部隊長並びに隊員諸君の日夜を分たぬ努力により、年々実力の養成につとめ、西日本防衛の骨幹として国民各層の認識と信頼を高めつつあります。

各種訓練の成果の一つのあらわれとして射撃、銃剣道等の武技も各全国競技会で最上位を獲得し、旧ろう行なわれた中央ラグビー大会においても宿願を果して優勝しました。

私はここに改めて各隊長以下隊員諸君の真しな精進を想起するとともに、この新年を更に強化充実の年たらしめるため、各隊の全員が各部隊長を核心とする親身の愛情にもとづく強固な団結をかため規律厳正、士気旺盛、訓練精到な部隊となり、誓って「精強西部」の名に恥じない態勢を作り上げるよう要望するものであります。

最後に諸君の一層の健闘と諸官並びに御家族の御多幸を祈念して年頭の辞といたします。

着任の辞（昭和４５年３月２４日）

第８代　西部方面総監　上妻　正康　陸将（昭和４５年３月～昭和４７年３月）

※方面隊広報紙「鎮西」より

私は、この度西部方面総監に任命された上妻陸将である。

私にとって当地の勤務は３年ぶりであり、かつ大槻、竹田津両師団長をはじめ、各部隊長及び旧知の者が多く、直ちにその職務を遂行し得る態勢にあることは誠にうれしく思うところであり心強く存ずるところである。

西部方面隊が歴代総監の立派な統率のもと、西方防衛のため誠実撓まない精進をつづけて輝かしい幾多の業績をあげていることは、私のよく承知しているところであり、ここに先輩各位及び諸官の労苦に対して深く敬意と謝意と表する次第である。国内外の諸情勢はまことに激動そのもので寸刻といえども油断を許されぬ重大な時局であるが、その間にあってわが国の独立と自由とを守り現在の輝かしい繁栄を維持拡大するため、今こそなるべく速かに全国民の合意を求めるよう努力を結集しなければならないと思う次第である。

国防のため最後の実力部隊として存在する自衛隊に勤務するわれわれとしては、正しく時局の深刻さを認識し勇気と自信をもってこれに処する心構えを確立しなければならないのである。

かかる情勢下にあって、西部方面隊はいかにあるべきか、いかに発展させるべきかが問題となるが今後諸君の協力支援をうけつつ篤と考えていきたいと思っている。

着任にあたり次の点を要望するので諸官それぞれの職務遂行にあたってその具体化と実践について努力されたいのである。

その一つは西部方面隊の地位とその自覚についてである。

わが国防衛のため九州が過去においていかなる地位を占めていたか、そこに住む九州人が困難に際して老若男女を問わず、いかに善く戦って国防を全うしたか、又遠く異郷に出征した親兄弟同僚等が日本陸軍の勇名をほしいままにしたことなど諸官のよく承知しているところである。

更に九州の防衛上の地位は沖縄返還に伴ってその重要性を増加することは必至である。かかる環境の中にあって存在する西部方面隊としては一隊員に至るまでよく地位の重要性を認識し、 それに伴う自覚を樹立しなければならない。

なお陸上自衛隊員の現勢力を、その出身地別に分析してみると約４分の１の勢力は九州出身者である。

陸上自衛隊の存否は九州出身者によって左右され、陸上自衛隊の精否は西部方面の良否によると結論することができると思う。

西部方面隊に勤務する、われわれとしては更に自粛自戒するとともに地域住民と一体となり、 もってそれぞれの職務遂行に万全を期し国民の負託にこたえなければならないと思う次第である。

その二は、西部方面隊の精強をいかにして増進するかということである。

口を開けば精強というが、その精強をいかにして判定するか、又精強増進のためにはいかなる因子が必要であるか等について研究し、創意工夫することは、きわめて大切なことでありながらおろそかになりがちなことである。

各級指揮官については云うまでもなく一隊員にいたるまで、部隊あるいは個人の精強度について正しく認識しつつ、キメ細かく日々の行動を律するよう心掛けたいものである。

私は“森羅万象これ皆わが師”という観念を強調したいと思っているので精強ということは決して訓練関係事項に限定したことではない。諸作業の中にも精強を期する貴重な因子を見出さなければならないと思う。要は部隊及び個人の総合的隊務運営に関する精強を増進したいと強く念願する次第である。

この際、特に幹部諸官に強調したいのであるが精強という物差しの決定は幹部の責任であり、その物差しはつとめて高く求めて部下とともにこれを追求すべきである。

又、幹部が不断にその職能を向上しようとする意欲的研さんと教育（訓練）指導能力及び実員指揮能力の練磨向上は部隊の精強を期する第一条件であるということを忘れてはならない。

以上２点について要望した。

近く昭和４５年度を迎えるのであるが相倶に決意を新たにして、上下相信じ左右相和したえること誓い合いたいものである。

諸官の自責自愛とその健闘を祈念して着任の訓辞とする。

回想　沖縄への部隊配置

第９代　西部方面総監　堀江　正夫　陸将（昭和４７年３月～昭和４８年３月）

※創隊六十周年記念誌より

私の一年間の総監としての最大の任務は、整斉たる沖縄部隊の新設・移駐・配置であった。

大東亜戦争末期、県民を挙げて共に戦い、膨大な戦死者を出した上に、戦後二十七年間も米軍の占領統治下にあった沖縄が、本年漸く復帰するのに伴う、初めての部隊の配置である。

四十年以上も前の事であり、日付等は覚えていないが、思い出す侭に当時の取組の状況を申し述べることとする。

その準備は、私の陸幕副長当時から、沖縄の実情に配慮し、関係者相協力し、万全を期して慎重に進められた。

復帰前副長であった私の沖縄視察もその一環であるが、部隊については、隊長桑江1佐以下沖縄出身者及び成績優秀隊員を以て編成し、積極的な民生協力ができるよう、不発弾処理能力の強化、施設隊の各種土木工事能力の強化と、学校等災害復旧のための木工諸資材の準備と訓練を行う他、全隊員に対し、現地事情の熟知理解と、これに処する心構え等について徹底した教育を行った。

同時に、島民に直接接することの多い、地方連絡部職員には、又吉１佐以下で有能な沖縄出身者を充て、又当時少数人員を以て島民に対する、自衛隊の啓蒙活動をしていた県隊友会に、物心両面の支援を行ない激励した。

実は、着任早々行った、熊本市内に江津湖の「台湾なぎ」の清掃除去は、上妻前総監当時からの懸案であり、沢内知事の強い要請もあり、早々に幕僚と共に実地調査の上で実施を決心し、当日は沢内知事、星子市長にも出て頂き、隊員多数も一緒に作業をした。

市民からは、憩の場を取り戻してくれたと好評であったが、これには私なりに一つの考えがあったのである。

それは、何れ沖縄部隊配置反対の、熊本がかつて経験した事のない全国的大規模なデモが、行なわれるに違いない。これに先立ち、市民の母なるこの湖を、昔の清澄な憩の場に回復することにより、市民の自衛隊に対する親近感、信頼をより確かなものにしておきたいという思いである。その後予想どおりのデモが行なわれたが、幸いに市民にいささかの動揺もなかった。

現地の諸準備も完了し、懸念していた企図を秘匿した佐世保までの夜行軍も、乗航、航行も順調に進み、いよいよ部隊の沖縄到着である。

島民の双手を挙げての歓迎は無理としても、静かに迎え、その目で自衛隊の実体を視て貰いたいと願っていた私にとって、部隊本隊到着後の県民対応は、大きな衝撃であった。

住民登録拒否、入学拒否である。早速現地に飛んだ私に対する屋良知事の対応は、極めて冷やかであった。その後相次いで何度沖縄に飛び、知事に会ったことか、回を重ねる中に段々と理解も進み、終には協力の言葉を得た時の、ホッとした思いは、今も忘れることはできない。 しかしその後も那覇市長の反対、公衆電話の設置拒否、不発弾処理場への地元村長の道路閉鎖と、米軍の自衛隊の不発弾処理拒否、隊内に測候所の存置等々隊務遂行上の阻害事態が次々と生起したが、その都度現地に飛びその解決に腐心した。

ただこの間隊員糧食費の五百円値上げを早急に実施して頂き、大蔵省の理解の下、借上げ宿舎制度が一般隊員にも容認される等、関係者から積極的な善意の協力を頂き、部隊も漸く腰を据えて、沖縄での第一歩を踏み出すことができたのである。

極めて短期間の在任であったが、この間将来の自衛隊を思い、日出生台演習場の利用効率上のために徹底的な自力整備を行ない、演習場に恵まれない中部方面隊の一部の使用を可能にしたり、成績優秀者の防大入学の促進を図ったり、奄美大島での将来を考えて部外工事を進んで行ったり、又、飲酒運転の禁止、退職等の規定を国の法制化に先立ち作ったこと等思い出は尽きない。

沖縄部隊配置後四十三年、当時を顧み今を思い、真に感慨無量である。私を補佐し、終始誠心誠意積極的に御協力を頂いた多くの各位に、心からの謝意を表すると共に、わが西部方面隊が総監の下、挙隊一心国民の期待に応えることを、お祈りして筆を置く。

年頭の辞（昭和４９年１月）

第１０代　西部方面総監　中島　直臣　陸将（昭和４８年３月～昭和４９年６月）

※方面隊広報紙「鎮西」より

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

さて旧年を回顧しますと、ベトナム戦争は一段落したものの中東戦争の勃発、石油不足による経済情勢の悪化、長沼判決等内外情勢は極めて流動的で、自衛隊にとっては厳しいものでありました。しかしながら、わが西部方面隊では隊務も比較的順調に運営され、特に隊員募集においては困難な情勢にもかかわらず、予期以上の成績を挙げる等、全般に亘り十分な成果を収めることができましたが、誠に同慶の至りと感謝にたえません。これは、全隊員が一丸となって職務を遂行したことによるものと、その労を多とするものとありますが、それとともに、われわれの後楯として、かげになりひなたになり御熱心に御支援を賜った隊員御家族、各協力団体の方々を始め、郷土の皆様のあたたかい御理解と御協力があったらばこそと、深く感謝している次第であります。ここに厚くお礼を申し上げます。

今年の内外情勢は、旧年に引き続き激変を重ね、防衛環境はますます厳しくなるものと予想されます。

わが陸上自衛隊においては、１８万体制の内部の充実を図って行く段階と考えられます。

そこで私は、今年は隊務の刷新充実を図るとともに、人間味溢るる隊員相互の心の通った団結をますます強固にして、いかなる困難な状況においても任務を完遂できる方面隊の練成を期したいと考えております。予想される社会情勢の激動の中で、不測の事態に即応できる態勢の整備、人的勢力の維持充実、自衛隊の施設及び演習場等に関連する公害および災害の未然防止等、郷土の皆様と一体となってこれらの施策を強力に推進したいと考えております。何卒倍旧の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

皆様のますますの御多幸と御発展を祈ります。

着任にあたっての挨拶（昭和４９年７月８日）

第１１代　西部方面総監　近藤　清　陸将（昭和４９年７月～昭和５１年３月）

※方面隊広報紙「鎮西」より

このたび、沖縄県を含む広大な西日本地域を担任し、わが国防衛上重要な地位を占め、しかも尚武の伝統と精強を誇る西部方面隊の総監を拝命しましたことは、無上の光栄であり、その責任の重大性を改めて自覚している次第であります。

また、数年振りに再び皆様に御挨拶を申し上げることができますことは、これまた無上の喜びであり懐旧の情にかられている次第であります。

さて、自衛隊の任務は申すまでもなく、我が国を防衛することでありますが、国民の皆様の理解と協力なくしては、その遂行は困難であります。また平素の隊務運営におきましても、特に地元との関係は極めて重要であります。幸いにして九州地域は郷土の皆様の自衛隊に対する御協力は強力なものでありますが、私は更に皆様の御理解と御信頼を深めるよう努力していきたいと考えております。

そのためには、西部方面隊が郷土の皆様にとって、真に誇りとなるように、ますます内容を充実し、精強さを加えることが基本であることは申すまでもありませんが、地域社会との密着を更に強化していくことが重要であると考えております。これがため私は、地域社会との接触交流を更に活発にし、また各種民生協力を積極的に実施したいと考えております。

国内外共に複雑にして、激動の困難な情勢下、私は西部方面隊の地位をよく認識し、内訓練精到にして、外地域住民と一体となり、もってますます精強な方面隊を練成し、不測事態即応の態勢を充実し、皆様の御期待にこたえるよう努力致す所存でありますので、一層の御理解と御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。酷暑の折柄、皆様のますますの御健勝を祈り、着任の辞と致します。

回想

第１２代　西部方面総監　塚本　勝一　陸将（昭和５１年３月～昭和５３年３月）

※創隊六十周年記念誌より

私が総監に着任したのは昭和５１年(１９７６年)３月であった。第１混成団が沖縄県に配備完了したのが４７年(７２年)１０月だから３年が経過しており、駐屯も順調に進んでいたが、それでも県民の軍(自衛隊も)に対する拒否アレルギーは強かった。だから私は特に気を使い同地の主な行事には必ず出席をして隊員を励ますことにしていた。この為２年間の在職間に１１回訪問した。略々隔月に１回ということになる。一般の報道等によれば県民の自衛隊忌避の感情が強いと言うことであったが、訪問する度に県民の温かい接遇を受け、今でも気持ちの良い思い出となっている。これも当時の混成団長 桑江良逢、地連部長 又吉康助 両陸特補の活躍に負うところが多かった。両将軍共に沖縄県出身の英才で、私はその性格から前者を硬、後者を柔と評していたが、この２人の硬軟巧みに織りまぜたバランスのとれた働きが、駐屯を円滑にしたものと思っている。初代混成団長の私の同期生鬼沢薫君と併せこの３人が沖縄駐屯当初の現地での功労者であった。今でも深く感謝している。革新諸党の支援を受けて初代知事となられた屋良朝苗氏とも非公式の立場で公邸の庭で２回にわたって和やかな懇談を長時間に亘り持てたのもそのお陰(屋良知事 又吉君の恩師)であると思う。

在任間政治のからむ事件としては数件あった。第８師団の管内に駐屯地を一つ新設する問題がその一つである。候補地としては数ヵ所あり、阿久根、出水、えびの等が名乗りをあげ誘致運動も盛んで方面総監部にまで及んできた。陸幕からの問い合わせもあり、隊員の居住性、訓練の便宜等について慎重に調査し、どこも適地だが、阿久根、出水を優先する様答申していたが、結局えびのに決定した。当時の首相田中角栄氏の鶴の一声で決まったらしい。

その頃、国鉄(当時)の合理化が政治の一つの大きい問題点であった。その一環として湯布院の重車両取り扱い(施設) を廃止すると通告してきた。湯布院は数少ない大演習場の一つである日出生台の門戸となる国鉄の駅であり、自衛隊の演習の度に装甲車、重車両等の搭載卸下に欠かせない重要な所である。朝鮮戦争の例に見る通り有事には決定的に緊要な役割を果たした。そこで、急遽陸幕にこの決定を取り消して貰う様上申したが駄目であった。防衛上の考慮等全く議題にもならなかったらしい。これが当時の中央官庁の一般的な空気であったと知って憮然とした。

健軍駐屯地の移転問題が急浮上してきたもの在任間であった。熊本出身の超大物代議士が秘書を通じて「健軍駐屯地を北熊本の小演習場へ移転しては」と申し入れてきた。理由は「（総監部が）用地を占領していたのでは町の発展を妨げる」と言うのである。この大物が本気で動かれたら大変なことになると思ったので、明確に拒否の回答をした。その後暫くはくすぶっていたが、この問題はそれ以上発展しなかった。

このような政治問題等を抱えながらも、九州は尚武の地、在任間を通じて楽しく有意義な時を過ごすことができた。

年頭の辞（昭和５５年１月）

第１３代　西部方面総監　加藤　誠一　陸将（昭和５３年３月～昭和５５年３月）

※方面隊広報紙「鎮西」より

西部方面隊の諸君、新年おめでとう、北は対馬から九州・沖縄諸島に至る各駐（分）とん地において、あるいはそれぞれの郷里において、輝かしい希望に満ちた昭和５５年の新春を迎えられたことと思うが、先ずもって新春のお慶びを申し上げたい。

昨年は、ベトナム・カンボジア紛争、中越紛争をはじめ、イラン革命、韓国の政変、北方領土をめぐるソ連の動向並びに国内政治・経済情勢等、目まぐるしい内外情勢のなかで。世界が１９８０年代の新しい秩序を求めて激しく揺れ動き、また、わが方面隊にとっても、西日本における陸上防衛力増強施策の推進、方面隊検閲の受閲等、多事多忙な年であったが、各部隊長等をはじめ、全隊員諸君の並々ならぬ努力により、主要な訓練行事はもとより、隊務全殿にわたって多大の成果を納め、誠に実りの多い充実・躍進の年であったと思う。顧みて、為すべきを果した充実感と、清々しいさわやかな気持ちをもって、新たな年を迎えることができたことを諸君とともに欣びたい。それとともに全隊員諸君の昨年中の御苦労に対して、心から感謝の意を表したいと思う。

新たに迎えた昭和５５年は、世界的に不確実・不測の時代といわれる厳しい１９８０年代の幕開けであり、わが国及び自衛隊をとりまく内外の環境は、一段と厳しい対応を迫ってくるものと覚悟しなければならないであろう。

このような情勢のもとにおいて、当方面隊においては、本年は、対馬警備隊の新編、第８師団の増強に伴う編成事業等、西方陸上防衛力の拡充・強化をいよいよ実現に向かって推進するとともに有事即動の態勢を一段と整備すべき重要な年であり、格段の努力を必要とするものである。

われわれは、年頭の決意も新たに、今年も旺盛な使命感のもとに、わが国防衛の戦士であることに悦びと誇りを持ち、その魁として自ら進んで日々の隊務に精励し、それぞれの職責を悔いなく果していこう。そして全隊員が、ひたすら精強化への途を邁進し、有事、真に役立つ精強な部隊等を練成し、８０年代の厳しい内外情勢の変化と試練に常に対応しうる実力と態勢を保持することこそ、国民の負託、なかんずく郷土の人々の信頼と期待に応える所以であると確信する次第である。激動する国際情勢にもかかわらず、平和のなかで迎えた輝かしい初日の光を拝みながら、わが国の平和と独立の維持に貢献している防人の欣びをかみしめつつ、諸君とともに、今年もまた、西部方面隊の使命達成のため相携えて邁進することを誓いたいと思う。

終りに、隊員諸君及び御家族の一層の御健勝と御多幸を祈念し、年頭のごあいさつとする。

回想

第１４代　西部方面総監　河津　幸三郎　陸将（昭和５５年３月～昭和５７年３月）

※創隊六十周年記念誌より

この度、西部方面隊創隊６０周年を迎え、記念誌を創刊される運びとなりました事は、誠に優ばしく、心から祝意を表したいと存じます。

私は、昭和５５年春から翌々年の春まで２ヶ年間、西部方面隊に勤務させて頂きましたが、この時期前後には、我が国の安全保障環境の変化に伴い、国の陸上防衛態勢について、重要正面を北から西に転換すべきであるとする論議が活発化していた事もあって、方面隊全隊の士気は極めて高く、且つ、幸にも第４、第８両師団長をはじめ、方面隊直轄の各部隊長や方面総監部の各部課長等、極めて優れた人材が配置されていた為、方面隊の隊務は、全般的に極めて順調に運営され、予期以上の成果を得る事が出来たものと信じている。

在九州の海空自衛隊との間の連携も緊密であり、実施された統合演習には印象深いものがある。

海上自衛隊との間では、対馬有事を想定し、第４師団の一部を海上自衛隊の輸送艦で対馬に対する増派する演習を行い、幾多の教訓が得られた。

又、航空自衛隊には、北部九州に展開した、我が方面隊の高射特科団の対空戦闘訓練の為の仮設敵機を演じて頂き、ホーク部隊のレーダーによる機影の捕捉から対空戦闘までの一連の行動を実践的に演練し、貴重な訓練が出来た。高射団長にはこの際、ホークのレーダーで捕捉した来襲敵機の情報を在九州の方面隊の全部隊に通報し所要の行動をとる訓練も、この演習に組み込むべきとして実行したが、南九州の部隊では、敵機未襲の報に接し、対空機関砲を屋上に準備中に、仮設敵機が頭上を通過したという実態で、何らかの抜本的な体制整備の必要性が痛感された。

忘れようにも絶対忘れられないのが、えびの駐屯地の創設である。予め予定地を視察すると、平地の全くない山又山の荒地であり、この山の上半分を切り取って谷を埋め、平地を造る工事を方面の施設団が実施すると聞き、難工事が予想された。工事開始後、雨天の多い年であり、土質上雨降りには工事が出来ず、為に施設団長は夜間照明設備を設置し、晴天時に昼夜兼行の工事を続行して、工期内に完成させたが、施設団の隊員諸君に大変なご苦労をかけ今でも感謝している。

方面隊の防衛地域は、防衛法制上の焦点であり、方面隊が今後益々発展充実し、一丸となって重責を完遂されん事を心から祈念しつつ、擱筆します。

回想

第１５代　西部方面総監　村松　榮一　陸将（昭和５７年３月～昭和５８年６月）

※創隊六十周年記念誌より

私は結果的には一年半弱の勤務をさせて戴きましたが、着任時には一年の短命総監を覚悟し、新機軸を出すのは部隊に大変な迷惑と自覚して河津前総監の統率方針 「即応態勢の整備」「精強な部隊の練成」を継承して勤務しました。

尚武の地九州は警察予備隊入隊時と自衛官最終勤務と二回の経験になりましたが、質実剛健、明朗闊達な隊員諸官のご支援を受け、充実し、かつ、快適な勤務をさせて載きました。毎日毎日が昨日のことのように記憶に残っておりますが、その中の若干を述べてみます。

即応態勢の整備の一つとして五七陸演を実施しました。この演習はかなりの反対を受けながら陸幕防衛部長時代に企画し、陸幕副長時代に実施に漕ぎ着けたものですが、部隊は熱心真摯に取り組んでくれました。八師団は民間バスを使っての部隊転用を実行し、総監部では地下司令部の設置や誰も教育を受けたことのない敵衛星情報の作成・対応指示、捕虜収容所の設置計画等に挑戦してくれました。反面、やってみると陸幕計画だけでは実戦の役には立たないとの反省もありました。例えば四十二連隊が北方に配属された後の連隊との連絡業務は誰がやるのか。旧軍のように隊員補充、家族との連絡、給与、郵政、賞典等を司る四十二連隊補充隊のようなものの制度化が必要ではと考えました。また、有事の西方の戦略情報は自力でどれだけ獲得できるのか不明でした。これはたまたま米韓合同のチームスピリット演習が実施されましたので、これを我が国への侵攻と仮想して確かめることとしました。この演習は予告無く総監部、 第二高射団、方面航空隊・通信群、対馬警備隊に非常呼集を掛けて開始しました。この日は高射団の幹部現戦の最終日でしたが団長は現地から命令を発して態勢を取ってくれました。敵味方識別が米軍、航空自衛隊は既にモード五になっているのに陸自は依然モード四で即応態勢が乖離していましたが、通信群が素早く空自と直通回線を構成して問題を克服しました。航空隊は気象レーダーで空母位置を概定し、警備隊は海自から海象情報を入手して調査部の敵上陸時期の判定を確実にしました。この演習で総監としては即応上方面隊の戦略情報獲得能力とその限界を掴むことが出来ました。

精強な部隊の錬成は短命総監の故に大幅にこれを各指揮官に分権しました。この成果は訓練視察で確かめましたが、成果の一つは七月の長崎災害派遣で即応態勢と共に確認できました。長崎災害派遣はその状況が刻々テレビで全国の茶の間に伝えられる都市型災害派遣でしたが、四師団を中核に施設団、航空隊、福岡地区病院、長崎地連等が第一線に立ち、八師団、方面各隊、地区補給処等がこれを支援し、方面隊一体となって見事に日頃の成果を発揮してくれました。この時は集中豪雨が続発する危険がありましたが、方面として即応出来る態勢を保持できました。

在任中、身を切られるような思いもありました。一つはえびの演習場での地区施設隊の地雷事故でした。着任時「訓練で死傷者を出すな」と要望しましたがこの事故で数名の死傷者を出してしまい、要望を徹底できなかった身の不徳に慚愧に堪えず、死傷された諸官、ご家族には申し訳ない思いで一杯です。

いま一つは石垣の地連分駐所視察に際し「人殺し集団に子弟を送るな」と大書された沖縄高教組の募集反対ビラを見た時でした。「人殺し」は人類共通のタブーですが、侵略を排除するためには避けられない行為です。自衛官は国防に身を挺する覚悟を決めていますし、自衛隊法にもこれが法定されています。

この国防行為を国民の一部と言いながら「人殺し」と誹謗する者が居り、この環境の中でたった三人の自衛官が家族と共に募集業務を遂行している現実に激しい衝撃を受けました。この環境を是正するには「自らの国は自らの手で守る」と言う民主国家の国民の国防義務を憲法に明記する以外ないと考え、現在も憲法改正提案をしながら市井の一隅で努力しています。

西部方面隊は自衛官最後の勤務をさせて戴き、充実快適な日々と素晴らしい諸官の顔を思い浮かべて心から感謝を捧げるとともに限りない愛着をおぼえております。

回想　日出生台の思い出

第１６代　西部方面総監　齋藤　信夫　陸将（昭和５８年７月～昭和６０年３月）

※創隊六十周年記念誌より

平成８年秋、田村鞆利総監から『火力演習』へのお誘いがあったときは喜んで参上させて頂くことにした。実は以前久我（幹）総監のときにも同様のご招待を頂いたことが有ったが、直前に体調を崩し急遽お断りした経緯があったので、恐らくこれが最後の機会になるだろうと思って勇躍由布院に向かい１０年ぶりに日出生台に上った。

私は富士・北海道・矢臼別等大演習場には縁が深かったが、それとは別に日出生台演習場には特別な思い入れがある。それは１９５３年前川原の普通科学校に勤務していた時、第４管区が井本（熊）副総監統裁のもとで行った警察予備隊最初の第１１連隊検閲に、補助官（補佐）として参加し、ここに訪れて居るからである。平素高良台演習場での小さな訓練しか見ていないので、小月・曽根・中津の各大隊が駐屯地を発して日出町付近に集結し、更に十文字原を経て日出生台演習場に展開しての陣地攻撃という規模の大きさには驚嘆した。勿論十文字原から先は農道を修復しながらの機動であった。演習の細部はともかく、先立つ補助官教育での主任補助官渡邊（博）第３部長の的確な地点指示は、今でも「弾痕山」の名前と共に忘れられない。

私は総監着任最初の総監部幹部教育で抱負を述べると共に、退官の際の行動についても付け加えておいた。「退官の日は是非演習場の訓練を見に行きたい」と。それを覚えていた諸官のご配慮で、当日午前は大矢野演習場で私が新任小隊長時勤めた８１ミリ迫撃砲小隊の戦闘射撃を、午後には思い出多い日出生台演習場を回って最後を送ることができた。

在任間総出訓練日には極力演習場に訓練視察に行く事を決めていたが、特に日出生台での連隊級の演習は必ず終夜視察していたので、方面隊の全連隊長の指揮振りを目の当たりに見ることができたのも素晴らしかった。

冬季の演習視察では「やまなみハイウェー」で積雪に逢い、演習場内では一面銀世界でジープもタイヤがスリップし降りて後押しをした程であったが、急造の白色偽装で行動している部隊に逢い北海道の冬季演習を思い出した。

又春・秋年２回の演習場整備には必ず顔を出して何かと注文をつけていた。

特に日出生台について忘れられないのは、「県道越射撃」である。もともとこれは演習場の有効利用で、長年の懸案でもあり、早くから野口（有）幕僚副長に担当させてこれの検討に入ったが仲々にその奥が深い。中央・警察にあたってみたところ丁度その頃沖縄で米軍の「県道越射撃」が基地闘争のシンボルとなっていたこともあって皆消極的である。国有財産の適切な管理は方面総監の責任であるとして頑張ったが警察側警備サイドは「演習で公道閉鎖はできない」として交通サイドに盥回され、交通サイドでは「通行者の安全」１本槍で難色を示す。それではと「通行者の居ない時に撃つ」と回答し、日程を決めて記者会見を行った。

現地ではそれまでに地元出身者の溝口(潤) 業務隊長の下で道路の境界には鉄線を張り、現地の通行量・種類等を曜日別・時間帯に調べてデータを揃え、且つ地元対策を進めていた。色々やり取りが有ったが計画最終日雨の中初弾を発射する事ができた。成功すると結構現地監視に進出していた警察側も喜んでくれ、又反対の為駐屯地に押し掛けていた人たちも当方を慰労しながら引き揚げていった。

初めての射撃でもあり警戒・情報通信網にやや過剰な態勢をとっていたのでそれが前例とならないように注意しておいたが。

年齢相応以上に故障が多く体力も衰え自信は無いが、「日出生台にどうですか」と誘われたら「是非」と言いたい思いが強い。

回想　健兵・強兵

第１７代　西部方面総監　新井　道彦　陸将（昭和６０年３月～昭和６１年３月）

※創隊六十周年記念誌より

先づもって西部方面隊創隊六十年をお慶び申し上げます。さていきなり私事に入り恐縮ですが、私は新潟生れの東北育ち、最初の陸軍も仙台の幼年学校でしたが父も一年志願（今の幹部候補生の前身）の予備役将校で本職、新潟県立師範学校（現在の新潟大学）の国漢教官ながら、 大戦間ふたたび召集将校として中国大陸で四年の御奉公を果しました。出征にあたっての父の颯爽たる陸軍将校姿が小三であった私の一生を定めることとなったのですが、然し七ヶ月生れの虚弱児童であった私は文字通りの不肖の子、母は後に幼年校の身体検査に合格しただけで大満足、後はもういいから帰ってこいと云う次第でした。幼年学校でも望外の入校の望みを果した喜びから向上心ゼロ、只々ケセラセラで学科・術科を過したその怠慢を恥しく思い起します。不幸にして卒業前の三年生にて八月終戦直前の米国空襲にて焼け出された長岡市から父の生家群馬県松井田町の父の実家に疎開致しました。父はたびたび四年間に亘る中、小隊長勤務の思い出を語ってくれましたが、それが冒頭の健兵、強兵の話でした。

「九州の兵隊さんは強い。－－然し負け戦では東北の兵隊さんの方が強い。何故ってどんなに敵に迫られても全く変ることなく一発一発しっかり照準して射っている。」と云うのです。ここは西部方面隊ですから多少差障りもありますが一面の事実と思います。即ち九州強兵東北健兵と云うことになるのでしょう。全く違う評価もあります。東北出身で剛快をもって鳴った、「柏葉祐幸陸将」は「新井君、九州の兵隊さんは強いよ。陣地構築の穴等掘らしたらその早さは東北の兵隊さんは足許にも及ばないよ。」とのことでした。一九八五年（昭和六十年）私はその憧れの強兵九州の西部方面総監に補されました。

確かに九州の隊員さんは強兵でした。

同時に東北の隊員さんも健兵でした。

回想

第１８代　西部方面総監　水澤　博　陸将（昭和６１年３月～昭和６２年３月）

※創隊六十周年誌より

省みませば昭和６１年３月総監として初めて熊本に赴任いたしました。６２年３月西方総監を最後に退官いたしました。先輩方が営々と築いてこられた精強西部方面隊の伝統に基礎をおき、皆と力を合わせて更に精強無比より強く、より逞しく、即応体制にいささかもゆるぎない方面隊を練成することに邁進したい。その心は、「治に居て、乱を忘れず」であると着任の辞としたことが思い出されます。

光陰の早さに改めて正に矢の如しの感しきりであります。自衛隊が真に国民のために役立つ自衛隊であって欲しいと念願致しております。

西部方面隊の益々のご発展を祈念いたします。

回想

第１９代　西部方面総監　荒木　雄二　陸将（昭和６２年３月～平成元年６月）

※創隊六十周年記念誌より

１　日米共同訓練

昭和６２年度の方面隊における最重要訓練と位置づけて、米陸軍との師団指揮所演習及び実動訓練を実施した。

訓練そのものは第４師団の担当とし、総監部は、日出生台演習場での初の日米共同訓練であることから、訓練の円滑な実施のため、主として訓練環境の整備に当たった。

（１）日出生台全周を囲む反対勢力

警察と調整し、「反対勢力の活動を禁止することは不可能である。但し訓練妨害者が演習場内に一歩でも足を踏み入れたら協力して即時逮捕等により排除する。」ということにした。

予想したところではあるが、演習場での訓練が開始されると、日出生台は反対勢力の車で全周を取り囲まれた。

しかし訓練の全期間を通じ、一件のトラブルもなく終了できた。

警察の積極的協力及び自隊の警備担当部隊の陰の力の賜物であった。

（２）演習場に直接接する住民の方々の理解と協力

終戦後、駐留米軍が日出生台演習場を使用していた。その際地域住民との間にトラブルがあったようである。そのため共同訓練について、演習場隣接住民の方々にかなりの心配や反対があった。

これ又、施設局や渉外担当隊員の昼夜を分かたぬ尽力のお陰で理解と協力が得られ、それに米軍の適切な規律維持施策も加わり、訓練間何も問題が生ぜずに済んだ。

以上のような次第で、協力してくれた関係機関及び訓練の裏方を担当した隊員等の感謝した共同訓練でもあった。

２　対空挺・対ヘリボン戦闘･･･地下陣地構築のため２万５千本もの掩蓋材を収集

昭和６３年度陸幕指命演習として「対空挺・対ヘリボン戦闘」の実施を命ぜられたので、第８師団の担当とした。

師団長は、戦闘の特質を考慮し、防御部隊全部の地下陣地化を決定した。

「そんなに掩蓋材が集められるのか?」とか「演習場が荒れてしまい流土の被害で苦情が殺到するのではないか?」との心配が部内外から聞こえてきた。

そんな中、師団長は、強力なリーダーシップを発揮し、南九州全域から道路工事のため伐採した樹木や間伐採等２万５千本に及ぶ大量の掩蓋材を収集した。そして、師団段列等を含む地下陣地を見事に構築した。又、徹底した演習場整備も行われ、完全に旧状に復することが出来、部外からの苦情も殆どでなかった。

強烈な意志と創意工夫を伴った実行力があれば、大抵のことは出来ることを示してくれた。

３　西方火力演習･･･４，７００名の観衆の中で

総監として着任以来、部外の方々から富士の総合火力演習を見たいが見に行けないかという話がよく出た。私がかつて富士教導団長を仰せつかっていたことをご存知の方々からの話が多かったように思う。

又、隊員の中にも、他職種の火力発揮の状況を生で見ていない者がかなりいることが分かった。そこで、部外広報、隊員の他職種部隊の火力への認識付与及び連隊戦闘団クラスの総合火力戦闘能力の向上を狙って、第４師団担当でミニ総合火力演習を日出生台演習場で実施した。

実施部隊は、正確な射撃を行い、その精強ぶりを発揮してくれた。

４，７００名の観衆は、部内外夫々の立場で戦闘団レベルの火力戦闘能力について認識してくれたと思った。これも又、思い出の１つとなった。

着任の辞（平成元年７月３日）

第２０代　西部方面総監　久我　幹生　陸将（平成元年６月～平成３年３月）

※創隊六十周年記念誌より

私は、この度西部方面総監を拝命した久我陸将である。

九州・沖縄に展開する西部方面隊は、我が国防衛の重要な一翼を担任し、古来尚武の地としてその名も高いこの地の各県民、協力諸団体の温かい御支援のもと歴代総監はじめ諸先輩並びに諸官の日夜たゆまぬ練磨により、威々たる伝統と栄光を築いてこられたことに対し先ずもって心から敬意と感謝の意を表するものである。

私は、この精強無比の西部方面隊において総監として指揮をとることを無上の光栄とし、同時にその責務の重大さに改めて身の引き締まる思いである。

さて、今日の国際軍事情勢は、米ソのＩＮＦ全廃条約の締結に代表されるごとく全般的には緊張緩和の方向に向いつつあるものの、依然、通常戦力の不均衡、極東ソ連軍の顕著な増強、更には中国情勢の不安定等、我が国をとりまく防衛環境は依然として厳しく予断を許さないものがある。このような情勢下、我々陸上自衛隊は陸上防衛こそ、国家としての最終的な抵抗意志の表明手段であり、抑止力の核心であることの自覚と誇りを持つことが極めて重要である。

私は、今後の隊務運営に当っては、何時、如何なる任務を付与されても、これを確実に遂行できる即応性の高い、そして各級指揮官を核心として全隊員が一丸となった精強な部隊の練成を目標に着実に隊務を推進してまいる所存である。

この目標達成のため、なすべきことは多々ありますが、当面、私は前荒木総監の要望された三つの事項を確実に受けついで実行してまいりたい。

即ち

その一つは、メリハリの効いた効率的な隊務運営

その二つは、各部隊長等の自主・積極的な隊務運営の推進

その三つは、隊員一人一人に対する限りない愛情に立脚した親身な統率

従って諸官は、従来と何等変わることなく、それぞれの職務において一歩一歩目標に向って努力を重ねていってもらいたい。

私も本日より、諸官と共に国民から信頼され、頼りにされる精強な部隊の練成に渾身の努力と最善をつくす覚悟である。

諸官の健闘を心から期待して着任の訓示とする。

回想　初めの話と終わりの話

第２１代　西部方面総監　重松　恵三　陸将（平成３年３月～平成４年６月）

※創隊六十周年記念誌より

私の三十八年間の自衛官勤務のうち、九年間は九州でした。有難いことです。

1　始めの話。辞表を出す男に「西部方面総監を命ず」

私は平成二年三月、防大幹事。第三十五期生が第四学年になります。夏から秋にかけて、卒業予定者に多くの企業から続々と手紙。試験も面接も受けていない学生に届きます。なかには「内定通知書在中」の表書きもあります。時はバブル。初任給は自衛隊の三倍以上がざら。年明け早々任官辞退者は九十名にはなるだろうとの予測です。私は大隊朝礼に出て初代校長　槇先生が私たち学生に説かれた、「道義」「信義」を伝え、「マンリー ヴァーチュー」を語り、自衛官への道を諭しました。防大では訓育・生活指導・訓練については校長に対する補佐責任は全て幹事にあります。大勢の辞退者が出れば幹事は辞表だと、覚悟を決めておりました。ところが三月初め、校長から人事異動の内示があり、三月十六日付「西部方面総監を命ず」と来ました。卒業式を待たず、幹事の責めを果たし得ず、熊本に赴任することに忸怩たる思いがありましたが、任務に邁進し御奉公に徹することでいくらかの償いとしたいと自分自身に言い聞かせました。

九十四名の辞退者。ただ救いはこの期の入学者は通常より百名多く、辞退者は陸・海・空自衛隊の幹部補充計画に影響がなかったことです。

2　終わりの話。総理から「隷下師団長を帯同し官邸で隊務を報告せよ」

総監としての勤務は、平成三年三月十六日から翌年の六月十五日でした。その間、六月三日に雲仙の噴火・火砕流、四十四名が死亡。住宅消失損壊千戸を超す。災害派遣は六年にわたりました。九月には台風です。十七号、その二週間後には十九号、ともに超大型。長崎・佐世保地区に上陸し、北部九州を東へ走る。下甑では風速八十八米。風倒木二百万本、玖珠・小国・日田地区を中心にほぼ九州全域に及びます。河川に流出し堤防・橋などへの二次災害の可能性が大きく、翌年の梅雨までに危険個所の倒木を処理してくれとの要請です。隊員は山の素人ばかり、スウェーデンからヴィデオを取り寄せた部隊もありました。「何のヴィデオだ、俺にも見せろ」、勘違い野郎がいたようです。四月から梅雨入りまでに八万本を処理し、災害の心配はなくなりました。大規模な派遣でした。

こんな中で地元と部隊の平素からの温かい濃い繋がりが出動部隊にとっても地元にとっても災害対処復旧の大きい力になること痛感しました。雲仙では天皇皇后両陛下の行幸啓を賜り、総理大臣のご視察を頂き、出動隊員一同感無量の想いでした。知事、市長、市民の皆さん、九大の先生、みんな隊員を思い、同じ気持ちになりました。それは今に続いております。昨年、出動の基幹部隊長であった元第十六普通科連隊長 山内明彦さんの葬儀が愛媛県でありました。壇上に一際大きい花輪が二つ。一つは当時の島原市長　髭の鐘ヶ江管一さん、もう一つは現市長の古川隆一郎さんから。二十五年前の災害派遣部隊長にこの情誼。涙ぐみたくなりました。私にも長崎県の対策本部が解散した時、火砕流で荒れたあの土地で採れたものですと、小ぶりな馬鈴薯が届けられました。官を辞して既に数年にもなる私には、光り輝く宝石に見えました。人の想いの熱きことをこれほど感じたことはありません。あの山川に、部落に、そしてあの人々に想いを馳せながら頂きました。

尖閣について、中国が領海法により故なき領有主張を激化したのもこの時期。大北幕僚副長を伴って、尖閣諸島を上空から視察しました。極めて大事なこの島。昔も今もわが国防衛の最前線であることに変わりありません。

平成四年六月、西方総監の職を辞することになりますが、官邸から隷下師団長を帯同し、情況を報告せよとの命令です。総理大臣の都合は六月十五日しかないとのこと。でもその日は私の離任式、陸幕は後任者の報告を折衝したようですが、総理の意向でそれはなりません。当日は離任式を早朝に行い、第四黒柳、第八松島両師団長と共に東京に向かいます。宮沢喜一総理大臣に二十分余の報告を終え、総理から温かい労いと励ましの言葉を頂き、私たち三人は大きい感動を胸に官邸を後にしました。

これが始めと終わりの話です。

西部方面隊と隊員のみなさんの御武運幾久しく、御隆盛あらんことを祈り上げます。

回想　北方重視から西方重視の陸上防衛の時代を迎えて

第２２代　西部方面総監　横地　貞　陸将（平成４年６月～平成６年３月）

※創隊六十周年記念誌より

私が、西部方面総監を拝命したのは、平成四年六月でありました。西部方面隊に着任して総監部各幕僚、各部隊長からの状況報告をうけ方面隊の概要を掌握した後、総監部各幕僚に最初に命じたのは、中国、南・北朝鮮の軍事情勢を推察する時、早急に従来の防衛計画を西方重視の防衛計画に変更する事でありました。これまでの陸上防衛は、ソ連（ロシア）の脅威に対抗するため北方重視の防衛構想であり、このため、あらゆる面において北部方面隊に対して資源が投入されて来ました。今後は、これを北方から西方へと変更することでした。これがため、防衛計画の作成に当たり、関係幕僚に西方管内の各島嶼を含めた全地城を巡視させ、西方防衛のあり方について抜本的に検討させ今後の如何なる要請にも対応する準備をすることでした。このことは、その後の西部方面隊を推察する時、方向性において妥当なものであったと思っております。

今日、わが国の陸上防衛構想は、西方重視であり、部隊の編制・装備等を初めとして、様々な施策が行われることでしょう。現役の諸官におかれては、最重要方面隊の一員として更なる精強化の道を邁進して頂きたいと切に願うものであります。

さて、総監時代の思い出についての寄稿依頼でありますが、前述の事の他に二～三の事柄について申し述べたいと思います。私が着任した時期は、雲仙普賢岳の火砕流による災害派遣の終末段階でした。この災害派遣の特色は、陸上自衛隊が撮映した大口付近の火砕流の状況のビデオ映像をＮＨＫ・民放各局を通じて全国に放映し災害派遣部隊の現況を理解して頂いた事にありました。陸上自衛隊の広報は、ややもすると受動的であり、消極的でありました。このため、西部方面管内の新聞・放送等の関係者に対する講演・講話の機会に強調したことがあります。それは、災害派遣に対し放送される文句や新聞に記載される内容が、必ず「警察・消防・自衛隊」の順番であります。災害現場に派遣されている人数から見ても圧倒的に自衛官の数が多く、さらに整然と部隊長の指揮の下、最も厳しい現場において活躍しているにも関らずであります。私は、この事に関し順番を「自衛隊・警察・消防」の順に変更することを強く要望し各部隊長、幕僚に実施させました。その結果、平成五年の鹿児島市の水害による第八師団の災害派遣に対してのマスコミ各社の報道は「自衛隊・警察・消防」の順となり、少しでも隊員の労苦に報いられたものと思っております。

もうひとつ記憶に残り実現したことがあります。それは、現在の総監部庁舎の建設についてであります。庁舎建設の最終段階の設計図を見た時、一般の建築常識にそぐわないところが多々見受けられ、その修正を要望しました。当時の建設を担当した福岡施設局もこれを受け入れ現在の総監部庁舎になったのであります。さらに総監部庁舎の吹き抜けの両面は、ただのコンクリートでした。そこで、この両側面に西方管内の名産である有田焼による絵画を作成することでした。多分、今でも庁舎の玄関を入って、吹き抜けを見上げれば見ることができると思います。この様に西部方面隊に対しては、忘れられない思い出が多々あり心に残っております。

私は、北部方面隊から始まり、五つの方面隊、更に内局・陸上幕僚監部・防衛大学校等の勤務を通じて多くの先輩・同僚・後輩に恵まれ、最後に最も精強を誇る西部方面隊で退官出来ましたことは、本当に幸せな自衛官生活であったと思っております。

以上をもって、はなはだ拙文ではありますが西部方面隊六十周年記念誌の寄稿文とさせて頂きます。

回想

第２３代　西部方面総監　新井　均　陸将（平成６年３月～平成７年６月）

※創隊六十周年記念誌より

総監として勤務したのは約１年半であったが多種多様な業務や行事等があり、与えられた紙面では編集子の要求された「思い出・エピソード」はとうてい全部記すことは許されず、その中から２～３の事について述べてみたい。

平成６年３月２３日に着任し逐次初度視察を実施中の７月８日、北朝鮮の金日成死亡の報が世界を駆け巡った。これを契機に特に北東アジア地域において何らかの事態が発生したら・・・１９７５年頃読売新聞でこれらの事を想定した「有事にっぽん」が連載され、その中で「難民１００万単位も覚悟・・・云々」の記事が脳裏をかすめ、そうなれば管内の特に離島には・・・自衛隊を取り巻く環境、特に法制等は何等変わっておらず、とにかく今出来る事と思い、特に兵站上の能力を確認しようと幕僚に報告を命じた事を鮮明に思い出す。幸い何事も無く事態は推移し安堵したが確認した兵站能力については極めて悲観的なものであった。(現在は相当改善されていると思うが・・・)

次に在任間の最大の教育訓練であった「日米共同訓練」と「阪神・淡路大震災」について申し述べることとする。

私は約１２年間の陸幕勤務の大半を教育訓練部で過ごし、従って米軍との共同訓練についてはその揺籃時期から関与しており特に「ＹＡＭＡＳＡＫＵＲＡ」に関しては「企画・予算（要求・実行）」等その目的達成の為には少なからず寄与したとの自負心があった。実動訓練・ＣＰＸ共に視察する事は多かったが実際に自ら担任したのは第５師団長として平成４年に実施した２回の実動訓練が初めてであった。総監に着任する前から「ＹＳ－２７」を平成７年に西部方面隊が担任する事は私が教育訓練部長時代に策定した計画のことでもあり承知しており大いに期待していた。前年のハワイでのＣＰＸに引き続き方面隊をあげての準備で実動訓練の「ＹＳ－２７」の１月２３日からの開始を持っていたが、平成７年１月１７日あの「阪神・淡路大震災」が発生し当然のことながら方面隊は二正面作戦を余儀なくされた。総監としても全力で「ＹＳ－２７」に臨めなくなり、北熊本駐屯地の訓練会場に総監部として３個のＣＰを設置し活動することとなった。即ち、「ＹＳ－２７」用ＣＰ、「災害派遣」用ＣＰ、「恒常業務」用ＣＰであり私はこの３ＣＰを巡回し各種の指導をせざるを得なかった。幸いに「ＹＳ－２７」の方は千田幕僚長（後に第３師団長）以下、特に洗防衛副長（後に東北方面総監）の的確な補佐を得て訓練の目的達成に大なる支障は無かったが、災害派遣の方は状況不明の全くの遭遇戦で過去の経験等だけが頼りであり迅速な部隊の派遣と支援内容の決定とには大変苦慮した。方面隊区を越える災害派遣と活動であり当然陸幕及び中部方面隊との調整等その業務は複雑多岐にわたり担当の幕僚（多くはＹＳ－２７との兼務）も当初は殆ど不眠不休でその任に当たってくれた。「ＹＳ－２７」の訓練内容・成果等の細部について記す紙面の余裕は無いが米軍関係者が西部方面隊の置かれた状況をよく理解して協力してくれ当初の訓練目的は十二分に達成できたものと思っている。ただ残念な事は、米軍関係者と熊本市をはじめとする地域社会の方々との相互理解のための各種アイデアに富む交流事業の大半を中止或いは変更せざるを得なかったことであり現在でも若干心残りである。

「ＹＳ－２７」訓練中も気にかかっていた災害派遣部隊の現地での活動状況を視察・激励出来たのは訓練終了後２～３日後であったが派遣された各部隊・各隊員はそれぞれの任務の完遂に精魂を傾けており、さすが西部方面隊と私は心の中で感涙した。当時の状況では「入浴支援」は特に喜ばれておりその現場を視察した時の事であるが若い、確か１士のＷＡＣであったと思うが冷たい寒風のもと両手を「しもやけ」で真っ赤にしながら黙々と入浴業務を行っており胸にジーンと熱いものがこみあげたのを昨日のように覚えている。その他、第１１回日本ジャンボリー大会に行啓された皇太子殿下を特別奉迎した際「設営等大変ご苦労に存じます。」と殿下からの直接労いのお言葉を賜り隊員とともに感動した事や村山首相・愛知長官の島原災害派遣部隊視察受け等々在任間の思い出等は多くあるがいずれも西部方面隊の精気溢れる部隊・隊員・家族・地域社会等のお陰であり感謝に堪えないところである。

西部方面隊の益々の発展を記念しつつ・・・・・・

回想　ゆるぎない使命感

第２４代　西部方面総監　田村　鞆利　陸将（平成７年６月～平成９年６月）

※創隊六十周年記念誌より

私が総監として着任した年は、西部方面隊が４０周年を迎え、現在の総監部庁舎が新しく完成した節目の年でした。それから、２０年の歳月が経過した現在の世界の諸情勢は大きく様変わりしました。しかし、歳月は流れても、総監として在任した二年間を振り返るときに、いつも心に印象深く残っている二つの大きな仕事を思い出します。

その一つは、着任直後の最初の大仕事になった普賢岳災害派遣部隊の撤収でした。

任務についている隊員を一日も早く激励したい強い思いから、着任直後に島原の現地に赴き災害派遣部隊を視察しました。派遣も既に５年目に入り、主な任務も警戒・監視となり、派遣部隊の規模も縮小されていました。７月の大変蒸し暑い時期でしたが、深江町等の簡素な監視所で、変化のない普賢岳を２４時間黙々と監視し続けている隊員の姿に強く心をうたれ、そして、その時に撤収する決意を心に固めたことを思い出します。

平成７年１２月、地元主催の盛大な撤収行事が行われ、挨拶に立った高田長崎県知事の感動的なスピーチは今でも心に深く残っています。“生命は、地球よりも重いといわれています。この現在の風潮の中で、その地球よりもっと重い使命感というものがあったのだということをまだまだと見て、熱いものがこみ上げて参りました。自衛隊は、いざという時、死を賭してやってくれるものだということを市民はしっかり見届けたのであります。・・・”４年半に亘った普賢岳災害派遣を象徴し、西部方面隊の歴史の中に生き続ける、忘れがたいこのスピーチに感慨無量なものがあります。

他の一つは、私の最後の仕事となりましたが、平成８年に西部方面隊で最初の国際貢献となったゴラン高原への部隊派遣でした。任務遂行の途上に、総監として現地のＵＮＤＯＦ派遣部隊を視察して隊員を激励しました。雲一つない青空の下で日の丸を背に、ゆるぎない使命感に満ち溢れた逞しい隊員の姿に接して、言葉に言い尽くせない感動がこみ上げ、目頭を熱くした思いが昨日の出来事のように心に蘇ります。

２０年という歳月が流れて、対象国であったシリアは今や内乱で混乱を極める等、国際的な安全保障環境は大きく変わり、また日本を取り巻く防衛環境も劇的に変化しました。そして、西方面隊が６０周年を迎えた今年、自民党の安倍政権の下で、積年の懸案であった安全保障関連法案が一挙に整備されて、日本防衛の最前線を担う西部方面隊にとって特別に意味ある年になりました。

これから、西部方面隊は早急に各種事態に即応できるよう態勢を整備すると共に必要な訓練を積み重ねて部隊の戦闘即応能力を高めて、まずは平和を維持する抑止力の強化に貢献していくことが急務です。

私は、西部方面隊が６０年の歴史の中で育て、継承してきた部隊・隊員の“ゆるぎない使命感という伝統を堅持していて、いついかなる危機事態に遭遇しても、必ず国民の負託に応えてくれるものと確信しています。

回想（創隊６０周年に思う）

第２５代　西部方面総監　樋山　周三　陸将（平成９年７月～平成１０年６月）

※創隊六十周年記念誌より

私は、平成９年の夏、第２５代総監として熊本に着任しました。冷戦終結に引き続く混迷の中、漸く「次の時代の姿」が見え始めてきた時期であったように思えます。月日の経つのは早いもので、当時のことは、もう昔語りとなってしまいました。

今般、与那国監視隊が新編されました。私が島を訪問したのは平成１０年春、いわゆる台湾海峡ミサイル危機の直後だったことでもあり、漁協でお会いした組合長さんの真剣な眼差しが今も眼に焼き付いています。

平成９年の秋だったと記憶しています。薩摩半島の西、宇治群島の瀬に、１隻の中国漁船が漂着しました。荒天による海難事故でしたが、漂着の場所が気になりました。

私は、子供のころから鉄道の時刻表と地図を眺めてばかりいたという旅行好きで、全国各地の地名には、かなり馴染みがあるつもりでした。が、宇治群島については、具体的なイメージが湧きません。確認したところ、一帯には岩礁も多く、古来海難多発、近年は大物釣りの好適地として知られ、瀬渡しの船もあるとのこと。鉄道好きには縁の遠い場所とは言え、方面隊区の広さと複雑さを改めて思い知らされました。

これを機に、航空隊に頼んで、各地に点在する島々や岩礁を、一通り自分の目で確認することとしました。関係する部署には大きな負担だったと思いますが、これらへの関心を高める必要があるとの思いもありました。

西部方面隊が受け持つ壱岐・対馬から八重山・与那国に至る広大な正面は、古来、我が国にとり、世界に向かっての玄関口でした。とくに大陸中国は、歴史的に見て、政治・経済・文化その他多くの分野で世界の一極としての地位を占め続けて来ており、距離的に最も近い朝鮮半島とともに、深い関係が続きました。かの地が、ここ２、３世紀間の混迷を脱しようとしている昨今、この地域が大きく揺れ動くことは自然の成り行きです。この中にあって、我が国が、独立国として矜持を保持し、平和と繁栄を享受し続けるため、その第１線に立つ西部方面隊の毅然たる存在は、何にもまして重要なことと考えます。

先を見通すことは大変難しいことですが、長期的な展望のもと次なる時代の姿を描き出し、その要求するところに対して柔軟に即応しうる実力を養って戴きたい、・・・方面隊創設６０周年にあたっての、一老兵の心からの願いです。

回想　「西部方面普通科連隊」のこと

第２６代　西部方面総監　天野　良晴　陸将（平成１０年７月～平成１２年４月）

※創隊六十周年記念誌より

今年の春、当時の防衛部編成班長尾池二佐から突然お便りを頂きました。その内容には、最近の「西部方面普通科連隊」の状況とその配置決定に至る詳しい思い出が綴られていました。以下はその返事の概要ですが、小生の思い出に替えさせて頂きます。

「拝復　陽春の候、貴君には益々お元気にてご活躍の由何よりです。この度は、ご丁重なるお便りを戴き、大変有難うございました。当時の「西部方面普通科連隊」の配置に関する検討の経緯について、大変懐かしく思い出しながら、読ませていただきました。

小生、平成十二年にふとしたことで退官して以降、早いもので今年で十五年が過ぎましたが、徐々に陸上自衛隊とは縁遠くなり、各地はもとより西方の記念日行事にも参加することも少なくなりました。わずかに「健軍会」と称し、当時のメンバーがたまに集まって酒を呑むこと、 そして毎年一回「西部方面総監懇親会」に堀江元総監夫妻を囲みながら、方面隊の近況報告を聞かせて頂く位になりました。

小生の総監時代の思い出には色々ありましたが、二つ挙げたいと思います。「殉職隊員慰霊碑」を建立したこと及び貴兄が策案してくれた「西部方面普通科連隊」の配置の決定の二つです。

前者は、かつて「五十年のあゆみ」に書いた通り、北熊本で実施されていた慰霊祭を健軍駐屯地に移転するため、新たに全隊員に浄財をお願いして「西部方面隊殉職隊員慰霊碑」を建立したことです。後者は、「西部方面普通科連隊」の配置の決定ですが、貴君の言う通り当初の案は異なる場所であったように思いました。皆さんの色々な意見を聞きながら、最終的には現在の地に決めた経緯については、貴君が詳しく書いてくれた通りです。

小生が日頃から決心にあたって心がけていたことは、「聞くと見るとは大違い」ではありませんが、まず自らがその地などを現地について直接見て確認することでした。更に、その地の要因も検討する必要がありました。連隊が離島へ迅速に展開するためには、統合運用、特に海上自衛隊との連携が焦点でした。更に、駐屯地の特性、空中機動・海上訓練の容易性、地元の状況など総合的に比較検討する必要がありました。特に私にとって魅力的であったのは、駐屯地が海に面していることでした。

幸い幕僚長以下、特に貴君の努力のお陰で、現在の地に決定できたことは嬉しいことでした。また編成後は、初代の越智連隊長以下の部隊長がその礎を築き、今や米海兵隊に負けない最精鋭部隊として共同訓練を遂行するとともに、更に陸上自衛隊の迅速な展開・対処能力の向上のため、「水陸機動団（仮称）」の基幹部隊となる予定とのこと、誠に頼もしい限りです。

今になってみれば、貴君には余計なご苦労をかけてしまったと後悔していますが、結果的にはよかったのではないかと思い、一安心しました。思いもかけず貴君から、大変懐かしいお便りを頂きました。出来れば近いうちに当時の皆さん方と、是非昔話を肴に一杯やりたいものと思っています。取りとめもない乱文になりましたが、貴君はまだまだ若く、やることも多いでしょうから、健康に留意しつつ頑張ってください。敬具」

返事は以上ですが、未だ尾池君との一杯会は実現できず残念でなりません。最後に西部方面隊が、小川総監を核心として「最精強方面隊」を目指して、益々努力されるよう期待しております。

回想

第２７代　西部方面総監　作道　光夫　陸将（平成１２年４月～平成１４年３月）

※創隊六十周年記念誌より

１　はじめに

平成１２年４月から平成１４年３月まで第２７代西部方面総監として職務を遂行しました。着任の辞では、「陸上自衛隊創隊５０周年の節目の今年は、西部方面隊としても創隊４５周年を迎えるが、これまで積み上げられた歴史と伝統の重みを感じるとともに、２１世紀を見据えた新たな時代に対応する戦略的に最も重要な正面を担任する西部方面隊の地位・役割に改めて思いをいたし、即応予備自衛官を含む方面隊２万余の諸君とともに『行動して評価される時代』に対応した『如何なる多様な任務をも創意を尽くして完遂しうる即応性ある活力に満ちた精強西部方面隊の練成』に全力を尽くす」（要旨）と訓示した。以下小生の在職間の特異事項について記述する。

２　本　論

（１）方面区内の離島訪問

離島における地方公共団体と所在陸海空部隊、防衛庁の機関等を訪問して相互理解、激励に勤めた。訪問した島は１０箇所（壱岐、対馬、五島、奄美、種子島、喜界島、沖縄本島、石垣、宮古、与那国）であった。空港使用に関して若干の指摘があったが自衛隊機着陸の道筋をつけることができた。また地方公共団体表敬時の服装で調整時制服に対する疑念を持つ自治体があったが、全て制服での表敬で押し通した。この間調査・防衛の幕僚を帯同し離島特性把握を図った。

（２）射場・演習場の整備

教育団が主として使用していた早岐小火器射場がヤード射座であることを相浦駐屯地初度視察の時に判明したため施設団・相浦業務隊による自隊工事で２年をかけて２００・３００m射座に改修工事を行った。工事中の泥水が海岸に流れない工夫をしたため現地自治体とのトラブル回避ができた。４師団管内射場で停弾堤における鉛問題が生起し、装備部の粘り強い関係機関との調整により全陸上自衛隊小火器射場の管理としての解決を図った。また日出生台演習場における多様な機動経路を確保するため施設団による南道拡幅工事に着手した。

（３）日米共同訓練（やまさくら-３９　（ＹＳ－３９）平成１３．１．２２～１．３１）

北熊本駐屯地に統裁部、主力部隊を展開し、第４師団は、福岡駐屯地にホームステイさせ指揮システムを最大限活用しペイパーレス化を図った。統裁部を日米ともに独立させ演習部隊指揮官は現職を持って充て演習に真剣味を持たせた。その成果としては、日米とも現職指揮官・幕僚の調整であり極めて責任ある調整連携が可能となった。また自衛隊の戦力の弱点把握ができ事後の陸幕報告においてしっかりとした改善報告ができた。日本共同実動演習を平成１３年秋に第８師団担任で計画準備し大矢野演習場廠舎整備が完了したが平成１３年９．１１のニューヨークにおける航空機ビル突入テロが発生したため米陸軍の来日が出来ず中止となった。大矢野演習場廠舎の整備が出来たのが事後の演習のための良き環境作りになった。

（４）韓国陸軍２軍との相互訪問

中谷陸上幕僚長の肝入りで始まった隣接軍レベルの交流は、平成１３．３．２６～２７韓国陸軍第２軍司令官金中将が西部方面隊を訪問され概況説明、演習場上空視察、第８師団視察等を実施され相互理解親睦を深め２８日には陸幕長表数のため東京に発たれた。平成１４年３．４～７に小生以下幕僚数名で韓国第２軍、５０師団、陸軍参謀本部、統参議長,、国防部政策補佐官等を訪問し相互理解に寄与した。この間金大佐第２軍調査部長（前在日韓国駐在武官）がエスコートを担任していただき極めて有意義な訪問ができた。

（５）方面銃剣道大会の復活

着任早々防衛部に近年全国大会で惨敗を続けている銃剣道を何とか常勝機運にさせたいため業務計画の修正をお願いし方面銃剣道大会を１２年度から復活した。大会の特色は、審判規定を方面独自に定め西方の利点である遠間からの先先の技を生かしたものとした。大会当日には、主賓として全日本銃剣道連盟会長のご臨席を頂きその祝辞において「今大会を催したとしても全日本の壁は厚く東方、東北方には勝てないだろう」と述べられたお陰で平成１３年４月の全日本銃剣道大会において西方選手の奮起によりベスト８以降は圧勝することが出来当初目標とした常勝機運の道筋をつけることが出来た。

（６）尖閣列島視察

調査部・防衛部の計画担当者は２～３回上空偵察を実施してその景観を承知している。小生自身石垣・宮古の離島訪問の際２回上空偵察を実施して海上保安庁の艦船の常続監視をしている実態を認識することが出来た。海上自衛隊佐世保総監の協力を得て西方普通科連隊準備隊、第２混成団、総監部幕僚等に艦船からの尖閣列島視察を計画して沖縄本島勝連港に入港したところ９．１１のテロに遭遇し中止せざるおえない状況になったことは、真に残念であった。

（７）中堅幹部教育の方面実施

着任当初に防衛部長の意見具申で方面で中堅幹部教育をすることにより隷下師団以下の教育に対する関心を高めより多くのＣＧＳ合格者を輩出することを目標に教育を開始した。

（８）沖縄サミット支援

第２混成団を中心に編成しサミット支援を実施した。準備状況を事前に視察し自衛隊の役割について理解を深めた。

３　結　び

小生陸上自衛隊に入隊し最初の勤務地が第８戦車大隊（北熊本）であり最後に西部方面総監として再び熊本で勤務出来たことに、運命的な因縁を覚えるとともに男子の本懐を遂げた思いである。小生の２年間の勤務は西部方面隊の長い歴史からすれば、僅か１コマに過ぎないがその時その時で最大限最良の成果を求めた結果であると思っている。

西部方面隊創隊４７周年記念式典式辞（平成１４年１０月１３日）

第２８代　西部方面総監　松川　正昭　陸将（平成１４年３月～平成１５年６月）

※創隊六十周年記念誌より

本日の西部方面隊創隊４７周年記念行事の挙行に当たり、国会議員の諸先生、九州・沖縄地区防衛協会連絡協議会会長の熊本県知事潮谷様、歴代方面総監を始め、部内外からの多数の御来賓の皆様の御臨席を賜り、誠にありがとうございます。

西部方面隊は、昭和３０年に創隊されて以来、４７年にわたり、多数の部隊の新編・改編が行われ、更に、即応予備自衛官・予備自衛官補制度の導入等の幾多の変遷を経て、現在の威容を整えるに至りました。

現在の精強な西部方面隊が維持されてきたのは、ひとえに九州・沖縄各県の皆様の御理解・ 御協力と歴代方面総監を始め、諸先輩の一方ならぬ御尽力の賜物であり、心より厚く御礼を申し上げる次第であります。

さて、昨今の国際情勢につきましては、冷戦後、世界各地で地域紛争が増加していましたが、昨年９月の米国同時多発テロ事件以降は、新たな国際テロ事件等が増加し、極めて複雑かつ不安定な情勢になっております。

また、我が国周辺の北東アジア情勢は、先月１７日に日朝国交正常化等を目的とする戦後初めての日朝首脳会談が開催されましたが、今後の朝鮮半島情勢及び中台関係情勢の安定化への推進の可能性は、現在も不透明な状態にあります。

我が国の国内情勢は、冷戦終結後に発生したバブル経済の崩壊により、経済不況が継続して、厳しい経済・財政状況をもたらし、更に少子高齢化の加速と殺人、強盗等の犯罪の増加が、社会を不安定にしております。

このような国内外情勢の下で、自衛隊はＰＫＯ等の国際貢献活動や大震災、原子力事故等に対する積極的な災害派遣活動等の平時における新たな任務が付与されていましたが、昨年の米国同時多発テロ事件以降は、更にテロ対策措置法の新法の制定と自衛隊法等の改正によって、 新たな米軍等支援、ＰＫＯ任務の拡大、米軍基地等の警護、不審船・テロ事件対処等の多様な任務が追加されました。

各部隊等においては、これらの新たな任務遂行のための教育訓練等を実施し、平成７年に改正された「防衛計画の大綱」に基づく自衛隊のコンパクト化、効率化による大きな部隊改編と人事異動の準備を推進して、極めて多忙な隊務運営の状態の中で、今年は、ワールドカップ・ サッカー大会及び不審船引き揚げに対する警備支援等の即応態勢をしっかりと維持され、大変御苦労さまでした。

しかしながら、将来の国際情勢は、より一層の複雑・不安定さが予測されるなかで、「我が国の安全・安定確保の最後の砦」としての役割を果たすため、西部方面隊としては、基本任務の 「国土防衛」とともに、平時の多様な任務をしっかりと着実に遂行できる部隊・隊員を育成して、２１世紀の情勢に対応し得る「真に精強な西部方面隊」を創り上げる所存であります。

従って、各級指揮官にあっては、適時・適切な指揮・統率によって、明るく、元気にして精強な部隊等の練成に全力を尽くすことを強く要望します。

また、隊員諸宮にあっては、迷うことなく指揮官の命令を実行するとともに、誇り高き陸上自衛官の心得の「挑戦・献身・誠実」を合言葉に、着実な訓練により、一人一人が優秀な戦士としての能力を更に高め、もって国民の負託に応えることを要望します。

御来場の皆様、西部方面隊創隊以来、約半世紀における御支援と御協力に改めて感謝を申し上げます。

なお、現在の西部方面隊は、一部の団体等から厳しい批判等を受けており、また、社会の不安定さの影響を受け、隊員の悩みも多くなっておりますので、明るく元気に平素の隊務を遂行でき、身の危険を賭してしっかりと実任務を遂行できるよう、部隊・隊員に対するなお一層の御指導と御激励を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、御多忙中にもかかわりませず、本日の式典に御臨席を賜りました御来賓各位の皆様に重ねで厚く御礼を申し上げ、式辞と致します。

回想　総監時代の思い出

第２９代　西部方面総監　森　勉　陸将（平成１５年７月～平成１６年８月）

※創隊六十周年記念誌より

平成１５年７月３１日午後、羽田発の航空機は濃霧のため福岡空港への変更を検討しながら熊本市上空を約３０分旋回した後ようやく熊本空港へ着陸した。行く先の平坦ならざることを予感しながら尚武の地九州に降り立った。幹部候補生学校入校以来二度目のそして最後の九州での勤務である。

冷戦終焉から既に１０年以上が経過し我が国を取り巻く戦略環境の焦点は北から西へと大きくシフトを始めていた。西部方面隊はかっての西方関東軍説（北方重視の中、西方正面の防衛の重要性を主張）とはその立場を大きく変化しつつあった。方面隊の戦略配置は明らかに半島を睨んでいた。南西諸島は残念ながら戦略的空白地帯であった。これは半島に隣接するという地政学上の特性や北方重視のためだけではなく沖縄の特殊な事情によるものでもあった。このような情勢の変化に対応するため、島嶼防衛に任ずる西部方面隊普通科連隊が既に相浦駐屯地に新編され、沖縄の第一混成団も近い将来旅団化が予定されていた。また、米陸軍・海兵隊との実戦的な共同訓練も着実に進捗していた。一方、国民の自衛隊による災害派遣への期待は大変高まっていた。また、イラク派遣、ＰＫＯ、国際緊急援助隊等の国際貢献活動の担任も逐次増加していた。着任して２か月余りの１０月初旬小郡に駐屯する第５施設団を中心とする第４次東チモール派遣施設群をＰＫＯ部隊として派遣した。壮行会で、任務の無事完遂を折り「お百度参り」をすると宣言し健軍神社に早朝１００回お参りした。ご利益あってか全員が無事任務を見事に達成し帰国してくれた。派遣隊員やその家族の笑顔はすべての苦労を喜びに変えてくれた。

南西諸島方面の戦略的空白を埋めるため、第一混成団の早期の旅団化はもとより先島諸島への部隊配置の検討、精強第４師団・第８師団をはじめとする方面隊隷下各部隊の訓練練度を更に高め方面隊の即応性のより一層の向上、海・空部隊との統合運用体制の検討、在沖縄海兵隊・在日米陸軍との緊密な連携、防衛基盤の更なる強化等が歴代方面総監をはじめとする方面隊全隊員の懸命な努力により着実に推進されていた。

私は着任後直ちにこれらの主要な施策の推進のほか、従来の服務体制を抜本的に改革した「輝号計画」の負の遺産ともいうべき平日の外出の禁止・駐屯地内における飲酒規律の維持・女性自衛官等の勤務体制の改善等服務体制の改革、駐屯地の美化・宮内食（隊員食堂）の魅力化・駐屯地各施設及び官舎等の自主点検と迅速な修理・隊員クラブの存続と魅力化・木工業務の活性化等の業務隊の抜本的な改革、狂乱募集時代の残滓を色濃く残す募集・援護業務を時代の変化に適合させる等地方連絡部の改革、部隊の道場たる演習場の効率的な整備、新たな方面隊物流システムの構築等内なる基盤の整備に取り掛かった。また隊区全県への元自衛官を防災官として配置等更なる防衛基盤の推進に着手した。残念ながら私の任期はわずか１年余りでその成果を確認することは出来なかったが、困難に立ち向かうのはこの部隊をおいて他になしとの確信を持って九州の地を去ることが出来た。この他、陸幕施策である隣接する野戦軍司令官相互の防衛交流として、韓国第２軍司令官ヤン・ウチョン陸軍大将との交流のため韓国（太田）を訪問し韓国陸軍をつぶさに視察するとともに軍人としての誇りをかけて爆弾酒を酌み交わし肝胆相照らす仲となり生涯の友を隣国に得ることが出来た。貴重な経験と思い出であった。

私的な面では九州・沖縄の旨い焼酎・泡盛等を十分に堪能し、趣味の野外活動もことのほか充実したものであった。また家族と九州各地の名所・旧跡を訪れた。異国情緒豊かな長崎くんち、古代のロマンを掻き立てる吉野ヶ里遺跡、菅原道真を祀る太宰府天満宮、日本一人気のある黒川温泉、神話の世界高千穂の夜神楽、神話から神武天皇への架け橋日向三代の陵墓「可愛山陵（ニニギ）・高屋山上陵（ホオリ）・吾平山上陵（ウガヤフキアエズ）」、午後８時になっても太陽が沈まない日本の最西端八重山諸島、そして雄大な阿蘇のカルデラ・加藤清正築城の名城熊本城等様々な歴史や文化に触れ、多くの人々と知り合い交流を深めることが出来た。

退官して既に１０年近くが過ぎた今尚、精強の誉れ高い西部方面隊を指揮統率したことそしてその一員であったことを大変誇りに思うと共に感謝の気持ちでいっぱいです。今や我が国防衛の最重要正面を担任する西部方面隊の益々の充実発展と武運長久を心からお祈りいたします。

回想

第３０代　西部方面総監　林　直人　陸将（平成１６年８月～平成１９年３月）

※創隊六十周年記念誌より

私は、第３０代総監として、平成１６年８月３０日～平成１９年３月２８日の間約２年７ヶ月の長期に亘り、陸上自衛隊唯一の陸将幕僚長３人の方と勤務させて頂き幸せ者であったと思っております。

その間には、防衛省移行、イラク派遣、中越地震をはじめ多くの災害派遣等ありましたが、その中でイラク派遣部隊激励の時に感じたことを記すことにします。また平成１８年９月８日に発生した玖珠駐屯地小銃等紛失事案では、多くの部内外の方に御心配をおかけし、第４師団長はじめ多くの方面隷下の自衛官に苦労させ、陸幕長の心痛を痛めしめ、また当時の九州管区警察局長、福岡高等検察庁検事長及び大分地方検察庁の検事の皆様にもご協力を頂きながら、平成２０年８月まで解決の道が閉ざされていたのは小生の不徳と感じ、この紙面をお借りしお詫びと御礼を申し上げます。幸いながら現職自衛官の犯行ではなく、依願退職自衛官の犯行でありました。事案解決を当時の用田総監の同意を頂き大分県知事に直接報告させて頂く機会も頂くことが出来、やっと終焉した感がありました。

扨て、イラク派遣部隊として、第４次イラク復興業務支援隊の要員派遣（平成１７年６月～翌１８年２月）第７次イラク復興支援群を第４師団を基幹として派遣(平成１７年７月～同11月）及び第８次イラク復興支援群を第８師団を基幹として派遣（平成１７年１０月～翌年２月）しました。

イラク派遣部隊の視察・激励は、平成１７年１１月、第７次及び第８次部隊の現地交代の時期にさせて頂きました。現地到着時の夜半迫撃砲の歓迎を受けましたが、岡崎群長、立花群長の両指揮官はまさに、沈着冷静な指揮を執り、異常の有無の確認、報告、事後の対応指示等、的確になされており、その様を見て、安堵致しました。また、砲撃直後の翌日の業務は、斎藤業務支援隊長の支援の下、各機能が淡々と何事もなかったように進められており、各業務のしぐさの中に、彼ら若き自衛官達の所作から侍の気概を感じることが出来ました。まさに、「真に強い者が優しくできる」という実態を目の当たりにし、この時、自衛隊は大丈夫だと確信し、後輩に強い信頼感を感じました。砲火の下での現地で彼ら若き侍達と共に寝泊まりできたことに感謝します。

以上長くなりましたが、これから今以上に厳しい任務が待っております現役の皆様に、心から感謝と尊敬の念を表します。西部方面隊の全自衛隊員とその家族に栄光あれ！

回想　平成１９年春から２０年夏の頃

第３１代　西部方面総監　輪倉　昇　陸将（平成１９年３月～平成２０年７月）

※創隊六十周年記念誌より

これまで西部方面隊で勤務し、しっかりと職務を果たし伝統を受け継いできてくれました諸先輩に心からの敬意を表しますとともに、西部方面隊を支えてくれた九州・沖縄地区の皆様に感謝をしております。私も、平成１９年３月から２０年８月までと、短い期間ではありましたが、西方で自衛官としての最後の勤務をしました。同じ時期に同じく西方に勤務した隊員諸兄と多くの思い出を共有したと思っていますが、勤務間に生起した個別の事象を記すと紙面が足りませんので、私が西方で勤務をするに当たりどのような考えで着任し、勤務したかについてその理由も含めて簡単に記したいと思います。

指揮官は、多く統率方針あるいは要望事項を示します。どちらにするかは部隊の大小や指揮官の考え方によるのでしょうが、内容も、普遍的なものから自らの信念、情勢・状況に合わせたもの等があると思います。私は当時の西方の状況を考えて着任の際に３点の要望事項を述べました。

１点目は「変化への対応」です。当時北から西へと防衛の重点が移りつつあり、海外任務は常態化しだすとともに統合が叫ばれ、そのような中で陸上自衛隊は大改編の最中でした（現在も大変な改編をしていますが）。大きな変化が自衛隊、中でも西部方面隊に迫ってきていました。これらに何としても対応してゆかねばなりませんが、変化に対し受動的に対応していては後手に回ってしまいます。前向きに積極的に対応することが必要と考え一番目に要望したものです。

２番目は「良き伝統の継承」です。周りがどんどん変化し、それらに対応してゆくとしても、変えてはならないものがあります。西方はこれまで輝かしい実績をあげ、それが脈々と受け継がれています。その伝統、特に形而上のものが多いとおもいますが、これは精神の基本ともいえるものです。いざというときに大きな力を発揮するものであり、変えることなく受け継いでゆくことが極めて大切です。

３番目は「誇り」です。これは２番目の「良き伝統の継承」とも関連するのですが、当時西方は「小銃紛失（盗難）事案」が継続していて、意気消沈しているように私には感じられました。西方は前述したようにこれまでに素晴らしい実績とそれに基づく伝統を有しています。確かに小銃事案はショックなものでしたが、ここで挫けてはならない、もう一度西方の各部隊の隊員であることに誇りを持ってもらいたいと思ったのです。同時に自衛官として国家・国民に奉仕するという職務に就いている誇り、また自分の部隊を誇りに思える部隊にしていってもらいたいという気持ちからでした。

要望事項は着任時に示しましたが、その後幹部教育あるいは初度視察の訓示の際に述べたのは「人は何の為に生きるのか」という命題に対する自分なりの答えです。幹部教育や初度視察の訓示でこんな事を言う指揮官はあまりいないだろうと思いますが、自衛官も自衛官である前に社会人でありその前に人間です。人間である以上人間としての究極の命題は「なぜ生きるのか」ということではないでしょうか。そのことを自分なりに理解する、あるいは認識することにより社会人としての生き甲斐、さらには自衛官としてのやり甲斐がでてくるものと思います。 問いに対する私なりの答えは教育や訓示で述べたとおりです。思い出してもらえれば幸いです。

西部方面隊が引き続き発展し、精強であり続けることを心から祈念します。

回想　西部方面隊６０周年記念、統合１０周年にあたって

第３２代　西部方面総監　用田　和仁　陸将（平成２０年８月～平成２２年３月）

※創隊六十周年記念誌より

西部方面隊が、統合運用の中核として発展しておりますのも、諸先輩方々のご指導と、西部方面隊の隊員のご努力、そして日頃からご指導・ご鞭撻を賜っております各協力諸団体、協力者の皆様方、さらには、それぞれの地元の方々の熱いご支援・ご声援のお蔭と心から御礼を申し上げます。

一方で、統合運用の中核であるということは、日本の厳しい戦略環境の矢面に立たされているということであり、真に戦いに勝てる強い方面隊として発展させなければならないという使命感の下、その実力が期待されているのだと思います。西部方面隊の皆さんは、この重責を物ともせず誇り高き日本の武人として、期待に応えてくれるものと確信しております。

１０年前、統合運用の「始まり」に当たり、その立ち上げと運用開始の一端に携わりましたが、その当時から考えますと目を見張るような発展を遂げていることに驚かされます。当時は、すべて手探りで、何のノウハウも対抗手段もなく、今のように的確な対応ができていたのかは分かりませんが、一つ一つの事態に対処しつつ同時に学び教訓をまとめながら、５年後は自分たちの苦労の１０分の一で済むことを願っておりました。

１０年後の今、西部方面隊を中核として、陸海空がより強固に「日本防衛の統合の柱」を築き上げるとともに、さらに米軍と一緒に「日米の固い鎧」をまとうようになってきたことは、まさに「鎮西」として重しを増し、抑止の要となってきている証左です。

在任時は、防衛省全体が南西諸島の防衛に本格的に舵を切り始め、陸海空の戦力と米軍の戦力を、いかに一つの力とし結集していくのかが本格的に議論され始めた時でした。また、結論に至らなくても実際に演習として試していく時代でもありました。既に中国の軍事的台頭は明確でしたから、一刻も早く統合運用の「型」を作る必要があったということです。

象徴的な出来事は数多くありました。既存の枠組みを拡大した自衛艦隊司令部、航空総隊との指揮官を交えた共同幕僚研究の実施、第７艦隊司令官と腹を割った意見交換等、枚挙にいとまがありません。また、非公開でしたが、統幕主催で統合演習の先駆けが実施されたことで、事後の新しい流れができたことを誇らしく感じております。この出始めとして、西部方面隊の記念日の１週間前に、鹿児島港から対艦ミサイル部隊が、台風の襲来を目前にして奄美大島に向かい出航して行きました。その時の光景と隊員の輝く目を今でも忘れられません。まさに新しい時代への船出でした。

一方で、隊員の皆さんに、新しいチャレンジと従来の隊務の両立をお願いしたことは過重であったろうと思います。それにもめげず、各級指揮官以下のご努力により見事に新しい道筋を付けて頂いたことに深く感謝申し上げます。

これからも、日本防衛の中核となる方面隊として、国民の皆様のご支援ご協力の下、見事に任務を完遂していくものと確信しております。

回想　一脈の清流

第３３代　西部方面総監　木﨑　俊造　陸将（平成２２年３月～平成２３年８月）

※創隊六十周年記念誌より

私は、平成２２年３月から翌年８月までの間、西部方面総監の任に就きました。第８師団長から直接の異動であり、北熊本駐屯地から健軍駐屯地への十数キロの異動は、将官としては異例だと揶揄されながらのことでした。（しかしながら、その後の人事では同様のケースが全国で見られるようになり、特別のことではなくなったようです。）

北朝鮮潜水艦の魚雷攻撃により韓国海軍哨戒艦「天安」が黄海で沈没したのが、平成２２年３月２６日。中国艦隊１０隻が沖縄本島及び宮古島の間を抜けて太平洋に進出したのが、同年４月１０日。宮崎県における口蹄疫災害が発生したのも同年４月。当時、我が国安全保障上のホットスポットとして焦点が当たっていた西部方面隊とはいえ、着任直後につぎつぎと起った事象には、一方ならず緊張したことを覚えています。

更に、尖閣諸島周辺の我が国領海において中国漁船が海保巡視船へ激突したのが９月、北朝鮮が韓国延坪島を砲撃したのが１１月。また、パキスタンで発生した大洪水災害に対し、８月から１０月までの国際緊急援助隊を担任しました。隊区内でも次々と大きな災害が発生し、口蹄疫終息後、奄美大島大水害、鳥インフルエンザ、新燃岳噴火と続いたのです。

また、現在の「鎮西演習」の前身である方面隊実動演習、日米共同方面隊指揮所演習（ＹＳ－５９）、自衛隊統合指揮所演習、そして方面隊直轄部隊訓練検閲等、方面隊挙げての訓練・演習は、計画通り淡々と進みました。

このような中にあって、各級指揮官、総監部幕僚、各隊員は、全てに前向き、明るく元気に取り組んでくれました。今から５年前は創隊５５周年の節目でした。５５周年に相応しいイベントを考えようと幕僚に指示しましたところ、いろいろな案が出てきました。その中で、「ゲストを誰にするか」との回答がユニークでした。「コント５５号の萩本欽チャン」。いやいや「ゴー！の郷ひろみ」。やはり「背番号５５、ヤンキースの松井秀喜選手」と、案を出すことを楽しんでいるようでした、最終的には、スケジュールや経費の関係で「松井選手のご両親」に決まり、ゲストとして花を添えて頂きました。やらなければならないことがたくさんある状況であっても、心に余裕をもって仕事をしてくれていた証。ささやかなエピソードです。

一年間走り続け、ほっと胸をなでおろした瞬間の「３．１１」でした。西部方面隊の全隊員は、粛々とそれぞれの任務を果たしてくれました。全ては、現場に派遣された師団長等以下全隊員の頑張り、自分たちにも派遣の機会がほしいと訴えつつ派遣部隊を支え、そして九州・沖縄の防衛警備等に怠りが無いように一層の奮起をした残留隊員の頑張りでした。総監としては、『根気堅実たる陸上自衛隊、一脈の清流が日本を再興す』という想いで一杯となりました。

振り返れば、宮下・木野村第４師団長、寺崎・堀口第８師団長、反怖・友部第１５旅団長以下各部隊長、久納・松尾方面幕僚長、岡部・岸川・山崎・高田幕僚副長、総監部部長以下各幕僚、そして全２８，０００名の隊員に感謝することばかりです。

“心がこもった笑い溢れる送別会”を最後に、健軍駐屯地正門をあとにしました。

これからも、我が国安全保障・防衛上の緊要な地域を担う西部方面隊が、強い組織をめざしつつ鍛練に鍛錬を重ね、与えられた任務を確実に完遂していくことを期待しております。

回想　統合運用のもと鎮西の任務に邁進して

第３４代　西部方面総監　宮下　寿宏　陸将（平成２３年８月～平成２５年８月）

※創隊六十周年記念誌より

西部方面区の防衛警備の重責を日夜担っている現役隊員のご尽力に感謝するとともに、創隊以来今日の西部方面隊の礎を築いてこられた諸先輩のご功績に対し心から敬意を表したいと思います。私は平成２３（２０１１）年８月５日から平成２５（２０１３）年８月２２日までの二年間、西方総監として統合運用の推進、「鎮西演習」の深化並びに事態対処への即応に任じました。特に重視して実施した事項を簡単に紹介したいと思います。

１　南西防衛第一線における統合運用の推進

総監着任後速やかに南西事態対処のための諸計画を整備するとともに、この実効性を検証するために「海上自衛隊演習（図上演習）」に陸自方面隊として初めて参加しました。また方面管内での海空自との協同訓練を推進するとともに、これを定例化するための協定を締結しました。

２　鎮西演習の範囲の拡大と内容の深化

木﨑前総監が策定された「方面隊実動演習五ヵ年計画」に定められた演習の範囲を「より南西へ展開」、内容を「更に実戦的な訓練に深化」させ諸計画の修正・教育訓練・法令整備・防衛力整備に成果と教訓を反映しました。更にこの実動演習を「鎮西演習」と名付け、演習を訓練ではなく「オペレーション」と位置づけて実施しました。

３　事態対処への即応

自然災害では平成２４年７月の「九州北部豪雨災害」に迅速に対処しました。特に平成２４年４月と１２月の「北朝鮮のミサイル発射事案」に即応し、対処部隊等を沖縄本島、宮古島、石垣島、与那国島等に初めて展開し対処しました。

４　日々「治而不忘乱」を戒めとして

総監として勤務間、西部方面隊は岩崎統合幕僚長（当時）より「第二級賞状」を三回授与されました。その内、二回は「北朝鮮のミサイル発射事案への対応」で、一回は「米国における統合訓練（ドーン・ブリッツ２０１３）の実施」の功績です。特に日米共同統合実動訓練の功績により西部方面隊、自衛艦隊並びに航空総隊が同時に表彰されたことは、まさに南西防衛における統合運用の進展を表すものでした。これらの任務を遂行した隊員諸官が寝食を忘れて真剣に努力する姿は、今でも私の瞼に焼き付いています。

現在西部方面隊がおかれている安全保障環境は、益々厳しさを増しています。しかし多くの国民が自衛隊は必ず任務を完遂してくれると期待しています。我々ＯＢも国民の一人として部隊・隊員の皆さんを引き続き応援していくことをお誓いし、私が総監在任間に座右の銘としていた「治而不忘乱」を西部方面隊創隊六十周年のお祝いに贈る言葉として筆を頂きたいと思います。

回想　鎮西の守りと西部方面隊

第３５代　西部方面総監　番匠　幸一郎　陸将（平成２５年８月～平成２７年８月）

※創隊六十周年記念誌より

西部方面隊の歴史を築かれた先輩各位、そして温かく力強く支え励まして頂いてきた九州・沖縄の地域の方々に改めて感謝と敬意を表します。

私は平成２５年８月、第３５代総監として着任致しました。篤い人情と緑豊かな自然、そして夙に精強の誉れ高き隊員たちの雄姿は変わらないものの、西部方面隊を取り巻く情勢は一層厳しさを増しており、在任間まさに西部方面隊が、名実ともに国防の最重要正面として極めて大きな責任を与えられ、内外からの高い期待と注目を集めていることを痛感する日々でした。

着任直後の平成２５年１２月、「国家安全保障戦略」、「２５防衛大綱」そして「２６中期防」が策定され、これからの我が国の安全保障の重点として、西部方面隊の担当する南西地域の防衛態勢を充実・強化することが決まりました。与那国島への警戒監視部隊配置も正式に決定され、平成２６年５月には防衛大臣臨席のもと現地での起工式が行われ長年の夢が実現されることになりました。そして、宮古島、奄美大島への部隊配置も具体的に動き出しました。また、各師旅団・方面直轄部隊の近代化改編や新型地対空・地対艦誘導弾、機動戦闘車、無人偵察機等最新鋭の装備の導入も始まりました。更に、西部方面普通科連隊を核心に進化してきた水陸両用作戦能力も「水陸機動団」創設の決定により、相浦が水陸両用戦のメッカとなり、Ｖ－２２（オスプレイ）の佐賀空港配備構想や水陸両用車部隊の佐世保崎辺地区配備構想などが進められることになりました。このような歴史的とも言える新たな西方の防衛態勢構築に向けた様々な事業を構想し、短期間に具体化することは、もとより容易なことではありませんでしたが、総監部と隷下各部隊が一体となって懸命に推進してくれたことをいつも感謝しておりました。

一方で、西部方面隊は、日々朝鮮半島と東シナ海を臨む南西地域の二つの大きな戦略正面を担当するとともに、多くの自然災害に向き合う高い即応性を維持してきました。在任間にも、緊急患者空輸や不発弾処理はもとより、累次の台風や口永良部島の火山噴火、鳥インフルエンザ、山林火災など、隊員たちは多くの災害派遣の現場で活躍し見事な成果を上げてくれました。 また、全国から陸海空の部隊が西方管内に集まり実施される「鎮西演習」は、歴代先輩方のご尽力によって名実ともに自衛隊を代表する重要な戦略的演習となり、内外からの注目を集めながら発展してきました。更に、南スーダンＰＫＯに派遣された西部方面隊の隊員たちの誠実で自信に満ちた活躍は国際的にも高い評価を受け、大きな誇りでありました。

西部方面隊創隊６０周年の今年は、日清戦争終結から１２０年、日露戦争終結から１１０年、そして大東亜戦争の終戦から７０年の節目の年でもあります。「鎮西は治国の基本」と言われて来ましたが、有史以来我が国の平和と独立の最前線として重要な役割を担ってきた「鎮西」の伝統と精神を継承する西部方面隊の役割は、これから一層大きくなっていくことと確信致します。この創隊６０周年を節目として益々発展されることを祈念してやみません。

方面隊創隊６０周年記念行事「観閲式」観閲官式辞（平成２８年１月７日）
第３６代　西部方面総監　小川　清史　陸将（平成２７年８月～平成２９年３月）

すばらしい十月の空のもと、本日ここに、九州・沖縄地区防衛協会連絡協議会会長 蒲島郁夫 熊本県知事、衆参両院の多数の国会議員の先生方を始め、在福岡米国領事館首席領事、在日米陸軍の代表者の皆様等、先程ご紹介させて頂きました部内外からの多数のご来賓のご臨席を賜り、また、多くの市民の皆様の御来場をいただき、西部方面隊創隊六十周年記念式典を挙行できますことは、我々全隊員にとりまして、この上ない慶びとするところであります。

さて、ご来場の皆様、西部方面隊は、昭和三十年に創隊し、昭和三十一年二月この健軍の地へ移駐以来、幾多の変遷を経て、多様な役割に即応し任務を完遂してまいりました。そして今年度、六十周年の節目を迎えることとなりました。これもひとえに、九州・沖縄各県民の皆様のご理解とご協力、そして歴代方面総監を始めとする諸先輩方、並びに職務遂行中に志半ばにして殉職された隊員の一方ならぬご努力の賜と、厚く御礼を申し上げます。

我が国を取り巻く安全保障環境は、様々な課題や不安定要因がより顕在化・先鋭化してきており、一層厳しさをましております。

西部方面隊は、今こそ陸海空自衛隊の統合運用態勢の下、海上及び航空自衛隊との緊密な連携を図り、各種統合・日米共同訓練をはじめ、各種災害対処を想定した防災訓練を実施し、各自治体、公共機関等との連携を深めております。

また、本年四月からは南スーダン国連ＰＫＯ第八次要員の主力として約三百五十名の隊員を派遣しております。

今後とも国家国民の皆様の負託に応えるため全身全霊をもって職務に邁進致します。

さて、隊員諸官、我々は、この時代、この西方の地において、同じ崇高な使命を持ち、この素晴らしい日本において、国民の生命・財産と領土・領海・領空を断固として守る「最後の砦」としてその任務を完遂しなければならない。我々は、今、陸上自衛隊創隊以来の大改革に取り組んでいる。

しかし、臆してはならない。我々は、部隊の一員であるとともに、守るべき「大切な家族」があり、支えてくれる親、兄弟、妻、子がいる。そして応援してくださる、地域の方々がいる。諸官には、これまで培ってきた実力がある。

隊員諸官の鍛えぬいた技術及び精神力は日本にとって大変貴重な財産である。

このかけがえのない諸官の貴重な人材という財産を、みんなが大切にして、私をはじめ各部隊の指揮官は、厳しい任務に対して、より一層高いレベルへと実力を引き上げなければならない。

そして、隊員諸官一人一人も自分を大切にし、より高いレベル、より高い練度を身に付けるべく努力してもらいたい。その結果、我々はより強い部隊になる。強い部隊になれば、隙がなくなり、これがより一層強い抑止力となるのである。それによって、家族や国民を守る事が出来る。家族や地域の皆様の応援を力にしてより厳しい任務に対して、自分のレベルを上げることによって、 部隊を強くし、日本の防衛態勢を強くしていくことが出来る。更には万が一事態が生起した時には、その高いレベルで早期に事態を収拾することが出来ることになり、より確実、着実に任務を完遂することが出来るのである。共に頑張ろう。

再度、御来場の皆様に、申し上げます。今後とも、より一層の応援とご理解をいただくべく、皆様からの信頼と期待とを誇りとし、常に胸に刻み、常に意識し、上司や同僚、海空自衛隊、そして米軍と一体となり、冷静に勝ちに導くべく着実にその任務遂行に邁進します。 そして幾多の先輩方が築かれた輝かしい伝統をしっかりと継承し、未来へと繋げることを、西部方面隊の創隊六十周年の記念の日にあたり、方面隊の全隊員を代表し、お誓い致します。

結びに当たり、本日ご臨席を賜りました皆様に、重ねて厚く御礼申し上げますとともに、今後益々の御健勝、御多幸を心から折念致しまして、式辞と致します。

方面隊創隊６２周年記念行事「観閲式」観閲官式辞（平成２９年１０月１日）
第３７代　西部方面総監　湯浅　悟郎　陸将（平成２９年８月～平成３１年３月）

式辞に先立ち、本年７月に発生した九州北部豪雨により尊い命を失われた方々とご遺族の皆様に改めて深い哀悼の意を表します。

さて、本日ここに、九州・沖縄地区防衛協会連絡協議会会長 蒲島郁夫 熊本県知事、国会議員の皆様を始め、部内外から多数のご来賓のご臨席を賜り、また、多くの市民の皆様に御来場いただき、西部方面隊創隊６２周年記念式典を挙行できますことは、我々全隊員にとりまして、この上ない慶びとするところであります。

西部方面隊は昭和３０年に創隊し、昭和３１年２月、この健軍の地へ移駐して以来、幾多の変遷を経て、本年度で６２周年を迎えることができました。

これもひとえに、九州・沖縄各県民の皆様のご理解とご協力、そして歴代方面総監をはじめとする諸先輩方のご尽力の賜物と、厚く御礼を申し上げます。

皆様ご承知のとおり、我が国を取り巻く安全保障環境は、周辺国の軍事力近代化や活動活発化が非常に顕著である上、北朝鮮による度重なる軍事的挑発もあり、情勢は、冷戦終結以降、最も厳しいと認識しております。

また、国内では、大きな被害をもたらす災害が発生し、また、南海トラフ大地震等の発生が予想されるなど、様々な事態への即応態勢が必要とされています。

このような厳しい認識の下、情勢の変化に的確に対応するため、陸上自衛隊及び西部方面隊は創隊以来の大改革を実施しているところであります。

本年度末には陸上総隊が新編され、その一元的な指揮の下、方面隊以下の実効的な運用態勢の構築が図られています。また、同時に、西部方面隊においては水陸機動団が新編される他、師団の改編等が予定されており、これらの戦力化のため、既に要員の養成や訓練等に着手しております。

更には、陸上自衛隊配備の空白地帯であった南西地区への部隊配備にあたっては、昨年、与那国駐屯地を開設したほか、奄美大島等における駐屯地の開設準備を進めており、紛争を抑止する態勢を着実に構築しているところです。

また、これらの改革に並行して、部隊の能力向上のための厳しい訓練を日々実施していることは勿論のこと、海上及び航空自衛隊と緊密に連携した各種統合訓練や、様々な日米共同訓練、そして防災訓練などを通じ、多様な任務に即応できる実力を練成するとともに、地域や自治体との連携強化にも努めているところであります。

このような様々な取り組みが、我が国の平和と独立を守り、国民の生命・財産を守るという我々の使命に直結すると考えており、今後ともしっかりと推進してまいります。

さて、隊員諸官、着任時にも述べたとおり、我々自衛隊は、行動をもって使命を達成する唯一の国の機関であり、国家・国民を守る最後の砦である。どんな過酷な状況でも行動して作戦を遂行し、任務を達成できる実力なくしては、我々の存在意義はない。

私は、国民から与えられた重い使命を常に念頭に置きつつ、「作戦集団としての実力向上」を統率方針として職務に取り組む所存である。

諸官らも、我々が、どのような状況であっても任務を達成しうる「戦う集団」であることを肝に銘じ、作戦集団としての実力を養うことに執念をもって取り組んでもらいたい。

また、我々が、地域の皆様の信頼と協力なくしては作戦を遂行できないことを深く認識してもらいたい。今後とも、自治体や地域の皆様と密接に連携するとともに、信頼に足る存在となるべく不断の努力を継続することを強く要望する。

ご来場の皆様、自衛隊員は、鍛え抜かれた精神と肉体を持ち、他人の幸せを自らの幸せと感じることのできる「真の強さ、逞しさ、優しさ」をもった素晴らしい集団であると思っております。

我々は、そのことに誇りを持ちつつ、皆様に信頼され期待される存在となるべく日々努力し、国民から与えられた使命達成に全力を尽くす所存でありますので、今後ともより一層のご支援・ご協力の程お願い申し上げます。

結びにあたり、本日ご臨席を賜りました皆様に、重ねて厚く御礼申し上げますとともに、今後益々の御健勝・御多幸を心から祈念致しまして、式辞とします。

方面隊創隊６４周年記念行事「観閲式」観閲官式辞（令和元年９月２９日）
第３８代　西部方面総監　本松　敬史　陸将（平成３１年４月～令和２年８月）

式辞に先立ち、今年５月の屋久島・口永良部、６月末から７月にかけての九州南部、８月の九州北部において発生した豪雨災害等において、被災された皆様に対し、心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地域の早期の復旧・復興をご祈念申し上げます。

さて、本日ここに、九州・沖縄地区防衛協会連絡協議会会長 蒲島 郁夫 熊本県知事、国会議員の皆様を始め、部内外から多数のご来賓のご臨席を賜り、また、多くの市民の皆様に御来場いただき、「令和元年西部方面隊記念式典」をかくも盛大に挙行できますことは、我々西部方面隊全隊員にとりまして、この上ない慶びとするところであります。

西部方面隊は昭和３０年に創隊し、昭和３１年２月、この健軍の地へ移駐して以来、幾多の変遷を経て、新元号「令和」の幕開けに際し、ここに創隊６４周年を迎えることができました。

これもひとえに、九州・沖縄８個県民の皆様のご理解とご協力、そして歴代方面総監をはじめ、 本日ご臨席を賜っております山下熊本県隊友会長他、各県隊友会ＯＢ各位のご尽力の賜物と厚く御礼を申し上げます。

皆様ご承知のとおり、我が国を取り巻く安全保障環境は、周辺国の軍事力近代化や活動活発化が非常に顕著であります。特に中国による海洋進出の拡大、北朝鮮による核・弾道ミサイルの開発は３回の米朝首脳会談が行われたものの依然として不透明であり、さらには宇宙・サイバー・電磁波といった新たな脅威も多様化・深刻化するなど、情勢は、冷戦終結以降、最も厳しいと認識しております。西部方面隊は朝鮮半島及び尖閣諸島を含む南西域の２つの戦略正面を有しており、その情勢から目が離せません。

国内では、全国的に自然災害等が頻発する中、西部方面隊は、４月の宮古島における廃油除去活動を行うとともに、５月の屋久島・口永良部、６月末から７月にかけての九州南部、８月の九州北部において発生した豪雨災害に対し、西部方面隊は、海・空自衛隊と協力して、被災された皆様に寄添い、現地において黙々とその対応にあたりました。また、引き続き南海トラフ大地震等の発生が予想されるなど、様々な事態への即応態勢を確立していく必要があります。

このような厳しい情勢認識の下、昨年度策定された「防衛計画の大綱」等に示された、「多次元統合防衛力」の構築のため、西部方面隊は様々な改革を実施しているところであります。

本年３月には、第４師団の「地域配備師団」への改編を行うとともに、陸上自衛隊配備の空白地帯であった奄美大島及び宮古島に駐屯地を新たに開設し、来年３月には宮古島駐屯地へ「地対艦ミサイル部隊」及び「高射ミサイル部隊」を配置して、「抑止態勢」を着実に強化しているところです。

また、日々部隊の能力向上のための厳しい訓練を実施していることは勿論のこと、海上及び航空自衛隊と緊密に連携した各種「統合訓練」や、「領域横断作戦」を含む様々な「日米共同訓練」、そして「防災訓練」などを通じ、多様な任務に即応できる実力を錬成するとともに、地域や「自治体との連携強化」にも努めているところであります。

さて、隊員諸官、我々自衛隊は、国民の生命と財産を守るため存在し、武器の保有を公に認められた組織である。その「自覚」と「誇り」を堅持しつつ、「任務」を全ての基本とし、あらゆる隊務を通じ、任務遂行能力の向上を目指すことが我々に課せられた「使命」である。

諸官らは、鎮西・南西の防人、すなわちプロフェッショナルとして、古くから最強の兵（つわもの）と称された防人のＤＮＡを受け継ぐものとして恥じない「プロ意識」と「技術」を日々練磨してもらいたい。

また、我々が、地域の皆様の信頼と協力なくしては任務を遂行できないことを今一度深く認識してもらいたい。西部方面隊は九州・沖縄の８個県民、約１４５０万人の生命と財産を守る組織である。隊員諸官が常に九州・沖縄県民の皆様に思いを致し、信頼に足る存在となるべく日々の隊務を遂行することを強く要望する。

ご来場の皆様、新元号「令和」は、万葉集の出典で、麗しき日本の「和」の精神を表していると言われておりますが、我々の組織が大事にしている「礼節を重んじ、和を尊ぶ」にも通じているところがあり、まさに自衛隊に相応しい元号であると思います。

我々は、そのことに誇りを持ちつつ、「明朗開達、風通し良く、かつ厳しい任務も淡々と遂行しうる凄みのある方面隊」を創造すべく全力で取り組んで参る所存であります。また、本日ご臨席を賜りました蒲島熊本県知事の県政で行われている「熊本地震からの創造的復興」についても、 西部方面隊として引き続き協力をして参りますので、今後とも西部方面隊に対するより一層のご支援・ご協力の程お願い申し上げます。

結びにあたり、本日ご臨席を賜りました皆様に、重ねて厚く御礼申し上げますとともに、今後益々の御健勝・御多幸を心から祈念致しまして、式辞とします。

年頭の辞（令和３年１月１４日）

第３９代　西部方面総監　竹本　竜司　陸将（令和２年８月～令和５年３月）

西部方面隊の隊員諸官、新年あけましておめでとう。

隊員諸官及びご家族におかれては心新たに輝かしい新年を迎えられたことと思う。

はじめに年末年始を通じ、各駐屯地における警備任務及び即応態勢のための各種待機任務、与那国島・宮古島・奄美大島及び対馬の島嶼部における警戒監視任務並びに鳥インフルエンザ災害派遣、緊急患者空輸や不発弾処理任務、またコロナ対応に従事した隊員諸官の献身的な任務遂行に感謝する。

昨年は、防衛警備等の各種事態に対応しつつ、鎮西演習・ＫＳ・ＹＳ等の統合及び日米共同訓練等を通じて領域横断作戦の実効性向上に努めてきた。

また世界的なパンデミックとなった新型コロナウイルスの感染拡大や自然災害等が猛威をふるうなか、沖縄における豚熱対応、新型コロナウイルスに関連しては帰国邦人の救援、各自治体への教育支援、長崎県クルーズ船医療支援、離島の感染者空輸、沖縄の医療体制支援等多様な任務に対応するとともに、コロナ禍の複合事態対応として令和２年７月豪雨、台風１０号離島住民避難支援、福岡・宮崎鳥インフルエンザ対応、年間１００件以上にわたる緊急患者空輸等の災害派遣及び年間３００件以上にわたる不発弾処理の全任務において一人のコロナ感染者も出さず高い使命感により的確に任務を完遂した。

これは、ひとえに総監要望事項である「任務完遂、使命を自覚せよ」を各級指揮官、隊員諸官が各々自らの使命を自覚し、高い使命感をもって愚直に職務に取り組んできた証左であり、隊員諸官ひとりひとりの真摯な姿勢とそれらを支えていただいた御家族のご理解や地域の皆様のご支援ご協力に対し改めて深く感謝申し上げたい。

さて我が国を取り巻く安全保障環境は極めて速い速度で厳しさと不確実性が増大するとともに、コロナ禍においてその状況はより顕在化し、南西、朝鮮半島の戦略２正面と直接対峙する西部方面隊の重要性は益々増大している。

言い換えれば西部方面隊は我が国における「抑止・対処の主体」であり、我々に期待される役割は「グレーゾーン事態への適切な対処」及び「領域横断作戦の実効性向上」である。特に南西正面を抱える西部方面隊の戦略環境は既にグレーゾーン事態の渦中にあるといっても過言ではない。

このため、私も自らの使命を自覚して、厳しい任務を完遂できる方面隊、すなわち「戦いに勝てる強靭かつ健全な西部方面隊」を創り上げるべく、教育訓練に、体制移行に、各種計画の実効性向上に、作戦基盤整備等に全身全霊をもって職責を果たす覚悟である。

隊員諸官においても各級指揮官を核心に「戦いに勝てる強靭かつ健全な部隊」を目指し、事態に即応し、衝撃力を絶やすことなく任務を完遂すべく飽くなき執念をもって隊務運営に取り組んでもらいたい。

我々西部方面隊は、鎮西・南西の防人として創隊６５年の輝かしい歴史を刻んでいるが、九州・沖縄８県の防衛警備、災害派遣に対する西部方面隊の責務は不変である一方、刻々と変化する情勢へ的確に対応することも求められている。進化論で有名な生物学者ダーウィンは「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き残るのでもない。唯一生き残ることができるのは、変化出来る者である。」と述べている。

コロナ禍においても益々厳しくなる安全保障環境において、我々西部方面隊の隊員ひとりひとりが自らの使命を自覚し主導性をもって「変えるべきは変え、守るべきは守る。」との『不易流行』を忘れず、我々が日本防衛の抑止・対処の主体であることを改めて肝に銘じ、西部方面隊の一員として厳しい訓練に挑みかつ常に変化に適合する戦い方を考え抜いて深化し、より強靭で健全な勝てる方面隊を創造し続けなければならない。これまで西部方面隊が積み上げた成果を基礎とし「不易流行」を忘れず、足腰の強い強靭で健全な部隊・隊員を目指し、「万事作戦」の気概をもって練磨に励み、周囲に対する「感謝信頼」の心を忘れず、「地域連携」で郷土の皆様と密接に協力して、あらゆる事態に任務完遂できる「戦いに勝てる強靭かつ健全な西部方面隊」を目指し進んでいこう。

私も諸官の先頭に立って使命を自覚し『責務の完遂』に努める所存である。

最後に、西部方面隊の全隊員、そして御家族にとって本年が希望に満ち溢れ、輝かしい年になることを心より祈念し年頭の辞とする。

『任務完遂、使命を自覚せよ！」

以上終わり

着任の辞（令和５年４月３日）
第４０代　西部方面総監　山根　寿一　陸将（令和５年３月～令和６年３月

３月３０日付で第４０代西部方面総監として着任した山根陸将である。

歴史上も、また、今、この時においても、国防の最前線であるここ九州・沖縄の地において、方面総監として勤務できることを心から誇りに思う。

さて、皆も知ってのとおり、昨年12月、日本国政府は国家安全保障戦略、国家防衛戦略、防衛力整備計画という３つの文書、いわゆる「戦略３文書」を策定した。この中で示されたのは「我が国の防衛力を抜本的に強化する」との大方針であり、その意味するところは、我が国を取り巻く安全保障環境が戦後最も厳しいという圧倒的な危機感である。防衛力の抜本的強化は確実に進めなければならない。そのための予算的裏付けも既に与えられていると認識している。そして、この抜本的強化の焦点の一つが、西部方面隊の責任地域である、ここ九州・沖縄地方の防衛にあることに疑う余地はない。

このため、方面総監として全部隊・全隊員に対して「強化促進」を要望したい。西部方面隊がその力を強化していくことそのものが、我が国の防衛力を強化することに直結することをまずは再認識してもらいたい。そして、この強化を進めていくにあたり三つの目標を示したい。

その一つは「実力の進化」である。これまでの演習や訓練の積み重ねにより、西部方面隊が既にかなりの実力を備えていることは承知している。今後はこれを更に進化し、より現実的なものにしていくことを要望したい。私は今後の防衛力は実際的であり、実効的であり、そして実証的でなければならないと考えている。その目指すものは「真に戦える力」であり、事に悩んで「確実に発揮される力」である。我々の実力に“机上の空論”などあってはならない。真の意味でのリアリティーを追求すべく、引き続き全部隊・全隊員の努力を期待する。

二つ目は「地域の理解」である。これには二つの側面がある。一つは地域を理解すること、そしてもう一つは地域に理解していただくことである。皆も知ってのとおり、陸上自衛隊の活動する場所は地面の上であり、そこには日本国民とその生活がある。したがって我々が活動するに際して「地域の理解」が必要不可欠であることは言うまでもない。しかしながら、約３年に渡るコロナ禍の影響は致命的であり、地域との繋がりは限りなく薄くなってしまったと理解している。 改めて地域を理解し、そして地域から理解される。この関係を再構築していくことが「強化促進」 をより盤石なものにしてくれる。ただし、その道のりは決して簡単なものではなく、長い年月をかけて一歩ずつ進めていかなければならない。地域との関係を再び取り戻すべく、全部隊・全隊員の挑戦を期待する。

三つ目は「個人の尊重」である。これは現代に生きる我々だからこそ達成しなければならない目標である。昨年から今に至るまで陸上自衛隊はハラスメントの発生に揺れている。いくら自衛隊が命令と服従により律される組織だとしても、個人の尊厳を踏みにじることは決して許されない。ハラスメントの撲滅を期するためにもまずは個人を尊重する精神を持ってほしい。そしてもう一つ、ワーク・ライフ・バランスの実践においても、個人の尊重は大きな柱である。ワーク、 すなわち「仕事の充実」のみならず、ライフ、すなわち「生活の充実」を実現していくためには、 組織としての要求に偏ることなく、個人の望みを最大限にかなえていく姿勢が肝心である。「個人の尊重」は一見「強化促進」からかけ離れているように思えるかもしれないが、これが達成できてこそ組織は健全であると言える。実力に加え、健全さも併せ持つ、真に強化された部隊を目指し、全部隊・全隊員の精進を期待する。

以上、要望事項として「強化促進」を、３つの目標として「実力の進化」、「地域の理解」、「 個人の尊重」を示したが、我々はこれらをすさまじい変化の中で達成していかなければならない。防衛力整備計画によれば、「我が国への侵攻に際して、概ね５年程度で、我が国が主たる責任をもって阻止・排除し得る防衛力を、概ね１０年程度で、努めて早期かつ遠方で阻止・排除し得る防衛力を構築する」となっている。これはすなわち、これまでにないスピードで様々な装備が入り、 防衛関連施設が構築され、そして米国や同志国との関係が日々強化されることを意味しており、 陸上自衛隊、そして西部方面隊にとっての環境の変化は経験したことのない速さで進展すると予想される。しかしながら、西部方面隊は我が国防衛の第一線方面隊として、その変化に対応しつつ、強化を促進していかなければならない。我々自身の強化がひいては、我が国防衛力全体の強化につながることを肝に銘じ、変化し続ける日々の隊務に励んでほしい。 九州・沖縄地方の、そして日本国の平和と独立を守るために、ともに頑張っていこう。

方面隊創隊６９周年記念行事「観閲式」観閲官式辞（令和７年３月２日）
第４１代　西部方面総監　荒井　正芳　陸将（令和６年３月～令和７年８月）

本日ここに、九州・沖縄地区防衛協会連絡協議会会長　熊本県知事　木村　敬（たかし）様をはじめ、多数のご来賓のご臨席を賜り、また、多くの地域の皆様にご来場いただき、西部方面隊創隊６９周年記念式典を挙行できますことは、我々西部方面隊全隊員にとりまして、この上ない慶びであります。

御来場の皆様方、西部方面隊は、昭和３０年の創隊以来、九州・沖縄地域の皆様のご理解とご協力、そして歴代方面総監をはじめとする諸先輩方のご尽力により、我が国防衛等の使命を果たしてまいりました。

しかしながら、近年、我が国周辺の情勢は悪化の一途を辿り、国内においては南海トラフ巨大地震等発生の蓋然性の高まりも相まって、我が国は、戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面しております。

このような厳しい安全保障環境に対応するため、令和４年１２月に策定された国家安全保障戦略等の、いわゆる「安保関連３文書」に基づき、西部方面隊においても、南西諸島をはじめとする九州・沖縄地域の防衛体制の強化を図っているところであります。

こうした取り組みは、我が国の強固な防衛意思を示すものでもあり、部隊の新編等を着実に推進するとともに、統合訓練や日米共同訓練をはじめとする各種訓練を積み重ねることにより高い抑止力・対処力を維持・向上させ、更には、災害派遣等の任務を着実に遂行することにより、地域の皆様の安全・安心の確保に努めているところです。

西部方面隊の隊員諸官、今述べた通り、現在の国内外情勢に鑑み、全隊員が切迫した危機感を保持しつつ、九州・沖縄の防衛警備・災害派遣等を担任し、１４００万人の皆様の生命・財産と国土を守るという崇高な使命を、今まで以上に自覚しなければならない。隊員諸官はそれぞれの役割をしっかりと果せるよう努力してもらいたい。

「西の守りは日本の守り」。

本職着任以来、様々な場面で述べているが、これを具現すべく「強靭な西部方面隊の創造」を目指し、諸官の先頭に立って、一意専心、精励する。

御来場の皆様、ただいま申し述べた通り、西部方面隊の使命の完遂に向け、全隊員が精励努力することを誓います。引き続き、部隊、隊員とその家族に対しまして、これまでと変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びにあたり、本日ご臨席・ご来場を賜りました皆様に重ねて厚く御礼申し上げ、式辞とします。

西部方面隊部隊等配置図

西部方面隊は、主に九州地方・沖縄県で防衛警備や災害派遣等を行っています。

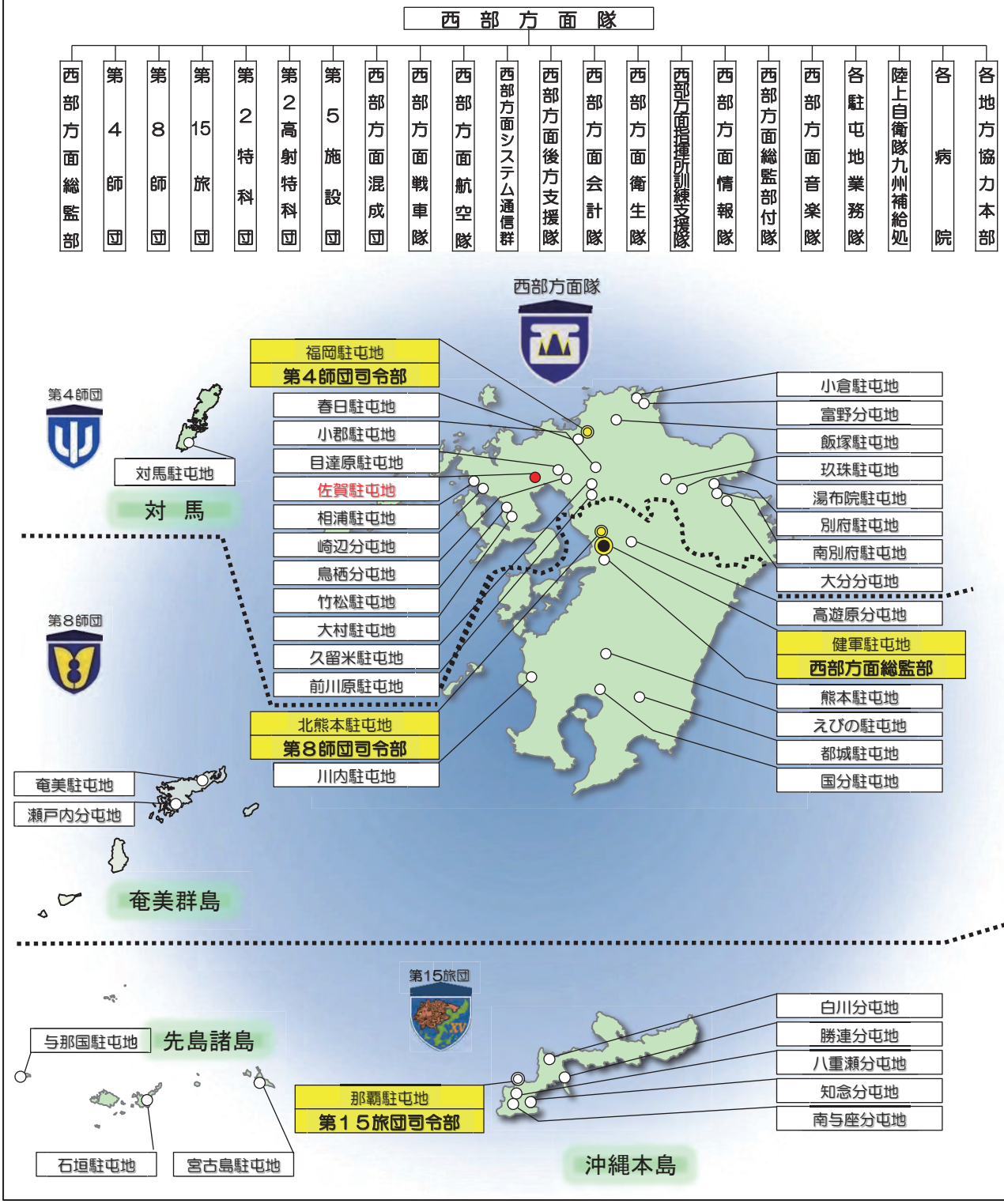
1955年（昭和30年）12月に福岡駐屯地に総監部を編成し方面隊の基盤を確立、翌年1月に創隊し、総監部は同年2月に健軍駐屯地に移駐しました。その後、1962年（昭和37年）に、第4管区隊が第4師団に、第8混成団が第8師団に改編され、2010年（平成22年）に第15旅団が新編されました。

2026年（令和8年）現在は、第4師団、第8師団及び第15旅団を基幹とし、29個の駐屯地、11個の分屯地、8個の自衛隊地方協力本部が配置されています。

西部方面隊の編成

西部方面隊の主要部隊

凡例 ◉：方面総監部所在地　◎：師団・旅団司令部所在地　○：各部隊所在地
赤字：令和7年度の主要な新・改編、移駐の部隊等



西部方面総監部歴代補職

西部方面総監部歴代補職等

役職＼年	昭和30年	昭和31年	昭和32年	昭和33年
方面総監	陸将　松谷　誠		陸将　池野　清躬	
副総監	将補　桜　義雄	将補　馬場　正義		
幕僚長	1佐　加藤　昌平	1佐　佐野　常光		
幕僚副長(防衛)				
幕僚副長(行政)				
幕僚幹事	2佐　佐久間　明		2佐　山田　隆生	
業務室長				
第1部長	1佐　水野 幸雄		1佐　北島　善行	
第2部長	1佐　堤　政二		1佐　堤　寛	
第3部長	1佐　藤井　一美			1佐　黒田　彌一郎
第4部長	1佐　三好　鹿雄		1佐　青山　左武郎	
総務課長	1佐　原　誠			
募集課長				
厚生課長	2佐　田辺　登	1部長兼務	2佐　佐久間　明	
法務課長	2佐　筒井　敏明	2佐　田辺　登		
警務課長	2佐　中橋　五郎			
会計課長	2佐　木村　経一			
衛生課長	1佐　武田　貴美			1佐　肱岡　国夫
施設課長	1佐　有利　正			
営繕課長				
武器課長	1佐　古川　尚志	1佐　加藤　芳彦	1佐　伊藤　荘美	
通信課長	1佐　桜井　稔			
補給課長	1佐　瀬間　喬			1佐　緒方　清昭
輸送課長	2佐　吉住　猛			
化学課長	2佐　瀬川　俊雄			
監察課長	1佐　神埼　清			
監察官				

（昭和52年度総監部改編まで）その1

昭和34年	昭和35年	昭和36年	昭和37年
陸将　辻村　義和	陸将　吉橋　戒三		陸将　和田　盛哉
		将補　熊谷　卓次	
将補　田中　兼五郎	将補　国武　輝人		1佐　黒田　彌一郎
1佐　水田　新太郎	1佐　田中　八千男		
1佐　西田　博			
1佐　西田　博	1佐　安元　至誠		
1佐　森川　竹雄	1佐　植田　米蔵		
1佐　成瀬　裕一	1佐　八木　衛		1佐　大平　四年生
1佐　安部　康彦	1佐　成瀬　裕一		
1佐　有利　正	1佐　吉次　俊英		1佐　救仁郷　靖
	1佐　金栗　省吾		
1佐　金栗　省吾	1佐　坂本　一郎		
2佐　伊東　松雄			
2佐　角口　憲基			1佐　川原　規矩夫
		1佐　小林　次男	
	1佐　久保田　哲夫	1佐　福嶋　克己	
			1佐　服部　敏
1佐　井上　元幸		1佐　笹井　周一	
1佐　重松　正人	1佐　厚地　五一		
	1佐　鍛冶　辰一		
1佐　曽良　孝成	1佐　萩平　昌之	1佐　中根　平次	
	1佐　園田　成夫		
1佐　久保田　次良		2佐　宮崎　健次	
2佐　原田　佐		2佐　椿　友祥	
1佐　中山　生藤	1佐　植田　米蔵		
		1佐　羽柴　正一	

西部方面総監部歴代補職等

役職＼年	昭和38年	昭和39年	昭和40年	昭和41年
方面総監	陸将　和田　盛哉		陸将　関口　八太郎	
幕僚長	将補　熊谷　卓次	将補　上妻　正康		
幕僚副長(防衛)	1佐　黒田　彌一郎	将補　齋藤　春義	将補　栂　博	
幕僚副長(行政)	1佐　水野　幸雄		将補　木村　経一	
業務室長	1佐　安元　至誠	1佐 猿渡　篤信	1佐　小林　祥八	1佐　徳武　光雄
第1部長	1佐 植田　米蔵	1佐　箕浦　文雄	1佐　白石　小助	
第2部長	1佐　大平　四年生		1佐　山内　重安	
第3部長	1佐　池田　智仁		1佐　杉山　三郎	
第4部長	1佐 救仁郷　靖	1佐　笠野　繁	1佐　中野子　昇	
総務課長	1佐 金栗 省吾	1佐　小林　静一	1佐　鍋田　實	
募集課長	1佐　坂本　一郎	1佐　中園　嘉市		
厚生課長	2佐 伊藤 松雄	1佐　白石　小助	2佐　隅蔵　秋壽	
法務課長	1佐　川原　規矩夫		1佐　福岡　潤治	
警務課長	1佐　小林　次男	2佐　今別府　義光		
会計課長	1佐　福嶋　克己	1佐　岡本　宗男	1佐　浅野　琢史	
衛生課長	1佐　服部　敏		1佐　浜田　稔雄	
施設課長	1佐　笹井　周一	1佐　坂本　経雄		
営繕課長	2佐　新福　徳造		1佐　村田　和夫	
武器課長	1佐　小沢　彌		1佐　長谷川　勝	
通信課長	2佐　中根　平次	1佐　飯嶋　達	2佐　植原　弘	
補給課長	1佐　鈴木　聖三郎		1佐　菊池　康太	
輸送課長	2佐　宮崎　健次	1佐　渡辺　良一		
化学課長	2佐　椿　友祥	1佐　続　芳雄	2佐　伊藤　俊之助	
監察官	1佐　羽柴　正一	1佐　伊集院　豊		1佐　池之上　貞己

（昭和52年度総監部改編まで）その2

昭和42年	昭和43年	昭和44年	昭和45年
	陸将　荒武　太刀夫		陸将　上妻　正康
将補　古川　義道	将補　竹内　實孝	陸将　山田　積昭	
	将補　木村　元岳		将補　近藤　雅之
将補　竹内　實孝	将補　近藤　清		将補　馬郡　芳郎
	1佐　高橋　良夫	1佐　山本　功	1佐　中山　勉
	1佐　鍋田　實	1佐　中山　政孝	1佐　佐藤　瑞
1佐　坂本　経雄	1佐　平原　一男		1佐　藤本　健市
1佐　増田　護		1佐　朝枝　照英	1佐　佐藤　公平
		1佐　岡田　光作	1佐　亀廣　學
	1佐　加藤　博	1佐　仲山　勉	1佐　梅田　陸善	1佐　北村　不二男
	1佐　日高　靖可		1佐　大石　盤根
	1佐　溝上　嘉幸		1佐　野口　令史
	1佐　近藤　淦男		1佐　下田　耕士
	1佐　村上　浩己		1佐　稲生　廣實
	1佐　川名　守治		1佐　長谷川　硯彌
1佐　高岡　要		1佐　坂田　亮明	
1佐　岡田　光作		1佐　亀廣　學	1佐　村上　勲
	1佐　桑本　百合雄		1佐　橋本　健一
	1佐　大友　正光	1佐　三浦　嘉六	
	1佐　配野　秀一		1佐　塚本　弘満
	1佐　能登路　達郎		1佐　末廣　猛
1佐　市崎　元總			1佐　澤野　純一
			1佐　柳瀬　守
	将補　猿渡　篤信		

西部方面総監部歴代補職等

役職＼年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年
方面総監	陸将　上妻　正康	陸将　堀江　正夫	陸将　中島　直臣	陸将　近藤　清
幕僚長	将補　植松　貞義	将補　緒方　二郎		将補　藤原　幸三郎
幕僚副長(防衛)	将補　大西　啓	将補　藤原　幸三郎	将補　飯山　茂	将補　小岩井　千里
幕僚副長(行政)	将補 馬郡　芳郎	将補　松永　明	将補　鈴木　敏通	
業務室長	1佐　時任　純一郎	1佐　鈴木　七郎	2佐　津江本　豊	
第1部長	1佐　佐藤　瑞	1佐　吉田　知弘	1佐　廣谷　志朗	
第2部長	1佐　藤本　健市	1佐　深町　輝男	1佐　原田　彰彦	
第3部長	1佐　佐藤　公平	1佐　鈴木　敏通	将補　小岩井　千里	1佐　荒木　雄二
第4部長	1佐 亀廣　學	1佐　橋本　健一	1佐　松原　輝男	1佐　六反園　文雄
総務課長	1佐　北村　不二男	1佐　清藤　克己		1佐　大石　盤根
募集課長	1佐　大石　盤根	1佐　松村　重穀		1佐　原　一喜
厚生課長	1佐　野口　令史	1佐　本村　初義		1佐　南　章
法務課長	1佐　下田　耕士		1佐　長瀬　麟六	
警務課長	1佐　稲生　廣實	1佐　上妻　正春		1佐　鎌谷　鐵吾
会計課長	1佐　長谷川　硯彌	1佐　奥井　一郎		1佐　松尾　仁
衛生課長	1佐　坂田　亮明	1佐　中宮　安夫		1佐　吉澤　元吉
施設課長	1佐 村上　勲	1佐　萩原　健一	1佐　西本　正	
営繕課長	1佐 橋本　健一	1佐　池田　大輔	1佐　天日　誠一	
武器課長	1佐　橋本　二郎			
通信課長	1佐　塚本　弘満	1佐　野口　方宏		2佐　松本　米二郎
補給課長	1佐　川崎　節彦		1佐　林原　齊	
輸送課長	1佐　澤野　純一	2佐　深山　達郎		1佐　坂井　俊夫
化学課長	1佐　柳瀬　守	1佐　中村　治		
監察官	将補 猿渡　篤信	1佐　藤木　護	(代) 栗原2佐	1佐　山口　叡	1佐　時任　純一郎
航空室長			1佐 高橋 進	1佐　伊藤　貴雄
予備自衛官室長			2佐 栗原 栄二	2佐 友井田 孝	第1部長兼務	2佐　柿元　清人

（昭和52年度総監部改編まで）その3

昭和50年	昭和51年	昭和52年
	陸将　塚本　勝一	
	将補　山之内　種章	陸将　梅野　文則
将補　荒木　一	将補　渡辺　敬太郎	将補 沖田　裕
将補　小岩井　千里	将補　六反園　文雄	将補　渡辺　敬太郎
1佐　塚本　宏二	1佐　牧村　章	
1佐　浮田　高明		1佐　成重　光國
1佐　米　正七		1佐　大塩　靖郎
1佐　船越　良一		1佐　松浦　愷
	1佐　齋藤　和治	1佐　松崎　徳蔵
	1佐　松村　重穀	1佐　井元　光雄
1佐　松居　智弘	1佐　西　正徳	1佐　新野　晃平
1佐　原田　次郎		1佐　上杉　長一
2佐　山崎　昭平		1佐　石川　憲郁
		1佐　塚由　忠夫
	1佐　岡本　敏之	
1佐　松薗　勉		
1佐　杉之尾　正信		
1佐　諸熊　文雄		1佐　柴田　平次郎
1佐　河野　敬敏	1佐　白垣　博	
	1佐　柿元　清人	
1佐　福永　昭		1佐　野村　吉雄
	2佐　加川　忠之	
1佐　伊藤　文教		
	1佐　品川　幸生	
	1佐　黒瀬　多聞	

西部方面総監部歴代補職等

役職＼年	昭和52年	昭和53年	昭和54年	昭和55年	昭和56年
方面総監	陸将　塚本　勝一	陸将　加藤　誠一	陸将　河津　幸三郎		
幕僚長	陸将　梅野　文則	陸将　林　陽一	陸将　森山　尚男	陸将 六反園　敏男	
幕僚副長(防衛)	将補 渡辺　敬太郎	将補 沖田 裕	将補　福田　達男	将補　増岡　鼎	将補 石井　政雄
幕僚副長(行政)	将補 沖田　裕	将補 福田　達男	将補　小森　昭治	将補 増岡　鼎	将補　石井　政雄	将補 荒木　雄二
総務部長	1佐　井元　光雄		1佐　谷脇　憲司		1佐 黒野　靖衛
総務課長	1佐　牧村　章	1佐　本田　耕一	1佐　桶嶋　來司	1佐　藤中　忠	
法務課長	1佐　石川　憲郁		1佐　山田　弘夫		
会計課長	1佐　岡本　敏之	1佐　寺井　正芳	1佐　竹田　博正		1佐 森田　一雄
広報室長					
人事部長	1佐　成重　光國		1佐　平山　誠	1佐　折原　哲	
人事課長	1佐　小山　隆司		1佐　岩田　貞幸		1佐 瀬戸　昭
募集課長	1佐　新野　晃平		1佐　中島　研司	1佐　友田　忠二	
厚生課長	1佐　上杉　長一		1佐　吉田　豊	1佐　西野　恭平	
援護室長			1佐　田島　義造		
調査部長	1佐　大塩　靖郎		1佐　広瀬　豊彦	1佐　小林 三郎	
調査課長	1佐　原田　宣夫		1佐　良永　百茂壽		1佐 青山　利雄
資料課長	2佐　田中　幸隆		2佐　中嶋　健	1佐　安福　勇次	
防衛部長	1佐　松浦　愷		将補　増岡　鼎	1佐　高木　重男	
防衛課長	1佐　多田　壽美雄			1佐　吉川　郁夫	
訓練課長	1佐　緒方　弘之		1佐　君島　信		1佐 新井　均
陸上連絡官(佐監)				1佐　田中　昇	
陸上連絡官(西空)				1佐　紺屋　恵一	
装備部長	1佐　松崎　徳蔵		1佐　杉山　邦一		
後方運用課長	1佐　樋口　和彦		1佐　眞鍋　旭		1佐 青野　繁
装備課長	1佐　白垣　博		1佐　安達　源	1佐　佐藤　正司	
需品課長	1佐　野村　吉雄		1佐　薙野　俊一		
施設課長	1佐　柴田　平八郎		1佐　笠岡　庸志	1佐　原　善昭	
医務官	1佐　大隅　義裕		1佐　菊谷　勇作		
監察官	1佐　品川　幸生	1佐　田村　十	1佐　中村　昭三郎		1佐 川崎　政美

海上連絡官	
航空連絡官	

（昭和52年度以降）その1

昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年
陸将　村松　榮一	陸将　齋藤　信夫	陸将　新井　道彦	陸将　水澤　博	
陸将　土谷　一郎	陸将　阿達　憲	陸将　宮嵜　文男	将補　水野　智之	
将補 荒木　雄二	将補　久我　幹生	将補 野口　有三	将補　柚木　文夫	将補 重松 恵三 / 将補 吉永　百茂壽
将補 久我　幹生	将補　野口　有三	将補 柚木　文夫	将補　重松　恵三	将補 吉永百茂壽 / 将補 齊野　光浩
1佐　長澤　惇			1佐　小林　繁	
1佐　有馬　峯和		1佐　溝口　濶	1佐　平峯　一郎	
1佐　福島　和哉			1佐　高橋　健一郎	
2佐　真鍋　弘				
1佐　松尾　捷太郎		1佐　堀　東一	1佐　岩下　義喜	
1佐　平井　敏之			1佐　遊橋　洪孝	
1佐　二見　郁男	1佐　橋口　大一		1佐　梅津　治平	
1佐　齋藤　郁夫		1佐　西久保　剛	1佐　佐藤　淳二	
1佐　橋口　大一	1佐　河原　正義		1佐　木ノ下　廣徳	
1佐　亀井　浩太郎			1佐　奈良崎　元	
1佐　茅原　郁生			1佐　藤井　建吉	
1佐　阿部　順治		1佐　小川　武	1佐　山口　秀雄	
1佐　松村　劭	将補　内田　十允		1佐　北島　壽一	
1佐　松田　康成	1佐　濱谷　隆平		1佐　伊藤　寛治	
1佐　北井上　一則		1佐　寺本　典也	1佐　瀬戸熊　矗	
1佐　下鳥　康夫	1佐　武藤　義治		1佐　定宗　義毅	
1佐　梅田　榮二	1佐　大浦　誠哉		1佐　吉村　弘喜	
1佐　関　正憲	1佐　財津　哲雄		1佐　功刀　忠男	
1佐　久行　計全			1佐　齋藤　芳久	
1佐　田中　祥介			1佐　伊原　崇	
1佐　大畑　進		1佐　西村　義司	1佐　吉田　利幸	
1佐　秋山　日出夫			1佐　寺村　昌忠	
		1佐　井野　慶一		
1佐　稲益　正清	1佐　吉田　孝幸		1佐　江籠　三郎	
	2海佐　工藤　芳郎		2海佐 村川　弘司	2海佐 上田　誠也
		2空佐　渡邊　昇		

西部方面総監部歴代補職等

役職＼年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
方面総監	陸将　荒木　雄二		陸将　久我　幹生		陸将　重松　惠三
幕僚長		将補　柚木　文夫	将補　岩田　貞幸	将補　藤原　博	
幕僚副長(防衛)		将補 齊野　光浩	将補 黒柳　彰久	将補 北井上　一則	将補 花岡　正明	将補 田村　鞆利	将補　大北　太一郎
幕僚副長(行政)		将補 黒柳　彰久	将補 北井上　一則	将補 花岡　正明	将補 田村　鞆利	将補 大北　太一郎	将補　藤原　利將
総務部長	1佐　小林　繁	1佐　徳永　文男		1佐　藤尾　秀治	
総務課長	1佐　平峯　一郎	2佐　岡本　博充	1佐　吉村　修一		1佐　眞崎　峰夫
法務課長		2佐　西入　重雄	2佐　中山　信之		2佐　佐藤　英宣
会計課長	1佐　細川　耀市		2佐　金子　哲也		
広報室長					
人事部長		1佐　長池　政彦		1佐　小林　正勝	1佐　山下　登
人事課長	1佐　奥村　修一		1佐　横川　美尊		1佐　森村　正昭
募集課長	1佐　梅津　治平	1佐　中山　英二	1佐　今野　忠彦		
厚生課長	1佐　佐藤　淳二	1佐　堤　可久		1佐　志水　民明	
援護室長	1佐　池松　功浩		1佐　坂梨　元治		1佐　庄山　正氣
調査部長	1佐　奈良崎　元	1佐　臼井　小五郎	1佐　久野　幸則		1佐　熊倉　惟晴
調査課長	1佐　織田　壽雄	1佐　坂梨　元治	1佐　庄島　久信	1佐　錦戸　泰三	
資料課長	1佐　山口　秀雄	1佐　曾根崎　博臣		1佐　田代　興治	
防衛部長		1佐　鈴木　善勝	1佐　山本　勝		1佐　佐山　詔介
防衛課長		1佐　川島　正	1佐　佐野　晃		
訓練課長		1佐　高橋　佳嗣		1佐　木元　寛明	
陸上連絡官(佐監)		1佐　田上　智生	1佐　宮地　守男		2佐　池田　勝宏
陸上連絡官(西空)	1佐　吉村　弘喜	1佐　桐畑　民雄	1佐　森　壽樹		1佐　船木　捷彦
装備部長	1佐　眞鍋　旭	1佐　高山　正義		1佐　森　勝信	
後方運用課長	1佐　齋藤　芳久	1佐　西村　博昭			1佐　松尾　和幸
装備課長		1佐　原武　正	1佐　新上　義昭		1佐　寄田　修
需品課長	1佐　吉田　利幸	2佐　寺田　米三		2佐　洞澤　佳廣	
施設課長	1佐　寺村　昌忠	1佐　宇都宮　昭成		1佐　和田　廣志	
医務官	1佐　井野　慶一		1佐　濱田　寧		
監察官	1佐　江籠　三郎	1佐　財津　哲雄	1佐　井上　陽市		1佐　田上　智生

海上連絡官		2海佐　竹内　信好	2海佐　中藤　光人	
航空連絡官	2空佐　渡辺　昇	2空佐　山田　博		2空佐　伊東　重継

（昭和52年度以降）その2

平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年
陸将　横地　貞		陸将　新井　均	陸将　田村　靭利	
将補　佐々木　英嗣		将補　千田　稔	将補　備後　嘉雄	
将補　藤原　利將	将補　新井　宏		将補　洗　尭	将補　田原　克芳
将補　新井　宏	将補　洗　尭		将補 田原　克芳	将補　菅　博敏
1佐　宮嵜　昭三			1佐　齋藤　四郎	
	1佐 庄島　久信	1佐　吉弘　嘉幸		
			2佐　﨑村　信弘	
2佐　標　光毅		1佐　坂本　眞一	1佐　金子　哲也	
	1佐　川畑　初夫		1佐　松尾　隆二	
	1佐　成田　昌弘		1佐　中原　勇	
		1佐　二宮　五郎		1佐　長島　光雄
1佐　山崎　安男		1佐　緒方　浩二		
	1佐　片山　一儀		1佐　山口　和男	
			1佐　森　三千雄	
	1佐　筧　隆保		1佐　西山　洋	
1佐　宮崎　悟介		1佐　櫨場　芳文		
1佐　庄島　久信	1佐　井田　昌孝			
	1佐　柳澤　壽昭		1佐　橋本　和夫	
1佐　白石　義行		1佐　坂本　恒雄		
1佐　中里　茂			1佐　岩丸　勇	
		2佐　林田　勝		2佐　石田　節
2佐　谷口　日出男			2佐　永吉　賢一	
1佐　織田　壽雄		1佐　大内　恭武		
1佐　籠田　純士			1佐　上田　萬満	
	1佐　北川　実			
1佐　工藤　慎一			2佐　沖田　照彦	
1佐　久保　邦彦			1佐　松隈　英之助	
	1佐　今西　康二			
1佐　佐藤　和美			1佐　津村　隆尋	
2海佐　坂崎　鐵蔵		2海佐　橋本　博		
2空佐　田代　健二郎		2空佐　久我　哲夫		

西部方面総監部歴代補職等

役職＼年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年
方面総監	陸将 田村　鞆利	陸将　樋山　周造	陸将　天野　喜晴	陸将　作道　光夫	
幕僚長		将補　佐山　詔介	将補　藤田　昭治	将補　奈良　暁	
幕僚副長(防衛)		将補　菅　博敏	将補　大久保　博敏	将補 廣瀬　誠	将補　山口　淨秀
幕僚副長(行政)		将補　青木　勉	将補　廣瀬　誠	将補　内田　益次郎	
総務部長	1佐　齋藤　四郎	1佐　須ヶ﨑　了英			1佐　松尾　隆二
総務課長	1佐　吉弘　嘉幸	1佐　福島　卓	1佐　村島　吉則		
法務課長		1佐　今田　清三			1佐　山本　孝一
会計課長	2佐　古賀　利雄	1佐　平田　常善			2佐(1佐) 松尾　剛史
広報室長	1佐　松尾　隆二	1佐　與國　洋			1佐　畊野　一郎
人事部長	1佐 中原　勇	1佐　増田　憲二	1佐　中村　憲一		1佐　土谷　貴史
人事課長	1佐　長島　光雄			1佐　椎葉　辰也	
募集課長		1佐　三里　武久	1佐　河野　裕俊		
厚生課長	1佐 山口　和男	1佐　秦　政寛			1佐　井上　壽
援護室長	1佐 森　三千雄	1佐　松本　純三			
援護業務課長					1佐　久保　雄作
調査部長		1佐　豊島　克治	1佐　大空　俊廣		
調査課長		1佐　松尾　辰藏		1佐　太田　清彦	
資料課長	1佐　竹田　徹		1佐　棗　慶三		1佐　永村　義成
防衛部長	1佐　橋本　和夫	1佐　庄田　豊		1佐　佐藤　修一	
防衛課長	1佐　宮崎　金次	1佐　佐藤　晃章		1佐　淵之上　徹	
訓練課長	1佐 岩丸　勇	1佐　大城　成一郎		1佐　畑中　二郎	
陸上連絡官(佐監)	2佐　石田　節	1佐　福田　文夫			1佐　本田　英昭
陸上連絡官(西空)	2佐　永吉　賢一	1佐　日高　一之	1佐　天登　忠雄		1佐　荒木　正廣
陸上連絡官(南混団)					
装備部長		1佐　行徳　浩志	1佐　武縄　正		
後方運用課長	1佐　田上　正		1佐　高島　誠二		
装備課長	1佐　伊藤　成夫	1佐　関口　健兒		2佐(1佐)　吉田　潔史	
需品課長		1佐　松本　輝昭			2佐(1佐)　鈴木　正春
施設課長		1佐　山下　高憲	1佐　大鶴　英二		1佐　松尾　一
政策補佐官					
医務官	1佐　西川　博	1佐　森戸　卓爾			1佐　安部　正雄
監察官	1佐(将補)　川内　厚生	1佐　新上　義明		1佐　赤松　修三	
法務官					

海上連絡官		2海佐　小堀　嘉昭	2海佐　岩崎　栄智
航空連絡官	2空佐　池澤　正雄		2空佐　森川　洋二
在日米陸軍連絡将校			スティーブン E. スミス少佐

（平成9年度～平成18年度）

平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年
陸将　松川　正昭	陸将　森　勉	陸将　林　直人		
将補　泉　一成	将補　福山　隆	陸将　亀田　津治男	将補 山口　淨秀	
将補　君塚　栄治	将補　関口　泰一	将補　海沼　敏明		
将補　宮島　俊信	将補　安部　隆志	将補　番匠　幸一郎		
1佐　田上　正	1佐　菊池　透	1佐　黒木　三治		
1佐　黒木　三治	1佐　町　喜久男	1佐　緒方　大介		
1佐　林田　和彦	1佐　中川　強			
2佐(1佐)　峯岸　元紀	1佐　松森　直			
1佐　古庄　和裕	2佐(1佐)　出水田　正志			
1佐　田原　昭彦	1佐　伊藤　善寛	1佐　宮本　忠明		
1佐　水嶋　達人	1佐　磯口　益宏	1佐　吉田　賢一郎		
1佐　河野　時彦	1佐　道田　啓一	1佐　大淵　和幸		
2佐(1佐)　原田　博	1佐　日髙　孝一			
1佐　家村　茂美	1佐　尾池　政裕			
1佐　櫨場　芳文	1佐　田上　健吾	1佐　大坪　義彦		
1佐　木上　英輔	1佐　唐箕　直樹			
2佐(1佐)　角田　徹	1佐　重岡　良昭			
1佐　吉田　朋生	1佐　綛村　透			
1佐　西川　公康	1佐　渡部　誠司			
1佐　海田　英昭	1佐　宍戸　勇			
1佐　工藤　秀元	2佐(1佐)　長野　耕治			
1佐　川上　孝一郎	1佐　牧野　兼雄			
			2佐　山本　勝也	
1佐　矢﨑　良博	1佐　小渕　信夫	1佐　溝口　秀盛		
1佐　平岡　正美	1佐　福山　義久			
1佐　平岡　誠司	1佐　堀　弘			
1佐　熊岡　弘志	1佐　安東　龍治			
1佐　藤本　康之	2佐(1佐)　吉田　英紀			
1佐　後藤　達彦	1佐　箱崎　幸也			
1佐　長島　光雄	1佐　名越　高正	1佐　長尾　民穂		
			1佐　桑原　幹夫	
2海佐　大城　伸吉	2海佐　坂崎　靖夫	2海佐　福原　尚道		
2空佐　佐藤　文明	2空佐　菅野　優	2空佐 宮里　憲次		
マイケル D. ワイズ少佐	ジェームス R. ロイ2世 少佐(中佐)	アラン L. ラモス少佐		

西部方面総監部歴代補職等

役職＼年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年
方面総監	陸将　輪倉　昇		陸将　用田　和仁	陸将　木崎　俊造	
幕僚長	将補　安部　隆志		将補　久納　雄二		将補　松尾　幸弘
幕僚副長(防衛)	将補 番匠　幸一郎	将補　海沼　敏明	将補　太田　牧哉	将補 岸川　公彦	将補 岡部　俊哉	将補 高田　克樹	将補 山崎　幸二
幕僚副長(行政)	将補 海沼　敏明	将補　太田　牧哉	将補　岡部　俊哉	将補 岸川 公彦	将補 山崎　幸二	将補 高田　克樹
方面最先任上級曹長		准尉　中川　光			
総務部長	1佐　黒木　三治		1佐　藤田　博久	1佐　池野　秀博	
総務課長	1佐　緒方　大介	1佐　北里　憲生	1佐　佐藤　文章	1佐　後藤　孝	
地域連絡調整室長		1佐　古賀　重行	1佐　青木　広治	1佐　佐野　弘之	
会計課長	2佐(1佐)　郷園　和明		2佐(1佐)　鶴　裕治	2佐(1佐)　永冨　直由	
広報室長	1佐　豊留　廣志		1佐　堀部　勇二		
人事部長	1佐　宮本　忠明	1佐　宇佐美　真	1佐　星指　隆		1佐　眞弓　康次
人事課長	1佐　吉田　賢一郎		1佐　石井　一将	1佐　渡邉　俊明	
募集課長		1佐　藤崎　和巳		1佐　内藤　一利	
厚生課長		1佐　工藤　秀元	1佐　齋藤　賢治	2佐(1佐)　有浦　隆	
援護業務課長		1佐　谷川　拓美	1佐　甲斐　正人		
調査部長		1佐　牧田　嘉己		1佐 伊集院　兼一	
情報部長				1佐　伊集院　兼一	
調査課長	1佐　端　博幸		1佐　須田　道夫		
情報課長				1佐　河津　賢一	
資料課長		2佐 江下　昌徳	2佐　渡邊　健一	2佐　熊本　光洋	
防衛部長	1佐　綛村　透		1佐　川嶋　昌之	1佐　岩村　公史	
防衛課長	1佐　大庭　秀昭		1佐　藤原　修		1佐　惠谷　昇平
訓練課長		1佐　西帶野　輝男	1佐　山根　直樹		1佐 谷口　喜一郎
陸上連絡官(佐監)	1佐　伊藤　直	2佐(1佐)　野中　稔		2佐　豊原　敬三	
陸上連絡官(西空)		2佐(1佐)　谷　俊彦	1佐　出口　憲七	2佐　渡部　哲行	
陸上連絡官(南混団)	2佐　山本　勝也		2佐　長野　伸二	2佐　谷口　雅憲	
陸上連絡官(ⅢMEF)					
陸上連絡官(掃海司)					
装備部長	1佐　溝口　秀盛		1佐　福田　敏	1佐　神原　誠司	
後方運用課長		1佐　三ヶ尻　修一		1佐　吉田　英紀	1佐　清水　均敏
装備課長	2佐(1佐)　日髙　昇			2佐(1佐)　菊池　隆	
需品課長	1佐　安東　龍治		1佐　依田　道男		2佐(1佐) 永野　純一
施設課長	2佐(1佐)　吉田　英紀		2佐(1佐)　神成　健一		
政策補佐官	事務官　多田　拓一郎		事務官　安野　雅義	事務官　岩池　正幸	
医務官	1佐　松枝　康弘			1佐　柴田　浩	
監察官	1佐　長尾　民穂	1佐　椎葉　辰也		1佐　真崎　唯信	1佐　原　圭三
法務官	1佐　桑原　幹夫		1佐　瀧上　浩典	1佐　東　哲男	

海上連絡官		2海佐　白石　有司		2海佐 徳永　康弘
航空連絡官	2空佐　宮里　憲次	2空佐　倉田　宏隆	2空佐　山本　隆祥	
在日米陸軍連絡将校		ネーザンH．レッドベッター少佐	クリストファーE．マーティン少佐	
ⅢMEF連絡将校				

（平成19年度～平成28年度）

平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年
陸将　宮下　寿広		陸将　番匠　幸一郎		陸将　小川　清史
将補　保松　秀次郎		将補 永井　昌弘	将補　金丸　章彦	将補　田中　重伸
将補　原田　智総	将補 野澤 真	将補　吉田　圭秀	将補　河本　宏章	将補　荒井　正芳
将補　野澤　真	将補 原田　智総	将補 河本　宏章	将補 吉田　圭秀	将補 荒井　正芳	将補　青木　伸一
准尉　古田　浩徳		准尉　木村　博臣		
1佐　池田　一敏		1佐　鵜居　正行		1佐　永田　伸二
1佐　今村　浩喜		1佐　林　優		
1佐　池田　博司		1佐　渡邉　茂和	2佐(1佐)　野間　光二	
2佐(1佐)　本田　賴朝				1佐　清水　直樹
1佐　立山　隆一		1佐　一宮　大介	1佐　大塚　陽一	1佐　南野　延寿
		1佐　腰塚　浩貴		1佐　大橋　智
1佐　北島　崇生			1佐　内野　敏紀	
1佐　平田　喜彦		1佐　枇杷　利政		1佐　佐藤　文章
2佐(1佐)　古庄　一広		2佐(1佐)　米良　憲一郎		1佐　首藤　光太郎
1佐　堀部　勇二		1佐　安藤　和幸		1佐　久守　直紀
1佐　須田　道夫		1佐　笠松　誠		1佐　柳田　常泰
1佐　有村　義治	1佐　姫田　良明		1佐　白石　智将	
2佐　戸簾　雅博		1佐 中富　普亮	2佐 川久保　嘉人	2佐　中武　裕嚴
1佐　吉見　隆			1佐　宮本　久徳	
1佐　武隈　康一			1佐　満井　英昭	
1佐　後藤　義之			1佐　大倉　正義	
2佐(1佐)　中村　靖彦		1佐　江下　昌徳		
2佐　平田　弘俊			2佐　小川　隆宏	2佐　有川　浩平
2佐　濵﨑　幸一		2佐　岩原　傑	3佐　渡部　友善	
		3佐　内田　恭裕		3佐　北村　大樹
		3佐　入江　大輔		3佐　村岡　俊之
1佐　吉野　俊二			1佐　源　弘紀	
2佐(1佐)　大村　隆紀		1佐　鶴村　和道		1佐　畠山　義仁
2佐(1佐)　紀平　眞覧		2佐(1佐)　黒川　宙		1佐　刀根　啓太
			2佐(1佐)　伊高　賢	
1佐　渋谷　幹		1佐　長縄　光則		1佐　矢田　浩通
事務官　佐藤　建五				事務官　大原　一郎
1佐　松木　泰憲	1佐　松村　琢也	1佐　川口　雅久	1佐　塗積　司	
1佐　吉永　幸男		1佐　濵﨑　文明		1佐　今村　浩喜
1佐　成澤　幹宏		1佐　村上　茂樹		1佐　近藤　恒史
2海佐　亀濱　盛貴			2海佐 石川　良二	2海佐　有田　勝
2空佐　堀米　浩章		2空佐　上田　光一郎		
ロイドD. オークス大佐	エリックW．ステインブルック少佐			ジャクリーンL．ハーン少佐
	ポールT．バートック少佐			クリストファーC．ニール少佐

西部方面総監部歴代補職等

役職＼年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年(令和元年)	令和2年
方面総監	陸将　小川　清史	陸将　湯浅　悟郎		陸将　本松　敬史	陸将 竹本　竜司
幕僚長	将補　田中　重伸	将補　小瀬　幹雄		将補　橋爪　良友	
幕僚副長(防衛)	将補 荒井　正芳	将補　青木　伸一	将補 田尻　祐介	将補 前島　政樹	将補 平田　隆則	将補　堺　一夫	将補 柳 祐樹	将補 南川 信隆
幕僚副長(行政)	将補 青木　伸一	将補　戒田　重雄	将補　平田　隆則	将補 前島　政樹	将補 堺 一夫	将補　南川　信隆	将補 柳 祐樹
方面最先任上級曹長	准尉　市瀬　竜一			准尉　梅崎　幸晴	
総務部長	1佐　永田　伸二	1佐　生田目　徹	1佐　青井　常治		
総務課長	1佐 林　優	1佐　小野　真嗣		1佐　加藤　恵一	
地域連絡調整室長	1佐 野間　光二	1佐　上薗　誠司	1佐　高田　博文		2佐(1佐)　吉良　隆文
会計課長	1佐　清水　直樹		2佐　伊藤　公裕	2佐 石山　秀一	2佐 荒巻　洋一	2佐 伊藤　公裕	
広報室長	1佐　南野　延寿	1佐　中畑　晶広		1佐　田代　裕久	
人事部長	1佐　大橋　智	1佐　佐藤　洋		1佐　圓林　栄喜	
人事課長	1佐　内野　敏紀	1佐　久守　直紀		1佐　上野　洋介	
募集課長	1佐　佐藤　文章	1佐　梅木　知克			2佐(1佐)　阿比留　孝徳
厚生課長	1佐　首藤　光太郎	1佐　柳田　孝臣		2佐　松田　友宏	
援護業務課長	1佐　久守　直紀	2佐(1佐)　田方　一寿	2佐(1佐)　藤本　正行		
情報部長	1佐　柳田　常秦	1佐　原　雅樹		1佐　佐藤　裕史	
情報課長	1佐 白石　智将	1佐　大坪　宏彰	1佐　茶園　宗武		
資料課長	2佐　中武　裕巖	2佐　棚橋　啓		2佐　豊丸　健	
防衛部長	1佐　宮本　久徳	1佐　垂水　達雄	1佐　坂元　秀明		1佐　佐野　浩司
防衛課長	1佐　満井　英昭	1佐　黒川　修		1佐　遠藤　智明	
訓練課長	1佐　大倉　正義	1佐　梅田　宗法		1佐 豊田　武史	1佐　溝口　光章	1佐 籔森 直樹
陸上連絡官(佐監)	1佐 江下　昌徳	1佐　新村　司	2佐(1佐)　平田　弘俊		2佐　小林　裕人
陸上連絡官(西空)	2佐　有川　浩平	2佐　高木　健次			2佐　上田　啓一
陸上連絡官(南混団)	2佐　渡部　反善	2佐　木村　秀利			2佐　西浦　修一
装備部長	1佐　源　弘紀	1佐　藤丸　幸二			1佐　河合　寿士
後方運用課長	1佐　畠山　義仁	1佐 五日市 弘文	1佐　佐藤　欣央		
装備課長	1佐　刀根　啓太	2佐　武石　政文	2佐　桜木　良文		
需品課長	1佐 伊高　賢	1佐　吉丸　雄一		2佐　植田　靖	
施設課長	1佐　矢田　浩通	1佐　長田　雄一		1佐　山下　拓路	1佐 坂口　誠
政策補佐官	行(一)8　大原　一郎		行(一)8　安藤　誠	行(一)8　池田　正	
医務官	1佐　吉積　司	1佐　中岸　義典	1佐　山本　秦輔		
監察官	1佐　今村　浩喜			1佐　末吉　平興	1佐 佐藤　恒昭
法務官	1佐　近藤　恒史	1佐　田﨑　信夫		1佐　廣田　耕士郎	1佐　坂田　隆

海上連絡官	2海佐　有田　勝		2海佐　竹田　正樹
航空連絡官	2空佐 上田 光一郎	2空佐　正田　浩一	2空佐　佐々野　真
在日米陸軍連絡将校	ジャクリーンL．ハーン少佐		ダグラス・ロック少佐
ⅢMEF連絡将校	クリストファーC. ニール少佐	ジョナサン・ペティバン大尉	ポール・スミス少佐

（平成28年度～令和7年度）

令和3年	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年
		陸将　山根　寿一	陸将　荒井　正芳	陸将 鳥海　誠二
	将補　楠見　晋一	将補　武田　敏裕		将補　佐野　浩司
将補 上野 和士 将補 柳　祐樹	将補　田浦　尚之	将補　北島　一	将補　田中　裕宣 将補 武者　利勝	将補　根本　勉	将補 吉川 徳等
将補 上野　和士	将補　北島　一	将補 田浦 尚之 将補　石原　由尊	将補 根本　勉	将補 吉川　徳等	将補 岡田 豊
准尉　木山　博樹			准尉　阿世賀　伴仁		
	1佐　井上　勝		1佐　佐藤　和之		
	1佐　吉富　博康		1佐　髙橋　圭	1佐　橋　孝朋	
	1佐　柳田　孝臣			2佐　北平　栄二	
2佐　日沖　和三		2佐　池﨑　学	1佐　丸田　裕一郎		
	1佐　井川　三典		1佐　豊原　芳之		
1佐　伊藤　佳哉	1佐　弥頭　親善		1佐　北　大蔵		
1佐　鈴木　諭司		1佐　渡邊　英明		1佐　小石　浩史	
	1佐　大平落　健二		1佐　溝部 保徳		
2佐(1佐)　髙橋 圭			1佐　木場　元大	2佐 鬼塚　崇旬	
1佐　塚本　洋邦		2佐　高坂　邦敏		2佐(1佐)　西浦　修一	
	1佐　野邊　格義		1佐　溝田　繁久		
1佐　溝上　学		1佐　和田　毅	1佐　寺岡　利春		
	2佐　近藤　昭仁		2佐　吉村　健	2佐 森岡　光雄	
1佐　神園　雄一	1佐　山本　雅史	1佐　香川　賢士	1佐　川口　繁	1佐　山﨑　潤	
1佐　髙田　剛一		1佐　湯澤　憲治	1佐　松田　良介		
	1佐　中津　健人		1佐　奥村　啓介	1佐 牧　正人	
	1佐　近藤　貴志		1佐　稲吉　正孝		
		1佐　岩下　悟	2佐　上原　祐二		
		2佐　後藤　信博		1佐　新島　藤夫	
	1佐　菊池　康治			1佐　髙橋　憲司	
1佐　伊藤　弘幸			1佐　今井　健二		
	2佐　荒川　洋一	2佐　金川　和磨		2佐　堀江　道祥	
1佐　鳥越　千尋	2佐　中山　裕介		2佐　泉　良介		
	1佐　川野　敏生		1佐　齋藤　崇	1佐 大坪　健一	
	行(一)8　柴田　秀司			行(一)8　奥村　晃司	
1佐　井上　裕悦		1佐　岩本　慎一郎	1佐　河野　修一	1佐 末永　浩一	
		1佐　小島　茂	1佐　小田島　邦弘		
	1佐　上薗　誠司	1佐　三輪　秦輔		1佐　工藤　健太郎	

	2海佐　平尾　孝志
	2空佐　谷冨　誠一郎
ニコラス・デドミンチ少佐	ブッラドリーD・フッド大尉（少佐）
ジョシュアー・ガイガー少佐	クリス・ネルソン少佐

西部方面隊歴代部隊長

西部方面隊歴代部隊長等

役職＼年	昭和30年	昭和31年	昭和32年	昭和33年
第４師団	第4管区隊			
	陸将　辻村　義和			
第８師団	第8混成団			
	陸将　宮崎　舜一			
第５施設団	第2施設群			
	1佐　重松　正人			
第３教育団	第8・第9・第13・第14新隊員教育隊、第5陸曹教育隊			
	（8新教）　2佐　福山　夏次		2佐　永田　忠雄	
	（9新教）　3佐　松尾　譲	3佐　藤田　英史		
	（13新教）　3佐　北窪　正直			
	（14新教）　3佐　中川　雅雄			3佐　畝原　保
	（5曹教）　2佐　野村　勝見		1佐　舟津　円之助	
第３特科群	1佐　山名　逸郎			
西部方面航空隊	第4航空隊	西部方面航空隊		
	3佐　広瀬　満	2佐　谷口　正義		
西部方面通信群	第102方面通信大隊、第104固定通信大隊（方面配属部隊）			
	（102）　2佐　森田　一雄	2佐　藤田　久之		
	（104）　2佐　萩平　昌之			
西部方面武器隊	第107武器隊			
	2佐　池上　俊	2佐　渡辺　亀雄	2佐　山田　忠雄	
第３０７輸送中隊	1尉　大山　二男		1尉　岐部　虎喜	
西部方面調査隊	調査隊第4管区隊分遣隊	調査隊西部方面分遣隊		
	3佐　齋藤　稔	3佐　佐藤　宏幸		
西部方面会計隊	2佐　岩田　忠知		3佐　末次　恒行	
第３０３保安中隊				3佐　園村　新三
西部方面総監部付隊	西部方面総監部付中隊			
	3佐　賀川　昇			
西部方面音楽隊				
九州地区補給隊	将補　馬場　政義	将補　加藤　昌平		将補　野嵜　一二
福岡地区病院	1佐　平野　謙次郎			
熊本地区病院	針尾地区病院		熊本地区病院	
	2佐　筒井　康彦		1佐　高木　達郎	
福岡地方連絡部		2佐　筒井　敏明	1海佐　久保　清	
佐賀地方連絡部		2佐　直﨑　潔		1佐　坂本　一郎
長崎地方連絡部	2佐　飛永　重壽		2佐　山田　粂夫	2佐　古澤　康
熊本地方連絡部		事務官　中島　清		
大分地方連絡部	2佐　梅津　八郎		2佐　植山　正弘	1佐　一水　伝
宮崎地方連絡部	2佐　佐藤　竹雄			
鹿児島地方連絡部	2佐　岡野　寛次	1海佐　折田　善次	1佐　金栗　省吾	
福岡駐屯地業務隊	1佐　金栗　省吾		1佐　木下　西舟	2佐　樋口　欣二
小倉駐屯地業務隊		2佐　伊藤　卓郎		2佐　服部　公相
小郡駐屯地業務隊	2佐　田中　賢哉		3佐　永吉　壽男	3佐　富永　文夫
久留米駐屯地業務隊	2佐　御厨　輝夫	2佐　馬場　開蔵	2佐　山内　忠温	
相浦駐屯地業務隊	2佐　吉田　良雄			
大村駐屯地業務隊	2佐　羽柴　正一	2佐　土橋　勝郎		
竹松駐屯地業務隊	3佐　前村　稜威夫		3佐　松坂　作蔵	
健軍駐屯地業務隊	3佐　篠塚　盛雄	1佐　鳥越　定一		2佐　淀川　末高
北熊本駐屯地業務隊		2佐　山田　粂夫	2佐　飛永　重壽	2佐　阿部　元
別府駐屯地業務隊			1佐　佐藤　公夫	2佐　隈元　茂
湯布院駐屯地業務隊		3佐　日高　定光		
玖珠駐屯地業務隊			3佐　赤羽　壽	3佐　立川　論
都城駐屯地業務隊	3佐　松永　三郎	3佐　松尾　譲		3佐　後藤　勝善
国分駐屯地業務隊	2佐　阿部　稔	2佐　岡野　寛次		2佐　鈴木　俊男

（昭和30年～38年）

昭和34年	昭和35年	昭和36年	昭和37年	昭和38年
			第4師団	
	陸将　池上　巖	陸将　竹下　正彦		
			第8師団	
陸将　平井　重文		陸将　塚本　政登士		
		第5施設団		
	1佐　安部　鞆一	1佐　井上　元幸		
	第3教育団			
3佐　小佐　野亘	陸将　中山　忠雄			陸将　豊島　俊夫
	1佐　中川　勇		1佐　森村　礼司	
	2佐　山口　義輔		2佐　野村　浩三	
	西部方面通信隊			
	1佐　萩平　昌之	1佐　中根　平次	1佐　志村　良雄	
				西部方面武器隊
	2佐　尾田　茂		2佐　竹内　孝弟	
				3佐　重松　翠
	西部方面調査隊			
	3佐　伊豆丸　環		2佐　高田　正武	
2佐　本田　保一	2佐　久保田　哲夫	2佐　五十嵐　敏夫		2佐　岡本　宗男
		3佐　近藤　允比古		3佐　広田　稔
			西部方面総監部付隊	
	1尉　吉鶴　利夫		3佐　坪山　成久	
	1尉　玉目　利保			1尉　川橋　又勝
		(代)1佐　金本　康隆	将補　水田　新太郎	1佐　山田　正明
	将補　坪井　正人		将補　村形　友治	
	1佐　中島　弘二	将補　加藤　悠太郎		
	1空佐　宮﨑　正直		1空佐　西村　三郎	1佐　竹内　實孝
	1佐　藤家　和平			1佐　樋口　忠
		1佐　樋口　忠		2海佐　相田　英雄
			空将補　加納　健一	
	1佐　北島　善行		2佐　宗　重彦	1佐　安部　康彦
	1佐　下薗　秀男			1佐　土持　則正
	1海佐　荻原　行友		1海佐　外山　三郎	1佐　宗　重彦
	1佐　小林　忠男		1佐　田中　兼光	1佐　隈蔵　秋壽
	2佐　藤田　英史			2佐　高安　徳三
				3佐　小林　保明
	2佐　春藤　元三			
	2佐　渡辺　進		2佐　甲斐　壽一	2佐　自見　太郎
	2佐　阿部　元		2佐　朝長　實	
	3佐　白男川　道治			3佐　蔵岡　税
	2佐　北野　秀雄			
	2佐　植山　正弘	1佐　吾郷　繁重		1佐　伊東　松雄
			2佐　赤羽　壽	
	2佐　木下　正彦			
	3佐　賀川　昇			
3佐　藤田　英夫	3佐　福山　則通		3佐　川越　明	
	2佐　田中　重綱			2佐　山口　里美

西部方面隊歴代部隊長等

役職＼年	昭和39年	昭和40年	昭和41年	昭和42年
第４師団	陸将　岩越　紳六		陸将　山口　立	
第８師団	陸将　塚本　政登士	陸将　碇井　準三	陸将　荒武　太刀夫	
第１混成団				
第５施設団	1佐　箕村　正道		(代)1佐　鈴木　豊	1佐　小野寺　重三
第３教育団	将補　豊島　俊夫	将補　山田　政次		将補　藤原　環
第３特科群	1佐　桑原　岳		1佐　近藤　嘉奈夫	
西部方面航空隊	2佐　野村　浩三		1佐　高久　久雄	
西部方面通信群	西部方面通信隊			
	1佐　有森　源次			2佐 今田　辰男
西部方面武器隊	2佐　西村　安之			2佐　石橋　雅美
第３０７輸送中隊	3佐　重松　翠	3佐　池口　恵一	1尉　松尾　正信	
西部方面調査隊	西部方面調査隊			
	2佐　野田　道夫			1佐　梅林　學
西部方面会計隊	2佐　浅野　琢史		2佐　川名　守治	
第３０３保安中隊	3佐　清原　勲			
西部方面総監部付隊	3佐　坪山　成久	1尉　吉岡　信之		3佐 松尾　正信
西部方面音楽隊	1尉　米山　博男			1尉 蟻正　晃
九州地区補給処	1佐　山田　正明	将補　前野　荒治		将補　岸　修祐
福岡地区病院	1佐　肱岡　国夫			
熊本地区病院	将補　加藤　悠太郎	将補　天辰　干城		
福岡地方連絡部	1佐　竹内　實孝	1佐　栗原　重厚		
佐賀地方連絡部	1佐　樋口　忠	1佐　八丁　敏臣		1佐　笹井　周一
長崎地方連絡部	2海佐 相田　英雄	1海佐　八巻　悌次	1海佐　道家　康之助	
熊本地方連絡部	空将補　加納　健一	1空佐　草刈　武男	1佐　小川　喜努男	
大分地方連絡部	1佐　安部　康彦	1佐　信吉　治男		1佐　角口　憲基
宮崎地方連絡部	1佐　土持　則正	1佐　小川　喜努男	1空佐　野間　秀太	
鹿児島地方連絡部	1佐　宗　重彦	1佐　新川　龍	1佐　此元　志津範	
福岡駐屯地業務隊	1佐　隅蔵　秋壽	1佐　猿渡　榮次		
小倉駐屯地業務隊	2佐　高安　徳三	2佐　浜本　利兵衛		
飯塚駐屯地業務隊		2佐　高安　徳三		
小郡駐屯地業務隊	3佐　小林　保明	2佐　肥後　水男		
久留米駐屯地業務隊	2佐　春藤　元三	2佐　宇都宮　次夫	2佐　恩田　政義	
相浦駐屯地業務隊	2佐　自見　太郎		2佐　稲富　正弘	
大村駐屯地業務隊	2佐　朝長　實	3佐　高橋　日本		
竹松駐屯地業務隊	3佐　蔵岡　税		3佐　吉村　三良	
健軍駐屯地業務隊	2佐　北野　秀雄	1佐　下園　秀男	2佐　水本　藤夫	1佐 川越　正憲
北熊本駐屯地業務隊	1佐　伊藤　松雄	1佐　福田　茂吉	1佐　月野木　精	2佐　野口　孝允
別府駐屯地業務隊	2佐　田上　忠夫		2佐　自見　太郎	
湯布院駐屯地業務隊	2佐　木下　正彦	2佐　徳永　鷹男		
玖珠駐屯地業務隊	3佐　賀川　昇	2佐　伊藤　忠		2佐 永瀬　環
都城駐屯地業務隊	3佐　川越　明			
国分駐屯地業務隊	2佐　山口　里美	2佐　江口　義綱	2佐　井出　克信	

（昭和39年～46年）

昭和43年	昭和44年	昭和45年	昭和46年
	陸将　竹田津　護作	陸将　高杉　恭自	
陸将　谷村　弘	陸将　大槻　光武		陸将 田中　登一
	1佐　堤　彦男	将補　山本　萃彦	
	将補　安元　至誠	将補　近藤　雅之	
	1佐　古本　一彦	1佐　緒方　馨	1佐　池田　正幸
	1佐　能勢　忠典	1佐　村上　武	
1佐　永野　茂門	1佐　小林　有一	1佐　杉山　吉男	
		2佐　中野　政明	
3佐　大坪　義昭			
	1佐　岡野　五夫		
1佐　赤須　邦壽			
3佐　小山　隆司		3佐　清藤　忠男	
	3佐　倉岡　行孝		
	1尉　堀越　一久		
		将補　江村　儀郎	
	将補　浜岡　淳		将補 緒方　弘之
	将補　友枝　哲夫		
	将補　川上　進	将補　吉ヶ江　正	
	事務官　北村　伊太郎	1佐　後藤　健	
	1海佐　浜口　孝和	1佐　上原　靖彦	
	1佐　佐藤　公平	1佐　中山　政孝	
		1佐　高村　尚	1佐 原村　数眞
	1空佐　高杉　文造	事務官　岡村　祐夫	
	1海佐　久木田　真之助		
	1佐　岡元　功	1佐　大塚　秦一	
1佐　福永　勇		2佐　白濱　久雄	
2佐　松永　誠二		2佐　枳殻　文雄	
	2佐　岳　正次	2佐　梅崎　丈夫	
	2佐　阿久津　透		2佐　池本　三徳
	2佐　畑中　章	2佐　隈元　郁夫	
2佐　植田　成元		2佐　松下　義道	2佐　廣瀬　章
		3佐　小柳　次郎	
	1佐　西依　嘉彦	1佐　中里　重治	
	1佐　本坂　洋		
	2佐　安藤　博	2佐　丹羽　計佑	
	2佐　横尾　薫	3佐　舩田　亨	
	2佐　恒松　勲		
	2佐　大城　隆	2佐　芝　裕敏	

西部方面隊歴代部隊長等

役職＼年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年
第４師団	陸将　高田　安董		陸将　吉ヶ江　正	
第８師団	陸将　田中　登一	陸将　田中　象二	陸将　味岡　義一	
第１混成団	臨時第1混成団		第1混成団	
	1佐　桑江　良逢	1佐　永谷　清矣	将補　鬼澤　薫	将補　桑江　良逢
第２高射団		第2高射団		
		将補　子野日　穣		将補　中野　秀樹
第５施設団	将補　山本　萃彦	将補　三澤　彰	将補　室井　彰	
第３教育団	将補　近藤　雅也	将補　押尾　精一	将補　寺本　弘	将補　柳　幸男
第３特科群	1佐　池田　正幸	1佐　横田　芳夫	1佐　頼近　信男	
西部方面航空隊	1佐　村上　武	1佐　高橋　進		1佐　鈴木　信之
西部方面通信群	1佐　杉山　吉男	1佐　下川　重夫		1佐　福岡　秋月
西部方面武器隊	2佐　中野　政明	1佐　友近　美和	2佐　南　昇	
第３０７輸送中隊	3佐　大坪　義昭			3佐　木下　昌美
西部方面調査隊	1佐　岡野　五夫	1佐　山本　寛一		1佐　石井　一弘
西部方面会計隊	2佐　長坂　進	2佐　菰方　利明		1佐　藤津　隆久
第３０３保安中隊	3佐　清藤　忠男	3佐　西　晃弘		
西部方面総監部付隊	3佐　赤星　良正		3佐　有吉　弘美	
西部方面音楽隊	1尉　堀越　一久		3佐　大田　之則	
九州地区補給処	陸将　岩下　徳治		陸将　川上　進	
福岡地区病院	将補　緒方　弘之			
熊本地区病院	将補　坂田　亮明			
別府地区病院		1佐　波多野　裕敏		
福岡地方連絡部	将補　加藤　誠一	将補　大津　榮之助		将補　林　榮一郎
佐賀地方連絡部	1佐　近藤　一馬		1佐　宇賀　昇	
長崎地方連絡部	1佐　松崎　久		1佐　永渕　壽之	
熊本地方連絡部	1佐　藤本　健市	1佐　千田　亮	1佐　原　一喜	
大分地方連絡部	1佐　原村　數眞	事務官　青柳　道也		
宮崎地方連絡部	事務官　岡村　祐夫	1空佐　餅田　守		1空佐　山下　和男
鹿児島地方連絡部	1海佐　森園　千治		1海佐　中釜　清光	
沖縄地方連絡部	将補　又吉　康助			将補　松原　輝男
福岡駐屯地業務隊	1佐　梅林　學		1佐　山崎　竹敏	
小倉駐屯地業務隊	2佐　田仲　豊		2佐　佐脇　増男	
飯塚駐屯地業務隊	2佐　川出　勝憲		1佐　石原　恒久	
小郡駐屯地業務隊	2佐　梅崎　丈夫	2佐　山田　幸雄	2佐　清田　潔	
久留米駐屯地業務隊	2佐　池本　三徳	2佐　高宮　徳七		
相浦駐屯地業務隊	2佐　小柳　次郎		2佐　小山　耕昭	
大村駐屯地業務隊	2佐　廣瀬　章	2佐　安岡　道朗	2佐　橋口　大一	
竹松駐屯地業務隊	2佐　岩松　彌佑		2佐　右手　康雄	
健軍駐屯地業務隊	1佐　中山　政孝		1佐　古閑　良裕	1佐　樺田　資孝
北熊本駐屯地業務隊	1佐　野口　令史		1佐　田中　幹一	
別府駐屯地業務隊	1佐　石田　蔀		2佐　松村　昭平	
湯布院駐屯地業務隊	3佐　舩田　亨	2佐　東　三郎		2佐　池田　民男
玖珠駐屯地業務隊	2佐　湯瀬　允端			2佐　弓削　直人
都城駐屯地業務隊			2佐　山口　貞	2佐　黒田　武里
国分駐屯地業務隊	2佐　芝　裕敏	2佐　池口　恵一		2佐　辻　正朝

（昭和47年～55年）

昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年	昭和55年
陸将　柏葉　祐幸		陸将　荒木　一		陸将　今田　敏之
陸将　飯山　茂		陸将　山之内　種章	陸将　上原　博	
将補　徳久　宗治		将補　阿野　慎平	将補　下田　耕士	
第2高射特科団				
	将補　原村　數眞		将補　上田　照夫	将補　山田　精一
将補　河村　義彦			将補　足立　豊重	
将補　平井　登			将補　三上　博康	将補　林　寅三郎
1佐　深見　俊平		1佐　中村　昭三郎		1佐　高橋　雄行
1佐　黒瀬　多聞		将補　中山　公夫		1佐　前田　榮満
	1佐　伊藤　昭三		1佐　樋口　和彦	
	1佐　植野　真成		1佐　山口　康徳	
2佐　橋口　又男	2佐　冨田　芳人		2佐　中川　彪	1佐　駒澤　弘
1佐　中島　昭夫		1佐　松山　卓司		1佐　芳野　弘
	2佐　中村　昭夫		2佐　本松　睦夫	
3佐　杉岡　素之			3佐　山岸　敏男	
3佐　市原　高秋			3佐　鈴木　三郎	
	3佐　細川　忠徳			1尉　長谷川　康正
陸将　齋藤　鎮男	陸将　山之内　種章		陸将　森　清	
将補　坂田　亮明	将補　堀　徹			陸将　中宮　安夫
将補　波多野　裕敏			将補　松薗　勉	
1佐　村山　凡志			将補　山本　巖雄	
将補　林　陽一		将補　落合　成行	将補　五十嵐　晃	
	1佐　首藤　愛明		1佐　友田　忠二	1佐　二見　郁男
1佐　三田　順一郎	1佐　中村　昭二郎		1海佐　葛原　俊作	
1佐　松井　智弘		将補　井原　公夫		将補　合原　博見
事務官　石川　肇		事務官　島田　昭重	事務官　林　武二	
	1空佐　中西　昭雄		1空佐　有富　義仁	
1海佐　志岐　叡彦		1海佐　土岐　勝彦		1海佐　田崎　洋一
	将補　鈴木　七郎		将補　時津　勇	
1佐　永渕　壽人	1佐　福永　昭		1佐　天方　宏	
2佐　松尾　周文		2佐　三苫　孜		2佐　高橋　伸夫
1佐　本田　耕一		1佐　二見　郁男		1佐　渡部　祥資
		2佐　加藤　貞信		1佐　佐藤　裕一郎
2佐　田中　靖二		2佐　笹野　重蔵		2佐　十時　親
	2佐　中島　健		2佐　中嶋　剛正	
	2佐　副島　正登		2佐　北村　欣一	
	2佐　内野　平生		2佐　坂　聖夫	2佐　伊達　浩一郎
	1佐　尾藤　健二		1佐　柴垣　慶一	
	1佐　藤尾　幸正	1佐　増田　好彦		1佐　森　敏彦
2佐　佐藤　源太郎			2佐　張本　四郎	
		2佐　萩原　正行		1佐　山本　久人
	2佐　乾　弘十			2佐　坂口　恒喜
	2佐　堤　浩造		2佐　堂　健二	
		2佐　春日　俊郎	2佐　栗川　勝	

西部方面隊歴代部隊長等

役職＼年	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年
第４師団	陸将　今田　敏之	陸将　曽根　輝雄		陸将　竹田　寛
第８師団	陸将　上原　博	陸将　五十嵐　晃		陸将　鈴木　英樹
第１混成団		陸将　倉林　昭三	陸将　黒田　崧	
第２高射特科団	将補　山田　精一	将補　谷田部　満		将補　遠山　久人
第５施設団	将補 足立　豊重	将補　伊佐次　達	将補　江口　博保	
第３教育団	将補　田邉　悟	将補　平山　誠	将補　谷脇　憲司	
第３特科群	1佐　高橋　雄行	1佐　内門　悟	1佐　矢部田　稔	
西部方面航空隊	1佐　中山　榮男	1佐　浅香　正毅		
西部方面通信群	1佐　小野　謙二	1佐　青山　滋		1佐 弘中　一壽
西部方面武器隊		1佐　田中　隆	1佐　伊藤　謙介	
第３０７輸送中隊	1佐　駒澤　弘		2佐　北野　聰	
西部方面調査隊	1佐　芳野　弘	1佐　吉村　弘喜		1佐 榎本　丈夫
西部方面会計隊	2佐　山田　一秀		2佐　松永　恒喜	
第３０３保安中隊		3佐　安藤　允彬		3佐　山田　行男
西部方面総監部付隊	3佐　小野　敬太	2佐　東原　至	2佐　中村　章和	
西部方面音楽隊		1尉　齋藤　南海男		
九州地区補給処	陸将　中根　新一	陸将　井原　公夫		陸将　阿達　憲
福岡地区病院	陸将　中宮　安夫		将補　蓬莱　裕	
熊本地区病院	将補　瀧井　常昭		将補　松本　侃二	
別府地区病院	将補　山本　巖雄			
福岡地方連絡部	将補 養父　信	将補　柳　康博	将補　森　敏彦	
佐賀地方連絡部	1佐　二見　郁男	事務官　力丸　研二		事務官　兵藤　祥治
長崎地方連絡部	1海佐　長田　功	1海佐　塚原　武夫		
熊本地方連絡部	将補　合原　博見	将補　平松　幹良	将補　志賀　謙三	
大分地方連絡部	事務官　玉光　隆治	1佐　木川　正一郎		1佐　福留　真信
宮崎地方連絡部	1空佐 有富　義仁	1空佐　高瀬谷　欣也	1空佐　木村　尚紀	
鹿児島地方連絡部	1海佐　田崎　洋一	1海佐　柄崎　節夫		1海佐　新元　力
沖縄地方連絡部	将補 時津　勇	将補　谷脇　憲司	将補　人見　五郎	
福岡駐屯地業務隊	1佐　天方　宏	1佐　稲益　正清	1佐　中薗　照之	
小倉駐屯地業務隊	2佐　高橋　伸夫	2佐　白水　敏雄		
飯塚駐屯地業務隊	1佐　渡部　祥資	1佐　田島　義造	1佐　紺野　恵一	2佐 松尾　周文
小郡駐屯地業務隊	1佐　佐藤　裕一郎	1佐　羽田　柱一郎	1佐　加来　壽和	
久留米駐屯地業務隊	2佐　十時　親	2佐　安部　卓三		
相浦駐屯地業務隊	2佐 中嶋　剛正	2佐　北村　揮一	1佐　村木　繁	
大村駐屯地業務隊	2佐　井上　勲		2佐　三浦　統男	
竹松駐屯地業務隊	2佐　伊達　浩一郎	2佐　三浦　秀昭		
健軍駐屯地業務隊	1佐 柴垣　慶一	1佐　黒田　象治郎	1佐　江籠　三郎	
北熊本駐屯地業務隊	1佐　森　敏彦	1佐　安東　英一	1佐　西野　恭平	
別府駐屯地業務隊	2佐　肥後　浩二		2佐　中島　直明	
湯布院駐屯地業務隊	1佐　山本　久人	1佐　溝口　濶		
玖珠駐屯地業務隊	2佐　坂口　恒喜	2佐　小原　實		2佐 椎原　哲利
えびの駐屯地業務隊		1佐 上田　武人	2佐　関根　晟	1佐 佐藤　淳二
都城駐屯地業務隊	1佐　堂　健二	1佐　河原　正義		1佐 木ノ上　廣徳
川内駐屯地業務隊				
国分駐屯地業務隊	2佐　濱島　昭夫		2佐　倉園　六一郎	

（昭和56年～64年）

昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	昭和64年（平成元年）
陸将　種具　正二郎		陸将　黒田　崧	陸将　遠山　久人	
陸将　矢野　龍男		陸将　森野　安弘		陸将　久保　正佳
将補　森　敏彦		将補　大東　信祐		将補　村田　純一
将補　岡　文夫				将補　北井上　一則
将補　長江　光一				将補　横山　松雄
	1佐　松下　政昭		1佐　三橋　國利	
	1佐　向井　啓		1佐　高橋　義洋	
	1佐　大上　正美		1佐　坂　正興	
	1佐　鈴木　善勝	1佐　廣田　英雄		
	1佐　中野　昭人	1佐　柿谷　勲夫		1佐　田原　明彦
1佐　白石　桂一	1佐　松藤　洋一			1佐　岩附　健
		1佐　貴島　猛		1佐　舩木　捷彦
2佐　近藤　行慶		1佐　青木　稔		
		3佐　城　良明		3佐　加藤　真五
	3佐　黒木　富男			
1尉　横井　豊		3佐　柳川　成章		
陸将　櫻井　和雄		陸将　森　敏彦	将補　和才　剛	
将補　近藤　正太郎		将補　大隅　義裕	将補　吉川　尚文	
			将補　松本　愷夫	
		1佐　松本　愷夫	1佐　河内　清司	
将補　吉崎　格		将補　阿部　賢吉		将補　岸良　征
	事務官　相沢　史郎		事務官　吉田　忠彦	
1海佐　水村　宏		1海佐　新田　雅敏		1海佐　落合　畯
将補　茂手木　久倬		将補　良永　百茂壽		1佐　田中　和彦
	1佐　長尾　哲吾		1佐　久光　禧敬	
1空佐　葺津　和親		1空佐　宮本　正壽		1空佐　津金澤　洋實
	1海佐　平川　俊郎			1佐　大畑　進
	将補　松坂　タカシ	将補　菊池　勝夫		
1佐　佐藤　榮		1佐　山下　忍		
2佐　藤本　嘉秋		2佐　小山　武男		2佐　前田　敏彦
1佐　平峯　一郎	1佐　武藤　義治		2佐　廣川　浩	1佐　松木　博司
	1佐　織田　稔夫		1佐　山口　秀雄	
1佐　清水　重勝		1佐　武田　和明	2佐 今野　忠彦	2佐　山本　誠人
	1佐　有馬　保邦		1佐　中釜　幸雄	
1佐　屋敷　榮一郎	2佐　橋本　登	2佐　関野　恒幸		2佐　岡　三略
2佐　上原　正助			2佐　熊本　清次	
1佐　眞鍋　旭		1佐　藤森　篤	1佐　武藤　義治	
1佐　井上　祐次郎		1佐　黒木　正夫		1佐　伊藤　宏美
1佐　馬場　隆春	2佐　中村　百助			2佐　大石　良治
2佐　池田　智爾			2佐　神谷　潔	
		2佐　徳丸　雄三		2佐　荒田　祐一
	2佐　小原　土		2佐　松山　誠也	2佐　橋口　隆雄
2佐　西岡　文敏			2佐　若松　秀俊	2佐　山内　征男
2佐　山内　明彦	2佐　増永　道雄			3佐　眞方山　國定
	2佐　堤　可久		2佐　中山　雅博	

西部方面隊歴代部隊長等

役職＼年	平成元年	平成2年	平成3年	平成4年
第４師団	陸将　遠山　久人	陸将　内田　十允		陸将　黒柳　彰久
第８師団	陸将　久保　正佳		陸将　松島　悠佐	
第１混成団	将補　村田　純一	将補　茂手木　久倬		将補　花岡　正明
第２高射特科団	将補　北井上　一則	1佐(将補)　正村　千秋		
第５施設団	将補　横山　松雄		将補　勝木　俊知	
第３教育団	1佐　三橋　國利	1佐　国谷　裕	1佐　小袋　正次郎	
第３特科群	1佐　高橋　義洋	1佐　氏森　武生		1佐　長野　陽一
西部方面航空隊	1佐　坂　正興	1佐　釘宮　初男		1佐　田島　勝征
西部方面通信群	1佐　廣田　英雄	1佐　西分　幸夫		1佐　林　忠行
西部方面武器隊	1佐　田原　明彦		1佐　新上　義昭	
西部方面輸送隊	1佐　岩附　健		1佐　橋本　捷	1佐　正岡　満典
西部方面調査隊	1佐　舩木　捷彦		1佐　坂梨　元治	
西部方面会計隊	1佐　青木　稔	1佐　田中　純一		1佐　嘉永　政俊
第３０３保安中隊	3佐　加藤　真五			3佐　小柳　勝裕
西部方面総監部付隊	3佐　黒木　冨男	3佐　西島　義春		3佐　橋場　紀仁
西部方面音楽隊	3佐　柳川　成章			3佐　古荘　浩四郎
九州地区補給処	将補　和才　剛	将補　雀ヶ野　環		
福岡病院	将補　吉川　尚文	将補　河内　清司		
熊本病院	将補　松本　愷夫			将補　正宗　弘道
別府病院	1佐　河内　清司	1佐　松本　富夫		
福岡地方連絡部	将補　岸良　征		1佐　溝内　好昭	
佐賀地方連絡部	事務官　吉田　忠彦	1佐　高木　幸夫		1佐　嶋野　隆夫
長崎地方連絡部	1海佐　落合　畯		1海佐　大瀬　護作	
熊本地方連絡部	1佐　田中　和彦		1佐　坂　聖夫	
大分地方連絡部	1佐　久光　禧敬	事務官　富永　洋		事務官　可児　正法
宮崎地方連絡部	1空佐　津金澤　洋實		1空佐　内山　好夫	
鹿児島地方連絡部	1佐　大畑　進	1佐　高橋　義洋		1海佐　吉原　征義
沖縄地方連絡部	将補　菊池　勝夫	1佐　内藤　幸雄	1佐　山本　勝	
福岡駐屯地業務隊	1佐　山下　忍	1佐　上田　武人	1佐　寺村　昌忠	
小倉駐屯地業務隊	2佐　前田　敏彦			2佐　志水　敏男
飯塚駐屯地業務隊	1佐　松木　博司		1佐　池上　旦生	
小郡駐屯地業務隊	1佐　山口　秀雄	2佐　友寄　喜一郎		1佐　今野　忠彦
久留米駐屯地業務隊	2佐　山本　誠人			1佐　小島　正人
相浦駐屯地業務隊	1佐　中釜　幸雄	1佐　高田　宏一郎	1佐　宮地　守男	
大村駐屯地業務隊	2佐　岡　三略		2佐　松本　憲一	
竹松駐屯地業務隊	2佐　熊本　清次	2佐　水原　正治		2佐　稼　崇至
健軍駐屯地業務隊	1佐　武藤　義治	1佐　田代　儀雄		1佐　本室　直彦
北熊本駐屯地業務隊	1佐　伊藤　宏美		1佐　濱谷　隆平	
別府駐屯地業務隊	2佐　大石　良治			2佐　上村　國之
湯布院駐屯地業務隊	2佐　神谷　潔	2佐　松井　和道		
玖珠駐屯地業務隊	2佐　荒田　祐一		2佐　澤村　庄次郎	
えびの駐屯地業務隊	2佐　橋口　隆雄		2佐　稲田　朋信	
都城駐屯地業務隊	2佐　山口　征男			2佐　上岡　隆章
川内駐屯地業務隊	3佐　眞方山　國定			2佐　馬場　孝之
国分駐屯地業務隊	2佐　中山　雅博		2佐　鬼塚　勝記	

（平成元年～9年）

平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年
陸将　宮本　敏明	陸将　大北　太一郎		陸将　中谷　正寛	
陸将　白石　一郎		陸将　古川　浩		陸将　備後　嘉雄
将補　瀬山　博英		将補　村田　秀信		将補　小早川　達彦
将補　備後　嘉雄		1佐(将補)　樋口　譲次		将補　佐野　晃
1佐(将補)　市川　淳			将補　寺尾　賢治	
1佐　藤井　建吉			1佐　泉　芳憲	
		1佐　折木　良一	1佐　諸橋　茂	
	1佐　岩崎　修治			1佐　矢﨑　良博
		1佐　川口　英徳		1佐　松浦　学
1佐　阿保　文敏				1佐　寄田　修
		2佐(1佐)　吉川　明徳		1佐　中村　茂夫
	1佐　庄島　久信			1佐　緒方　浩二
	1佐　小野　信秋			1佐　川上　齋
	3佐　手嶋　秦二郎	3佐　下野　博文		
	3佐　前田　敏棋		3佐　本郷　猛	

将補　池野　萬	将補　鈴木　善勝	将補　古沢　節夫	将補 千輪　俊明
			将補　芳賀　博光
	将補　濱田　寧		将補 川端　弓雄
1佐　濱田　寧	1佐　脇坂　愛次郎	1佐　今西　康二	
1佐　廣﨑　恪也	1佐　佐々木　達士	1佐　西村　長治	
	事務官　川原　光之	事務官　森岡　高司	
1海佐　北村　武郎	1海佐　西川　鉄也		
1佐　寺村　誠士	1佐　元植　秦男	1佐　森　満	
	1佐　吉田　邦雄	1佐　白石　義行	
1空佐　山本　隆文	1空佐　林　國満		
	1海佐　坪屋　成壮	1海佐　小森谷　義男	
1佐　井本　敏夫	1佐　原　充宏		1佐　濱田　豊克
1佐　竹下　治雄	1佐　堀尾　鐵三		
	2佐　下田　克彦	2佐(1佐)　池田　等	
1佐　松尾　博史	1佐　片山　一儀		1佐　松隈　英之介
	1佐　坂梨　元治		1佐　吉住　尚昭
1佐　真崎　峰夫	1佐　庄山　正氣		
	1佐　川本　哲士		1佐　椎原　哲利
2佐　横山　高昭		2佐　林田　勝	
	2佐(1佐)　塚原　茂樹		2佐　永岡　陽吉
1佐　高橋　英巳		1佐　畠山　昌彦	
1佐　宇都宮　隆	1佐　袖井　孝		1佐　池田　三千穂
2佐　井上　昭治			2佐　池見　正敏
2佐　木藤　眞仁		2佐　平岡　正美	
2佐　曽根﨑　益雄			2佐　佃屋　俊雄
	2佐　成松　國隆	2佐　岩元　光男	
	2佐　岩元　光男	2佐　山村　治	2佐　黒川　保幸
	2佐　東　利文		
	2佐　福島　卓		2佐　宮﨑　勉

西部方面隊歴代部隊長等

役職＼年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年
第４師団	陸将　中谷　正寛	陸将　野中　光男	陸将　管　博敏	陸将　奥村　快也
第８師団	陸将　備後　嘉雄	陸将　田原　克芳	陸将　宮武　良光	
第１混成団	将補　小早川　達彦	将補　椋木　功	将補　廣瀬　誠	
第２高射特科団	将補　佐野　晃		将補　五藤　正美	
第５施設団	将補　寺尾　憲治	1佐(将補)　菅谷　敏彦		
第３教育団	1佐(将補) 佐藤　和美	1佐　志水　民明		1佐　上松　大八郎
西部方面普通科連隊				
西部方面特科隊				
第３特科群	1佐　諸橋　茂	1佐　中村　太	1佐　井上　武	
西部方面航空隊	1佐　矢﨑　良博	1佐　黒木　信行	1佐　古本　和彦	
西部方面通信群	1佐　松浦　学		1佐　上田　萬滿	
西部方面後方支援隊				
西部方面武器隊	1佐　寄田　修	1佐　山上　満		
西部方面輸送隊	1佐　中村　茂夫		2佐　真野　晴生	
西部方面衛生隊				
西部方面調査隊	1佐　緒方　浩二	1佐　青木　五十一	1佐　坂田　順彦	
西部方面情報保全隊				
西部方面会計隊	1佐　川上　齋	1佐　太田　良俊		1佐　徳留　和教
西部方面指揮所訓練支援隊				
西部方面情報処理隊				
西部方面通信情報隊				
第３０３保安中隊		3佐　武　和弘	3佐　山本　健	
西部方面総監部付隊	3佐　本郷　猛	3佐　永野　久治	3佐　早崎　剛	
西部方面音楽隊	3佐　古荘　浩四郎	2佐　片山　伸生		
九州地区補給処	将補　千輪　俊明	将補　寺村　誠士	将補　高橋　佳嗣	
福岡病院	将補　芳賀　博光	将補　小川　明		
熊本病院	将補　川端　弓雄	将補　高尾　健		
別府病院	1佐　今西　康二	1佐　西川　博		1佐　上田　幸夫
福岡地方連絡部	1佐　西村　長治	1佐　赤谷　信之	1佐　富本　啓一	
佐賀地方連絡部	事務官　森岡　高司	1佐　坂本　恒雄	事務官　安藤　照行	
長崎地方連絡部	1海佐　森田　良行		1海佐　高橋　節男	1海佐　佐々木　孝宣
熊本地方連絡部	1佐　山内　明彦		1佐(将補)　池田　廣春	1佐　廣田　義則
大分地方連絡部	1佐　白石　義行	事務官　佐藤　隆章	1佐　生山代　至伸	
宮崎地方連絡部	1空佐　岡村　雄司		1空佐　田中　仁	
鹿児島地方連絡部	1海佐　小森谷　義男	1海佐　中塚　久雄	1海佐　森　哲郎	
沖縄地方連絡部	1佐　濱田　豊克	1佐(将補)　行徳　浩志		1佐　上村　邁
福岡駐屯地業務隊	1佐　吉田　邦雄		1佐　錦戸　泰三	
小倉駐屯地業務隊	2佐(1佐)　池田　等	2佐　益田　修	2佐　酒井　淨	
飯塚駐屯地業務隊	1佐　松隈　英之介	1佐　益留　政利	1佐　松本　輝昭	
小郡駐屯地業務隊	1佐　衛藤　利治		1佐　奏　政寛	
久留米駐屯地業務隊	1佐　吉弘　嘉幸	1佐　山口　和男	1佐　松本　純三	
相浦駐屯地業務隊	1佐　椎原　哲利	1佐　井田　昌孝	1佐　中村　匡秀	
大村駐屯地業務隊	2佐　林田　勝	2佐(1佐)　浦川　康二		2佐　橋口　兼文
竹松駐屯地業務隊	2佐　永岡　陽吉	2佐　友冨　睦夫		
健軍駐屯地業務隊	1佐　畠山　昌彦	1佐　岩崎　修治	1佐　松尾　一弘	
北熊本駐屯地業務隊	1佐　池田　三千穂	1佐　庄司　洋平	1佐　白石　義行	
別府駐屯地業務隊	2佐　池見　正敏	2佐　石田　節	2佐　徳永　喜憲	
湯布院駐屯地業務隊	2佐　八木　大策	2佐(1佐)　本田　英昭	2佐　森本　恒生	
玖珠駐屯地業務隊	2佐　佃屋　俊雄	2佐(1佐)　三根　登	2佐　小倉　新一	
えびの駐屯地業務隊	2佐　田尻　宏行			2佐　野尻　伸二
都城駐屯地業務隊	2佐　黒川　保幸		2佐(1佐)　永村　義成	2佐　岩崎　耕太郎
川内駐屯地業務隊	2佐　佐藤　孝志		2佐　坂下　光里	
国分駐屯地業務隊	2佐　宮崎　勉	2佐　方違　民昭		2佐　大岐　継寛

（平成10年～17年）

平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
陸将　衣笠　陽雄	陸将　江藤　文夫	陸将　澤山　正一	
陸将　得田　憲司	陸将　佐伯　義則		陸将　泉　一成
将補　山口　淨秀	将補　君塚　栄治		将補　藤﨑　護
将補　加賀谷　貞司		将補　平野　治征	
将補　末包　昭彦	将補　姉崎　泰司		
1佐　谷川　孝司	1佐　川口　洋市		1佐　大塚　敏郎
1佐　越智　正典			1佐　山中　洋二
1佐　大地　教文			
1佐　下池　賢一			1佐　川口　博司
1佐　上水　俊哉	1佐　時津　憲彦		1佐　藤田　博久
1佐　河野　廣行		1佐　太田　良俊	
1佐　河野　廣行			
2佐(1佐)　小田　修身	1佐　折田　健造		
1佐　東　威志			1佐　桂　幸一
1佐　渡邊　公博			1佐　中村　太
1佐　野﨑　幸治	1佐　伊藤　善寛	1佐　葛岡　義久	
1佐　松尾　辰藏			
2佐　縄　義生			
2佐　大内　義輝			
3佐　久保　敏雄		3佐　境田　守	
3佐　瀬戸山　勝士			3佐　比良元　昌導
3佐　神　明			
将補　福山　隆	将補　品川　澄雄		将補　福田　裕
将補　安部　正雄		将補　西川　博	
将補　小林　秀紀	将補　加瀬　勝一		将補　近藤　壽郎
1佐　後藤　達彦			1佐　東　威志
1佐　安部　壽和			1佐　佐藤　正
1佐　小原　繁		事務官　西方　孝	
1佐　武田　功		1海佐　原田　哲郎	
1佐　大塚　敏郎			1佐　日笠玲　治郎
事務官　山本　直男		1佐　光永　邦保	
1空佐　本村　久郎		1空佐　杉﨑　信之	
1海佐　乳井　三治		1海佐　福本　出	
1佐　岩切　厚			1佐　小川　祥一
1佐　松尾　隆二		1佐　與國　洋	
2佐　大﨑　幸雄		2佐　齋藤　輝夫	
1佐　平嶋　公洋			1佐　工藤　和生
1佐　久冨　信繁		1佐　工藤　秀元	
1佐　久保　雄作			1佐　道田　啓一
1佐　富安　久芳		1佐　金子　茂実	
2佐　山下　正美			2佐　島松　正一
2佐　木下　英二	2佐　和田　俊昭	2佐　坂本　孝	
1佐　大城　成一郎			
1佐　岩﨑　理一郎	1佐　坂本　恒雄		
2佐　水田　治敏		2佐　廣瀬　和紀	2佐　竹下　勝
2佐　上杉　泰洋			2佐　有浦　隆
2佐　松田　龍一		2佐　坪倉　洋	
2佐　松原　幸孝			
2佐　本仮屋　勉		2佐　濵砂　和彦	
2佐　小楠　功一			2佐　肥後　秀一
2佐　松田　安司			2佐　川井田　誠

西部方面隊歴代部隊長等

役職＼年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年
第４師団	陸将　内田　益次郎		陸将　宮島　俊信	陸将　宮下　寿広
第８師団	陸将　泉　一成	陸将　酒井　健	陸将　君塚　栄治	陸将　木﨑　俊造
第１５旅団				
第１混成団	将補　藤﨑　護	将補　武内　誠一		将補　反怖　謙一
第２高射特科団	将補　平野　治征	将補　高橋　勝夫	将補　保松　秀次郎	
第５施設団	将補　田邉　揮司良		1佐(将補)　西村　智聡	将補　赤松　雅文
第３教育団	1佐　大塚　敏郎	1佐　中野　陽一郎	1佐　宮本　修一	
西部方面混成団				
西部方面普通科連隊	1佐　山中　洋二	1佐　若生　明智		
西部方面特科隊	1佐　松井　俊彦		1佐　小林　秀人	
西部方面航空隊	1佐　川口　博司		1佐　服部　正	1佐　沖邑　佳彦
西部方面通信群	1佐　藤田　博久	1佐　花田　順一朗		1佐　藤井　祥一
西部方面後方支援隊	1佐　太田　良俊	1佐　上水　俊哉	1佐　大坪　義彦	
西部方面輸送隊	1佐　横山　正樹		1佐　仁王　伸樹	
西部方面衛生隊	1佐　根本　理		1佐　大塚　正征	
西部方面会計隊	1佐　葛岡　義久	1佐　田村　洋二	1佐　松尾　隆一	
西部方面指揮所訓練支援隊	1佐　藤田　太		1佐　園田　郁夫	
西部方面情報隊				
西部方面情報処理隊	2佐　縄　義生	2佐　若林　賢	2佐　西　正明	
西部方面通信情報隊	2佐　大内　義輝	2佐　原田　優二		
第３０３保安中隊	3佐　境田　守	3佐　重田　長太郎		
西部方面総監部付隊	3佐　比良元　昌導	3佐　竹ノ下　伸幸		
西部方面音楽隊	3佐　神　明		3佐　高橋　充	
九州補給処	将補　福田　裕	将補　植木　美知男	将補　中村　憲一	将補　酒井　弘
福岡病院	将補　加瀬　勝一			将補　千先　康二
熊本病院	将補　近藤　壽郎		将補　上田　幸夫	
別府病院	1佐　大島　智		1佐　黒澤　洋一	
福岡地方協力本部	1佐　佐藤　正	1佐　時津　憲彦	1佐　山澤　將人	
佐賀地方協力本部	事務官　西方　孝	事務官　塚本　和重	1佐　原　圭三	
長崎地方協力本部	1海佐　濱田　暢喜		1海佐　下薗　輝昭	
熊本地方協力本部	1佐　日笠　玲治郎		1佐　川瀬　昌俊	
大分地方協力本部	1佐　光永　邦保	1佐　澤野　一雄	1佐　髙木　新二	
宮崎地方協力本部	1空佐　杉﨑　信之	1空佐　宇都　定史	1空佐　鎌田　修一	
鹿児島地方協力本部	1海佐　福本　出	1海佐　佐藤　俊也	1海佐　村上　良宏	
沖縄地方協力本部	1佐　友部　薫	1佐(将補)　末永　典良		将補　山下　裕貴
福岡駐屯地業務隊	1佐　佐藤　晃章		1佐　光安　智敬	
小倉駐屯地業務隊	2佐　齋藤　輝夫	2佐　力丸　寿久		
飯塚駐屯地業務隊	1佐　工藤　和生	2佐　藤本　重美		
小郡駐屯地業務隊	1佐　工藤　秀元	1佐　大渕　和幸		
久留米駐屯地業務隊	1佐　道田　啓一	1佐　尾池　政裕	1佐　後藤　永二郎	
相浦駐屯地業務隊	1佐　金子　茂実		1佐　白神　和彦	1佐　上田　和幹
大村駐屯地業務隊	2佐　島松　正一		2佐　野口　克彦	
竹松駐屯地業務隊	2佐　坂本　孝	2佐　髙山　善郎		
健軍駐屯地業務隊	1佐　松尾　辰藏	1佐　海田　英昭		1佐　光永　邦保
北熊本駐屯地業務隊	1佐　佐嘉田　進		1佐　黒木　三治	
別府駐屯地業務隊	2佐　竹下　勝	2佐　木野　正博		2佐　岡﨑　泰雄
湯布院駐屯地業務隊	2佐　有浦　隆		2佐　園田　智弘	2佐　安藝　桂一郎
玖珠駐屯地業務隊	2佐　坪倉　洋	2佐　徳丸　富貴男		2佐　古野　茂樹
えびの駐屯地業務隊	2佐　佐藤　安志		2佐　秋元　由昭	
都城駐屯地業務隊	2佐　迫　輝昌			2佐　衛藤　俊一
川内駐屯地業務隊	2佐　肥後　秀一	2佐　櫁柑山　洋一		2佐　平岡　裕一
国分駐屯地業務隊	2佐　川井田　誠		2佐　松下　重明	
那覇駐屯地業務隊				

（平成18年～26年）

平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
陸将　木野村　謙一		陸将　武内　誠一	陸将　川又　弘道	
陸将　寺﨑　芳治	陸将　堀口　英利	陸将　松尾　幸弘	陸将　森山　尚直	
将補　反怖　謙一	将補　友部　薫	将補　小林　茂		
将補　掛川　壽一		将補　藤田　浩和		将補　星指　隆
	将補　冨井　稔		将補　中野　義久	
1佐　北村　昌也	1佐　藤田　譲			
			1佐　曽田　健史	
1佐　黒澤　晃		1佐　國井　松司		
1佐　村松　秀明	1佐　田原　義信	1佐　渡與　金三		1佐　三宅　優
	1佐　田尻　祐介		1佐　酒井　秀典	1佐　佐々木　博茂
	1佐　廣惠　次郎		1佐　濵崎　芳夫	
	1佐　辻　勝文			1佐　藤井　祥一
	1佐　望月　雄一		1佐　星　信利	
	1佐　松下　芳太郎		1佐　柴田　浩	
	1佐　平尾　靖之		1佐　砂本　伸幸	
	1佐　青木　泰憲		1佐　佐藤　正典	
1佐　須田　道夫	1佐　矢野　幸雄			
	3佐　平松　和昭			3佐　荒木　浩彰
	3佐　井田　康男			3佐　森　良司
		将補　藤井　貞文	将補　川﨑　朗	
			将補　上部　泰秀	
	将補　石川　卓志			将補　松木　泰憲
		1佐　後藤　義孝		
1佐　山中　洋二		1佐　三宅　優		1佐　秋葉　瑞穂
	事務官　海和　千城		事務官　遠藤　隆	
1海佐　森川　一朗		1海佐　佐々木　秀悦		1海佐　矢藤　久雄
1佐　坂本　知司			1佐　斎藤　剛	1佐　山中　敏弘
	1佐　末安　雅之		1佐　黒丸　逸朗	
	1空佐　林　英治		1空佐　西谷　正文	
	1海佐　福永　賢太郎	1海佐　内野　誠		1海佐　深谷　克郎
	将補　上尾　秀樹		将補　本松　敬史	
	1佐　井手　篤		1佐　三上　繁	
2佐　安光　光儀	2佐　井上　修二			
2佐　竹内　啓三	2佐　緒方　光		2佐　熊本　光洋	
1佐　西尾　信裕		1佐　北里　憲生	1佐　吉田　純真	
	1佐　木下　茂		1佐　宮本　浩	
	1佐　木村　克美	1佐　橋本　精一郎		1佐　新村　司
	2佐　加塩　徳雄	2佐　大林　康夫		2佐　諸石　修
	2佐　執行　武弘	2佐　岩永　真太郎		2佐　西　一昭
	1佐　松尾　博之		1佐　木上　英輔	1佐　大塚　元幸
	1佐　鈴　浩樹	1佐　池野　秀博		1佐　須藤　二男
	2佐　山内　貞二		2佐　山﨑　智文	
	2佐　河原　謙次		2佐　岡﨑　光洋	
	2佐　原田　泰文	2佐　木原　一彦		2佐　宇田　弘志
	2佐　日髙　義広		2佐　藤本　良樹	
		2佐　椎葉　誠也	2佐　藤倉　勝久	
	2佐　池袋　靖彦		2佐　野村　浩司	
2佐　西郷　賢二郎	2佐　西　一幸		2佐　山内　健一	
1佐　吉田　英紀		1佐　末吉　平興		1佐　平田　喜彦

西部方面隊歴代部隊長等

役職＼年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
第４師団	陸将　深津　孔	陸将　赤松　雅文	陸将　岩谷　要	陸将　髙田　祐一	陸将　沖邑　佳彦
第８師団	陸将　山之上　哲郎	陸将　岸川　公彦	陸将　本松　敬史	陸将　吉田　圭秀
第１５旅団	将補　上尾　秀樹	将補　原田　智総
第２高射特科団	将補　星指　隆	将補　佐藤　真	将補　田渕　忠史
第５施設団	将補　中野　義久	将補　秋葉　瑞穂	将補　白川　訓通
西部方面混成団	1佐　杉本　嘉章	1佐　中澤　剛
西部方面普通科連隊	1佐　後藤　義之	1佐　豊田　龍二
西部方面特科隊	1佐　三宅　優	1佐　壁村　正照	1佐　牛島　弘樹
西部方面航空隊	1佐　佐々木　博茂	1佐　吉浦　健志	1佐　伊藤　佳哉
西部方面通信群	1佐　濵崎　芳夫	1佐　富崎　隆志	1佐　藤田　達也	1佐　奈良　一志
西部方面後方支援隊	1佐　大川　貴司	1佐　石丸　威司	1佐　佐々木　龍太郎
西部方面輸送隊	1佐　星　信利	1佐　村上　至	1佐　古内　弘樹
西部方面衛生隊	1佐　大川　貴司	1佐　藤田　真也
西部方面会計隊	1佐　砂本　伸幸	1佐　安井　崇	1佐　真部　亮太
西部方面指揮所訓練支援隊	1佐　大足　卓也	1佐　岡部　勝昭
西部方面情報隊	1佐　伊部　俊宏	1佐　原　雅樹	1佐　姫田　良明
水陸機動準備隊	2佐　樋口　毅	1佐　小野田　宏樹
西部方面総監部付隊	3佐　荒木　治彰	3佐　藤原　聖也	3佐　田上　智巳
西部方面音楽隊	3佐　森　良司	3佐　伊東　札記
九州補給処	将補　神原　誠司	将補　小瀬　幹雄	将補　山﨑　嘉樹
福岡病院	将補　大鹿　芳郎	将補　鈴木　智史	将補　松木　秦憲
熊本病院	将補　松木　秦憲	将補　越智　文雄	将補　松村　琢也
別府病院	1佐　松枝　康弘	1佐　牟田　直
那覇病院
福岡地方協力本部	1佐　秋葉　瑞穂	1佐　松永　康則	1佐　藤田　英俊
佐賀地方協力本部	事務官　佐藤　伸樹	1佐　大塚　陽一	1佐　宮本　善弘
長崎地方協力本部	1海佐　矢藤　久雄	1海佐　小野　彰一郎	1海佐　小谷　克己
熊本地方協力本部	1佐　山中　敏弘	1佐　勝井　省二	1佐　濱田　博之
大分地方協力本部	1佐　渡辺　辰悟	1佐　久田　茂将
宮崎地方協力本部	1空佐　菊田　哲	1空佐　植村　茂己
鹿児島地方協力本部	1海佐　深谷　克郎	1佐　敷島　章	1海佐　髙岩　俊弘
沖縄地方協力本部	将補　山根　寿一	将補　井土川　一友	将補　松永　浩二
福岡駐屯地業務隊	1佐　青木　秦憲	1佐　石橋　克伸	1佐　白田　正俊
小倉駐屯地業務隊	2佐　安村　英行	2佐　鬼木　一也	2佐　末本　聖志
飯塚駐屯地業務隊	2佐　熊本　光洋	2佐　中原　顕史	2佐　森尾　俊博
小郡駐屯地業務隊	1佐　丸田　弘史	2佐　松本　哲治	2佐(1佐)　大平落　健二
久留米駐屯地業務隊	1佐　中富　普亮	1佐　弥永　正一	1佐　福岡　和博
相浦駐屯地業務隊	1佐　新村　司	1佐　中富　普亮	1佐　竹井　弘文
大村駐屯地業務隊	2佐　諸石　修	2佐　上薗　誠司	2佐　濱口　美登志	2佐　北島　基行
竹松駐屯地業務隊	2佐　西　一昭	2佐　有永　博之	2佐　古川　成敏
健軍駐屯地業務隊	1佐　大塚　元幸	1佐　三家本　勝志	1佐　堤　秀一
北熊本駐屯地業務隊	1佐　藤原　修	1佐　林　優	1佐　立石　健一
別府駐屯地業務隊	2佐　伊勢馬場　哲也	2佐　松井　健一	2佐　山崎　真一
湯布院駐屯地業務隊	2佐　樋口　祐	2佐　今井　健太	2佐　酒見　哲紀
玖珠駐屯地業務隊	2佐　宇田　弘志	2佐　長野　伸二	2佐　後藤　良一
えびの駐屯地業務隊	2佐　尾崎　俊郎	2佐　妹尾　智志	2佐　濵田　伸一
都城駐屯地業務隊	2佐　立薗　俊洋	2佐　坂元　利浩	2佐(1佐)　萱沼　文洋
川内駐屯地業務隊	2佐　野村　浩司	2佐　塚本　忠	2佐　矢内　博之
国分駐屯地業務隊	2佐　山内　健一	2佐　川久保　嘉人	2佐　東　宏二郎
那覇駐屯地業務隊	1佐　平田　喜彦	1佐　古堅　悟	1佐　山口　敦史
宮古駐屯地業務隊
石垣駐屯地業務隊
与那国駐屯地業務隊
奄美駐屯地業務隊

（平成27年～令和5年）

平成31年（令和元年）	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年
	陸将　末吉　洋明	陸将　腰塚　浩貴		陸将　戒田　重雄
陸将　堀井　秦蔵		陸将　小林　弘樹		陸将　青木　伸一
将補　中村　裕亮	将補　佐藤　真	将補　井土川　一友		将補　松永　浩二
将補　藤田　英俊			将補　小山　直伸	将補　大橋　智
	将補　北島　一	将補　満井　英昭		
1佐　古庄　信二			1佐　有村　義治	
	1佐　前田　尚男			
1佐　椿　裕一			1佐　中尾　国保	
	1佐　横山　信太郎		1佐　兼子　孝人	
	1佐　柳田　常秦	1佐　野口　恵一		1佐　中村　公多朗
	1佐　森　英久	1佐　永禮　完次		1佐　中村　普士
	1佐　白石　智将	1佐　品川　真之		1佐　国島　秀仁
	1佐　木屋　正博			1佐　大谷　雅之
1佐　西田　健		1佐　根本　正之		
	1佐　岡　栄治		3佐　高木　真一	
	3佐　中野　真澄		3佐　杉村　博仁	
	2佐(1佐)　志賀　亨			3佐　稲積　英典
将補　吉野　俊二	将補　竹内　網太郎			将補　佐藤　洋
		将補　川口　雅久		将補　森　知久
将補　平山　健一	将補　中岸　義典		将補　内藤　智子	1佐　濵地　理通
	1佐　清水　浩	1佐　吉積　司		
			1佐　小池　哲司	1佐　山本　哲生
1佐　深草　貴信			1佐　平松　良一	1佐　久田　茂将
	1佐　安藤　和幸	1佐　古賀　博彦	行(－)8　松島　史人	
	1海佐　西田　洋一郎	1海佐　江上　昌利		1海佐　伊藤　圭市
	1佐　仲西　勝典	1佐　橋本　賊		1佐　笹島　昭佳
1佐　井村　昭利			1佐　内野　敏紀	1佐　川間　信太郎
1空佐　荒井　将人	1空佐　石原　信也			1空佐　黒子　一也
	1海佐　赤岩　英明		1海佐　稲崎　精一郎	1海佐　松浦　幸一
	将補　坂田　裕樹			将補　久保　勝裕
	1佐　古川　幹雄		1佐　奥田　広樹	
		2佐　太田　孝治		2佐　榎窪　正和
	2佐　長谷　正仁			1佐　西　俊作
	1佐　黒岩　太一郎		1佐　西谷　修一	1佐　足達　陽一
	1佐　江崎　賢治		2佐　石川　達也	
	1佐　矢口　鑑		1佐　岩村　福雄	
	2佐　武次　和正		2佐　児玉　太郎	
	2佐　石本　智亮			2佐　品田　宗爾
1佐　森岡　雄介	1佐　阿部　仁一		1佐　南野　延寿	
1佐　小林　栄樹		1佐　川崎　誠二		1佐　米良　憲一郎
	2佐　福元　昌二	2佐　後藤　良一		2佐　北平　栄二
2佐　加藤　晴世	2佐　小山田　万恵			2佐　縣田　善信
2佐　大塚　秦浩		2佐　工藤　健一		2佐　上久保　隆二
2佐　外屋敷　孝好		2佐　福島　邦彦		2佐　實松　一臣
	2佐　縣田　善信		2佐　年森　文秦	
2佐　山神　雄久		2佐　久保　裕作	2佐　林　一三	2佐　波多野　武
	2佐　永谷　大介			2佐　井上　博文
	1佐　平田　弘俊		1佐　後藤　茂寿	
				2佐　川﨑　達夫
				2佐　阿比留　恵一
				2佐　矢野　清
				2佐　柿崎　貴志

西部方面隊歴代部隊長等（令和6年～7年）

役職＼年	令和6年		令和7年	
第４師団	陸将　戒田　重雄			陸将　前島　政樹
第８師団	陸将　青木　伸一	陸将　徳永　勝彦		陸将　白川　訓通
第１５旅団	将補　上野　和士			将補　泉　英夫
第２特科団	将補　伊藤　久史		将補　横田　紀子	
第２高射特科団	将補　大橋　智	将補　田中　裕宣		
第５施設団	将補　満井　英昭	将補　大久保　克久		
西部方面混成団	1佐　有村　義治			1佐　山田　篤
西部方面航空隊	1佐　不破　悟		1佐　林　英彦	
西部方面通信群	1佐　石橋　良浩			
西部方面後方支援隊	1佐　中村　公多朗		1佐　川田　義一	
西部方面輸送隊	1佐　中村　普士		1佐　伊藤　弘幸	
西部方面衛生隊	1佐　國島　秀二			
西部方面会計隊	1佐　大谷　雅光		1佐　山口　護	
西部方面指揮所訓練支援隊	1佐　南野　延寿		1佐　中村　英昭	
西部方面情報隊	1佐　高木　真一		1佐　兒島　康宏	
西部方面総監部付隊	3佐　淀川　桂介			
西部方面音楽隊	3佐　稲積　英典			
九州補給処	将補　佐藤　洋			将補　河合　寿士
福岡病院	将補　森　知久		将補　菊地　勇一	将補 内藤　智子
熊本病院	1佐　濵地　理通			将補 山本　秦輔
那覇病院	1佐　山本　哲生			1佐　河野　修一
福岡地方協力本部	1佐　久田　茂将			
佐賀地方協力本部	行(－)8　松島　史人	行(－)8　佐々木　眞秀路		
長崎地方協力本部	1海佐　伊藤　圭市	1海佐　佐々木　昌貴		
熊本地方協力本部	1佐　笹島　昭佳		1佐　矢野　秀樹	
大分地方協力本部	1佐　川間　信太郎			1佐　米村　謙一
宮崎地方協力本部	1空佐　黒子　一也		1空佐　壱岐　香里	
鹿児島地方協力本部	1海佐　松浦　幸一		1海佐　川畑　信一	
沖縄地方協力本部	将補　久保　勝裕	将補　伊藤　優一郎		将補　今井　健太
福岡駐屯地業務隊	1佐　奥田　広樹		1佐　内野　敏紀	
小倉駐屯地業務隊	2佐　榎窪　正和		2佐　久保　晃	
飯塚駐屯地業務隊	1佐　西　俊作			1佐　吉良　隆文
小郡駐屯地業務隊	1佐　足達　陽一			
久留米駐屯地業務隊	2佐　石川　達也	2佐　木原　好浩		
佐賀駐屯地業務隊				2佐　田口　宏
相浦駐屯地業務隊	1佐　清水　直樹			
大村駐屯地業務隊	2佐　桑原　和宏			
竹松駐屯地業務隊	2佐　品田　宗爾		2佐　鈴木　崇大	
健軍駐屯地業務隊	1佐　鮫島　昭一			
北熊本駐屯地業務隊	1佐　米良　憲一郎			
別府駐屯地業務隊	2佐　北平　栄二	2佐　柳澤　和之		
湯布院駐屯地業務隊	2佐　山下　雄二			
玖珠駐屯地業務隊	2佐　矢浦　良一			
えびの駐屯地業務隊	2佐　實松　一臣		2佐　大崎　聡史	
都城駐屯地業務隊	2佐　浜松　賢二			
川内駐屯地業務隊	2佐　波多野　武		2佐　福岡　裕人	
国分駐屯地業務隊	2佐　井上　博文		2佐　髙山　徹	
那覇駐屯地業務隊	1佐　後藤　茂寿	1佐　山本　哲		
宮古駐屯地業務隊	2佐　川﨑　達夫	2佐　田中　啓介		
石垣駐屯地業務隊	2佐　阿比留　恵一	2佐　大町　裕介		
与那国駐屯地業務隊	2佐　矢野　清		2佐　與田　将一朗	
奄美駐屯地業務隊	2佐　柿崎　貴志			

西部方面隊年表

西部方面隊年表①

年	国内外情勢	総監 （着任月）	編成等	主要事象
昭和25年 （1950年）	6月 朝鮮戦争勃発 8月 警察予備隊発足			
昭和27年 （1952年）	4月 日米安全保障条約発効 10月 保安隊発足			
昭和29年 （1954年）	7月 防衛庁 陸・海・空自衛隊発足		11月 健軍駐屯地開設	
昭和30年 （1955年）		12月 初代 松谷 誠 陸将	12月 西部方面総監部編成完結	
昭和31年 （1956年）	12月 国連加盟		2月 総監部健軍へ 12月 北熊本駐屯地開設	7月 陸・海総合演習
昭和32年 （1957年）	5月 国防の基本方針決定	8月 第2代 池野 清躬 陸将	6月 託麻原分屯地開設 9月 太刀洗分屯地開庁 12月 玖珠駐屯地開設 別府駐屯地開設	1月 管区対抗指揮所演習 7月 西日本大水害災害派遣
昭和33年 （1958年）				7月 方面隊築城演習
昭和34年 （1959年）		8月 第3代 辻村 義和 陸将	2月 第303保安中隊編成 8月 第3教育団新編	5月 4管区・8混成団対抗兵棋演習 10月 伊勢湾台風災害派遣
昭和35年 （1960年）	11月 新日米安保条約発効	8月 第4代 吉橋 戒三 陸将	1月 方面管区制施行	4月 空地統合演習 10月 西方機関紙「鎮西」発刊
昭和36年 （1961年）	1月 陸上自衛隊部隊改編 13個師団へ		8月 第5施設団新編	10月 管区対抗駅伝大会
昭和37年 （1962年）	10月 キューバ海上封鎖 11月 防衛施設庁発足	8月 第5代 和田 盛哉 陸将	1月 山口 中部方面隊に移管 8月 第４・８師団に称号変更	1月 雪害による災害派遣
昭和38年 （1963年）			8月 第5陸曹教育隊、 相浦から 大村に移駐	4月 38指揮所演習 11月 三池炭鉱災害派遣
昭和39年 （1964年）	10月 東京オリンピック		3月 武器隊・施設野整備隊改編	1月 佐多対空射撃場射撃開始 6月 中央駅伝競技会を北熊本で開催 10月 オリンピック支援 11月 師団対抗指揮所演習
昭和40年 （1965年）	6月 日韓基本条約署名	3月 第6代 関口 八太郎 陸将		
昭和41年 （1966年）	5月 中国 文化大革命開始		2月 飯塚駐屯地開設 2月 第4戦車大隊・対戦車隊、玖 珠へ	9月 陸幕訓練検閲受閲 10月 湯布院駐屯地に行啓・行幸
昭和42年 （1967年）	8月 東南アジア諸国連合結成			10月 健軍駐屯地内・周辺で記念行事

西部方面隊年表②

年	国内外情勢	総監 （着任月）	編成等	主要事象
昭和43年 （1968年）	6月 小笠原諸島復帰 8月 ソ連・東欧チェコ侵入	7月 第7代 荒武 太刀夫 陸将	3月 西部方面ﾍﾘｺﾌﾟﾀｰ隊新編 通信隊、群に改編	12月 中央射撃競技会、十文字原演習場で開催
昭和44年 （1969年）			5月 女性自衛官第1期生59名配置 8月 118教育大隊新編、第3教育団（相浦）へ	2月 方面対空演習 5月 全自ラグビー大会優勝
昭和45年 （1970年）	2月 国産初人工衛星打ち上げ成功 11月 防衛白書発刊	3月 第8代 上妻 正康 陸将		9月 方面対空演習 11月 対空挺演習
昭和46年 （1971年）	7月 全日空機が自衛隊機に衝突		3月 第3高射特科群新編 4月 高遊原分屯地開設	11月 鎮西演習を4師団主力で実施 ホーク米国年次射撃開始
昭和47年 （1972年）	2月 札幌で冬季オリンピック開催 5月 沖縄、本土復帰 9月 日中国交正常化	3月 第9代 堀江 正夫 陸将	10月 那覇駐屯地開設、第1混成群新編	7月 天草大水害災害派遣
昭和48年 （1973年）		3月 第10代 中島 直臣 陸将	1月 予備自衛官室発足 2月 第6高射特科群編合 7月 沖縄防空任務開始 10月 第1混成団本部新編	5月 沖縄における不発弾処理開始 11月 太洋デパート火災災害派遣
昭和49年 （1974年）		7月 第11代 近藤 清 陸将	1月 第5陸曹教育隊、相浦に移動 3月 第4施設大隊、大村に移動 8月 第7高射特科群新設	8月 防御陣地構築訓練
昭和50年 （1975年）			8月 師団音楽隊新編	1月 沖縄遺骨収集支援 6月 6・25 熊本大水害災害派遣
昭和51年 （1976年）	9月 ミグ25函館強行着陸 10月 防衛計画の大綱	3月 第12代 塚本 勝一 陸将	3月 方面輸送隊新編（目達原）	9月 総監部対抗指揮所演習
昭和52年 （1977年）	5月 領海12海里法施行		4月 第3特科群、湯布院へ	1月 師団対抗指揮所演習
昭和53年 （1978年）	12月 日米ガイドライン策定	3月 第13代 加藤 誠一 陸将	1月 総監部、5部2官 部課直列制 8月 別府駐屯地移設 南別府駐屯地開設	6月 渇水に伴う給水支援（福岡）
昭和54年 （1979年）	12月 ソ連、アフガニスタンに侵攻		3月 第8戦車大隊、玖珠に移動 援護教育センター編組	1月 有明演習 11月 方面隊検閲受閲
昭和55年 （1980年）	9月 イラン、イラク 本格的交戦状態に	3月 第14代 河津 幸三郎 陸将	3月 方面輸送隊、健軍に移動 対馬警備隊新編 第41普通科連隊第4中隊、別府へ	8月 他方面区演習（矢臼別） 10月 夜間戦闘演習
昭和56年 （1981年）	1月 日米共同訓練開始		3月 第8師団改編 12月 えびの駐屯地開設	5月 対装甲訓練 12月 八九作戦
昭和57年 （1982年）	2月 日米共同指揮所演習開始	3月 第15代 村松 榮一 陸将		7月 長崎大水害災害派遣 8月 第1回陸上自衛隊演習

西部方面隊年表③

年	国内外情勢	総監 （着任月）	編成等	主要事象
昭和58年 （1983年）	9月 ソビエト連邦 大韓航空機墜落	7月 第16代 齋藤 信夫 陸将		6月 野戦特科部隊、北方へ転地訓練
昭和59年 （1984年）				11月 総合機動演習
昭和60年 （1985年）	8月 日航機墜落事故（御巣鷹山）	3月 第17代 新井 道彦 陸将	3月 川内駐屯地開設	7月 対舟艇射撃訓練開始（佐多） 8月 60陸上自衛隊演習参加
昭和61年 （1986年）	4月 チェルノブイリ原発事故	3月 第18代 水澤 博 陸将		1月 日米共同訓練参加 7月 北方機動特別演習
昭和62年 （1987年）	3月 青函トンネル完成	3月 第19代 荒木 雄二 陸将	3月 第4師団に155㎜榴弾砲（FH-70）導入	3月 市街地戦闘訓練 11月 九州初の日米共同訓練（日出生台・十文字原各演習場）
昭和63年 （1988年）	9月 ソウルオリンピック開催		3月 第8師団に155㎜榴弾砲（FH-70）導入	7月 西方火力演習 11月 対空挺ヘリボン戦闘訓練
平成元年 （1989年）	3月 大喪の礼	6月 第20代 久我 幹生 陸将	3月 対馬警備隊改編	7月 短SAM実射訓練 11月 西部方面隊指揮所演習
平成2年 （1990年）	8月 イラク、クウェート侵攻 10月 東西ドイツ統一		3月 後方支援連隊新編 第3対戦車ヘリ隊新編	7月 阿蘇 一の宮災害派遣（集中豪雨災害） 8月 北方機動演習
平成3年 （1991年）	4月 ペルシャ湾へ掃海艇派遣	3月 第21代 重松 恵三 陸将		6月 島原・雲仙普賢岳災害派遣 11月 日米共同実動訓練（鎮西03演習）（日出生台演習場等）
平成4年 （1992年）	6月 国際平和協力法成立 9月 ＰＫＯ派遣（カンボジア）	6月 第22代 横地 貞 陸将	4月 陸曹候補士制度開始	5月 風倒木予防災害派遣 12月 駅伝中央競技会（南九州）
平成5年 （1993年）	6月 ＰＫＯ派遣（モザンビーク） 7月 北海道南西沖地震		4月 総監部各課に班を新設	8月 中・南九州大水害災害派遣
平成6年 （1994年）	9月 ルワンダ難民救援支援	3月 第23代 新井 均 陸将		8月 戦車・対戦車部隊、米本土にて射撃訓練
平成7年 （1995年）	1月 阪神・淡路大震災 3月 地下鉄サリン事件	6月 第24代 田村 鞆利 陸将		1月 阪神・淡路大震災災害派遣 1月 西方初の日米共同方面隊指揮所演習（YS27）（北熊本）
平成8年 （1996年）	1月 ゴラン高原へ隊員派遣		3月 第8対戦車隊の廃止	2月 TESC方式訓練開始 8月 ゴラン高原へ第2次隊派遣 ロケット・中・重砲実射訓練

西部方面隊年表④

年	国内外情勢	総監 （着任月）	編成等	主要事象
平成9年 （1997年）	9月 新日米ガイドライン策定	7月 第25代 樋山 周造 陸将	4月 ヘリ映像伝送運用開始	
平成10年 （1998年）	2月 長野オリンピック開催 8月 北朝鮮が三陸沖にミサイル発射 11月 ホンジュラス援助隊派遣	7月 第26代 天野 良晴 陸将	3月 第5地対艦ミサイル連隊新編 4月 即応予備自衛官制度導入	10月 地対艦ﾐｻｲﾙ実射訓練（米国） 11月 国内初の米海兵隊との実動訓練を大矢野原・霧島演習場で実施
平成11年 （1999年）	3月 能登半島沖不審船事案 5月 周辺事態法成立			2月 ゴラン高原へ第7次隊派遣 8月 ゴラン高原へ第8次隊派遣 熊本国体支援
平成12年 （2000年）	7月 沖縄サミット開催	4月 第27代 作道 光夫 陸将		10月 陸上自衛隊創隊50周年
平成13年 （2001年）	9月 米国同時多発テロ 12月 九州南西海域不審船事案		3月 西部方面総監部改編	1月 日米共同方面指揮所演習（YS39）（北熊本）
平成14年 （2002年）	9月 日韓首脳会議 10月 拉致被害者５人が帰国	3月 第28代 松川 正昭 陸将	3月 西部方面普通科連隊新編 第4対舟艇対戦車隊新編 第4化学防護隊新編 第8化学防護隊新編	7月 第1回予備自衛官補採用（一般公募15名、技能公募5名） 11月 米海兵隊との実動訓練（日出生台・十文字原各演習場）
平成15年 （2003年）	2月 自衛隊保有対人地雷全廃 3月 イラク戦争勃発 5月 フセイン政権崩壊	7月 第29代 森 勉 陸将	3月 西部方面特科隊新編 西部方面衛生隊新編 西部方面後方支援隊新編 西部方面調査隊廃止	2月 離島災害対処指揮所訓練 7月 水俣市宝川内地区災害派遣 10月 東ティモール第4次隊派遣 10月 米陸軍との実動訓練（OS）（大矢野原演習場、北熊本） 11月 水俣市宝川内地区災害派遣
平成16年 （2004年）	1月 イラク復興支援先遣隊派遣 10月 新潟中越地震	8月 第30代 林 直人 陸将	3月 西部方面指揮所訓練支援隊新編	2月 UNDOF第17・18次隊派遣 6月 中砲長距離射撃訓練（第4師団）
平成17年 （2005年）	1月 スマトラ島沖地震（陸海空自衛隊派遣） 3月 福岡県西方沖地震		3月 西部方面情報処理隊新編 西部方面通信情報隊新編	5月 福岡県八女郡矢部村山林火災に伴う災害派遣（第4師団） 6月 重砲長距離射撃訓練 イラク復興業務支援（第4次）要員派遣 7月 大分県玖珠郡九重町及び日田市水害に伴う災害派遣（第4師団） 7月 第7次イラク復興支援群派遣 9月 台風14号に伴う災害派遣（第8師団、西部方面特科隊） 10月 第8次イラク復興支援群派遣
平成18年 （2006年）	7月 陸上自衛隊イラク撤収完了		7月 自衛隊地方協力本部へ名称変更	1月 日米共同方面指揮所演習（YS49）（健軍） 1月 初めての米国における米海兵隊との実動訓練（IF）
平成19年 （2007年）	1月 防衛庁から防衛省へ移行 4月 熊本城築城400周年祭（ブルーインパルス展示飛行） 7月 新潟中越沖地震	3月 第31代 輪倉 昇 陸将		1月 米国における実動訓練（第8師団） 1月 米海兵隊との実動訓練（第1混成団）（大矢野原演習場） 6月 協同転地演習（北方） 7月 新潟県中越沖地震災害派遣（第4師団、第8師団） 7月 大雨に伴う熊本県美里町災害派遣（第8師団）

西部方面隊年表⑤

年	国内外情勢	総監 （着任月）	編成等	主要事象
平成20年 （2008年）	2月 海上自衛隊インド洋での給油活動を再開 9月 大分国体支援	8月 第32代 用田 和仁 陸将		2月 警察との共同訓練 （第4師団、第8師団） 3月 キャンプハンセン訓練開始 （第1混成団） 8月 鹿児島県霧島市における行方不明者捜索にかかる災害派遣 （第8師団） 11月 自衛隊統合演習
平成21年 （2009年）	3月 アフリカソマリア沖へ海上自衛隊護衛艦派遣 8月 民主党へ政権交代			1月 海兵隊との米国実動訓練 （20IF） 1月 米陸軍との実動訓練（OS） （大矢野原演習場、北熊本）（第8師団） 7月 北九州集中豪雨に伴う災害派遣 （第4師団）
平成22年 （2010年）	1月 日米安全保障条約改定50周年 1月 ハイチ地震に伴う国際緊急援助隊派遣 2月 ＰＫＯ派遣（ハイチ） 7月 国際緊急援助隊派遣 （パキスタン）	3月 第33代 木﨑 俊造 陸将	3月 第15旅団新編 西部方面情報隊新編	2月 UNDOF第29・30次隊派遣 5月 宮崎県口蹄疫にかかる災害派遣 （第8師団、第5施設団） 10月 鹿児島県奄美大島豪雨に伴う災害派遣（第8師団） 11月 方面隊実動演習（鎮西演習）開始 12月 米海兵隊との実動訓練（霧島） （第8師団）
平成23年 （2011年）	3月 東日本大震災 3月 東日本大震災に伴う予備自衛官、即応予備自衛官に対する災害派遣招集 8月 第5次ハイチＰＫＯ派遣	8月 第34代 宮下 寿宏 陸将		1月 宮崎県鳥インフルエンザに伴う災害派遣（第8師団） 1月 日米共同方面隊指揮所演習 （YS59）（健軍） 2月 米国における米海兵隊との実動訓練（IF） 3月 東日本大震災災害派遣
平成24年 （2012年）	1月 ＰＫＯ派遣（南スーダン） 3月 弾道ミサイル等に対する破壊措置命令発令（日本政府） 4月 北朝鮮「人工衛星」と称する弾道ミサイル発射 12月 弾道ミサイル等に対する破壊措置命令発令（日本政府） 12月 北朝鮮「人工衛星」と称する弾道ミサイル発射 12月 自民党政権交代		3月 第4特科連隊改編	4月 弾道ミサイル発射対応 7月 九州北部豪雨災害派遣 8月 米海兵隊との実動訓練 （日出生台）（第4師団） 12月 弾道ミサイル発射対応
平成25年 （2013年）	1月 ＵＮＤＯＦ派遣終了 3月 ハイチＰＫＯ派遣終了 12月 国家安全保障戦略について（26大綱）閣議決定	8月 第35代 番匠 幸一郎 陸将	3月 西部方面対舟艇対戦車隊新編	5月 第4次南スーダンＰＫＯ派遣
平成26年 （2014年）	1月 国家安全保障局発足 8月 広島豪雨災害 9月 御嶽山噴火災害		3月 第15高射特科連隊（那覇）新編 第4特殊武器防護隊新編 第8特殊武器防護隊新編	6月 防衛大臣の部隊視察受け
平成27年 （2015年）	4月 ネパール地震に伴う国際緊急援助隊派遣 6月 戦後70年沖縄全戦没者追悼式 9月 平和安全法制整備法案、国際平和支援法案、可決成立	8月 36代 小川 清史 陸将	3月 与那国準備隊新編 西部方面情報隊新編 水陸機動団準備隊新編	5月 第8次南スーダンＰＫＯ派遣 5月 鹿児島県口永良部噴火災害派遣 6月 豪州における米海兵隊との実動訓練（TS） 10月 西部方面隊創隊60周年記念行事 11月 福岡県・佐賀県・長崎県における原子力防災訓練

西部方面隊年表⑥

年	国内外情勢	総監 （着任月）	編成等	主要事象
平成28年 （2016年）	2月 弾道ミサイル等に対する破壊措置命令発令（日本政府） 2月 北朝鮮「人工衛星」と称する弾道ミサイル発射 4月 熊本地震		3月 与那国沿岸監視隊新編	2月 弾道ミサイル発射対応 4月 熊本地震災害派遣 10月 第15旅団による緊急患者空輸9,000回目の任務実績 11月 日米共同方面隊指揮所演習（YS71）（健軍）
平成29年 （2017年）	7月 九州北部豪雨	8月 第37代 湯浅 悟郎 陸将		7月 九州北部豪雨災害派遣 12月 米海兵隊との実動訓練（大矢野演習場、高遊原）（第8師団）
平成30年 （2018年）	3月 陸上総隊新編		3月 第8師団改編（機動師団へ） 水陸機動団新編（相浦） 西方混成団移駐（久留米） 西部方面戦車隊新編（玖珠）	4月 大分県山崩れに伴う災害派遣 7月 平成30年7月豪雨災害派遣 12月 米海兵隊との実動訓練（日出生台、十文字原）（第4師団）
平成31年 令和元年 （2019年）	5月 新天皇即位 5月 鹿児島屋久島豪雨 6月 米朝首脳会談（板門店） 8月 令和元年８月豪雨 9月 日露首脳会談（大阪）	4月 第38代 本松 敬史 陸将	3月 第4師団改編（地域配備師団へ） 奄美警備隊新編 宮古警備隊新編	5月 鹿児島県屋久島における豪雨による孤立者救助・救出に係る災害派遣 8月 佐賀県における人命救助、生活支援等に係る災害派遣 9月 国内における米陸軍との実動訓練（矢臼別演習場、大矢野演習場、奄美駐屯地）（第4師団） 12月 日米共同方面隊指揮所演習（19YS）（健軍）
令和2年 （2020年）	1月 新型コロナウイルス発生 3月 東京オリンピックの延期毛決定 4月 新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言発令（日本政府） 7月 令和2年7月豪雨	8月 第39代 竹本 竜司 陸将	3月 第15情報隊新編（那覇） 第302地対艦ミサイル中隊新編（宮古島）	4月 新型コロナウイルス感染症対処（患者輸送） 7月 令和2年7月豪雨に係る災害派遣 9月 令和2年台風10号に係る災害派遣 10月 方面隊実動演習（02鎮西）（日出生台、大矢野原、十文字原） 11月 鳥ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞに係る災害派遣 12月 日米共同統合演習（KS21）（九州・沖縄） 12月 日米共同指揮所演習（20YS）（健軍）
令和3年 （2021年）	2月 新型コロナワクチン接種開始 2月 ミャンマーでクーデター 7月 東京オリンピック開幕 8月 ハイチ地震（Ｍ７．２） タリバン、アフガン制圧 9月 岸田内閣発足		3月 第301電子中隊新編（健軍） 第347高射中隊新編（竹松） 第373買会計隊新編（都城）	5月 自衛隊統合防災演習（03JXR） 8月 令和3年8月豪雨に係る災害派遣 9月 陸上自衛隊演習（03陸演） 10月 比国軍に対する能力構築支援 11月 方面隊実動演習（03鎮西） 自衛隊統合演習（03JX）

西部方面隊年表⑦

年	国内外情勢	総監 （着任月）	編成等	主要事象
令和4年 （2022年）	1月 トンガで海底火山噴火 2月 北京冬季オリンピック開幕 ロシア軍、ウクライナ侵攻 5月 沖縄復帰50年 7月 安部元首相、銃撃事件 12月 安保3文書改定		3月 第102高射特科隊新編（竹松） 3月 第303地対艦ミサイル中隊新編（石垣） 3月 自衛隊別府病院閉院	1月 日米共同統合演習（KE22） 2月 方面隊指揮所演習（03鎮西） 6月 自衛隊統合防災演習（04JXR） 8月 米陸軍との実動訓練（OS22） 9月 方面隊実動演習（04鎮西演習） 9月 台風14号における行方不明者捜索（宮崎県三股町） 11月 西部方面音楽隊初の海外演奏（オマーン軍楽祭） 日米共同統合演習（KS22） 日米共同方面隊指揮所演習（YS83） 11月 高病原性鳥インフルエンザに係る災害派遣
令和5年 （2023年）	2月 Ｇ７首脳会議開催（広島） 4月 宮古島沖陸自ヘリ（UH－60JA）航空事故 4月 フィンランド、ＮＡＴＯ加盟 5月 新型コロナウイルス感染症「５類」移行 10月 ハマスによる対イスラエル大規模作戦 11月 北朝鮮、偵察衛星打ち上げ成功	3月 第40代 山根 寿一 陸将	3月 八重山警備隊新編（石垣） 3月 第304地対艦ミサイル中隊新編（健軍） 3月 第302多連装ロケット中隊新編（湯布院） 3月 第322基地通信中隊石垣派遣隊新編 3月 第349高射中隊新編（飯塚） 3月 西部方面移動監視隊新編（北熊本） 3月 奄美駐屯地業務隊新編 3月 宮古島駐屯地業務隊新編 3月 石垣駐屯地業務隊新編 3月 与那国駐屯地業務隊新編	1月 日米共同演奏会（沖縄） 1月 自衛隊統合演習 2月 日米共同統合防空ミサイル防衛訓練（RS23） 6月 宮古島沖陸自ヘリ（UH－60JA）航空事故に係る葬送式 12月 日米共同方面隊指揮所演習（YS85）
令和6年 （2024年）	1月 能登半島地震（震度７） 2月 日航機、海保機と衝突炎上（羽田空港） 7月 パリオリンピック開催 10月 石破内閣発足 12月 韓国大統領、「非常戒厳」を宣言	3月 第41代 荒井 正芳 陸将	3月 第304地対艦ミサイル中隊移駐（勝連） 3月 第7地対艦ミサイル連隊新編（勝連） 3月 第2特科団改編（湯布院）	7月 国内における米海兵隊との実動訓練（RD24） 9月 比国軍に対する能力構築支援 10月 陸上自衛隊演習（06陸演） 12月 日米共同方面隊指揮所演習（YS87）
令和7年 （2025年）	1月 イスラエルとハマス、ガザ停戦合意 1月 トランプ米大統領就任 3月 愛媛、岡山両県で山林火災 5月 備蓄米、20万トン放出開始 10月 高市内閣発足 11月 大分市佐賀関大規模火災	8月 第42代 鳥海 誠司 陸将	3月 第8地対艦ミサイル連隊新編（湯布院） 4月 佐賀駐屯地業務隊準備隊新編（目達原） 7月 佐賀駐屯地開設 8月 輸送航空隊移駐完了（木更津駐屯地から佐賀駐屯地へ）	3月 山林火災に係る災害派遣（愛媛県） 7月 自衛隊統合防災演習（07JXR） 7月 浸水被害に伴う災害派遣（大東島） 9月 国内における米海兵隊との実動訓練（RD25） 11月 自衛隊統合演習（07JX） 11月 大分県大分市佐賀関市街地火災に伴う災害派遣

特 別 編

ＯＢの活動記録

猪　熊　文　雄　氏

（昭和５２年西部方面総監部営繕課長を最後に定年退官）

※「回想の自衛隊」より

今を生きる（自衛官、司法書士の記録）

先人樹を植えて後人涼をとる

若干大袈裟かも知れないが、人生のすべてを捧げてきたつもりの自衛隊をあと一年以内に去らねばならない。と思うと一抹の淋しさとともに何かを部隊の為、後輩の為に残したい。という気がして真剣に考えた。

早朝静かに心をととのえて神想観という座禅をしているとき、先輩市議阪本富氏の名言、「先人樹を植えて後人涼をとる」が突然頭に閃いた。「これだ!!植樹だ!!」何処に？健軍駐とん地東側ダ!! 小鳥を招待しよう。 と連続的に神の啓示とも思える素晴らしいアイデアが次々に湧き出て来た。

植樹の時期は今が適期、この月を逃がしたらもう在職中に植えることは出来ない。早急に、しかし苗木購入用の予算など全くない。植える場所は、健軍駐とん地東側の弾薬庫地域約十万坪、草茫々として蚊の発生源、周辺市民から色々と迷惑がられている。これを維持する為には、ここに一大森林を造って、四季折々に花が咲き、野鳥が常にたわむれる自然の森にして周辺住民の理解を得るようにしなければ、弾薬庫周辺の、（保安地域）は残せないという情けない法的状況下にあるため早速駐とん地司令、方面総監の許可を頂き植樹作戦を展開したが、何もなしの無手勝流、再び朝の神想観中に「市役所の緑化推進のすすめ」が啓示され、早速緑化推進課に趣き、当方の事情を説明し、無料で苗木を寄附してくれるところはないか？とお願いしているとき、四・五人の真面目そうな人達が、何処かに樹を植えさせて頂くところはないか？寄附を受けてくれるところはないか!! 貰いたい方とやりたい方が偶然にも寸刻たがわず何の打合せもなく市役所の緑化推進課で遭遇するとは、人間智では計り知れない気がして、思わず神に感謝した次第です。

早速契約が結ばれ、約四千本の千原桜（熊本にしかない桜で原種が一本焼け残ったのを地元の有志の方々が保存会をつくって、自分達の田畑を提供して苗木を育てられたもの）を無償で寄附して頂き、そのほか、 楠など常緑樹を、これ又竜田町の有志で親子二代に亘って熊本市内に十万本の楠の木を植えつづけているという奇特な、河喜多氏から寄附して頂き、業務隊の山口管理科長をはじめ沢山の人々の協力を得て一大植樹作戦が展開された。

作戦展開に当って植樹祭と名うって近藤清方面総監のご臨席を頂き、 駐とん地司令主催のもと、県知事 （代理）市長を始め、内外来賓の出席のもとに、千原桜保存会の皆様、竜田町の河喜多様及び明午橋―大甲橋間の右岸に戦災の焼跡をコツコツと一人で整地し、自費を投じて植樹し管理し見事な公園（本人の名にあやかって鶴田公園）を創り上げ今なお黙々と手入れに励んでおられる南千反畑町の鶴田絲平様（方面総監部施設課鶴田技官の尊父）に感謝状が贈呈され、出席者全員が一本づつ記念植樹をしたのであるが、そのとき記者会見をして、『これから二十年後に阿蘇と金峰山と竜田山の小鳥達をこの森に招待して、小鳥達の大パーティをやります』とおおみえをきった次第です。

あれから十年、苗木は幼木となり成木となり確実にあと十年後に迫ったパーティーの舞台作りをしています。

来年あたりからは遅咲きの千原桜の花見客で賑うことでしょう。

熊本でしか見ることのできない千原桜、四月上旬の桜祭りが健軍駐とん地の前通り、吉野桜（これも著者等が補植し手入れした桜）の花見であるならば、四月中旬の桜祭りが、 健軍駐とん地裏通りの千原桜の花見が盛大に行なわれ、市民の皆さんに楽しい憩の場を与えることを祈念している次第です。

停年万歳

停年迄あと千日、九百九十九日、 九百九十八日……と一日一日少なくなっていくときの気持、それは丁度秋の日差しが毎日毎日畳の一目ずつ短かくなっていくように、一日暮すごとに残りが確実に一日ずつ減っていく。

マラソンランナーが、最終の直線コースに入って、決勝点がかすか彼方に見えて来た。これで何とか完走できるであろう喜びと、ヤレヤレやっとここ迄来たという安堵感が交錯して、これ迄張りつめていた風船が徐々にしぼんでいくような淋しいような妙な気持であった。人間目標を失うと、実にダラシないものでありそれは恰も自分の行くべき目的地なしに自転車に乗っているようなものであり、倒れない為にペタルを踏んでいるぐらいキツイものはない。

日曜日の朝、玄関に投げ込まれた新聞の片隅に「自由業、死ぬ迄出来る司法書士」「高収入を保証される土地家屋調査士」の文字が目に飛び込んだ。今迄であれば気に止めなかった。自由業や高収入、まして死ぬ迄できるとあっては!!

決勝点に見えていたラインが、出発点に見えて来た。夕日に見えていたのが、光り輝やく朝日になった。 何と人の心の変わることよ。こちらの心が変わると一瞬に周囲が明るくなった。思わず万歳!!停年万歳である。

堀江総監に「部隊を沖縄へ移駐させるに、さきだって官舎用地を買収しろ」との命を受け、単身初めての外地（その当時は外国）へ乗り込んだ。那覇空港に恐れ多くも二人の一佐殿が出迎えておられる。何はともあれ車に乗り込むや否や「用地買収の行動方針や如何？」ときた。まるでCGSの試験のようである。

珍らしい外国風景、アメリカ一色に色彩られた街並み、西部劇の中に出て来そうな看板、見るものすべて鮮かな原色、ＣＧＳ問答に回答の出来るはずはない。こちらは構えなき無構え出たとこ勝負、自在無碍であると、開きなおった。一佐殿に回答しないうちに那覇防衛施設局に到着である。

連れていかれた先は建設部長のいかめしい部屋である。ソファーに座って暫く待つと、数人の人が待っているのを後廻しにして部長が、こちらに来てくれた。何とそれは昔から知っている大和国彦氏ではないか。二十年経ってもその時の流れを感じさせない懐かしい青年大和係長様である。まさか私が今を時めく建設部長の友人とは二人の一佐殿が、ビックリして御座る。大和氏の活発な行動は年をとっても変らない。用件を聞くや否や、業者の名簿を見ながら片っ端しからの電話、沖縄全員が不動産屋といわれていると聞いて来たが、まさにその通り、各建設業者とも日本復帰の一大転換のこの際に、 どさくさにまぎれて一かく千金を目指しているのであろうか？

出るわ出るわ官舎適地が、現地を見てのお楽しみと部長殿直接御案内のもと、那覇めぐりとしゃれ込んだ。 那覇市はおろか沖縄のすべてが一望に見渡せる、いわば沖縄本島のへそにも当たる浦添の高台、まさに一等地である。

早速、緒方幕僚長に報告、任務完了一週間の慰労休暇を頂いて万々歳。

米軍兵舎の一角に間借りしている先発隊の幹部宿舎のうす汚れたベッドの上で、天井を這い廻っているヤモリを眺めながら、この時程、内から湧き出る喜びを感じたことはなかった。人の有難さである。大和国彦という大人物をまさに名前のとおりの素晴らしい人を友人にもっておったが為に、そして又彼が、私にとっては一大事の時に一番適当な役職につき、その彼のもとに案内してくれた二人の一佐殿総てが、堀江総監の厳命を達成する為に創られた神の構図としか思えない。

只今、有難うございますの気持であった。

任務達成の安堵感からゆっくり休んだ枕元に「方面総監部から電話です」の声に飛び起きた。
米軍回線を利用しての電話で仲々聴きとり難かったが、司令部からの伝達で、官舎用地について、浦添は駄目だ!!とのこと。何故かといえば浦添は革新市長で官舎を建てても入居の登録が拒否される、下水の排水が許されない、子供の入学が出来ないとのこと、これでは全く無茶苦茶だ!!何の為に家を建てたか判らなくなってしまう。それでは「何処が悪くて何処の市が良いのか教えろ」といえば、那覇市、コザ市（現沖縄市）浦添市が駄目で、糸満市、東風市、具志頭等の町村は良いとのことであった。双六は振り出しへ、舞いもどされたのである。さて、これから頑張るぞ!!と勇気凛々である。
地図を展げての検討、陸上自衛隊予定地へ一番近くて、先ほどの条件を満たす土地は？それは、糸満市がグッーと北へ張り出して、那覇市と小溝一つで区切られている阿波根である。ここならば糸満市行政区でありながら、部隊へは那覇市内と同じである。
ここだ!!と決めて、再び防衛施設局建設部長室へ、又も一杯の面会待の人をそっちのけに熱心に相談にのって戴いた。建設業者リストを一生懸命調査しているとき、私達の様子を不満そうに眺めていた待人の一人が、部長に耳打ちした。部長はその若者を私に紹介してくれた。それは株式会社大手建設のＡ君であった。
Ａ君は、本社から出向している模範的なやり気社員であった。
その頃の沖縄には「大和チュウ」という内地からの企業が資材置場などの名目で到るところ土地を買いまくっていた。大手建設もその類にもれず、沖縄南部に数ヶ所の土地を買い込んでいた。それを二人で見ていくうちに私が地図で調べたピッタリの土地が最後にあった。はやる心をおさえながら、この土地を巡っての下調査をすることにした。境界は？排水先は？隣接所有者は？行政区域は？学校は？買物は？部隊への交通は？整地工事はできるのか？等々現地における調査とともに、法務局へ行っての所有権者は？抵当権がついていないか？字図と合致しているか？地積、地目？などなど登記所での調査は始めであったが、これが将来司法書士資格取得に当って大変為になった。
人生何が、どこで、その人にとって大切なものとなるか全く不明であるが、司令部の指示によって双六が振出しにもどらなかったら、このチャンスもなく、このチャンスがなければ今日の素晴らしい司法書士の仕事も出来なかったと思うと、感謝せずにはいられない。ただ有難うございます。
すべての調査が終って大手建設との売買契約が締結され、やがて白亜の官舎ができることとなったのである。
第一の攻撃目標は比較的容易に達成できたが、これだけでは沖縄部隊の営外者を収容するには不十分である。もっと大規模な官舎用地が必要である。むしろ、これからが本当の主陣地に対する攻撃である。用地買収も二回の試練を経ると一介の不動産屋である。地元の不動産屋が色々と言いよって来る。俗にいう「千三つ」の言葉のとおり千に三つ本当があればよい、というが、仲々真面目な不動産屋は、という懐疑心がこちらにあると、折角真面目な人が素晴らしい情報をもって来ても何かウサン臭いと、しりぞけてしまう。
真実が判明できない者にとってはすべてが信用できない。特に全人口総不動産屋といわれた復帰前夜の沖縄にあってはテンヤワンヤの有様である。
因みに当時の沖縄の土地管理行政の状況は、戦争によって、土地台帳も字図も登記簿もすべて焼かれてしまい、所有権や抵当権等権利関係を証明する一切の基礎資料は灰塵となって消え去り、現地においては、敷地間の境界はもとより、字界や区域界の目印となる小川や小溝、里道や農道等の長狭物も米軍の戦車やブルドーザーによって胡散霧消してしまい、当局も困りはてて自主申告をさせたところ、合計面積が沖縄本土だけで四国の面積と同じとなったという笑い話がある程、メチャクチャであった。それを現実に合致するよう大変な努力がなされたのであろう。毎日毎日法務局の書庫に通ううちに当局の苦労の程がしみじみと解るようになった。扨て、攻撃準備も序々に進展し、二人の信頼のおける不動産の関係者と地元の有力な土地家屋調査士与那嶺氏の協力が得られることになり、一応の部隊編成は整った。

攻撃目標は、部隊と与座地区のレーダーサイトに最も便利な嘉数地区の丘陵地帯である。一筆の面積がせいぜい百坪平均の土地を三万坪もまとめて購う為には数百人の地主全員が同意してくれなければならない。例え一人の反対も許されないのである。又沖縄では予想以上に、むしろかたくなな程に墓を大切にし、買収区域内に墓地があったら何百人の同意を得てもそれは無に等しいことになるのである。登記簿で墓地のないことを確認しているとき全く予想外の地目に対面した。

それは拝所（うがんしょ）であり内地ではお目にかかることのできない地目である。早速地元の元老又吉地連部長に夜間であったが電話した。 それは湧水のあるところで、水の少ない沖縄の人々にとっては、それはまさに聖地であり神の恵が現象界に顕れ出たる処として敬崇の対象となったところと教えられ、候補地の真ん中にそれなる拝所が鎮座ましますのである。大変なことにはなったが参ったとお手あげする訳にいかない。何とか解決する方法はないか。それは、東風平の部落総会の決議によって承認して頂くほかに手段はない。

沖縄全土に自衛隊反対の運動が渦巻くなかで、毎日毎日ゲートの前には自衛隊移駐反対の厳しいデモ行進が行なわれている状況下に、数百人の地主の全員が或いは地主でなくても東風平地域に何かの関係があってもなくても、自衛隊に反対する努力がこの拝所問題に介入されたら絶対に取得することは困難となる。

最近問題となっている横須賀の米軍弾薬庫（国有地）跡地に米軍の官舎を作ろうとしている以上に、他人のしかも反対者多数いる中でこれを買収して、彼等が目の敵、不具戴天の敵としている自衛隊の官舎を作ろうとするのであるから並大抵のことではない。それはまさに楠正成の千早城以上の機略に満ちた戦術であった。

それも殆ど早朝における自己の心を空しうして神の経示ともいえる神聖なる不思議な力を受けることがしばしばあり、これをすべて信用して実行して下さる与那嶺調査士等地元の人々の協力は本当に有難かった。

これらの行動方針は科学的な思考過程は一応経たのかも知れないが、 殆の場面が、ネグレクトされ、それはあたかも直感に近い感じで示顕された。

その例をあげると、私が如何に奮闘しようとも自衛隊の自の字でも出せば必ず反対分子が現れる。そこでこれを偽装する為に何か機略を用いる必要がある。当時沖縄で一番信頼されていたのがTKである。沖縄随一の白亜の殿堂TKホテルの名は、 当時のテレビの人気者、ゲゲゲの鬼太郎の名と同等に子供でも知っている状況であった。

これが為にまずＴＫ建設（株）に買収して頂くことを提案した。

建設部長を始め施設庁側もOK、勿論部隊側も異存なし、その日から TK建設の社員になりすまして行動開始である。このことが停年後の仕事に大変な利益となったのであるが神ならぬ身将来如何にその影響が現れるかは全く思慮の外であり、只々今を一生懸命努力するにありと、十二時から地主を集めて会議することしばしば、十二時とは夜の十二時である。内地では考えられないことであるが、昼の十二時は熱くて昼寝の真最中、やおら太陽が斜めに傾き始めた頃から活動が始まり、夜の十二時頃からがやっと人が集って来るのである。交渉が段々と煮つまっていくに従っていろんな問題が具体的に浮きぼりになって来た。

問題点のその一、不思議な話

一人の御主人に四人の奥さんが戸籍上存在した。これも又吉地連部長に教えを請うたところ、「それはあり得ること」との回答であった。

早速四人の御夫人について一人一人相続権の有無を調査したところ何れも一人ずつの子供がおり、その子供達の同意が絶対条件となった。ところが三人の子供は容易に同意書と印鑑証明書の入手ができたが、一人の子供のみ所在不明である。戸籍上抹消されていないから何処かに生きているに相違ない、生きている限りは絶対無視することはできない色々と突込んで調べていくうちに、まさに戦場となった沖縄でなければ想像も出来ないような嘘のような本当の話しである。

戦争で焼かれてしまった戸籍原簿を復現する為に各人が申告を行ったのであるが、申告しなかった者も親や兄弟の申立によって復現されたのであろうか、一番最後の奥さんの一人娘Ｔ子は、自主申告のときに、本来の本籍地東風平の役場にすべきところを親のつけた名前は嫌いといって隣の糸満市にＳ子と偽って届出たのである。従ってT子として相続権があるにもかかわらずT子はＳ子となって現存することとなったのである。サスペンス小説にもなりそうな嘘のような本当の話しである。

これを面白がっていては夜が明ける。早速土地を一番売りたがっているように見受けられる地元代表の一人に、ＴＳ如何であろうとも当方が必要なのはＴ子の印鑑証明とＴ子の同意書である。遺産分割協議書を作ってやって捺印すべき場所と必要書類を指示し終ったときは、カテイサークのボトルが空となり、東の空が白ずんで来た頃であった。

Ｓ子は噂によれば、米軍のサージャントと立川へ行っているとのこと。色々と役所間の免倒な手続きを経るならば内地の家庭裁判所の許可などを考えると二ヶ月はかかるのではと？二ヶ月も経てば部隊は移駐してしまう。第一、一ヶ月もこのままにすればこちらの正体がばれて又振り出しに舞いもどされそうな臭いがする。何としても一週間位の内に解決しなければ、という気持で一生懸命念じ祈るほかはない。

ところが翌日の十二時、例の男が書類一切を整えて現れたのである。間違いなく村長の発行した印鑑証明と本人の捺印である。深くしん酌しないで、その苦労を謝して喜んで受領する。

沖縄は古来進取な気性に富み海外に進出されている人が多く、当該地域内だけでもハワイとブラジルに出国され、相続ができていない家族が二組も現れた。ぐずぐずはしておられない。早速日本政府の代表総合庁舎におもむいて、大至急の渡航手続き、それも防衛庁の名を出すことは絶対オフレコ、慎重なうちにも敏速に人間関係をフルに利用しての押したり引いたり笑ったり泣いたりの強引なかけ引き、普通の手続きでは考えられないスピードで翌日にはそれぞれの地元代表が必要書類をもってハワイとブラジルへ飛んで行った。

又意外に多かったのが、台湾とフィリピンの人達の抵当権である。当時の沖縄が八百屋さんや駄菓子屋さんに至る迄、外国との輸出入手続 （免倒な手続き）を行なって、軽易に外国貿易をやっていたことがうかがえるのである。

これらもすべて抹消しなければならない。現金を渡して相手に担保権を解除させる以外に方法はない。こうなると国が当事者であれば小廻りがきかない、幸いこちらはTK建設である。そのあたりのことは本社の方で可成り有難い対応をして頂いた。

それぞれの側面攻撃、各個攻撃は着々と進められ、外掘りは徐々に埋められて行った。

愈々残るは買収予定地の真ん中に鎮座まします拝所の移転対策である。 これが為には部落総会の意志決定が必要である。

着手してから数ヶ月夜と昼との転倒暮しである。夕方になるとコソコソと起き出し、昼間は寝て暮し、それも妙な編み笠をかぶってよれよれのズボン（一ヶ月位で帰れると思って準備してきたのが既に二ヶ月を過ぎたので）現地調達の服装、色黒くなって格好はまさに沖縄ンチュウであるが、言葉がどうも馴染めない。

乗り合わせたタクシーの運転手が（地主の一人であることがあとで判った）どうも頭をかしげているようである。なるべく早く正体がばれないうちに売買締結完了としなければならない。

部落総会の前に味方となって頂けそうな人達との打合せ、拝所の移転先の下交渉など、周到な準備のうちに手取り早くやっていく、内地の人達もそうであるが、沖縄の人達は特に個人個人となる素晴らしい仏のような人達である。数ヶ条の条件は出されたが一応本筋では了解して頂いた。これでやっと九分通り片づいた。 あとは愈々調印式である。

ＴＫホテルで一番上等な部屋を貸り切って、地元のお百姓さん達が初めて見るような明るく美しい豪華な調度、素晴らしい雰囲気の中で地主の皆さん達がガヤガヤやっているうちに、東京の本社から小林部長が売収代金数億の現金を自衛隊が始めて特別に民間へ提供した空飛ぶ重役室 ＭＲに乗せて雷雲の中、物ともせずと言いたいが、相当にゆられながら六時間の空の旅を経て那覇空港へ。そこからは警務隊のパトカーに護衛されてＴＫホテルへ直行。目を見張るなかでの現金での支払い、署名調印やれやれとやっと終った。

陸幕に強引に掛け合ってＭＲ機を飛せて頂いた橋本一佐ありがとうございました。素晴らしいフィナーレのうちに幕はおろされました。

あれもこれも一切人様のお陰でできたと思う。只有難うございます。

このすべての基礎となった命令を附与された堀江総監に万腔の感謝を捧げるとともに、就中色々な法令の制約の中で自由奔放、やりたいようにやらせて頂いた緒方幕僚長、松永行政副長、要点要処で必ず素晴らしいアイデアを企画して頂いた橋本四部長、更にあとで米軍関係などでも素晴らしい指導をして頂いた松原四部長、地元の与那嶺文雄社長、宮島勅雄社長、そして最も理解ある協力を常に友愛のうちに示して頂いた大和国彦建設部長、この舞台劇の最大のスポンサーとして御支援頂きました小林ＴＫ建設株式会社取締役に最大の感謝の念を表する次第です。

沖縄での用地買収という特殊な任務が部隊訓練では絶対に得られない貴重な体験となり、停年後の私の生きる途を決定する因となり、停年万歳と喜べる種がこのときに播かれたのです。

沖縄の悪戦苦闘も私にとっては大変有益な経験と勉強の成果を残して大成功裡に任務を完遂した。

その後、別府駐とん地移転の問題についても、この体験が大変自信となり、一切を解決するうちに愈々停年迄一年以内となり、カレンダーの中に停年の日が書き込めるようになって司法書士の受験も準備完了。

任務を与えられ、それを達成する為に、その時その時の「今」を一生懸命やって来た。その積み重ねが開花する時の到来である。一日は二十四時間、これは総ての人に平等に与えた天の宝である。この宝を無偽に使い捨てるか、有効に活かすかはそれぞれ本人の自由である。

勤務時間は概ね九時間、睡眠時間七時間、残りの八時間、これが私に与えられた自由時間、毎日八時間勉強すれば四時間授業の学校に二つ同時通学したことになる。これを三年続ければ二つの学校を同時に卒業したこととなる。しかし人間には人との交際もあれば健康を保持する為の運動もやらねばならない。しかし、それらの時間は大したことではない。 何に消費したか判らない時間が意外に多い。仮りに一日のうち三分の一を生かす人が七〇才迄生きたとすれば、ボンヤリして過した人より二十年も長生きしたこととなるのです。等々屁理屈をつけながら自らの時間管理につとめた。来年七月停年後に目標をセットし、今年は司法書士の合格を予行演習のつもりで七月の第一日曜日受験する。

何才になっても試験は嫌なものである。若い人々の中に一人オジンが場違いの格好である。本番は来年、今年は予行演習気楽なものである。かえってこれが良かったのでしょう。 解らなくて迷うようなものはなく、若干の時間を残して完了。ヒョッとすれば奇蹟が顕れるかもしれない、 と思いながらも仕事に追い廻わされているうちに三ヶ月が過ぎた十月始め、法務局長から一通の封書が届けられた。余り期待してもいなかったので何かしらと軽い気持で開封したところ、一次・二次合格、三次面接の通知であった。

来年でよいと思っていたのが、と若干の計算違いに戸惑いを感じながら面接に行った。五十才を過ぎて物に動じないつもりでいても面接の試験となれば緊張せざるを得ない。しかし、それも試験官室に入場する迄最敬礼して頭をあげるとニコニコ笑顔の法務局長と北野総務課長、何れも顔なじみ、試験で選考というより注意事項の説明など気楽な雰囲気、防衛が成り立って始めて司法行政も存在する、できることなら停年まで自衛官として勤務したいと申し出たが、次年度試験の七月迄に開業しなければいけないとのことであった。停年日より六ヶ月前の退官であったが、かえってこれが将来大変役に立つこととなるのである。

自衛官としての素晴らしい生活に愈々終止符をうち、新しく生れ替る日が目睫に迫った。再就職する為には自衛隊における階級はあまり問題にされず、むしろ邪魔になることさえあり、企業としてはやり気が階級である。特に熊本は軍都として栄えた街であり、今でも人の位の高さの目安として旧軍人の階級が生きているところがあり、貴方は一佐で元大佐ですか、それでは気易く物を言えないと敬遠される。従って一佐以上の方を地場産業で使いこなすところは極めて稀となり、援護センターは大変苦労しているようです。若干横道にそれましたが、私は停年でなくて半年前退官となったので、制服を脱ぐ日が急に早くなり大変である。事務所の開設、書類の準備、事務員の採用等テンヤワンヤ、しかしながら皆さんの温かい協力によって一応準備万端である。愈々最後の日、駐とん地正門前の見送り、これ迄それ程感じなかったが愈々お別れであると思うと借別の情が一気に込み上げた。

始めがあり終りがあるのは現像界の法則であり、生者必滅会者定離の諺のあるように、如何に親子、兄弟たりともその法則からのがれることは肉体を超越しない限り困難なことである。

通常であれば事務所開設後三年間は仕事は勿論、相談ごとも殆どなく閑古鳥が鳴くのが常道とのこと、自衛隊出身者はさすがに違う。

時恰かも、建設ブーム熊本でもその波にのり、黒石原演習場に隣接するすずかけ台の開発の最盛期七百五十区画の登記を全部依頼するから宜しく頼むといって来たのは外ならぬ沖縄で共に苦労し、東京から沖縄迄六時間お金と共に悪戦苦闘したＴＫ建設の小林常務である。世の中の人の絆の不思議な縁に今更の如く畏敬の念をもった次第である。この厚意は有難く涙が出るように嬉しかったが一応おことわりし、新たに建物の登記のみをお受けすることとした次第なり。

そのお陰で更に大いなる仕事が舞い込むこととなるのであります。

何れにしても人様のお陰で実に素晴らしいスタートが出来ました。

人は最高の財産

「お客様は神様です」は、歌手三波春夫の有名な言葉ですが、私は、「人様」が私に与えられた最高の財産と感謝しています。

退職した自衛官にとって、何をするにも「人」だけが資本ではないでしょうか。資産を蓄積し、又は先祖から相続をうけた人は例外として、大部分の人達は、長年自衛隊で鍛えた肉体と精神が目前のものであり、資本となるのは陸上自衛官十五万人であり、退職隊員県下八千名であり （特に熊本では六軒に一軒は自衛隊又は旧軍関係者の家と言われている。）この人々、この家々が自衛隊退職者の最高にして唯一の人的資本と思う。 即ち、自衛隊出身というだけで共通の心が他人行儀の皮の一枚を脱がせてくれるのです。あとは真実一路、決して相手を裏切らない心で接しておれば、例え結果がその人の期待に十分そえなくても当方の心は通ずるものであり、金や物の資本は使えば減るが、人という財産は使えば使う程段々増えていくのです。目の前の景気不景気にとらわれず、最高の財産を持った自衛隊退職者です。今日一生懸命頑張ろうと湧気凛凛、出発つ。

「如何なる宝も知らない間は無に等しい」

仏教の有名な法話に、貧乏な乞食ボロボロの衣をまとい道端で物乞いをしている友人を見つけた大金持ちがその友人の乞食に同情して乞食が用便に行っている間に何かこの友人に与えるものはないかと思って持物を捜したが持ち合せがなく、身につけていた数千万円もするダイヤの装身具を贈ることにして、そこにおいてあった乞食の上衣の内ポケットに入れて去った。

一週間後同じ道を通りかかると例の乞食が道端に同じ姿で三日も何も食っていないと今にも死にそうな顔をして座っている。

大金持曰く、「君は大金持になっているのに何故そのようにしているのか」乞食「僕は何も持ってないよ食べるものさえないのだよ、何か恵んで下さい」と、そこで大金持は乞食の上衣のポケットを示して、「ホレ、このように君は数千万円もする宝石をもっているではないか」最高の宝を持っておっても、それを知らない間は無いのに等しいのです。

我々自衛官出身者は使えど減らず使えば使う程増えていく無尽蔵の宝をもっていることを自覚し、それを使う方法を考えることが大切です。どんな宝石でもそれを持っておるのみでは、腹一杯になることもなく、寒さを防ぐことも出来ません。宝石を換金しなければならないように隊友という人的宝を有効にする為には隊友会に積極的に入会し、活動し、その会が大いに発展することが、即素晴らしい人的財産となって隊友自身を豊かにすることです。

事故が変じて飛躍となる

出勤すると室内の空気が何時もと違う。何かあったなと感じた途端!!「班長大変です」「何かあったのか」「日出生台で大砲の射撃中事故があったでしょう。弾丸が演習場外の炭小屋の近くに落ちて」やや論理性を欠いだ順序不同の報告、「判った、その先は知っている」と最後まで聞かずに部長室に飛び込んだが、さっぱり要領を得ない。部長の方がかえって情報を得ておられて、それによれば、今日八時半頃日出生台周辺の人達が「日出生台射撃反対」の幕旗を立てて方面総監に陳情におしかけるとのことで、その対応の一切を建設班長たる小官へ命ずるとのことであった。

日出生台演習場は西日本唯一の大砲の実射訓練ができる特科部隊にとって極めて貴重な存在である。第二部からの情報によれば、S氏をリーダーに数十人が大変な勢いでおしかけて来つつあるとのこと、時あたかも日出生台とは指呼の間にある蜂の巣城において室原さんが、下筌ダム建設反対の一大運動展開中であり覚悟を決めて営門に近いＰＸ横の部屋で会談することにした。総勢三十名位、そのうちの一人が黄色い声を張り上げてヒステリックにまくし立てる。又別の男がドスのきいた声で「総監に会せろ!!射撃即中止・絶対反対!!」を繰り返えす。

蜂の巣をつついたようなテンヤワンヤの騒ぎである。こちらは、平身低頭いんぎん無礼相手の騒音の終るのを待つのみ、まさに専守防衛である。一時間位も経ったような気もするが相手が言いたいことを言ってしまい腹の虫が治ったのかやや静かになったとき、長老ともおぼしきリーダーが、全身情熱エネルギッシュな声で要望書を読み出した。それによれば、大砲の射撃方向を逆にせよとのことであった。

ここで射撃の方向を変更することは大変困難である。その理由を如何に理論的に大声をあげて説明しても到底納得して貰える雰囲気ではないが、やはり説明せずにはおられない。一口言うと十口位の大声が反射して来る。三時間位聴き役に専念していると相手も根負けしたのか、これ以上言っても仕方がないと締めたのかやや静かになったが、引きあげる気配は一毫も見受けられない。まさに根気比べである。昼食時も過ぎて腹が減ったのか、いら立ちの様子が見受られた。一体真意は何処にあるのか、本当の要望は何か？を探り出すまでは頑張らねばと思っていたところリーダーが小便に立ったので、こちらも連小便ときた。お互いに並んでの独り言、「五十一戸全戸の移転買収も出方によっては」とのようであった。さあこれで相手も目的を達成したと思ったのか、早々に旗を巻き陣を引いていった。これから関係部落五十一戸の移転及び用地買収の予算獲得と現地交渉が始ったのである。弾丸一発の飛び込み事故が演習場を更に使い易く、且つ有効に利用できるよう行動を起す極めて有効な引金となったことを特科部隊に感謝した次第です。

「真心は必ず通ず」との信念をもって柔道の猛者吉次四部長に随行して相手の本陣部落公民館へ乗り込んだ。勿論好物の祝盃用焼酎を携行しての交渉である。相手は下筌ダムに勉強に行ったらしく仲々強硬であり射撃方向の変換が容易に出来ないことを知っての無理難題の繰りかえしである。

当方は二人相手は入れかわり立ちかわり無数である。話し合えそうな雰囲気は一向に出てこない。柔道で耳がダゴのようになっている部長も無言の行、我慢と忍耐・飲まず食わず六時間余りの缶詰、今日は諦めて又にしようかなど考えていると相手も同じ考えとみて、干しゼンマイとワラビの煮付とコップをもって現れた。話しは一応棚あげにして取敢えず飲むこととした。飲む程に酔う程に対立の気持が同調となり、肩をたたき合い手を握り合う頃には「昨日の敵は今日の友」と酒の力の偉大さを今更の如く痛感した次第です。

その後は根強くやり抜くのみ、とうとう五十一戸全部残らず同意を頂くこととなり、三分の一は農林省の協力のもとに大分市郊外の開拓地へ三分の一は地元の協力を得て近隣に農地（田畑）を造成して、集団移転、残り三分の一は、現金を貰って別府や大分市へ、人の運命の分れ道程簡単にしてスリルに満ちたものはない。十年後その較差は当時絶対に想像できるものではなかった。

即ち、大分効外の開拓地に入植した人達は色々な苦労はあったであろうが、鶴崎臨海工業地帯の開発に伴なって住宅地となり地価は著しく高騰し、近隣に移転した人達は明るい近代的な住宅に住み、宅地に隣接した水田を耕作し、昔の狭い谷間では考えられない村だと喜んでおられる。 この様子を見るとき、無理にでも強行してよかった。例え一時的に反対されようとも、最後に感謝されることがあればと思いながら任務を通じて沢山の人に喜ばれ絆を結んで頂いたことに深謝する次第である。

松林の大きな家の引越

明治開化を記念して有栖川宮熾仁親皇が御手植なされたと伝え聞く松の大集団、一本一本が大人の一かかえ以上もある大樹は亭々として天を衝き無数に立ちのぼる温泉の湯けむりの中に一際緑鮮やかに映える景観はまさに天下一品、湯布院から峠を越えるとパッ!!と展がる別府市街の真ん中に、先人が残せし偉大な財産、日本列島改造中の中によくぞこれだけの自然が大都会の中心部に残されたものだと感心する。

それこそわれらの同僚第四十普通科連隊を始め、別府に駐とんする自衛隊の諸部隊の人達が、秋には根巻き、春には虫焼きと、わが子の如く育てし結果、松喰虫の大流行のときも一本の被害もなく生々と生き続けてきたのである。

しかるに別府市当局は、この偉大なる財産は別府全体の宝であるから自衛隊は立ち退くようにとの要望である。「適当な移転先があれば協力しましょう」と、合意が成立してから約十年、一時は十文字原へ移転してくれとの声もあり、狸が出そうな辺鄙な高原へ？一体自衛隊を何と心得ているかとの反論もあり、頓座したり進んだりの一進一退であったがその後、俄かに進展し始め別府市も今迄の抽象的な話しから具体的な数字の問題にも言及するようになった。 当方も愈々決心を固めて移転先を扇山とし基本方針をまとめる為の細部の接衝の段階となり、別府市、自衛隊、施設局、財務局、当事者の会同が殆ど毎週別府市で行なわれることとなり、これが私にとって最大の勉強の時間となったのである。即ち熊本から別府まで片道四時間、この間訪れる人もなければ電話もかからない、動く勉強室（官用車）で行きは民法帰りは刑法、何かしら申訳ないような気がしたが、これは天からの賜りものと感謝し、沖縄では任務を遂行する為に否応なしに登記の実務を勉強させられ、今度は又基礎となる法律を研鑽させて頂く時間を与えて下さる恵み、深く極めて行き届いた神の配慮に合掌再拝しながら別府通いに終始した半年間でした。

大平三佐、宮嶋一曹等々植物を愛し、緑を大切にする人々の汗によって新駐とん地の緑化は予算がないため、挿し木や種播きから始めた気長いものであったが、年月の経過とともに素晴らしい環境ができ上がり、就中近藤清総監直接指導のもとで築いた国道沿いの天然石を基礎にして斜面に咲き誇るつつじを配した景観は、通る人々に大変な潤いを与えており、近藤総監亡きあと、その遺徳をしのぶ貴重なものとなっており、永遠に残ることでしょう。

一方、空き家となった旧駐とん地は、その後訪ねることもなく十年余り過ぎ去りましたが、先日、隊友会九州ブロック会議に出席した際、杉の井ホテルの窓から眺めたところ、昔に変らぬ素晴らしい深緑を、立ちのぼる無数の湯煙りの中に、一層鮮やかに残している姿は、湯の街別府を自然の中に一層引き立てているようでした。

九時間に及ぶ対決

随分昔のことで現在の外務大臣倉成正先生が、長崎県農地林業部長のときである。

時の長崎県知事西岡竹次郎構想として、大野原演習場内の千綿川流域に育成されている杉の成木樹林を水源涵養林として管理することが新聞に発表された。当時は木材高騰で大変貴重品あつかいされていたときであり、水源涵養の美名のもとに部分林が地方行政の管理下に移譲される事例が多く行なわれつつあったが、演習場の真ん中を流れる千綿川流域の森林部分をとられたのでは演習場は完全に二つに分断され、小銃の射撃でも気をつけねば跳弾が立木に当たり補償の問題が発生するおそれがあり、迫撃砲や無反動砲の射撃もできなくなる。従って自衛隊としては如何にしてもこれを断呼断わらねばならない。しかし相手も西岡竹次郎県知事のもと智将倉成農林部長、お互いに平行線をたどるばかりで一向に交渉は進展しない。朝九時から県庁小会議室でのやり取りである。そのうちに相手が森林管理を継続して施行することは諦めて、現在、立派に成木となっている五十年生～四十年生の杉の伐採のみに譲歩された。こちらは素人だが、水源涵養の目的であるのであれば一挙に伐採することは好ましくないのではないかといい、夕方六時頃になって、やっと演習に支障がなく水源涵養上も問題が少ない一部分のみを段階的に払い下げることを検討することになった。

このとき、もし県に森林を植えたり伐採したりする権利を認めておれば、未だにその権益が残って大変なことになるところであった。

一部演習に支障ない立木を払い下げることにおいて三部の反対もあったが、上司の決裁を得て、防衛施設局から県に払い下げられ、一件落着となった。

あの日交渉が終ってから倉成部長とともに食べた長崎皿うどんのおいしかったこと、未だに舌覚に残っているようである。

あれから二十五年、当時の倉成農地林業部長は今や日本を代表して世界を相手に活躍する立場におられる。

倉成外相の御健闘を切にお祈りする次第であります。

共存共栄の演習場

日本の国土は狭まい、大砲を最大射程にして射てば島をつき抜けそうである。どちらに向いて射ってもその先には部落があり人が暮している。又射弾道下の凹地には水田があり、 平地には畑があり、高地には森林がある。

無人の果てから果てへ、誰にも遠慮することなく演習行動が十分にとれるところは、西日本一の大演習場をもって任ずる日出生台でもできない。

毎年行なわれる地元と部隊の演習場使用調整会議は双方の言い分が、真っ向うから対立し、仲々成立しない。本来、自衛隊の行政財産である演習場であれば自衛隊が自由勝手に使用するのが当然と思われるが、その演習場の中に旧軍時代からの水田、畑、林地の耕作権あり、入会権あり地元もこれがなければ生活ができないので昔から共存の形がとられてきたのである。旧軍時代のように射撃日数が少なくて済めばそれ程困ることもなかったであろうが、今や西日本随一の特科射撃ができる日出生台、無制限に入れかわり立ちかわり射たのであれば、田植も手入も稲刈もできない。地元民は干上がってしまう。

このようなことは陸幕からおいでになった方には仲々理解ができない。何時も地元とのトラブルのもととなるのである。

毎年のように繰り返されるやりとり、何とかならないものだろうか。自衛隊にとっても、又地元にとっても不幸なことである。

時々農政局に顔を出していたが、あるとき耳よりな話を聞いた。それは山村の谷間に点在する水田を適当な場所に集約移転する為にパイロット事業を実施しているとのこと、早速、百姓の神様と尊敬されていた吉岡好大夫玖珠町長に相談したところ直ちに賛成して頂き、元大分県農政課長の経歴の持ち主である吉岡町長だけあって、極めて短期間のうちに予算は一切農林省側で、但し水田造成のための土木工事は自衛隊の部内訓練工事でと、まことに願ってもない計画ができあがり、車谷南方の斜面へ農地（水田）を集約移転することができて地元は今まで借地でありしかも演習の合い間を縫って農作業をしていたのが、土地から一切自分のものとなって万々歳、自衛隊も余分な気を使わずのびのびと射撃は勿論、演習行動も出来るようになり一石二鳥とは、まさにこのことであろう。

地元と仲良くする為に実施した施策が、もう一つあった。

私が停年三年前のこと、吉岡町長が引退され衛藤征四郎町長（現衆議院議員）が新たに就任のあいさつに方面総監部来訪の折、地元は椎茸ブームであるが、その台木となるドングリの原木が仲々手に入らないとの話しがあった。

日出生台は野原が多くて隠蔽遮蔽する樹木が少ないので普通科の演習上最良ではないとの声も聞いていた。

それは毎年野焼をする為、小樹林は一緒に焼けてしまって保護ができず計画的に造成しなければ何時の間にか消えてなくなってしまう為である。

そのため西方管内の全業務隊長にお願いして総出訓練や野外訓練の際ドングリの実を拾って湯布院駐とん地へ送って頂くよう依頼したところ早速約八万個の実が送られてきた。当時、湯布院の東業務隊長は鹿児島高等農林卒の植林の大家、苗床を作り発芽育成と大変御苦労をおかけしたが、約七万本の幼木ができたので、これを演習部隊の意見を十分斟酌して十ヶ所に分けて植えることにした。十ヶ所に分けた理由は毎年一ヶ所ずつ払い下げていけば十年毎に一回伐採することとなる。ドングリの木は十年で椎茸の台木となって立派にその役目を果たすことができるとのことであった為であります。

その後、仕事に追われてドングリさんは成育しているだろうか？焼け死んではいないかと心配しておりましたら、停年退職後間もない私の事務所へ、衛藤玖珠町長、麻生九重町長の御両名がわざわざ御来駕賜り、感謝状と記念品を日出生台演習場周辺全市町長の連名において私の為にお授け下され大変恐懼感謝致しましたが、ドングリさんがすくすく育っている証拠であろうと喜んで受けた次第であります。

ドラマを展開する大舞台

ドラマには舞台があり、登場人物あり、泣き笑いあり、人生の縮図といわれるが、男のドラマ、スケールが最も大きいドラマ、それは上妻総監が統裁された西特演であった。

舞台は日出生台を核とし、西は高良台、鯛生、北は小倉曽根、南は都城に至る。それは九州全土を捲き込む大舞台、登場人物は、精強日本一を以って自負する第四師団と第八師団、一年前から植松幕僚長指導のもと着々と準備が進められ、私は舞台作りの第一陣を担当することとなり第四師団れい下全部隊が集結する場所、行動地域と思われる区域全般に亘り作戦行動ができるよう事前に借り上交渉をしておくことである。高良台と曽根の集結地は自前の演習場であり特に問題はないが、鯛生の集結地（第十六普通科連隊）は事前に借上げ契約をしておく必要があり交渉したところ、「鯛生金山再開にあたり爆薬等の処理について自衛隊にお世話になったので、この際御恩返しをさせて頂きます。」との所長さんの有難いお言葉、十六連隊はお蔭で出陣式まで鉱山側で実施して頂き、素晴らしいスタートとなったのです。

更に各集結地から日出生台迄の部隊行動は状況下においてそれぞれの部隊装備を駆使して実戦下に行なわれるものであるから、地域住民は勿論そこを通行する一切の人々の理解と協力が必要である。現在のように自動車が多くて戦車が通っただけで文句が出るようではとてもできないであろう。

上津江村長さんの所へお願いに行った時、村長さんが大変やさしい方で畳の間に机をおいて机の上に事務員さんを呼ぶ為の風鈴のようなものがおいてあり、如何にものどかに楽しそうに執務しておられた容姿が目にうかびます。

道路に面した空地、植林していない更地、何処でも結構です、自由にお使い下さいとの有難い御返事、次いで小国町長さんの所へ参上したとき役場は節約の為電灯が非常に少ない。奥まった小さい町長室に参上すると全国町村長会長熊本県自民党会長その他数え切れない程の役職をもっておられる河津寅雄町長がうす暗い所で執務しておられる。早速用向を申しあげると「部隊は野営を止めて各戸に民宿をしては」との有難いお提言でしたが、状況下の行動であるからとお断りを申し上げ、上津江町同様すべてをあげて協力して頂くことになった。又これからの各地主との各個交渉の為、総務課長を案内役として派遣することをお許し頂いた。これは行政簡素化の為、既にその時代から助役を排しておられ、助役兼総務課長を二日間に亘って全面協力して頂いたこと感謝に堪えない次第です。

今は廃止になったが、国鉄宮原線の阿蘇釣の駅前の広場を国鉄に借りに行ったとき、駅前広場は国鉄有地でなくて北里さんの所有地とのこと国鉄全盛の時代、個人の土地であることを意外に思うとともに北里さんの偉大さにビックリして早速お願いに参りました。

そのお邸の広大なこと、邸内にプールがあり、何か外国映画に出てきそうな風景で、こんな田舎にこんな近代的な素晴らしいセンスの大邸宅があろうとはという感じでした。勿論駅前広場を使用することは快く御承諾を頂きました。三百ヶ所余りの集結地、野営地、補給基地、ヘリポート、駐車場など自由に部隊が選択して使用できるようにお膳立てしたのであるが、これを部隊側へ如何に意思を伝えるか、特に牧草地などは宿営はよいが車の進入は困るとのこと等々、夜間に進入してくる部隊がそれらの制約を守れるようにする為に大変苦労したことでした。

愈々作戦行動開始、それぞれの部隊が一刻も早く日出生台の占領を目ざして強行軍、特に第八師団側は先発隊が十文字原出発で日出生台まで近い為、鶴見岳、由布岳、狭霧台等の要点における部隊行動を阻止する為の統裁部の指導、四偵の対応行動など大変苦労があったようです。部隊は、敵対行動に気が立っており、使用上の制約事項も仲々守られないことが各所に発生したが、殆んどは演習後の交渉によって解決できる些細なことであったが、一ヶ所のみどうしても直ちに出向いてこいとの緊急要請、途中の道路は部隊の移動方向に逆らい容易に進行できないためヘリコプターで飛ぶこととなった。現地に着いてみると牧草が奇麗に植えられて、あたかもゴルフ場のような所を装軌車が踏みにじっている。地主がおこるのも無理はない。陳謝して一応その場はおさまった。

8D、4Dともにジリジリと陣を進め、愈々主力の舞台が日出生台となり、不眠不休三日～四日に亘る食うか食われるかの死闘、静かな中に必死に動いている夜間行動、中には統裁部指導官の裏をかいて、一応寝たかにみせかけてから再び起き出しての隠密行動など奇略謀略、勝つ為の手段が縦横無尽に駆使されて一大ロマンが展開されました。

秋の野にススキの穂が夕日に映えて満目蕭蕭たる風景は、さき程まで勝った負けたと男の命をかけた戦いも一切合切包みこんでしまったように静かに暮れていきました。

このときの湯布院駐とん地船田業務隊長のアイデアによって作られた山芋を中心に椎茸、山魚など山菜魚介類を盛り合せた日出生台の香を一杯つめ込んだ手づくりのおみやげが外国武官を始め、陸幕や他方面隊からおいでになった方々に大変好評であったとあとあと迄の話題となったようでありました。

十年前の思いが実現

愈々停年!! 明日から司法書士事務所の開設、事務所を何処にするか、普通は仕事の都合上法務局の近くにするのが常識である。

私の場合は財務局の方々のアドバイスがあって法務局とは約一㎞位離れた大江渡鹿の四つ角とした。それには訳があった。国有財産の管理を担当して財務局の考えには法務局が何処に移転するかわからないが、第三合同庁舎ができて、現在あちこちに分散している法務関係各庁舎が統合されるであろうことは当時の特別庁舎等の特別計画、俗にいう特々計画によって推測されるところであった。

そこで法務局が空くことになるがその跡を是非熊本地方連絡部の庁舎として頂くよう、当時の南九州財務局中村管財部長にお願いし、このことは管財部長の申し送り事項にして貰うよう強くお願いしたのであります。そもそも熊本地方連絡部は部隊側を代表して国民の皆さんに接する機関であるにもかかわらず、健軍駐とん地よりも、北熊本駐とん地よりもわかり難いところにあり、電話で地連への道巡を説明しても相手に理解させることは到底不可能なぐらいわかりにくいものの代表であった。

これでは任務達成上著しく支障があり、幸い土地は県からの借りものであったため、処分には何等の問題もなかった。

私が停年後二～三年すれば夢が実現するものと信じていたが、法務局移転の話は一向に表面化しない。

折しも行政改革の嵐が日本列島を吹きまくり、そのトップに上げられたのが、南九州財務局(熊本)と北九州財務局の統合であった。

経済の中核をなす福岡と、防衛、農政、郵政等政府機関の九州のかなめをなしている熊本とが、激しく誘致合戦を始めたのである。

その余波をうけて法務局を含む第三合同庁舎の建設は遅延に遅延を重ねたが、財務局問題は熊本に軍配があがり、やっと夢が実現することとなったのである。

その間地方連絡部移転先の問題が色々と取り沙汰されたようであるが退職している私にとっては知る由もなかった。ただ神に祈る気持で、中村管財部長との約束を信じて、専守防衛ならぬ専心祈願のみ執念の如く思い続けて十年、やっと熊本市の全域をコンパスで囲むとき、その針の位置は丁度地連庁舎になるのであります。そこに平松部長御自慢の金色の看板が、まばゆいばかり光り輝いて熊本地方連絡部三十年の歴史に錦上花をそえています。

お蔭様で私の事務所の裏に法務局が引越して参りまして、大変便利になりお客様が待っている間に簡単な調査が出来るなど、益々皆様のお役に立ち得ることを喜んでおります。

新聞記者を騙した話

善意・無過失・公然・平穏で十年経過すれば時効が成立し、例え悪意であっても無過失、公然、平穏に二十年過ぎれば時効が成立すると民法に定められている。

三十年も前のことであるから、今更発表してもお許し頂けると思って書かせて頂きます。

さてそれは、福岡に駐とんする第十九普通科連隊には手近かに演習場がなかった。日常の小部隊の訓練でも高良台か日出生台迄出向かなければならない状況であり、班以下の訓練は地元の村落や山林を利用して何とかやっていたが、日本列島開発ブームに乗って福岡郊外は急激に住宅化が進み、昨日迄の原野が見る見る裡に住宅地に変って行った。

訓練の場が日に日に縮められ、九万六千坪しかない駐とん地の広場が唯一の訓練の場となった。訓練しない自衛隊など、例えは悪いが卵をうまない鶏と一緒であり、いつつぶされても文句のいえない無用の長物と化してしまう。

当時の第四管区副総監井本熊雄陸将は、この状況を大変心配されて、「新聞記者を集めろ」とのこと、広報班にお願いして記者会見をやって貰った。

その際、井本副総監は「福岡に駐とんする十九普通科連隊は演習場がない為、他に移転せざるを得ない状態である。現在、移転先は諸般の事情により発表できないが数ヶ所から猛烈な誘致運動がなされており、そこには何れも手頃な演習場が用意されている」旨を発表されました。

その翌日一斉にその記事が出るや真先にあわてたのは地元の商店街である。すぐに繁栄会長以下町内のお歴歴が陳情にお出ましになった。その結果、今迄こちらからいくら話しかけても乗ってこなかった地元が、演習場獲得に協力することを確約してくれたのです。福岡県や那珂町（当時は福岡市に編入されていなかった）からも問い合せが殺倒したが演習場獲得の手段である旨を県や施設局には御説明して納得して頂いた。

扨てその結果であるが、地元の協力があって非常に便利な位置に、手頃な広さの訓練場が見つかった。

それは国道三号線と朝倉街道の分岐点針摺東側の丘の連なる約十五万坪の台地である。

当時中村文夫さん（旧軍大尉）以下数戸が入植し、地質が花崗石の風化した赤土で農耕になじまない土地であり、岩石が多く開拓に大変苦労しておられた。数回お訪ねしているうち、その素晴らしい人格に引かれて家族ぐるみのおつき合いをさせて頂き、日曜日になると子供達が鶏や豚のいる、又いちごやトマトのある中村さんのお宅にお邪魔するのを楽しみにしていたくらいでありました。

愈々価格の点をつめることになるが、地元の要求する坪七百円は妥当な価格として中央に要求したが、中央で査定の結果三百五十円となり、一年余り接衝を続けたが遂に折合がつかなかった。

なおその地は後で、防衛的見地から第四施設大隊を大村から移転させる候補地となり、その時は価格の面も十分成算あるものをつけられる見通しでお迎えのお膳立はできたが、「施設部隊は大事な虎の子、絶対に他県に渡す訳には参りません!!」と強硬に引き留め運動を起した長崎県の執念によって立ち消えとなった。

第八施設大隊をいとも簡単に鹿児島へ渡してしまった熊本県とは雲泥の差があるような気がする次第です。

三十年経た現在、針摺地区は立派な高級住宅街と化し、地価は数十万円とのこと。中村さん達は自衛隊に売らなくて、大金持となり安楽に暮しておるものと思いながらも仕事に追われ、お訪ねできないのが残念です。

人生何が幸せか、日出生台の拡張で移転した人々のことを併せ考えながら、神様の作り賜える未来に向かって希望のみをもって明るく楽しく前進することの幸せをつくづく感ずる今日この頃である。

治にいて乱を忘れず

常に地球上の何処かに国と国とが相い撃ち合う不幸な戦いが起っておりますが、日本においては、昭和二十年八月十五日以来、四十年余り平和が続いていることは、まことに奇跡的なことであり喜ばしいことですが、その陰に自衛隊の人達が、黙々として訓練に精励し、一旦緩急の場合に対処する為に努力しておられることも重要な要因をなしているのであります。

世の中には自衛隊があるから戦争がおこるという人もいますが、これは消防署があるから火事がおこる論と同じであり、大変間違っていることは明瞭です。

扨てわが国の防衛は、わが国土において敵の進攻を防ぐ専守防衛であり、いざという時に平素から慣れ親しんだ郷土においてその地形地物を活用して目的を達成するのが陸上自衛隊の主要な役目です。従って平素から地形の特徴を十分に活用できるよう研究し、訓練を現地に即応して行ない、要すれば、平素からいざ鎌倉の際に直ちに敵の進攻に対応できるよう想定して、防衛施設や訓練施設を整備していくことが肝要と思いますが、わが国においては、私権の尊重があまりにも優先して、民法第一条の「私権は公共の福祉に遵う」という基本精神が戦後薄れてしまい、 仲々困難な状況です。

お隣の韓国においては、高速道路が直線に作られており、いざというとき直ちに飛行機の滑走路として使用できるように配慮されているのですが、わが国においては、高速道路は御承知のとおり総て複合曲線でわざわざカーブの連続で結ばれています。従って韓国のようなことは絶対にできません。

そのような中で尊敬する上妻総監が、敢然として実施されたT訓練場の取得、新設は、まさに有事にそなえた大英断であったと高く評価しているところであります。

このことは、当時の福岡防衛施設局長高橋儀一氏がその点を深く理解されて栄誉ある防衛施設局長の職を賭して、推進されたお陰で大変困難なT訓練場の取得が出来たのです。私も福岡防衛施設局の担当課長さんとともに地元町議会に出席し深夜まで説明したこと、部落の集会で色々と苦情を拝聴したことなど、又一部保安林に指定されている部分があり当時北海道砂川事件で、保安林優先、自衛隊憲法違反の判決が出た直後であり、関係官庁との交渉に大変手古摺ったこともありましたが、陰に陽に、この施設の建設によって国家の安泰、国民の平和が保たれるのだとの心の支えがあって苦労も苦とならず完成できたものです。

その後、進入路の崩潰等によって維持管理に大変苦労されていると聞きますが、先人の偉大なる慧眼によって造られた重要な施設であることを認識して頂きたいのであります。

自衛隊法第百三条（有事の際の施設の使用等）の下部法令が全く無制定で死文化している時。専守防衛に任じこれに徹せざるを得ない現況下においては、このような着眼に基づく防衛施設の整備が、特に必要であり、それが戦争抑止になるものではないかと思います。

心がすべてを支配する

心が変れば世の中が楽しくなる

特別に遺産のない私共庶民にとって御先祖からの最高の贈りものは、毎日毎日使わして頂いている苗字ではないでしょうか。名前は自分一代であり、気に入らなければ改名することもできますが、苗字は仲々そう変えることはできません。

私の苗字は諸熊と書き「もろくま」と発音すると思うのです。というのは、子供の頃は「もろぐま」とくが濁って呼ばれていたのです。長ずに及んで熊の字が何故「ぐま」になるのかと疑問を持って調べても「熊」は「くま」であり「ぐま」とは発音されていません。従って私は「もろくま」で通しておりますが、時々コンピューターにインプットされるときモログマと濁って入力されていることがあり、モロクマでアウトプットしようとして出てこないことが屢々あります。

その御先祖様が定めてくれた「諸熊」なる苗字を自衛隊にいる間正面に読んでくれた人は極めて少なくて大部分は、射撃のいのくまさん（都城駐とん地の副連隊長）ですか？又は柔道のいのくまさんですかと、よく間違えられ、又電話口で一言ずつ「モ・ロ・ク・マ」といっても「ムロクマ」になる等、正しく伝える為に他人以上に余分に苦労したのです。その都度、「鈴木さん」とか「伊藤さん」等間違われるおそれが絶対ない苗字がうらやましくてたまりませんでした。

ところがある日、ロータリークラブの先輩の話を拝聴した際「諸の字にイ（にんべん）を加えると「儲」という字になります。又左から別々に読むと（信・者）信者。となります。と教えられ、人を大切にし人の協力をうけることができれば儲かることになっており、それを信ずることが大切である。人を信じ人の力を得ることが諸熊を生かすことである。と気がついたとき更めて御先祖の深慮遠謀に感謝せずにおられませんでした。

お陰様で人の有難さ、「山川草木国土悉皆成仏」人は勿論のこと、草も木も、山も川も一切のものに共に普遍なる仏の命が宿っていると教示せられたお釈迦様の教えにもあるとおり、一切の人に物の仏性ありと覚らせて頂いたとき人を大切にせずにおれなくなり、人も又、私を助けてくれることとなり、自然に諸の字にイ（にんべん）が加わって、何時の間にか高額所得者名簿の片隅に載ることがあり、嫌いで仕方のなかった諸熊（もろくま）の苗字が好きで好きでたまらなくなりました。

諸熊の苗字もその読み方も変わりませんが、自分の心が変わると、今まで嫌いであった苗字が好きに変わったのです。

相手の悪をみている間は、その人の全部は悪にみえ、善のみを見ていればその人が善人にみえてくることも又真理でしょう。

宇土に生まれ、後鳥羽天皇の皇子で川尻大慈禅寺の御開山寒厳義伊禅師に住し祝髪をうけた大智禅師が、菊池武時に希い翼われて鳳儀山聖護寺開山に当たり、殉忠菊池一族の魂となったと思われる発願文の一節に 「広く衆生を度して、疲厭を生せず」とありますが、瓦を瓦と思って一生懸命磨いても鏡には仲々ならないもので、疲れを生ずるのみでしょう。 瓦を瓦と思わず、本来鏡である。その鏡である本来の姿を磨き出すのだと思えば疲れは感じないでしょう。 人の本来の姿は仏である。その本来の姿を顕し出す為に衆生を度すのであるから疲厭を生じない。即ち心の問題という深い深い意味が含まれているのだと私なりに独断したとき大変教えられるところがありました。

保険の勧誘日本一

経営の神様といわれたリコー・三愛の社長市村清さんの若かりし頃の奮戦記の一コマ。

昭和二年の初秋大東銀行上海支店長代理の職を、上司の背任の責任を自ら被って辞職して夫人の実家長崎へ引き揚げてきた。

さて、何をするか?世はまさに世界的経済恐慌のとき、一番難かしい仕事といわれている保険の勧誘を選んだ。どうせやるなら保険思想が最もおくれており、亭主関白、保守王国と謳歌され、当時保険セールスの第一人者といわれていた第一相互の渡幸吉さんさえ歯がたたないと尻っぽを巻いた熊本でやろう‼と決意した。

市村さんは、「私は仕事が困難であればあるほど燃えるんですよ。そして自分の手がけた仕事が、その後順調にいっていると、もう次の新しい事業開拓に関心が移っているんですね」と自伝の中で述べておられる。 市村さんは奥さんを実家に残して単身熊本へ乗り込んだ。財産は、あり金はたいて買った一台の自転車だけ。

当時、熊本では保険の勧誘員は、〞押売り〞と思われているようなところがあったので、まず保険に対する認識を改めてもらうため保険思想の普及が大切であると考え、学校の先生、医者、官吏、弁護士等、智識層を目あてに、保険思想を説きながら、自転車で駆けずり廻った。一日中訪問して帰ると、必ずその日に廻ったところに手紙を書くことを忘れなかった。毎日、毎日これを繰り返すが、何の手掛りもなく半月過ぎた。

そんなある日、突然夫人がやってきた。奥さんの話によれば、市村さんが熊本へ出たあとでお医者さんをやっているお父さんをはじめ親族が集って、この際思いきって市村さんと別れた方がいいのではないかと勧められた。

奥さんは、「どんな苦労もいとわない、あの人と一緒に頑張ります。」と反対を押し切ってやって来たというのです。今にもくじけそうになっていた市村さんの心に再び火が点ぜられた。

妻の言葉に励まされた市村さんは新しい力を得て再びかけずり廻った。保険加入を勧める仕事は「岩の上に種子を蒔くような感じであった」と同じところへ五回も六回も、断られても断わられても足を運んでいく。ついに子供におぼえられて、「あっ‼またノッポの保険やさんだ‼」

今では殆ど見かけなくなったが、 当時は到るところに門づけをしながら、食を乞いていた俗にいう“カンジン〞が徘徊していたが、それと同様に白い目で見られることさえあった。

一ヶ月たち、二ヶ月たっても何の手応えもない。背水の陣をしいての奮戦も愈々ギリギリ、とうとう暮れもおし迫った十二月二十四日、保険の募集を始めてから六十八日の夜、精も根もつき果て市村さんはしょんぼりと帰ってきた。

「今まで一生懸命やれば人間やれないものはない。と信念をもってやって来たが、今度ばかりは駄目だ‼保険の仕事は自分には不向だったようだ‼お前には申し訳ないが、これから東京へでも行ってやり直そうか」 夫人は黙って聞いていたが、「私は東京でも大阪でも、貴方が行かれるところどこでも参りましょう……でも逃げ出して行くつもりなら、ここでもう少しおやりになったら‼私はただ、あなたの履歴のなかに一つでも失敗したということがあるのが残念でたまりません。」と、この一言が市村さんの意地をよびおこしました。

翌日、再び勇を鼓舞して熊本市九品寺の大江高等女学校の竹崎校長宅へ、九度目の訪問、門の前に立ってベルを押そうか？押すまいか？ややもすれば引っ込みそうになるところを勇を鼓して押すと、女中さんが待っていたように飛んで来て「アラ、 勧誘さん、しばらくお待ち下さい」
いつもと様子が違う。ホッとして待っていると竹崎先生が自ら出て来られ、「いやあ、ごくろうさま。やっぱり来ましたね。今度見えたら入ることにしようと、待っていたのです。」とうとうやった。九回目の訪問、保険を始めてから六十九日目竹崎宅では、市村さんが五回も六回も足を運ぶ熱心さ、帰ってから必ずお礼の手紙を出される義理がたさ、家人と相談して今度来られたら入ってあげようということになっていたようです。

片栗がかたまるとき、片栗粉をとかして徐々に熱を加えながら根気強く液体状をかき回し努力を続けていると最後の一瞬に透明となってゼリー状に固まるのです。この最後の一瞬迄努力を継続することが一番大切なのです。

その一瞬の変化の為にその前の水面下の努力が積み重なっているのです。途中で止めなかった市村さんは見事に素晴らしい成果を得ることとなったのです。竹崎先生が同僚や知人を紹介して下さったので、五高の教授やお医者さん達が次々と加入して頂き、市村さんの熱心さ、誠実さが好評を得て、とんとん拍子に契約がとれた。こうして暮れの三十一日迄に一万三千円の契約がとれて、諸手当を加えると三ヶ月分の収入百八十円が貰えることになった。

市村さんのことは、その誠意と行き届いた仕事ぶりに感心した人達によって口から口へと伝えられ、市村さんのPRをしてくれたのです。その結果、成績はメキメキ上がり五万円近い契約高となり、全国一の社長賞を貰ったのです。

市村さんのセールス語録に 「お客さんをセールスマンにせよ」 と、（別府正大著　経営の偉才市村清より）『人を愛し、国を愛し、勤めを愛する』この三愛の精神は、市村先生亡きあと、永遠に残ることでしょう。

あとがき

日本が世界のトップクラスの経済国となり、私共は物質的に大変豊かな暮しをしていますが、心の面ではどうでしょうか。国を護るということ一つをとってみても、自分の国は自分の手で護らなければ誰も面倒はみてくれません。私が尊敬する阿蘇の土地家屋調査士佐藤武之さんは、 小鳥が雛を守る様子をスライドに撮って講演をされますが、「可弱い雛の糞も抜け毛も雛の臭いの残っているものは総て一つ一つ別の所に運び去り、万一敵(蛇、ねずみ、いたち等)が巣に迫って来れば、自ら手負いの真似をして敵を自分の方に引きつけて、巣から遠ざかるように誘導する。これこそが現在の自衛隊の姿であり、専守防衛が如何に大変であるか、国民の皆さんの生命財産を守る為に身の危険を顧ず頑張っておられる自衛官一人一人の姿です。又小鳥は一定の日時が経てば、雛が如何に巣立を恐れても毅然としてこれを巣から押し出してでも独立をさせます。大学を卒業しても嫁さんをもらっても子供にベタベタしているお母さん如何でしょう。小鳥に見習うべきではありませんか。」と結ばれるのです。

世界中何れの国をみても、国をみずから守るという気概のない国民はありません。ただ日本のみが青少年の過半数（七十四％）が、敵が来れば逃げる!!白旗をあげる!!といっていますが、一体何処へ逃げれるのでしょう。降参したら命や面目が保証されるでしょうか。大東亜戦争終戦直前の満州の状況は如何だったでしようか。今日もNHKで戦争孤児の方々の紹介がなされていますが、逃げても降参しても惨めです。厳然として敵を寄せつけないことが大切です。その為には国民一人一人が決然として国を護るとの確固たる意思が必要となるのです。

戦後、米国の日本占領政策によって日本弱体化が図られ、その中の最も重視されたのが教育改革といわれていますが、それは戦前の日本の教育が大変素晴らしかった証拠だと思います。その素晴らしい教育制度を明治維新から僅か二十年の間に創り上げたのは一体誰でしょう。それはわが熊本の先輩です。

明治天皇は開校間もない東京帝国大学（現在の東京大学）に行幸なされて、教育の内容が西洋文明のみにとらわれ、専ら物質万能の偏向教育がなされていることを深く憂慮され日本の国を背負って立つべき人材を養成する学校が、ただ物的もののみであっては如何なものか、もっと精神的ものを考慮すべきではないかと天皇の侍講元田講永孚先生に御指示なされたと聞き及んでおります。

元田先生は、熊本市山崎町（現岩田屋伊勢丹横）に生まれ、横井小楠の教えをうけ、明治四年天皇の侍講として仕えることとなり、以来二十年間終始一貫誠心天皇に侍し、絶大なる信任を得られたのですが、天皇の御指示に基づき教育勅語の草案を作成し、又その草案を引き継ぎこれを完成したのが、これ又熊本市坪井出身（現熊本市立高校内）の井上毅先生であります。井上先生は、フランスに藩命によって留学し、明治二十一年法制局長官となり教育勅語を完成し、その後、文部大臣となり教育勅語を根源とした教育の普及徹底に努力されたのです。この教育勅語によって世界一の教育がなされ、その成果が日本の発展の基礎となったのです。

然るに占領政策日本弱体化運動によって教育勅語が反動と決めつけられ、一切オフレコとなったのが今日の青少年の国防意識の低下の一因となったことは当然のことでしょう。一方、米国や西ドイツ、中共、韓国、台湾等においては、教育勅語をそれぞれ教育の中心として取り入れられていると聞きますが、正しい倫理観、 国家観が育成され、国防意識が日本に比して格段の差があることも宜なるかなと存じます。

最近、老人会やロータリーや生長の家の誌友会などで教育勅語をコピ ―して配布していますが、この間大津の老人会長さんが、一枚のコピーから五百枚のコピーを作って配ったと感謝のお礼があり、又矢野郷友会会長さんを中心として教育勅語の配布運動をやっていらっしゃる由大変嬉しく思います。山鹿ロータリーにお邪魔して卓話のあとで教育勅語を配りましたところ、前週にも会員の方が配布されたことを聞き、日本の国の教育の復興は、再び熊本から始まるのではないかと胸がわくわくしました。

このように日本再建の嚆矢は九州からと元文部大臣永井道夫先生の講話を拝聴してから信じかつ行動しているところです。

何故郷里熊本が、かくも期待されているかというと、それは尽忠一途二十四代に亘って一人の反逆者もなく御皇室を輔弼し奉って来た菊池一族の精神が脈々と継承され、その菊池一族の精神的根拠となった大智禅師の魂が県民一人一人の中に宿っているように思えるのです。しかしながら今日の学校教育を見ますと、熊本が一番遅れて福岡や佐賀に比して著しく学力は低下しており、進学率も低いようです。又道徳教育の面も劣り、色々な問題が起きているようです。これらはその原因が教師側にあるとのことを屢々耳にしています。 校長の人事権、任命権を組合の教師が持っているとのことを聞いたとき耳を疑いましたが、現在ではかなり改善されたといわれていますが、小中学校に比しその傾向は高校に強く残されており、平松自衛隊地連部長の高校訪問が間接的に反対されるなど保守を誇る熊本で自衛隊の募集が未だに敬遠されている高校があるようです。先般矢部高校で起きた言葉にすることさえ恥かしい事件が再びおこることがないよう、良識ある人々が勇敢に正しいことを実行している先生方を支援しようではありませんか。必ず悪は滅びることを信じます。

「東洋の一角日本に二千六百年の歴史をもち、一心に国民の尊敬を集めていらっしゃる天皇様がおられることは世界の宝であります。やがて米ソも軍事競争につかれて世界連邦を創るべき時が来ます。その時、盟主と仰ぐことができるのは天皇様以外におられません。天皇様が日本においでになることは神様が地球に贈られた最高の宝です」とアインシュタインはいっています。日本人として生まれたことを最大の誇りとして今を一生懸命生き続けます。これが祖国の不滅を信じて突込んで行った先輩、同僚へ対する責務であり、恒久の平和を築き、子々孫々に継渡す使命を与えられし者の途なりと信じ邁進します。

創隊７０周年記念行事の記録

8.2.28　西部方面隊殉職隊員追悼式（場所：健軍駐屯地）

8.2.28　西部方面隊殉職隊員追悼式（場所：健軍駐屯地）

8.2.28　西部方面隊創隊７０周年記念行事（感謝状贈呈式）

8.2.28　西部方面隊創隊７０周年記念行事（祝賀夕食会）

8.2.28　西部方面隊創隊７０周年記念行事（祝賀夕食会）

8.2.28　西部方面隊創隊７０周年記念行事（祝賀夕食会）
（左から佐世保地方総監・ⅢＭＥＦ司令官・西部方面総監）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（正門）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（記念式典）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（記念式典）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（記念式典）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（記念講演）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（記念講演）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（装備の動的展示）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（装備の動的展示）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（装備の動的展示）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（装備の動的展示）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（装備の動的展示）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（装備の動的展示）
（左から米陸軍在日米陸軍司令官代理・ⅢＭＥＦ司令官
佐世保地方総監・西部方面総監・九州防衛局長）

令和７年度

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（音楽演奏）
（西部方面音楽隊・西特連太鼓・熊本工業高校演奏部・演奏前集合写真）

8.3.1　西部方面隊創隊７０周年記念行事（音楽演奏）
（西部方面音楽隊と熊本工業高校演奏学部との合同演奏）